

# 鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか

—仙台市富沢駅西土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書—

〔第2分冊〕

2018年3月

仙台市教育委員会  
仙台市富沢駅西土地区画整理組合



# 本文目次

第4節 鍛冶屋敷前遺跡	1
1. I区の調査	1
(1) III層検出遺構と出土遺物	1
1) 竪穴住居跡	1
2) 柱列跡	1
3) 土坑	2
4) 溝跡	4
5) ビット	6
(2) 遺構外出土遺物	6
2. II区の調査	6
(1) III層検出遺構と出土遺物	6
1) 竪穴住居跡	6
2) 土坑	29
3) 溝跡	32
4) 性格不明遺構	35
5) ビット	37
(2) 遺構外出土遺物	37
3. III区の調査	38
(1) III層検出遺構と出土遺物	38
1) 竪穴住居跡	38
2) 竪穴遺構	43
3) 土坑	50
4) 溝跡	51
5) 竪穴住居跡・竪穴遺構・鍛冶関連遺構・性格不明遺構	52
6) ビット	58
(2) 遺構外出土遺物	58
4. まとめ	58
第5節 京ノ中遺跡	82
1. 平成26年度の調査	82
(1) III層検出遺構と出土遺物	83
1) 竪穴住居跡	83
2) 土坑	88
3) 溝跡	88
4) ビット	89
(2) 遺構外出土遺物	89
2. まとめ	89

第6節 川前遺跡	95
1. IV a1～3層の調査	95
(1) 遺物包含層出土遺物	95
2. IV b1層の調査	130
(1) IV b1層検出遺構と出土遺物	130
1) 竪穴住居跡	130
2) 土坑	134
3) ビット	134
(2) IV b1層出土遺物	134
3. IV b2層の調査	140
(1) IV b2層検出遺構と出土遺物	140
1) 土坑	140
2) ビット	140
(2) IV b2層出土遺物	140
4. まとめ	140
(1) 遺構について	140
(2) 遺物について	144
1) 縄文土器	144
2) 打製石器	144
3) 磨製石器	144
4) 礫石器	144
5) 石製品	144
6) 土製品	144
第7節 宮崎遺跡	176
1. 平成27年度の調査	176
(1) III層検出遺構と出土遺物	177
1) 竪穴遺構	177
2) 土坑	178
3) 小溝状遺構群	179
4) ビット	180
(2) 遺構外出土遺物	180
2. まとめ	180
(1) 遺構について	180
(2) 遺物について	180
第7章 総括	184
第1節 出土遺物について	184
1. 縄文時代の遺物について	184
(1) 縄文土器	184
1) 富沢館跡	184

2) 川前遺跡	190
(2) 土製品	206
1) 土偶	206
2) その他の土製品	206
(3) 石製品	207
1) 岩偶	207
2) イモ貝形石製品	207
3) 石刀	207
4) 線刻環	207
2. 古代の遺物について	208
(1) 古代の土器	208
(2) 仙台市・鍛冶屋敷 A 遺跡出土刻書砥石	220
1) 形状	220
2) 積文	220
3) 内容	220
(3) 鉄鏃・鉄鋌	225
第 2 節 検出遺構	225
1. 縄文時代の遺構	225
(1) 富沢館跡	225
(2) 川前遺跡	226
2. 古代の遺構	226
(1) 竪穴住居跡及び竪穴遺構の時期と変遷	226
(2) 鍛冶関連遺構	227
3. 富沢館跡の土塁と堀跡	228
(1) 主郭部	231
(2) 外郭部	233
1) 北外郭部	233
2) 東外郭部	233
3) 南外郭部	234
4) 西外郭部	234

引用・参考文献

報告書抄録

## 挿 図 目 次

### 鍛冶屋敷前遺跡

第 240 図	鍛冶屋敷前遺跡Ⅰ区遺構配置図	1
第 241 図	SI1 竪穴住居跡平面図・断面図	2
第 242 図	SA1 柱列跡平面図・断面図	2
第 243 図	SA2 柱列跡平面図・断面図	3
第 244 図	SA3 柱列跡平面図・断面図	3
第 245 図	SK1～3 土坑平面図・断面図	4
第 246 図	SD1～9 溝跡断面図	5
第 247 図	鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区遺構配置図	7
第 248 図	SI8 竪穴住居跡平面図・断面図	8
第 249 図	SI8 竪穴住居跡出土遺物	9
第 250 図	SI9 竪穴住居跡平面図・断面図	10
第 251 図	SI9 竪穴住居跡出土遺物	11
第 252 図	SI10 竪穴住居跡平面図・断面図	12
第 253 図	SI10 竪穴住居跡出土遺物	13
第 254 図	SI12 竪穴住居跡平面図・断面図	14
第 255 図	SI12 竪穴住居跡出土遺物	15
第 256 図	SI13 竪穴住居跡平面図・断面図	16
第 257 図	SI14 竪穴住居跡平面図・断面図	18
第 258 図	SI14 竪穴住居跡出土遺物	19
第 259 図	SI15 竪穴住居跡平面図・断面図	20
第 260 図	SI15 竪穴住居跡出土遺物	21
第 261 図	SI16 竪穴住居跡平面図・断面図	22
第 262 図	SI16 竪穴住居跡出土遺物	23
第 263 図	SI17 竪穴住居跡平面図・断面図	24
第 264 図	SI17 竪穴住居跡出土遺物	25
第 265 図	SI18 竪穴住居跡平面図・断面図	27
第 266 図	SI18 竪穴住居跡出土遺物(1)	28
第 267 図	SI18 竪穴住居跡出土遺物(2)	29
第 268 図	SI19 竪穴住居跡平面図・断面図	30
第 269 図	SI19 竪穴住居跡出土遺物	31
第 270 図	SK13～22 土坑平面図・断面図	33
第 271 図	SK13・21 土坑出土遺物	34
第 272 図	SD1～10・12～14・16・17・19 ・20・22～24・26・28～31・35 ～38 溝跡平面図・断面図	36
第 273 図	SX7 性格不明遺構平面図・断面図	37

第 274 図	ビット出土遺物	37
第 275 図	遺構外出土遺物	38
第 276 図	鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区遺構配置図	39
第 277 図	SI6 竪穴住居跡平面図・断面図	40
第 278 図	SI6 竪穴住居跡出土遺物	41
第 279 図	SI7 竪穴住居跡平面図・断面図	42
第 280 図	SI7 竪穴住居跡出土遺物	43
第 281 図	SI1 竪穴遺構平面図・断面図	44
第 282 図	SI2 竪穴遺構平面図・断面図	44
第 283 図	SI3 竪穴遺構平面図・断面図	45
第 284 図	SI4 鍛冶関連遺構平面図・断面図	46
第 285 図	SI4 鍛冶関連遺構出土遺物(1)	47
第 286 図	SI4 鍛冶関連遺構出土遺物(2)	48
第 287 図	SI4 鍛冶関連遺構出土遺物(3)	49
第 288 図	SI4 鍛冶関連遺構出土遺物(4)	50
第 289 図	SB1 掘立柱建物跡・SI5 掘り方平面図 ・断面図	51
第 290 図	SK1・4・5 土坑平面図・断面図	52
第 291 図	SD1 溝跡断面図	52
第 292 図	SX3 鍛冶関連遺構、SX5 竪穴遺構、 SX1 性格不明遺構平面図・断面図	54
第 293 図	SX2 竪穴住居跡平面図・断面図	55
第 294 図	SX2 竪穴住居跡出土遺物	56
第 295 図	SX4 鍛冶関連遺構平面図・断面図	57
第 296 図	SX4 鍛冶関連遺構出土遺物	59
第 297 図	SX6 性格不明遺構平面図・断面図	59
第 298 図	SX6 性格不明遺構出土遺物	60

### 京ノ中遺跡

第 299 図	京ノ中遺跡遺構配置図	82
第 300 図	SI1 竪穴住居跡平面図・断面図	84
第 301 図	SI1 竪穴住居跡出土遺物	85
第 302 図	SI2 竪穴住居跡平面図・断面図	86
第 303 図	SI2 竪穴住居跡出土遺物	87
第 304 図	SK1・2 土坑平面図・断面図	88
第 305 図	SD1 溝跡断面図	89

### 川前遺跡

第 306 図	川前遺跡Ⅳ a 層遺構配置図	96
---------	----------------	----

第 307 図	川前遺跡 A～C 区基本層序図	97	第 343 図	SI4 竪穴住居跡平面図・断面図	135
第 308 図	IV a1 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (1)	99	第 344 図	SI4 竪穴住居跡出土遺物	136
第 309 図	IV a1 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (2)	100	第 345 図	SK2 土坑平面図・断面図	136
第 310 図	IV a1 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (3)	101	第 346 図	IV b1 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (1)	137
第 311 図	IV a1 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (4)	102	第 347 図	IV b1 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (2)	138
第 312 図	IV a1 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (5)	103	第 348 図	IV b1 層 (A・B 区) 遺物包含層出土遺物 (3)	139
第 313 図	IV a1 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (6)	104	第 349 図	川前遺跡 IV b2 層遺構配置図	141
第 314 図	IV a1 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (7)	105	第 350 図	SK3～8 土坑平面図・断面図	142
第 315 図	IV a1 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (8)	106	第 351 図	SK6 土坑出土遺物	143
	・IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (1)	106	第 352 図	IV b2 層 (A・B 区) 遺物包含層出土遺物	143
第 316 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (2)	107	<b>宮崎遺跡</b>		
第 317 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (3)	108	第 353 図	宮崎遺跡遺構配置図	176
第 318 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (4)	109	第 354 図	SI1 竪穴住居跡平面図・断面図	177
第 319 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (5)	110	第 355 図	SI1 竪穴住居跡出土遺物	178
第 320 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (6)	111	第 356 図	SK1 土坑平面図・断面図	178
第 321 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (7)	112	第 357 図	小溝状遺構群 SD1～15 断面図	179
第 322 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (8)	113	<b>総括</b>		
第 323 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (9)	114	第 358 図	富沢館跡縄文土器集成 深鉢 (1)	187
第 324 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (10)	115	第 359 図	富沢館跡縄文土器集成 深鉢 (2)	188
第 325 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (11)	116	第 360 図	富沢館跡縄文土器集成 深鉢以外	189
第 326 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (12)	117	第 361 図	川前遺跡縄文土器集成 A～C 群	196
第 327 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (13)	118	第 362 図	川前遺跡縄文土器集成 C～D 群	197
第 328 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (14)	119	第 363 図	川前遺跡縄文土器集成 D～E 群	198
第 329 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (15)	120	第 364 図	川前遺跡縄文土器集成 E～F 群	199
第 330 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (16)	121	第 365 図	川前遺跡縄文土器集成 F 群 (1)	200
第 331 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (17)	122	第 366 図	川前遺跡縄文土器集成 F 群 (2)	201
第 332 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (18)	123	第 367 図	川前遺跡縄文土器集成 F～G 群	202
第 333 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (19)	124	第 368 図	川前遺跡縄文土器集成 G 群	203
第 334 図	IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (20)	125	第 369 図	川前遺跡縄文土器集成 H～I 群	204
	・IV a3 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (1)	125	第 370 図	川前遺跡縄文土器集成 I～J 群、その他	205
第 335 図	IV a3 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (2)	126	第 371 図	土偶・その他の土製品集成	206
第 336 図	IV a3 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (3)	127	第 372 図	石製品集成	208
第 337 図	IV a3 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (4)	128	第 373 図	古代土器集成 (1)	212
	・IV a 層 (B・C 区) 遺物包含層出土遺物	128	第 374 図	古代土器集成 (2)	213
第 338 図	川前遺跡 IV b1 層遺構配置図	129	第 375 図	古代土器集成 (3)	214
第 339 図	SI2 竪穴住居跡平面図・断面図	130	第 376 図	古代土器集成 (4)	215
第 340 図	SI2 竪穴住居跡出土遺物	131	第 377 図	古代土器集成 (5)	216
第 341 図	SI3 竪穴住居跡平面図・断面図	132	第 378 図	古代土器集成 (6)	217
第 342 図	SI3 竪穴住居跡出土遺物	133			

第 379 图	古代土器集成 (7) .....	218
第 380 图	古代土器集成 (8) .....	219
第 381 图	金属製品集成 .....	225

第 382 图	A ~ C 期主要遺構の重複関係模式図 ..	229
第 383 图	富沢館跡場所想定配置図 .....	235

## 写真図版目次

写真図版 1	鍛冶屋敷前遺跡 (1) .....	65	写真図版 7	川前遺跡 (7) .....	153
写真図版 2	鍛冶屋敷前遺跡 (2) .....	66	写真図版 8	川前遺跡出土遺物 (1) .....	154
写真図版 3	鍛冶屋敷前遺跡 (3) .....	67	写真図版 9	川前遺跡出土遺物 (2) .....	155
写真図版 4	鍛冶屋敷前遺跡 (4) .....	68	写真図版 10	川前遺跡出土遺物 (3) .....	156
写真図版 5	鍛冶屋敷前遺跡 (5) .....	69	写真図版 11	川前遺跡出土遺物 (4) .....	157
写真図版 6	鍛冶屋敷前遺跡 (6) .....	70	写真図版 12	川前遺跡出土遺物 (5) .....	158
写真図版 7	鍛冶屋敷前遺跡 (7) .....	71	写真図版 13	川前遺跡出土遺物 (6) .....	159
写真図版 8	鍛冶屋敷前遺跡 (8) .....	72	写真図版 14	川前遺跡出土遺物 (7) .....	160
写真図版 9	鍛冶屋敷前遺跡 (9) .....	73	写真図版 15	川前遺跡出土遺物 (8) .....	161
写真図版 10	鍛冶屋敷前遺跡 (10) .....	74	写真図版 16	川前遺跡出土遺物 (9) .....	162
写真図版 11	鍛冶屋敷前遺跡出土遺物 (1) .....	75	写真図版 17	川前遺跡出土遺物 (10) .....	163
写真図版 12	鍛冶屋敷前遺跡出土遺物 (2) .....	76	写真図版 18	川前遺跡出土遺物 (11) .....	164
写真図版 13	鍛冶屋敷前遺跡出土遺物 (3) .....	77	写真図版 19	川前遺跡出土遺物 (12) .....	165
写真図版 14	鍛冶屋敷前遺跡出土遺物 (4) .....	78	写真図版 20	川前遺跡出土遺物 (13) .....	166
写真図版 15	鍛冶屋敷前遺跡出土遺物 (5) .....	79	写真図版 21	川前遺跡出土遺物 (14) .....	167
写真図版 16	鍛冶屋敷前遺跡出土遺物 (6) .....	80	写真図版 22	川前遺跡出土遺物 (15) .....	168
写真図版 17	鍛冶屋敷前遺跡出土遺物 (7) .....	81	写真図版 23	川前遺跡出土遺物 (16) .....	169
写真図版 1	京ノ中遺跡 .....	93	写真図版 24	川前遺跡出土遺物 (17) .....	170
写真図版 2	京ノ中遺跡出土遺物 .....	94	写真図版 25	川前遺跡出土遺物 (18) .....	171
写真図版 1	川前遺跡 (1) .....	147	写真図版 26	川前遺跡出土遺物 (19) .....	172
写真図版 2	川前遺跡 (2) .....	148	写真図版 27	川前遺跡出土遺物 (20) .....	173
写真図版 3	川前遺跡 (3) .....	149	写真図版 28	川前遺跡出土遺物 (21) .....	174
写真図版 4	川前遺跡 (4) .....	150	写真図版 29	川前遺跡出土遺物 (22) .....	175
写真図版 5	川前遺跡 (5) .....	151	写真図版 1	宮崎遺跡 .....	183
写真図版 6	川前遺跡 (6) .....	152			

## 第4節 鍛冶屋敷前遺跡

## 1. I区の調査

I区では、基本層Ⅲ層上面(古代以降の遺構検出面)において、竪穴住居跡1軒、柱列跡3列、土坑3基、溝跡9条、ピット35基を検出した。ピットについては遺構配置図にのみ表示している。

## (1) Ⅲ層検出遺構と出土遺物(第240～246図、図版1)

## 1) 竪穴住居跡

## S11 竪穴住居跡(第241図)

[位置] 調査区中央南付近に位置する。

[規模・形態] カマド煙道の煙出しピットのみを検出した。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。規模は、長軸44cm、短軸37cm、深さ8cmである。

[主軸方位] 煙道方向でN-1°-Wである。

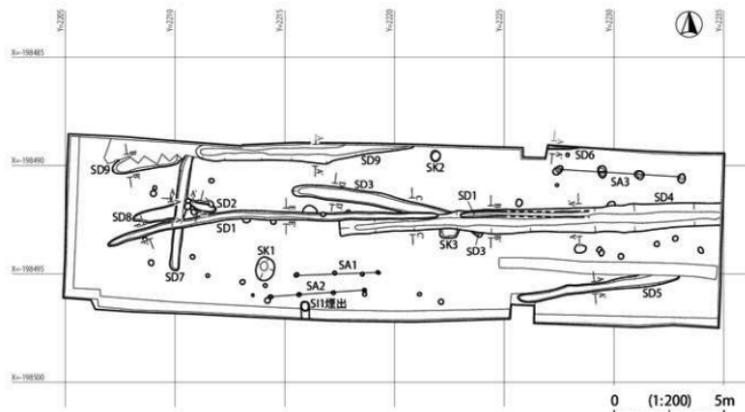
[堆積土] 2層に分層された。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

## 2) 柱列跡

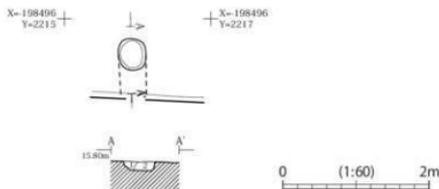
SA1 柱列跡(第242図、図版1) 調査区中央南側で検出した。検出した柱穴は4基で、東西方向に延びる。規模は総長3.91m、柱間寸法は東から73cm+127cm+173cmである。柱列方向はN-88°-Eである。平面形は円形または楕円形で、規模は長軸17～22cm、短軸15～18cm、深さ15～20cmである。断面形はU字形で、壁面は外傾して立ち上がる。柱痕跡は検出されていない。P25・27の堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SA2 柱列跡(第243図、図版1) 調査区中央南側で検出した。P20・29と重複関係にあり、本遺構が新しい。検出した柱穴は4基で、東西方向に延びる。規模は総長448cm、柱間寸法は東から143cm+159cm+134cmである。



第240図 鍛冶屋敷前遺跡I区遺構配置図

#### 第4節 観測屋敷前遺跡

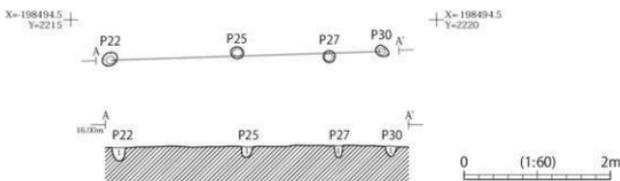


遺構名	名	平面形	方位	規模・軸幅・深さ (m)
S11	土坑	不明	N41°E	φ15.8
P番号	平面形	断面形	長軸×短軸×深さ (m)	
検出シット	楕円形	逆円形	0.44×0.37×0.08	

遺構名	層位	土色	土質	備考
S11	1	10YR4/4 黒褐色	シルト	径1～20mmの礫土を多数、径5mmの褐色粘土質シルトを少量含む。
	2	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	径1～10mmの褐色粘土質シルトブロック、径2～10mmの褐色シルトブロックを少量含む。

第241図 S11 竪穴住居跡平面図・断面図



遺構名	平面形	柱列方位	幅員 (m)
SA1	直線	N68°E	3.99
P番号	平面形	断面形	長軸×短軸×深さ (m)
P22	楕円形	U字形	0.22×0.18×0.19
P25	円形	U字形	0.18×0.18×0.15
P27	円形	U字形	0.17×0.17×0.17
P30	楕円形	U字形	0.18×0.15×0.20

遺構名	層位	土色	土質	備考
P22	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	径2～5mmの褐色粘土・灰黒褐色シルトを少量含む。
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	径2～5mmの褐色粘土・灰黒褐色シルトを少量含む。
P25	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	径2～5mmの褐色粘土・灰黒褐色シルトを少量含む。
	1	10YR4/3 赤褐色	シルト	径2mmの褐色粘土質シルトを少量、径1～3mmの黒褐色シルトを少量含む。

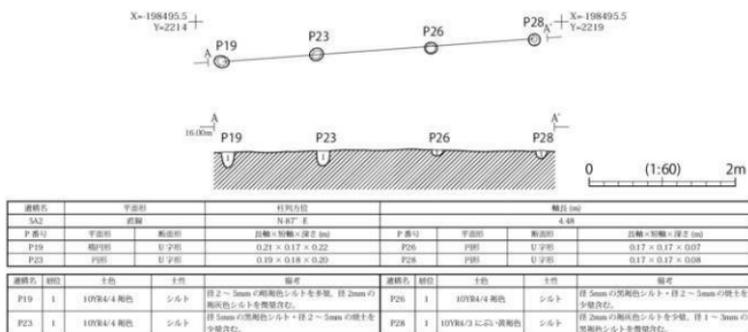
第242図 SA1 柱列跡平面図・断面図

柱列方向はN-87°Eである。平面形は円形を基調とし、規模は長軸17～21cm、短軸17～18cm、深さ7～22cmである。断面形はU字形で、壁面は外傾して立ち上がる。柱痕跡は検出されていない。P28から土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

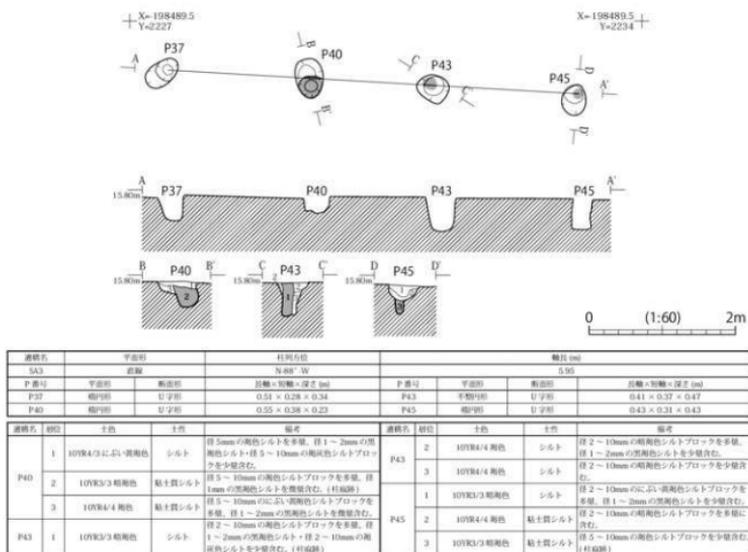
SA3 柱列跡 (第244図、図版1) 調査区北西側で検出した。検出した柱穴は4基で、東西方向に延びる。規模は総長5.95m、柱間寸法は東から205cm+165cm+195cmである。柱列方向はN-88°Wである。柱穴掘り方の平面形は楕円形を基調とし、規模は長軸41～55cm、短軸28～38cm、深さ23～47cmである。断面形はU字形を基調とし、壁面はやや外傾して立ち上がる。P40・43・45で、径13～29cmの柱痕跡を検出した。P3から土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

#### 3) 土坑

SK1 土坑 (第245図) 調査区西側で検出した。平面形は楕円形で、長軸方向はN-4°Eである。規模は長軸109cm、短軸84cm、深さ17cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は皿形で、底面は平坦である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。



第 243 図 SA2 柱列跡平面図・断面図

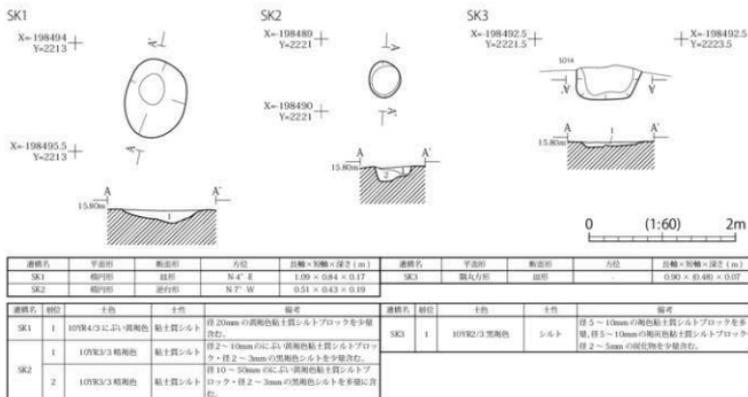


第 244 図 SA3 柱列跡平面図・断面図

SK2 土坑 (第 245 図) 調査区中央北側で検出した。平面形は楕円形で、長軸方向は N7°-W である。規模は長軸 51cm、短軸 43cm、深さ 19cm である。壁面はやや外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で、底面は起伏する。堆積土は 2 層に分層された。遺物は出土していない。

SK3 土坑 (第 245 図) 調査区中央付近で検出した。SD14 と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は隅丸方形

#### 第4節 殿治屋敷前遺跡



第 245 図 SK1～3 土坑平面図・断面図

と考えられ、長軸方向は不明である。規模は東西 90cm、南北 48cm 以上、深さ 7cm である。壁面は外傾して立ち上る。断面形は皿形で、底面はやや起伏する。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

#### 4) 溝跡

SD1 溝跡 (第 240・246 図、図版 1) 調査区東側から西側で検出した。東端は削平され不明である。東西方向に延びる溝跡である。SD3・4・7、P15・21・24・50・51 と重複関係にあり、SD3・4・7、P15・21・24・50 より新しく、P51 より古い。方向は N-86°-E で、規模は長さ 22.00m 以上、幅 41cm、深さ 16cm である。断面形は皿形である。堆積土は 2 層に分層された。遺物は出土していない。

SD2 溝跡 (第 240・246 図) 調査区西側で検出した。東西方向に延びる溝跡である。P8～10・12 と重複関係にあり、本遺構が古い。方向は N-73°-W で、規模は長さ 122cm 以上、幅 37cm、深さ 7cm である。断面形は皿形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD3 溝跡 (第 240・246 図) 調査区中央付近で検出した。東西方向に延びる溝跡である。SD1・4 と重複関係にあり、本遺構が古い。方向は N-77°-W で、規模は長さ 8.90m、幅 63cm、深さ 45cm である。断面形は皿形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD4 溝跡 (第 240・246 図、図版 1) 調査区東側から中央で検出した。東西方向の溝跡で、東端は調査区外へ延びる。SD1・3、SK3、P41 と重複関係にあり、SD3、SK3、P41 より新しく、SD1 より古い。方向は N-88°-E で、規模は長さ 17.37m 以上、幅 130cm、深さ 45cm である。断面形は皿形である。堆積土は 4 層に分層された。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD5 溝跡 (第 240・246 図) 調査区東側で検出した。東西方向に延びる溝跡で、掘乱により東端の一部を削平される。方向は N-82°-E で、規模は長さ 7.00m、幅 54cm、深さ 5cm である。断面形は皿形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

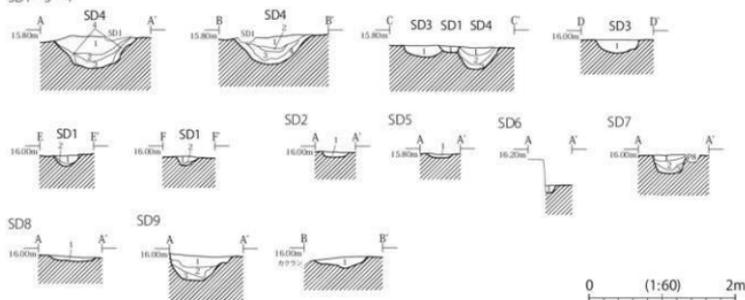
SD6 溝跡 (第 240・246 図) 調査区東側北壁際で、南壁の一部を検出した。東西方向に延びる溝跡と考えられ、調査区外へ延びる。方向は N-90° で、規模は長さ 142cm 以上、幅 20cm 以上、深さ 10cm である。断面形は U 字形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD7 溝跡 (第240・246図、図版1) 調査区西側で検出した。南北方向の溝跡で、北端は擾乱により削平される。SD1・8、P8・9と重複関係にあり、SD8より新しく、SD1、P8・9より古い。方向はN-7°-Eで、規模は長さ5.32m以上、幅49cm、深さ26cmである。断面形はU字形である。堆積土は3層に分層された。堆積土中より土師器片、砥石が出土したが、図示できる遺物はない。

SD8 溝跡 (第240・246図) 調査区西側で検出した。東西方向の溝跡である。SD7と重複関係にあり、本道構が古い。方向はN-79°-Eで、規模は長さ195cm以上、幅63cm、深さ6cmである。断面形は皿形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD9 溝跡 (第240・246図、図版1) 調査区中央から西側北壁付近で検出した。東西方向の溝跡で、東側は調査区外へ延び、一部を擾乱により削平される。方向はN-85°-Eで、規模は長さ11.80m以上、幅90cm以上、深さ35cmである。断面形は皿形である。堆積土は3層に分層された。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

## SD1・3・4



遺跡名	平面形	断面形	方位	長さ×幅×深さ(m)	遺跡名	平面形	断面形	方位	長さ×幅×深さ(m)
SD1	直線	皿形	N 60° E	022.00 × 0.41 × 0.16	SD6	直線	U字形	N 90° E	0.42 × 0.20 × 0.10
SD2	直線	皿形	N 77° W	0.22 × 0.37 × 0.07	SD7	直線	U字形	N 7° E	5.32 × 0.49 × 0.26
SD3	直線	皿形	N 77° W	8.90 × 0.63 × 0.45	SD8	直線	皿形	N 79° E	1.95 × 0.63 × 0.06
SD4	直線	皿形	N 68° E	17.37 × 1.30 × 0.45	SD9	直線	皿形	N 85° E	11.80 × 0.90 × 0.35
SD5	直線	皿形	N 62° E	07.00 × 0.54 × 0.03					

遺跡名	経緯	土色	土質	備考	遺跡名	経緯	土色	土質	備考
SD1・3	1	10YR5/2 黒褐色	シルト	径2～10mmの角礫シルトブロックを多数含む。	SD5	1	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径10～50mmの角礫シルトを多数、径2mmの黒褐色シルトを少量含む。
SD1E	1	10YR4/2 灰褐色	シルト	径2～10mmの黒褐色シルトブロック・細粒鉄屑を少量、径1mmの黒褐色シルトを数個含む。	SD6	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	径10mmの黒褐色粘土質シルトブロック・径2mmの黒褐色シルトを少量、径1mmの黒褐色シルトを数個含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	径2～5mmの黒褐色シルト・径2～3mmの黒褐色シルトを少量含む。		1	10YR3/2 黒褐色	シルト	径3～10mmの黒褐色シルトブロックを多数、径1～2mmの黒褐色シルトを少量含む。
SD1F	1	10YR4/4 褐色	シルト	径3～10mmの黒褐色シルトブロックを多数、径1mmの黒褐色シルトを少量含む。	SD7	2	10YR4/4 褐色	シルト	径3～10mmの黒褐色シルトを多数、径1～2mmの黒褐色シルトを少量含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	径1～5mmの黒褐色シルトを少量含む。		3	10YR2/2 黒褐色	シルト	径2～10mmの褐色シルトを多数含む。
SD2	1	10YR4/4 褐色	シルト	径3～5mmの黒褐色シルトを多数、径1～2mmの黒褐色シルトを少量含む。	SD8	1	10YR5/2 に近い黄褐色	シルト	径2～10mmの黒褐色・黄褐色シルトを含む。
	2	10YR4/4 褐色	シルト	径3～10mmの黒褐色シルトを多数、径1～2mmの黒褐色シルトを少量含む。		2	5YR5/2 に近い黄褐色	シルト	径2～5mmの角礫・黄褐色シルトを多数、径1～2mmの黒褐色シルトを少量含む。
SD3	1	10YR4/4 褐色	シルト	径3～10mmの黒褐色シルトを多数、径1～2mmの黒褐色シルトを少量含む。	SD9A	2	10YR4/2 灰褐色	シルト	径1～3mmの黒褐色シルトを少量、細粒鉄屑を多数、径1～2mmの黒褐色シルトを数個含む。
	2	10YR4/2 黒褐色	シルト	径3～10mmの黒褐色シルト・径1～5mmの黒褐色シルトを少量含む。		3	10YR4/2 に近い黄褐色	シルト	径3～10mmの黒褐色シルトを多数、径1mmの黒褐色・細粒鉄屑シルトを数個含む。
SD4	2	10YR2/2 黒褐色	シルト	径1～5mmの黒褐色シルトを多数、径1～5mmの黒褐色シルトブロックを少量、径1～5mmの黒褐色シルトを数個含む。	SD9B	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	径10～40mmの角礫・粘土質シルト・径10～40mmの黒褐色・に近い黄褐色シルト・径1～5mmの黒褐色シルトを多数、径3～10mmの黒褐色シルトブロックを少量、径2mmの黒褐色シルトを少量含む。
	3	10YR4/4 褐色	シルト	径2～10mmの黒褐色シルトを多数に含む。					
SD4	4	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	径1～5mmの黒褐色シルトを多数、径3～10mmの黒褐色シルトブロックを少量含む。					

第246図 SD1～9 溝跡断面図

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡

##### 5) ビット (第240図)

35基のビットを検出した。7基のビット堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

##### (2) 遺構外出土遺物

土師器片、須恵器片、が出土しているが、図示できる遺物はない。

#### 2. II区の調査

II区では、基本層Ⅲ層上面(古代以降の遺構検出面)において、竪穴住居跡11軒、土坑10基、溝跡29条、性格不明遺構1基、ビット266基を検出した。ビットについては遺構配置図にのみ表示している。

##### (1) Ⅲ層検出遺構と出土遺物(第247～275図、図版2～6・11～14)

###### 1) 竪穴住居跡

S18 竪穴住居跡(第248・249図、図版2・11)

[位置] 調査区西側に位置する。

[重複関係] P211・374・379・412と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は東西5.07m、南北4.25mである。平面形は方形と考えられる。周溝、掘り方は検出されていない。

[主軸方位] カマド基準でN-7°-Eである。

[堆積土・構築土] 7層に分層された。1・2層は住居堆積土、3～7層はカマド内堆積土である。

[壁面] 床面からやや外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大10cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層を床面として、概ね平坦である。住居範囲中央付近で、被熱範囲を1ヶ所検出した。

[柱穴] 床面で18基のビット(P1～18)を検出した。規模や位置関係から、P1～4・9・14は主柱穴の可能性がある。規模は長軸11～39cm、短軸17～36cm、深さ4～19cmである。平面形は円形ないし楕円形で、断面形は逆台形を基調とする。その他のビットの規模は長軸15～48cm、短軸14～40cm、深さ7～19cmである。平面形は円形ないし楕円形のものが多く、断面形は概ね逆台形ないし皿形である。

[カマド] 新旧2基を検出した。カマド(新)は、北壁のやや東側に付設されている。燃焼部の規模は奥行150cm、幅75cm、奥壁高10cmで、奥壁は住居内に取まると考えられる。底面はやや起伏があり、奥壁は外傾して立ち上がる。煙道部の規模は長さ95cm、幅15～30cm、深さ3～8cmである。底面は奥壁側から北端に向けてやや傾斜する。カマド(古)は、北壁の中央付近に付設されている。燃焼部の規模は奥行135cm、幅65cm、奥壁高5cmで、奥壁は住居から張り出すと考えられる。底面は中央がやや窪み、奥壁は外傾して立ち上がる。

[その他の施設] 床面で土坑跡2基(SK1・2)を検出した。SK1は、住居南西側に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.10m、短軸87cm、深さ18cmである。堆積土は2層に分層した。SK2は、住居北東側に位置し、カマド1の東側に近接する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸85cm、短軸67cm、深さ15cmである。堆積土は2層に分層した。規模や位置関係から、SK2は貯蔵穴と考えられる。

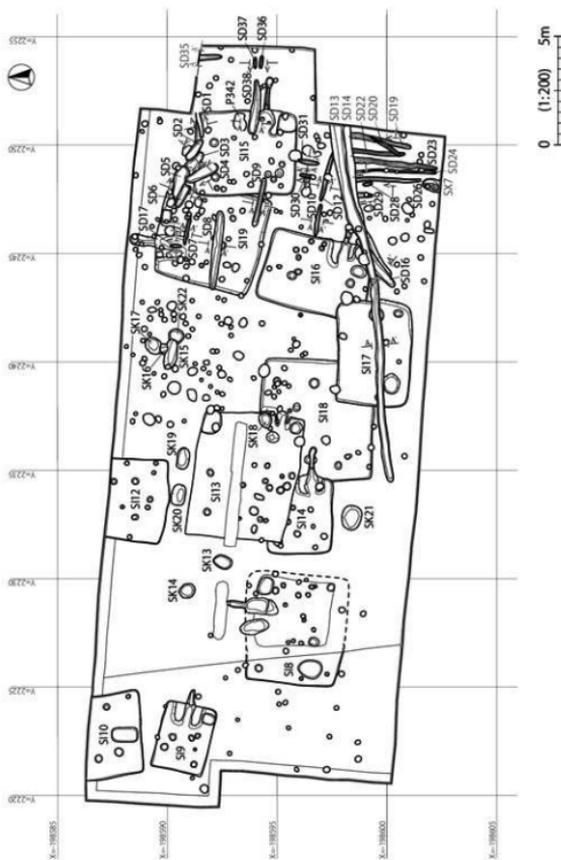
[出土遺物] 住居堆積土、S18-SK1、カマド(新)(古)、S11-SK1、S11-P1・2・8・11・12から土師器、赤焼土器、須恵器片、石製品、金属製品が出土しており、土師器1点、赤焼土器1点を図示した。そのうち、2層から出土した土師器環(第249図1)、床面直上から出土した赤焼土器環(第249図2)は本住居跡に伴うことから、年代は10世紀前半頃と考えられる。

S19 竪穴住居跡(第250・251図、図版2・11)

[位置] 調査区北西側に位置する。

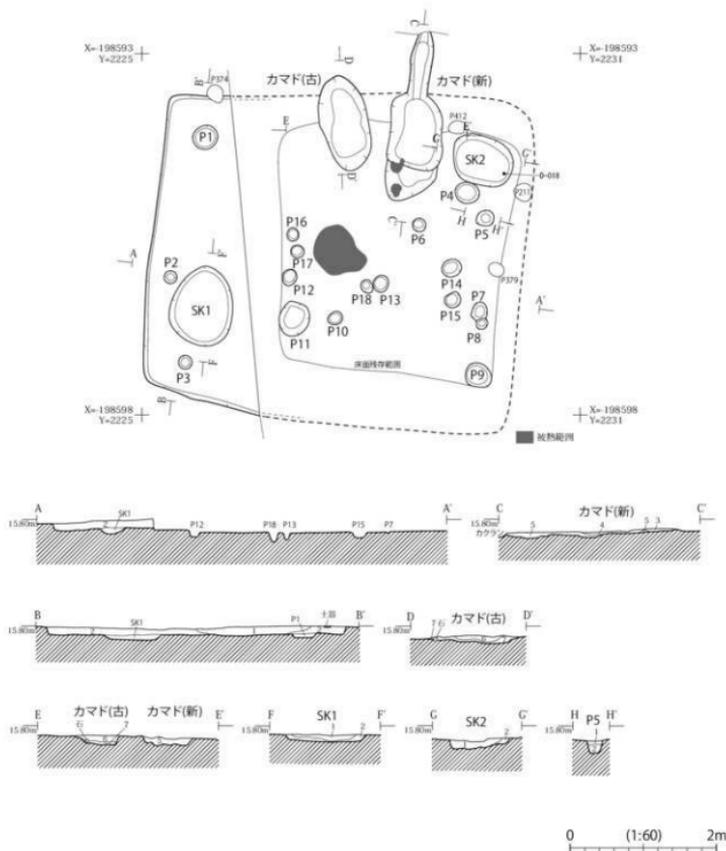
[重複関係] P369・370と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は東西315cm、南北239cmである。平面形は長方形である。周溝・掘り方は検出されていない。



第 247 図 観治屋敷の遺跡 II 区遺構配置図

第4節 鍛冶屋敷前遺跡



遺構名	カマド	平面形	方位	直径・短軸・深さ (m)			
				直径・短軸・深さ (m)	直径・短軸・深さ (m)	直径・短軸・深さ (m)	
S18	あり	方形	N 7° E	(5.07) × 4.25 × 0.13			
P 番号	平面形	構造形	直径・短軸・深さ (m)	P + SK 番号	平面形	構造形	直径・短軸・深さ (m)
P1	円形	皿型	0.34 × 0.32 × 0.04	P11	半整円形	遊歩形	0.46 × 0.40 × 0.11
P2	円形	遊歩形	0.18 × 0.17 × 0.19	P12	楕円形	遊歩形	0.24 × 0.20 × 0.07
P3	円形	遊歩形	0.18 × 0.18 × 0.11	P13	楕円形	遊歩形	0.24 × 0.20 × 0.13
P4	楕円形	遊歩形	0.34 × 0.28 × 0.11	P14	楕円形	遊歩形	0.27 × 0.25 × 0.17
P5	半整円形	U字形	0.25 × 0.22 × 0.17	P15	半整円形	遊歩形	0.23 × 0.20 × 0.10
P6	円形	遊歩形	0.18 × 0.18 × 0.19	P16	楕円形	遊歩形	0.18 × 0.15 × 0.08
P7	半整円形	皿型	0.25 × 0.20 × 0.09	P17	円形	皿型	0.18 × 0.18 × 0.08
P8	半整円形	皿型	0.15 × 0.14 × 0.10	P18	楕円形	遊歩形	0.20 × 0.15 × 0.09
P9	半整円形	遊歩形	0.39 × 0.36 × 0.14	SK1	半整楕円形	U字形	1.10 × 0.87 × 0.18
P10	楕円形	遊歩形	0.21 × 0.18 × 0.09	SK2	半整楕円形	遊歩形	0.85 × 0.67 × 0.13

第248図 S18 竪穴住居跡平面図・断面図

S8・11 竪穴住居跡堆積土主成分

遺構名	層位	土色	備考	遺構名	層位	土色	備考		
S8	1	10YR4/4 黄褐色	砂質シルト	黒褐色砂質シルト・径 5mm の炭化物を少量含む。S11 の 1 層相当。	カマド (表)	6	10YR4/2 黄褐色	砂質シルト	径 5～8mm の焼土・径 5mm の炭化物を少量含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	黒褐色砂質シルト・径 5mm の炭化物を少量含む。S11 の 2 層相当。		7	10YR4/2 黄褐色	砂質シルト	径 10～20mm の黄褐色砂質シルトブロック・径 5mm の焼土を少量含む。
	3	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	黒褐色砂質シルトブロックを多量に含む。	P5	1	10YR2/4 黄褐色	砂質シルト	径 20mm の焼土・径 5mm の炭化物を少量含む。
4	10YR4/4 黄褐色	砂質シルト	黒褐色砂質シルトブロック・径 5mm の焼土を多量に含む。下部に焼土を多量に含む。	2		10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	径 20mm の焼土・炭化物を少量含む。	
カマド (裏)	5	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径 5mm の焼土・炭化物を少量含む。	SK1	1	10YR4/4 黄褐色	砂質シルト	径 5mm の炭化物を少量含む。
					2	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	径 5mm の炭化物を少量含む。	
					1	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	径 5～20mm の炭化物を多量に含む。	
				SK2	2	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径 5mm の焼土を少量含む。	



№	図録番号	遺構名	層位	構造	形状	土厚×底径×最高高さ (cm)	外周設備	内周設備	備考	写真図版
1	B-021	S8	2	土壁	円	0.35×0.0×4.0	ロケの調整 既設・掘り直し・土間	（縁部・底面）ハシラを付した彩色塗料	内周に土間。	11.1
2	B-018	S11	床面	赤土層	円	0.40×4.1×3.5	ロケの調整 既設・掘削・塗り直し	ロケの調整	内面に付着物を含む。	11.2

第 249 図 S8 竪穴住居跡出土遺物

[主軸方位] カマド基準で E-13°-S である。

[堆積土・構築土] 8 層に分層された。1 層は住居堆積土、2・3 層はカマド内堆積土、4～8 層はカマド関連層位である。

[壁面] 床面からやや外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大 5cm である。

[床面] 基本層 III 層を床面とし、やや起伏する。

[柱穴] 床面で 6 基のピット (P1～6) を検出した。規模は長軸 15～35cm、短軸 14～33cm、深さ 5～9cm である。平面形は円形ないし不整形が多く、断面形は U 字形を基調とする。主柱穴は不明であるが、これらは補助的な柱あるいは内部施設に伴うものである可能性がある。

[カマド] 東壁の中央に付設されている。規模は左袖が長さ 104cm、幅 60cm、床面からの高さ 15cm で、右袖が長さ 105cm、幅 60cm、床面からの高さ 10cm である。燃焼部の規模は奥行 105cm、幅 30cm、奥壁高 5cm で、奥壁は住居壁面から張り出す。底面は概ね平坦で、奥壁は外傾して立ち上がる。深さ 10cm の掘り方を持つ。煙道部の規模は長さ 70cm、幅 17～30cm、深さ 5～10cm である。底面は東端から奥壁に向けて傾斜し、奥壁手前が最も下がる。

[その他の施設] 床面に土坑 1 基 (SK1) を検出した。SK1 は、住居跡南東隅に位置し、カマド右袖と接する。平面形は不整形円形で、規模は長軸 61cm、短軸 50cm、深さ 24cm である。堆積土は単層である。規模や位置関係から、貯蔵穴と考えられる。

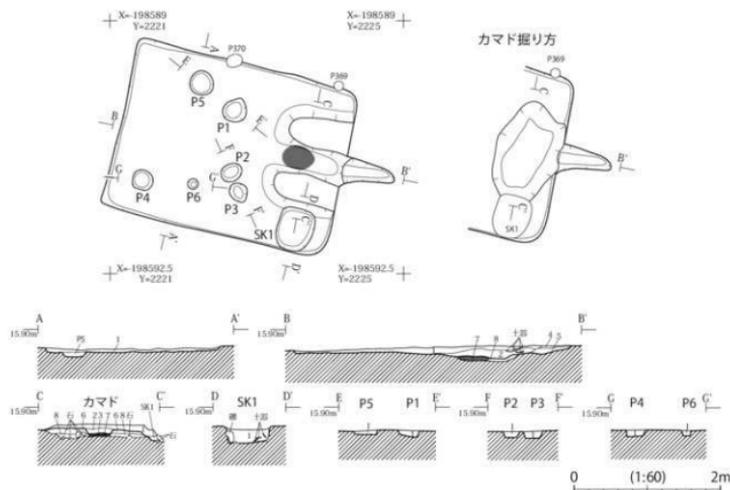
[出土遺物] 住居堆積土、カマド内堆積土、カマド袖構築土、SK1 から土師器、須恵器が出土しており、土師器 9 点、須恵器 1 点を図示した。そのうち、1 層から出土した土師器環 (第 251 図 6)、2 層から出土した土師器裏 (第 251 図 9)、須恵器裏 (第 251 図 10)、カマド袖から出土した土師器裏 (第 251 図 1・7・8)、SK1 から出土した土師器環 (第 251 図 3～5) は本住居跡に伴うことから、年代は 10 世紀前半頃と考えられる。

S10 竪穴住居跡 (第 252・253 図、図版 3・11)

[位置] 調査区北西に位置する。北側は調査区外へ延びる。

[規模・形態] 規模は東西 380cm、南北 240cm 以上である。平面形は、方形と考えられる。周溝・カマドは検出されていない。

#### 第4節 観治屋敷前遺跡



遺構名	カマド	平面形	方位	直径・短軸・深さ (m)			
S0	あり	長方形	E 47° S	3.15 × 2.30 × 0.17			
F 番号	平面形	敷設品	直径・短軸・深さ (m)	P + SK 番号			
P1	不物埋	U 字形	0.35 × 0.33 × 0.08	P5	円形	U 字形	0.34 × 0.33 × 0.05
P2	堀り方	楕円形	0.32 × 0.24 × 0.08	P6	円形	U 字形	0.15 × 0.14 × 0.07
P3	不物埋	U 字形	0.29 × 0.24 × 0.09	SK1	不物埋	U 字形	0.61 × 0.50 × 0.24
P4	不物埋	U 字形	0.30 × 0.28 × 0.08				

遺構名	層位	土質		備考	遺構名	層位	土質		備考
		砂質シルト	粘り土				砂質シルト	粘り土	
S0	1	10%R/4 黄褐色	砂質シルト	径 50mm の炭化物を少量含む。	F1	1	10%R/4 褐色	砂質シルト	炭化色砂質シルト・径 50mm の炭化物を少量含む。
	2	10%R/3 黄褐色	粘土質シルト	径 50mm の硝子・径 10mm の硝子を多数含む。	F2	1	10%R/4 褐色	砂質シルト	炭化色砂質シルト・径 50mm の炭化物を少量含む。
	3	10%R/1 黄褐色	砂質シルト	硝子粘り土質シルト・径 50mm の硝子を多数含む。	F3	1	10%R/4 褐色	砂質シルト	炭化色砂質シルト・径 50mm の炭化物を少量含む。
	4	10%R/0 黄褐色	砂質シルト	径 10mm の硝子を多数含む。	F4	1	10%R/4 褐色	砂質シルト	炭化色砂質シルト・径 50mm の炭化物を少量含む。
	5	10%R/6 黄褐色	砂質シルト	径 50mm の硝子・炭を多数含む。	F5	1	10%R/4 褐色	砂質シルト	炭化色砂質シルト・径 50mm の炭化物を少量含む。
	6	10%R/4 褐色	粘土質シルト	径 50mm の硝子・径 10mm の炭化物を少量含む。	F6	1	10%R/4 褐色	砂質シルト	径 20mm の硝子・硝子・炭化物を少量含む。
	7	5%S/6 明褐色	砂質シルト	硝子。	SK1	1	10%R/4 褐色	砂質シルト	径 50mm の硝子・炭化物を少量含む。
	8	10%R/3 黄褐色	粘土質シルト	径 50mm の炭化物を少量含む。					

第 250 図 S19 雙六住居跡平面図・断面図

[主軸方位] 南壁基準で N-82° E である。

[堆積土・構築土] 2層に分層された。1層は住居堆積土、2層は掘り方埋土である。

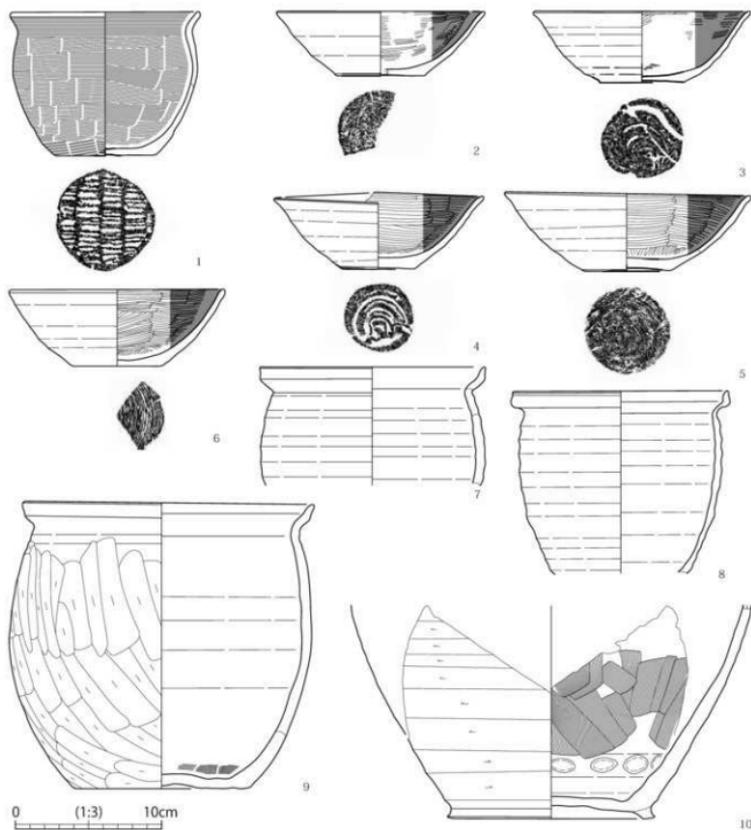
[壁面] 床面から外積して立ち上がる。壁高は床面から最大 10cm である。

[床面] 掘り方埋土上面を床面とし、やや起伏する。

[柱穴] 床面で 4 基のビット (P1 ~ 4) を検出した。規模や位置関係から、P1 ~ 3 は主柱穴の可能性が高い。規模は長軸 30 ~ 40cm、短軸 29 ~ 38cm、深さ 11 ~ 13cm である。平面形は円形を主体とし、断面形は U 字形を呈する。その他のビットの規模は長軸 21cm、短軸 19cm、深さ 9cm である。平面形は楕円形で、断面形は U 字形である。

[その他の施設] 床面で土坑 1 基 (SK1) を検出した。SK1 は、住居中央南側に位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は皿形である。規模は長軸 121cm、短軸 68cm、深さ 6cm である。堆積土は単層である。

[掘り方] 深さ 6 ~ 10cm である。底面は、概ね平坦である。



№	名称	遺物番号	形状	種類	器種	口径×底径×高さ(mm)	外面装飾	内面装飾	備考	写真掲載
1	C 001	S9	6	土師器	甕	13.0 × 6.8 × 10	1線部: ココナデ 装飾: ナデ →ナデ小ハナメ 底面: 滑石粉の 注染	1線部: ココナデ 装飾: ナデ	内外面滑石粉、器底内 面滑石粉、装飾	11-5
2	D 004	S9 SK1	1	土師器	片	× 6.0 × ×	ロケイ装飾 底面: 目焼赤褐色		1線部-底面: ヘラミダキ 黒 色装飾	11-4
3	D 005	S9 SK1	1	土師器	片	13.0 × 5.0 × 5	ロケイ装飾 底面: 目焼赤褐色	ヘラミダキ 黒色装飾	内面滑石粉装飾	11-8
4	D 009	S9 SK1	1	土師器	片	14.7 × 4.9 × 5.3	ロケイ装飾 底面: 目焼赤褐色	ヘラミダキ 黒色装飾	内面滑石粉	11-9
5	D 010	S9 SK1	1	土師器	片	16.8 × 5.9 × 5.5	ロケイ装飾 底面: 目焼赤褐色	1線部-底面: ヘラミダキ 黒 色装飾	内面滑石粉	11-10
6	D 006	S9	1	土師器	片	(14.8) × (6.2) × 5.3	ロケイ装飾 底面: 目焼赤褐色	ヘラミダキ 黒色装飾		11-3
7	D 008	S9	6	土師器	甕	(13.0) × × (6.2)	ロケイ装飾	ロケイ装飾	外面滑石粉、器底内 面滑石粉	11-6
8	D 007	S9	6	土師器	甕	(14.4) × × (12.0)	ロケイ装飾	ロケイ装飾	外面滑石粉、器底内 面滑石粉	11-7
9	D 012	S9 カマド	2	土師器	甕	20.0 × (12.0) × 10.7	ロケイ装飾 ヘラミダキ 底 面: 中央部ユビイサユ	ロケイ装飾 ユビイサユ		11-11
10	F 001	S9	2	灰土器	甕	× 0.42 × 0.44	ロケイ装飾 裏面-底面: 目焼 赤褐色 底面: 滑石粉	ロケイ装飾 裏面-底面: ヘラミダ キ 底面: ユビイサユ	内面底面: 自然剥付粉	11-12

第 251 図 S9 竈穴住居跡出土遺物

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡

[出土遺物] 住居堆積土、SK1 から土師器、須恵器片が出土しており、土師器5点を図示した。そのうち、1層から出土した土師器環(第253図1)、土師器高台付環(第253図2~4)、土師器甕(第253図5)は本住居跡に伴うことから、年代は9世紀後半~10世紀前半と考えられる。

S112 竪穴住居跡(第254・255図、図版3・12)

[位置] 調査区中央北壁際に位置する。北側は調査区外に延びる。

[規模・形態] 規模は東西380cm、南北282cm以上である。平面形は方形と考えられる。周溝・カマドは検出されていない。

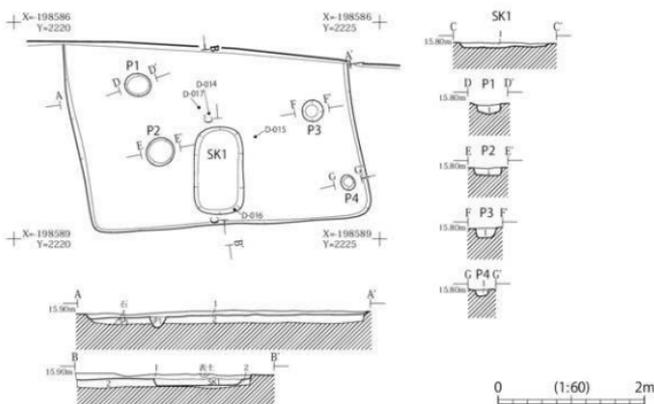
[主軸方位] 南壁基準でN-85°-Wである。

[堆積土・構築土] 2層に分層された。1層は住居堆積土、2層は掘り方理土である。

[壁面] 床面からやや外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大20cmである。

[床面] 掘り方理土上面を床面とし、やや起伏する。

[柱穴] 床面で10基のビット(P1~P10)を検出した。規模や位置関係から、P1・3・5は主柱穴の可能性が高い。規模は長軸21~23cm、短軸20~22cm、深さ12~18cmである。平面形は不整形円形を主体とし、断面形はU字形を呈する。いずれも、径10~11cmの柱痕跡が確認された。その他のビットの規模は長軸19~32cm、短軸17~30cm、深さ7~15cmである。平面形は円形ないし楕円形のものも多く、断面形は概ねU字形ないし皿形である。

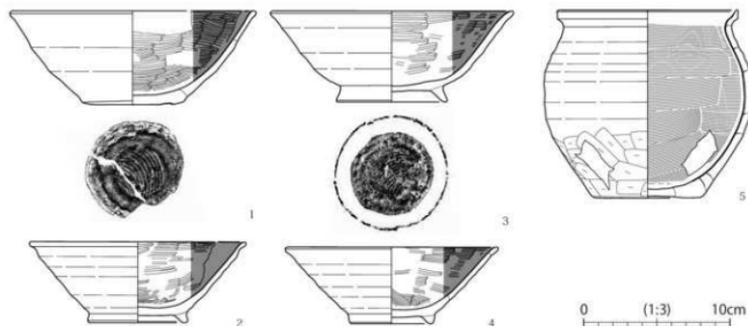


遺構名	名称	平面形	方位	規模・軸線・深さ(m)			
SK10	方池	方池	N42°E	3.80 × (2.43 × 0.09)			
P番号	平面形	断面形	規模・軸線・深さ(m)	P・SK番号	平面形	断面形	規模・軸線・深さ(m)
P1	楕円形	U字形	0.36 × 0.31 × 0.12	P4	楕円形	U字形	0.21 × 0.19 × 0.09
P2	円形	U字形	0.40 × 0.38 × 0.11	SK1	楕円方形	楕円	1.21 × 0.68 × 0.06
P3	円形	U字形	0.30 × 0.29 × 0.13				

遺構名	層位	土質	備考	遺構名	層位	土質	備考	
SK10	1	10YR4/3以上・黄褐色	砂質シルト	径50mmの陶化物を少量含む。	P3	1	10YR4/4褐色	砂質シルト
	2	10YR4/4褐色	砂質シルト					
P1	1	10YR4/4褐色	砂質シルト	径10mmの陶化粘土質シルトブロック・径5mmの焼土を少量含む。	P4	1	10YR4/4褐色	砂質シルト
P2	1	10YR4/4褐色	砂質シルト	径10mmの陶化粘土質シルトブロック・径5mmの焼土を少量含む。	SK1	1	10YR4/4褐色	砂質シルト

第252図 S110 竪穴住居跡平面図・断面図



No.	登録番号	遺物名	単位	種類	器種	口径×底径×高さcm	内面装飾	内面装飾	備考	写真掲載
1	D-015	S10	1	土師器	高台付杯	口径6.8×6.8×6.5	ロウロ装飾 底面：目柄・糸状 →埋戻しヒトナシ	土師器一底面：ヘラミ字半 雲 色装飾		11-13
2	D-013	S10	1	土師器	高台付杯	口径4.8×6.6×5.6	ロウロ装飾 底面：目柄・糸状 →高台付	土師器一底面：ヘラミ字半 雲 色装飾		11-14
3	D-014	S10	1	土師器	高台付杯	口径6.6×7.4×6.3	ロウロ装飾 底面：目柄・糸状 →高台付	ヘラミ字半 雲色装飾	内面厚縁。	11-15
4	D-016	S10	1	土師器	高台付杯	口径4.6×5.5×5.3	ロウロ装飾 底面：目柄・糸状 →高台付	土師器一底面：ヘラミ字半 雲 色装飾	内面厚縁。	11-16
5	D-017	S10	1	土師器	盃	口径7.0×7.5×13.5	ロウロ装飾 胴部下半：ヘラミ 字付 底面：切り崩し不明→ ヒトナシ	ロウロ装飾 胴部：ナシ	内外面に埋付物。土師 器一底面に付着物あり。 埋物。	11-17

第253図 S10 竪穴住居跡出土遺物

P9・10では、径10cmの柱痕跡が確認された。

[掘り方] 深さ5～10cmである。底面は、やや起伏する。

[出土遺物] 住居堆積土、掘り方埋土から土師器が出土しており、土師器2点を図示した。そのうち、床面直上から出土した土師器環(第255図1)、土師器盃(第255図2)は本住居跡に伴うことから、年代は9世紀後半頃と考えられる。

#### S113 竪穴住居跡(第256図、図版3)

[位置] 調査区中央付近に位置する。

[重複関係] S114・18、SK18、P196・204・205・279・281・293・295・423と重複関係にあり、S114・18より新しく、SK18、P196・204・205・279・281・293・295・423より古い。

[規模・形態] 規模は東西5.80m、南北4.79cmである。平面形は長方形である。周溝・掘り方は検出されていない。

[主軸方位] カマド基準でE-5°-Sである。

[堆積土・構築土] 5層に分層された。1層は住居堆積土、2～5層はカマド内堆積土である。

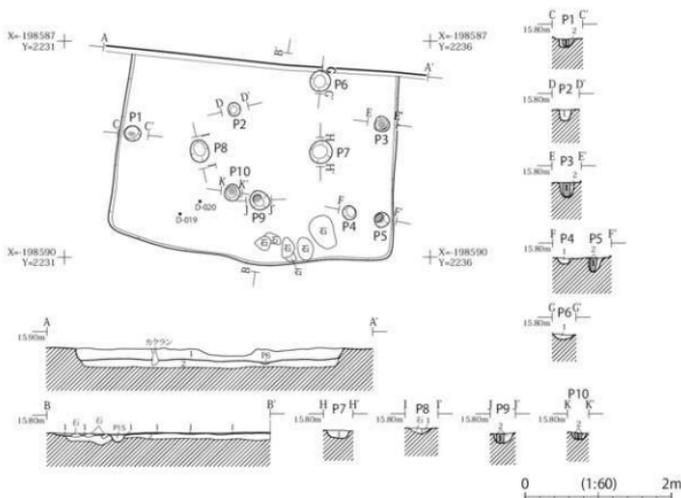
[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大3cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層を床面とし、やや起伏する。被熱範囲を4ヶ所検出した。

[カマド] 東壁の南側に付設されている。規模は左袖が長さ50cm、幅25cm、床面からの高さ15cmで、右袖が長さ65cm、幅20cm、床面からの高さ10cmである。燃焼部の規模は奥行25m、幅48cm、奥壁高4cmで、奥壁は住居から張り出す。底面は窪み、奥壁は外傾して立ち上がる。

[その他の施設] 床面で土坑3基(SK1～3)、ピット16基(P1～7・9～17)を検出した。SK1は、住居南東隅に位置する。平面形は不整形で、断面形は逆台形である。規模は長軸57cm、短軸53cm、深さ20cmである。堆積

第4節 鍛冶屋敷前遺跡



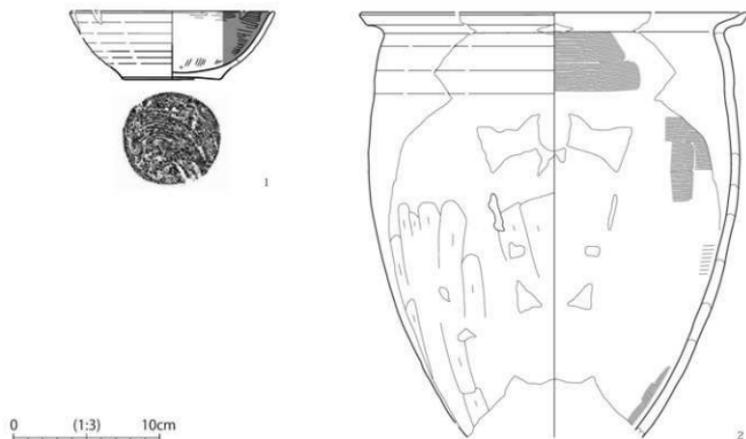
遺構名	カマド	平面形	方位	規模・形状・深さ (m)	遺構名	平面形	方位	規模・形状・深さ (m)
SI12	なし	方形	北偏西 90°	3.40 × 0.82 × 0.18				
P1	円形	U字形		0.25 × 0.22 × 0.12	P6	円形	東西	0.28 × 0.28 × 0.07
P2	楕円形	U字形		0.19 × 0.17 × 0.15	P7	楕円形	東西	0.32 × 0.30 × 0.11
P3	半楕円形	U字形		0.21 × 0.20 × 0.18	P8	楕円形	東西	0.32 × 0.25 × 0.08
P4	円形	U字形		0.25 × 0.18 × 0.07	P9	半楕円形	U字形	0.28 × 0.25 × 0.14
P5	半楕円形	U字形		0.22 × 0.20 × 0.18	P10	楕円形	U字形	0.24 × 0.20 × 0.10

遺構名	層位	土色		土質	備考	遺構名	層位	土色		土質	備考			
		1	2					1	2					
SI12	1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	粘り強い粘土を少量含む。	P5	1	10YR5/2 黄褐色	粘土質シルト	褐色砂質シルト・径 5mm の硬化物を少量含む。(付属)	P6	1	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	粘土の塊を少量含む。
	2	10YR3/4 に近い黄褐色	粘土質シルト	緑色を呈。径 2mm の硬化物を少量含む。		2	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径 2mm の塊を少量含む。		2	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトを少量含む。
P1	1	10YR5/2 黄褐色	粘土質シルト	褐色砂質シルト・径 5mm の硬化物を少量含む。(付属)	P7	1	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトを少量含む。	P8	1	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトを少量含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径 2mm の塊を少量含む。		2	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトを少量含む。		2	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトを少量含む。
P2	1	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	径 2mm の塊を少量含む。	P9	1	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトを少量含む。	P10	1	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硬化物・径 10mm の塊を少量含む。(付属)
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径 2mm の硬化物・径 2mm の塊を少量含む。		2	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	径 2mm の塊を少量含む。		2	10YR4/6 黄褐色	砂質シルト	径 5mm の硬化物を少量含む。(付属)
P3	1	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	褐色砂質シルト・径 5mm の硬化物・径 2mm の塊を少量含む。(付属)	P10	1	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硬化物を少量含む。(付属)	P10	2	10YR3/4 黄褐色	砂質シルト	径 5mm の硬化物を少量含む。(付属)
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径 2mm の塊を少量含む。		2	10YR3/4 黄褐色	砂質シルト	径 5mm の硬化物を少量含む。(付属)		2	10YR4/6 黄褐色	砂質シルト	径 5mm の硬化物を少量含む。(付属)
P4	1	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径 5mm の硬化物・径 10mm の塊を少量含む。										
	2	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	径 2mm の塊を少量含む。										

第254図 SI12 竪穴住居跡平面図・断面図

土は2層に分層された。規模や位置関係から、SK1は貯蔵穴と考えられる。SK2は、カマド西側に位置する。平面形は楕円形で、断面形はU字形である。規模は長軸57cm、短軸50cm、深さ32cmである。堆積土は2層に分層された。SK3は、住居北東隅に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸114cm、短軸85cm、深さ21cmである。被熱範囲と近接することから、これと関係する遺構と考えられる。ピットの規模は長軸17～46cm、短軸13～36cm、深さ4～27cmである。平面形は円形ないし楕円形を基調とし、断面形は逆台形ないしU字形が多い。いずれも柱痕跡は確認されていない。

[出土遺物] 住居堆積土、カマド内堆積土、SK1～3、P2・4・5・7・8・13・14から土師器片、須恵器片、鉾津が出土しているが、図示できる遺物はない。重複関係から9世紀前半の住居跡と考えられるSI18および9世紀前半以降の住居跡と考えられるSI14より新しい竪穴住居跡と考えられる。



No.	登録番号	遺構名	NO.	種類	図例	土厚×底径×高さ (cm)	内周設備	内周設備	備考	写真図版
1	D-019	SI12	1	土炉跡	円	14.0×6.7×4.7	口枠設備 底面(土板未検出)	上扉蓋(土板) 内周(ヘラミダキ) 燃焼部	内周体部に掘削(何?) 内周土厚調査済。	12.1
2	D-020	SI12	1	土炉跡	楕	26.0×11.0×9.0	口枠設備 下扉(ヘラミダキ)	口枠設備 下扉	内周土厚調査済。	12.2

第255図 SI12 竪穴住居跡出土遺物

## SI14 竪穴住居跡 (第257・258図、図版3・4・12)

[位置] 調査区中央東側に位置する。

[重複関係] SI13・18、P206～209・233・299と重複関係にあり、SI18より新しく、SI13、P206～209・233・299より古い。

[規模・形態] 規模は東西365cm、南北308cmである。平面形は、隅丸方形である。周溝は検出されていない。

[主軸方位] カマド基準でE-1°Sである。

[堆積土・構築土] 9層に分層された。1・2層は住居堆積土、3～5層はカマド内堆積土、6～8層はカマド関連層位、9層は掘り方埋土である。

[壁面] 床面からやや外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大15cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層または掘り方埋土上面を床面とし、概ね平坦である。

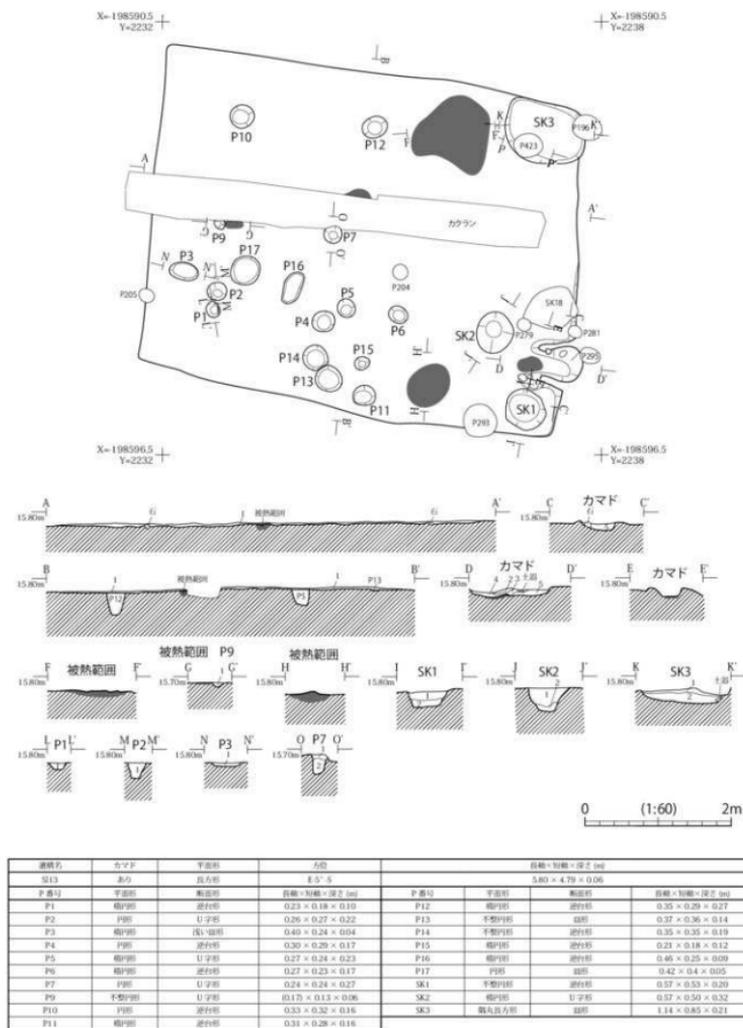
[カマド] 東壁の南側に付設されている。規模は左袖が長さ90cm、幅55cm、床面からの高さ20cmで、右袖が長さ80cm、幅40cm、床面からの高さ13cmである。いずれの袖からも、土師器片や須恵器片が出土しており、構築材として使用されていたと考えられる。燃焼部の規模は奥行130cm、幅40cm、奥壁高5cmで、奥壁は住居壁面から張り出す。底面は中央がやや窪み、奥壁は外傾して立ち上がる。深さ10cmの掘り方を持つ。煙道部の規模は長さ95cm、幅17～30cm、深さ5cmである。底面は概ね平坦である。

[その他の施設] 床面でピット5基(P1～5)を検出した。規模は長軸25～40cm、短軸23～38cm、深さ4～10cmである。平面形は円形を基調とし、断面形は皿形を基調とする。いずれも柱痕跡は確認されていない。

[掘り方] 深さ10～15cmである。底面は、平坦である。

[出土遺物] 住居堆積土、カマド内堆積土、カマド構築土、P6から縄文土器、土師器、須恵器片が出土しており、

第4節 鍛冶屋敷前遺跡



第256図 S113竪穴住居跡平面図・断面図

SI11 層内住居堆積土と土器

遺構名	層位	土器	備考	遺構名	層位	土器	備考	
SI13	1	10YR4/3に灰-黄褐色	シルト	層2～5mmの炭化物を少量含む。	P7	1	10YR4/6黄褐色	砂質シルト 層10mmの炭化物粘土質を少量含む。
	2	7.5YR2/2黒褐色	粘土質シルト	層2～5mmの焼土・層1～2mmの炭化物を少量含む。		2	10YR4/3に灰-黄褐色	砂質シルト 層5mmの炭化物を少量含む。
	3	7.5YR2/2黒褐色	粘土質シルト	層2～10mmの焼土・層1～5mmの炭化物を少量含む。	SK1	1	10YR4/4黄褐色	砂質シルト 層2～5mmの焼土・層2～10mmの炭化物を少量含む。
	4	10YR4/2灰黄褐色	砂質シルト	層5mmの炭化物を少量含む。		2	10YR2/3黒褐色	砂質シルト 層20mmの焼土・層2～5mmの炭化物を少量含む。
	5	10YR2/2黒褐色	粘土質シルト	層5～10mmの焼土を多数含む。	SK2	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト 層10～30mmの粘土質ブロックを多数、層5～10mmの焼土を少量含む。
P1	1	10YR3/3黄褐色	粘土質シルト	層2～5mmの炭化物・層2～3mmの炭化物を少量含む。		2	7.5YR2/2黒褐色	粘土質シルト 層2～5mmの焼土を多数、炭化物を少量含む。
	P2	1	10YR3/4黄褐色	砂質シルト	層5～10mmの炭化物を多数、層5mmの焼土を少量含む。	SK3	1	10YR3/4黄褐色
P3		1	10YR3/4黄褐色	砂質シルト	層5～10mmの炭化物を多数含む。		2	10YR3/4黄褐色

土師器3点を図示した。そのうち、1層から出土した土師器環(第258図1)、土師器甕(第258図2)、カマド袖から出土した土師器甕(第258図3)は本住居跡に伴うことから、年代は9世紀前半以降と考えられる。

#### SI15 竪穴住居跡(第259・260図、図版4・12)

[位置] 調査区東側に位置する。

[重複関係] SD1～4・9・38、P121～124・133～136・253・334～336・342・343・346～348・400・411・413・424と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は東西390cm、南北465cmである。平面形は、隅丸長方形である。周溝は検出されていない。

[主軸方位] カマド基準でE-8°-Sである。

[堆積土] 11層に分層された。1・2層は住居堆積土、3～8層はカマド内堆積土、9～11層はカマド関連層位である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大10cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層を床面とし、概ね平坦である。

[柱穴] 床面で9基のビット(P1～9)を検出した。規模や位置関係から、P3・6・7は主柱穴の可能性はある。規模は長軸38～39cm、短軸37～38cm、深さ15～18cmである。平面形は円形を基調とし、断面形はU字形を基調とする。柱痕跡は確認されなかった。その他のビットの規模は長軸20～32cm、短軸20～28cm、深さ7～20cmである。平面形は円形を基調とし、断面形はU字形を基調とする。柱痕跡は確認されなかった。

[カマド] 東壁の南側に付設されている。規模は左袖が長さ75cm、幅35cm、床面からの高さ10cmで、右袖が長さ120cm、幅40cm、床面からの高さ10cmである。燃焼部の規模は奥行110cm、幅70cm、奥壁高10cmで、奥壁は住居からやや張り出す。底面はやや窪み、奥壁は外傾して立ち上がる。深さ5cmの掘り方を持つ。中央付近でビットを2基(P1・2)検出した。煙道部の規模は長さ150cm、幅16～20cm、深さ5cmである。底面は概ね平坦である。煙出し部の規模は長軸49cm、短軸30cm、深さ20cmである。底面は平坦である。

[その他の施設] 床面で土坑1基(SK1)を検出した。SK1は、住居南東隅に位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸89cm、短軸86cm、深さ18cmである。堆積土は2層である。規模や位置関係から、SK1は貯蔵穴と考えられる。

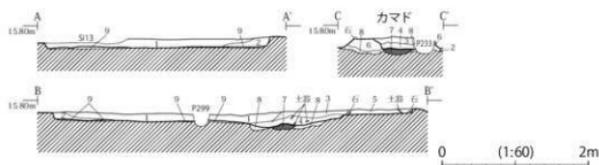
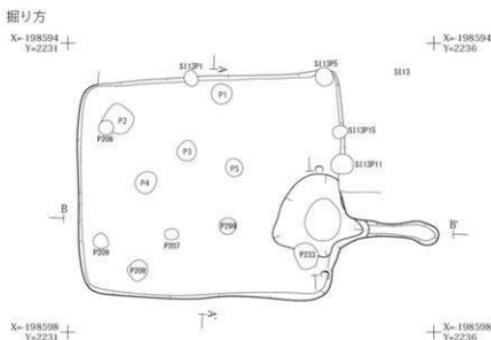
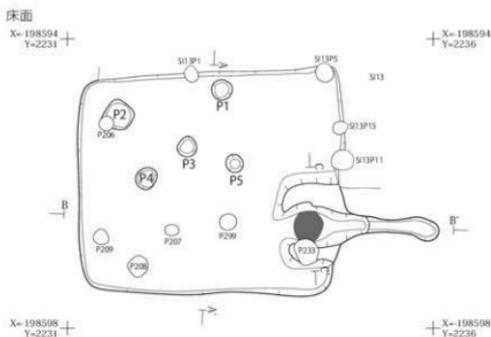
[出土遺物] 住居堆積土、カマド内堆積土、煙道、SK1、P1・4、掘り方から土師器、赤焼土器、須恵器片、砥石、鉈滓、土製品が出土しており、土師器3点、赤焼土器1点、土製品1点を図示した。そのうち、3層から出土した土師器甕(第260図3・4)、SK1から出土した土師器環(第260図1)、赤焼土器環(第260図2)は本住居跡に伴うことから、年代は10世紀前半頃と考えられる。

#### SI16 竪穴住居跡(第261・262図、図版4・5・12・13)

[位置] 調査区東側に位置する。

[重複関係] SI17、SD13・14・16、P115・116・129・151・282・283・287・288と重複関係にあり、本遺構

第4節 鍛冶屋敷前遺跡

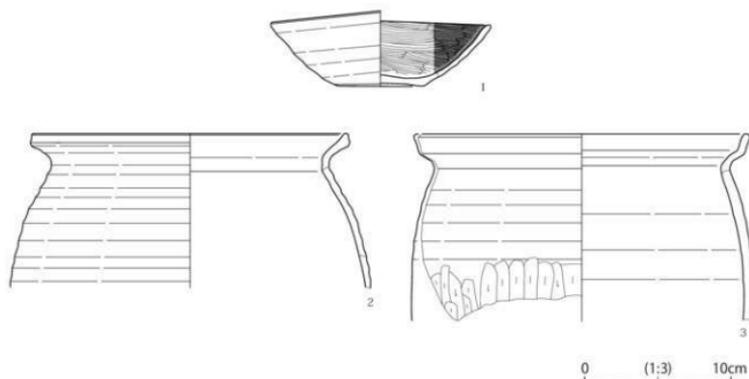


遺構名	方マド	平面図	方位	径横×径縦×深さ (cm)			
S14	北东	掘り方図	E 45° S	3.65 × 3.08 × 0.20			
P番号	平面図	掘り方図	径横×径縦×深さ (cm)	P番号	平面図	掘り方図	径横×径縦×深さ (cm)
P1	掘り	掘り	0.28 × 0.28 × 0.08	P4	平面内図	掘り	0.32 × 0.28 × 0.04
P2	掘り方図	掘り	0.45 × 0.38 × 0.06	P5	平面内図	掘り	0.25 × 0.23 × 0.10
P3	平面内図	掘り	0.29 × 0.27 × 0.04				

遺構名	層位	土色	土厚	備考	遺構名	層位	土色	土厚	備考
S14	1	10YR5/6 黄褐色	約 5mm	径 5mm の硬化物を少量含む。	S14	5	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	径 5mm の粘土を少量含む。
	2	10YR5/4 に 5% 混濁色	砂質シルト	径 10 ~ 20mm の硬化物を多数に含む。		6	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	径 5mm の粘土・硬化物を多数に含む。
	3	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	径 5 ~ 10mm の硬化物を多数、径 5mm の硬化物を少量含む。		7	5YR5/3 暗赤褐色	シルト	焼土。
	4	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硬化物を多数に含む。		8	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	径 30 ~ 50mm の礫を少量含む。
					9	10YR5/4 に 5% 混濁色	粘土質シルト	径 5mm の硬化物を多数に含む。	

第 257 図 S14 竪穴住居跡平面図・断面図



第258図 S114 竪穴住居跡出土遺物

が古い。

[規模・形態] 規模は東西345cm、南北495cmである。平面形は長方形である。周溝・掘り方は検出されていない。

[主軸方位] カマド基準でE-12°Sである。

[堆積土] 18層に分層された。1～4層は住居堆積土、5～11層はカマド内堆積土、12～17層はカマド関連層位である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大13cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層を床面とし、概ね平坦である。

[柱穴] 床面で9基のビット(P1～9)を検出した。規模や位置関係から、P1・2は主柱穴の可能性がある。規模は長軸40cm、短軸35～40cm、深さ25～27cmである。平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。その他のビットの規模は長軸25～35cm、短軸20～30cm、平面形は円形を基調とする。柱痕跡は確認されなかった。

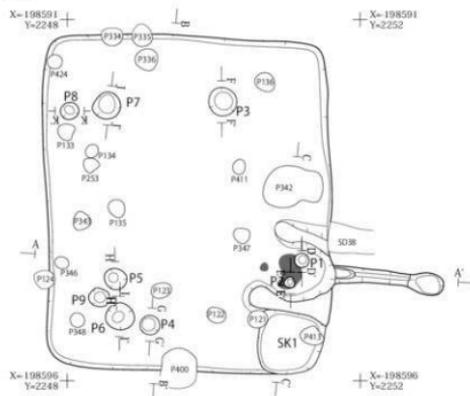
[カマド] 東壁の南側に付設されている。規模は左袖が長さ120cm、幅55cm、床面からの高さ20cmで、右袖が長さ75cm、幅35cm、床面からの高さ15cmである。燃焼部の規模は奥行105cm、幅40cm、奥壁高15cmで、奥壁は住居内に収まる。底面はやや窪み、奥壁は外傾して立ち上がる。深さ10cmの掘り方を持つ。中央付近で直立された礫が出土した。全体が被熱しており、位置関係や出土状況により支脚と考えられる。煙道部の規模は長さ60cm、幅20～25cm、深さ15cmである。底面は概ね平坦である。

[その他の施設] 床面で土坑2基(SK1・2)を検出した。SK1は、住居南東隅に位置する。平面形は円形で、規模は長軸75cm、短軸75cm、深さ30cmである。堆積土は3層に分層された。規模や位置関係から、SK1は貯蔵穴と考えられる。SK2は、住居南側、SK1の西側に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸70cm、短軸55cm、深さ15cmである。堆積土は2層に分層された。

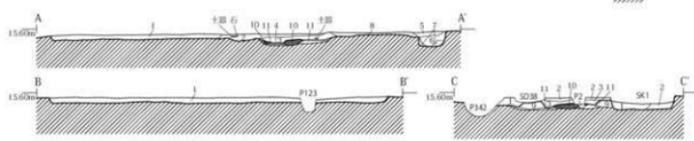
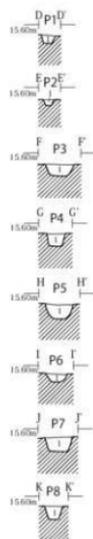
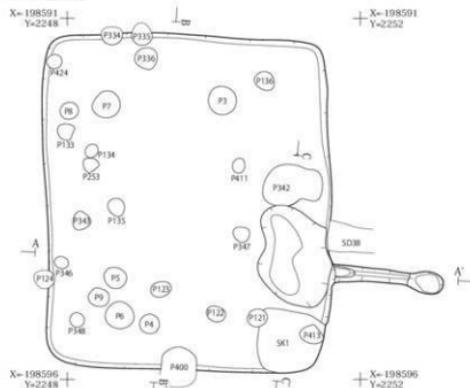
[出土遺物] 住居堆積土、カマド内堆積土、煙道、SK1、P1～3・5・8、カマド掘り方から土師器、赤焼土器、須

第4節 鍛冶屋敷前遺跡

床面



カマド掘り方



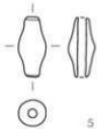
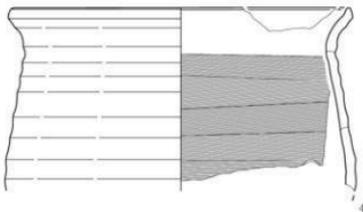
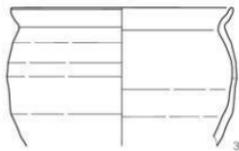
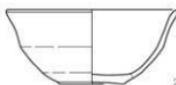
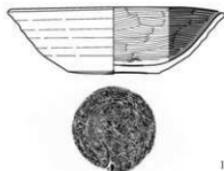
第259図 S115 竪穴住居跡平面図・断面図

S15 壁穴住居跡断面表、埋蔵土法定表

遺構名	方向	位置	方向	距離・加幅・厚さ (m)			
S15	西→東	掘削区	E-N	4.65 × 3.00 × 0.13			
P番号	位置	断面	距離・加幅・厚さ (m)	P・SK番号	位置	断面	距離・加幅・厚さ (m)
P1	内側	掘削面	0.21 × 0.20 × 0.07	P6	内側	U字部	0.38 × 0.37 × 0.18
P2	外側内側	U字部	0.20 × 0.20 × 0.08	P7	外側内側	U字部	0.38 × 0.37 × 0.18
P3	内側	掘削面	0.38 × 0.38 × 0.15	P8	内側	U字部	0.27 × 0.25 × 0.18
P4	内側	U字部	0.27 × 0.26 × 0.17	P9	外側内側	掘削面	0.28 × 0.25 × 0.14
P5	掘削面	U字部	0.32 × 0.28 × 0.20	SK1	掘削区	掘削面	0.80 × 0.86 × 0.18

遺構名	種類	土色		備考	遺構名	種類	土色		備考
		表層	底層				表層	底層	
S15	1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト		P1	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	径 5mm の焼土を少量含む。
	2	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	黒褐色粘土質シルトを少量含む。	P2	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	径 5mm の焼土を少量含む。
	3	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径 5 ~ 10mm の炭化物を少量含む。	P3	1	10YR4/4 黒色	砂質シルト	径 5mm の焼土を少量含む。
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	径 5mm の炭化物を多量に含む。	P4	1	10YR4/4 黒色	砂質シルト	径 5mm の焼土を少量含む。
	5	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径 5mm の炭化物を少量含む。	P5	1	10YR4/4 黒色	砂質シルト	径 5mm の焼土を少量含む。
	6	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	暗褐色砂質シルト・径 5 ~ 10mm の炭化物を多量に含む。	P6	1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	
	7	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	暗褐色粘土質シルトを少量含む。	P7	1	10YR4/4 黒色	砂質シルト	径 5mm の焼土を少量含む。
	8	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の焼土を多量、下部に灰を少量含む。	P8	1	10YR4/2 黒褐色	砂質シルト	
	9	10YR4/4 黒色	砂質シルト	径 5 ~ 10mm の焼土を少量含む。	SK1	1	10YR4/4 黒色	粘土質シルト	径 10 ~ 15mm の炭化物・径 5mm の焼土を多量に含む。
	10	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト		2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	炭化物シルト・焼土を少量含む。	
	11	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の焼土・炭化物を少量含む。					



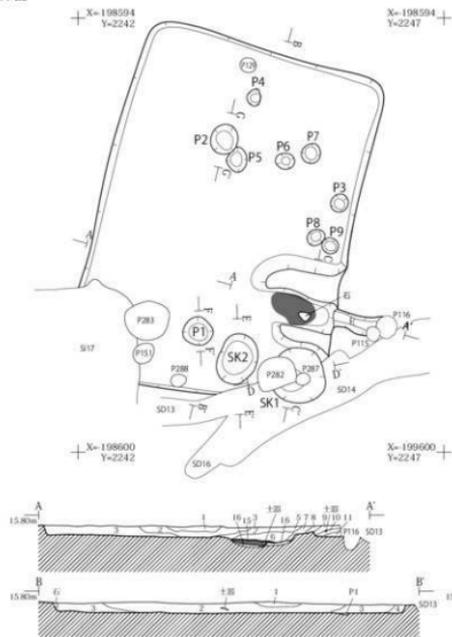
0 (1:3) 10cm

No.	登録番号	遺構名	種類	構造	距離	1径×底径×高さ (mm)	外面調整	内面調整	備考	写真掲載
1	D-026	S15-SK1	陶土	土師器	片	14.8 × 6.2 × 4.6	ロウロ調整 底面：目肌表面付	上縁部～底面：ヘラミヤチ 凹面調整		12.8
2	D-025	S15-SK1	1	赤褐色土器	片	11.80 × 4.4 × 5.2	ロウロ調整 底面：目肌表面付	ロウロ調整	焼割による割欠。内面厚縁。	12.9
3	D-027	S15	3	土師器	片	(15.2) × × 6.6	ロウロ調整	ロウロ調整	内面厚縁。内面厚縁。	12.6
4	D-028	S15	3	土師器	片	12.10 × × (12.6)	ロウロ調整	ロウロ調整 1径部～縁部：目肌ヘラミヤチ	内面：目肌厚縁。	12.7
No.	登録番号	遺構名	種類	構造	距離	長さ×幅×厚さ (mm)	厚さ (mm)		備考	写真掲載
5	P-001	S15	2	土師器	土師	4.2 × 1.9 × 0.6	10.30		ヤジ	12.10

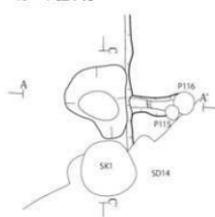
第 260 図 S15 壁穴住居跡出土遺物

第4節 観治屋敷前遺跡

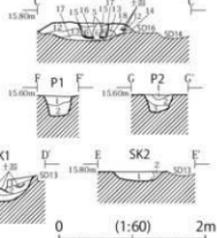
床面



カマド掘り方



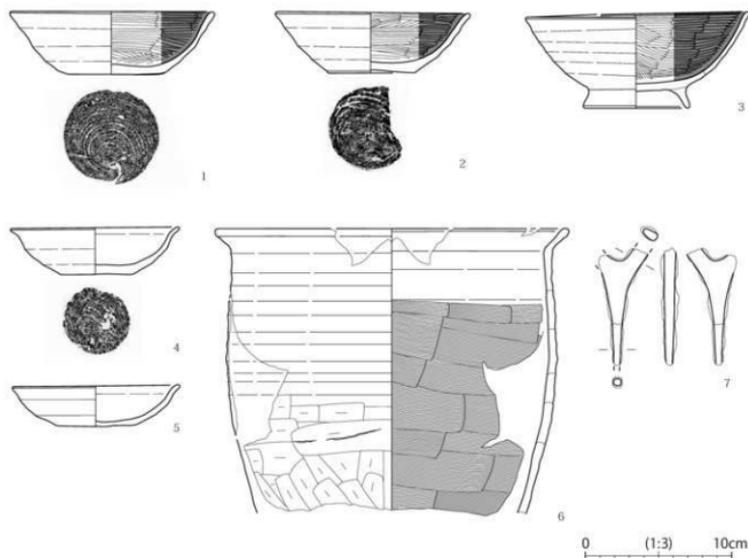
カマド



遺構名	名称	平面図	方位	径横×縦横×深さ (m)			
SK16	あり	長方形	E 42° S	4.95 × 3.45 × 0.13			
P番号	平面図	断面図	径横×縦横×深さ (m)	P+SK番号	平面図	断面図	径横×縦横×深さ (m)
P1	円形	逆円形	0.40 × 0.40 × 0.27	P7	円形	-	0.30 × 0.25 × -
P2	円形	逆円形	0.40 × 0.30 × 0.25	P8	円形	-	0.25 × 0.20 × -
P3	円形	-	0.25 × 0.25 × -	P9	円形	-	0.25 × 0.20 × -
P4	半円形	-	0.25 × 0.20 × -	SK1	円形	逆円形	0.75 × 0.75 × 0.30
P5	半円形	-	0.35 × 0.30 × -	SK2	楕円形	逆円形	0.70 × 0.55 × 0.15
P6	円形	-	0.35 × 0.20 × -				

遺構名	層位	土色			備考	遺構名	層位	土色			備考	
		1層	2層	3層				1層	2層	3層		
SK16	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。	SK16	17	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。	
	2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。		18	10YR4/4 褐色	砂質シルト	-	径 100mm の硝子を少量含む。	
	3	10YR4/3 に近い 黄褐色	砂質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。		P1	1	10YR4/2 黒褐色	粘土質シルト	-	黄褐色の砂質シルトを多数、径 50mm の硝子を少量含む。
	4	10YR4/4 褐色	砂質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。			2	10YR4/3 に近い 黄褐色	砂質シルト	-	黄褐色の砂質シルトを多数、径 50mm の硝子を少量含む。
	5	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を多数に含む。		P2	1	10YR3/1 黄褐色	粘土質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。
	6	10YR4/3 に近い 黄褐色	砂質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を多数に含む。			2	10YR4/3 に近い 黄褐色	砂質シルト	-	黄褐色の砂質シルトを多数、径 50mm の硝子を少量含む。
	7	10YR4/3 に近い 黄褐色	砂質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。		SK1	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	-	径 100mm の硝子を少量含む。
	8	10YR4/3 黄褐色	粘土質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。			2	10YR3/2 暗褐色	粘土質シルト	-	径 100mm の硝子を少量含む。
	9	10YR4/3 に近い 黄褐色	砂質シルト	-	黄褐色の砂質シルトを多数、径 50mm の硝子を少量含む。		SK2	1	10YR3/1 黄褐色	粘土質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。
	10	10YR4/3 に近い 黄褐色	砂質シルト	-	径 200mm の硝子を少量含む。			2	10YR4/3 に近い 黄褐色	砂質シルト	-	黄褐色の砂質シルトを多数、径 50mm の硝子を少量含む。
	11	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。							
	12	10YR3/4 に近い 黄褐色	砂質シルト	-	径 50mm の硝子・灰化物を少量含む。							
	13	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	-	灰化物を多数、径 50mm の硝子を少量含む。							
	14	10YR4/4 褐色	砂質シルト	-	-							
	15	10YR6/6 黄褐色	シルト	-	粘土。							
	16	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	-	径 50mm の硝子を少量含む。							

第 261 図 SK16 竪穴住居跡平面図・断面図



No.	図録番号	遺物名	単位	種類	説明	寸法×底径×部高(mm)	内面調整	外面調整	備考	写真掲載
1	D-029	SI16-SK1	2	土師器	杯	14.1 × 6.5 × 4.4	ロウロ調整 底面：目焼表面切り	ヘラミガキ 黒色陶質		12-12
2	D-030	SI16-SK1	2	土師器	杯	13.3 × 6.0 × 4.3	ロウロ調整 底面：目焼表面切り	ヘラミガキ 黒色陶質	内面砥石摩滅。	12-13
3	D-033	SI16-SK1	2	土師器	高台付杯	15.8 × 7.1 × 6.7	ロウロ調整 底面：目焼表面切り 一点付付	目焼面調整：ヘラミガキ 黒色陶質		12-11
4	D-031	SI16-SK1	2	赤焼土器	皿	11.6 × 4.6 × 3.3	ロウロ調整 底面：目焼表面切り	ロウロ調整		12-14
5	D-032	SI16-SK1	2	赤焼土器	皿	11.6 × 5.3 × 2.9	ロウロ調整 底面：切り磨し不 揃のヘラミガキ	ロウロ調整		12-15
6	D-034	SI16-SK1	2	土師器	甕	φ24.2 × × 119.7	ロウロ調整 胴部下半：ヘラミ ガキ	ロウロ調整→ヘラミガキ	外面：胴部～胴部上半 に磨付着。内面調整に 付着物有り。	13-1
No.	図録番号	遺物名	単位	種類	説明	長さ×幅×厚さ(mm)	長さ(mm)	幅(mm)	備考	写真掲載
7	N-001	SI16	9B	動物遺物	鉄鏝(骨叉)	13.4 × 1.0 × 1.0	117.90	0.55	断面0.5cm	13-2

第262図 SI16 竪穴住居跡出土遺物

恵器片、砥石、鉄鏝、釘が出土しており、土師器4点、赤焼土器2点、鉄鏝1点を図示した。そのうち、SK1から出土した土師器杯(第262図1・2)、土師器高台付杯(第262図3)、赤焼土器皿(第262図4・5)、土師器甕(第262図6)は本住居跡に伴うことから、年代は10世紀前半頃と考えられる。

SI17 竪穴住居跡(第263・264図、図版5・13)

[位置] 調査区西側に位置する。

[重複関係] SI16・18、SD13、P151～153・232・283と重複関係にあり、SI16・18、P283より新しく、SD13、P151～153・232より古い。

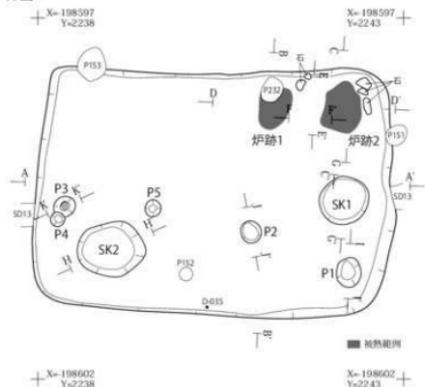
[規模・形態] 規模は東西495cm、南北345cmである。平面形は、長方形である。周溝・掘り方は検出されていない。

[主軸方位] 長軸南壁基準でN-88°-Wである。

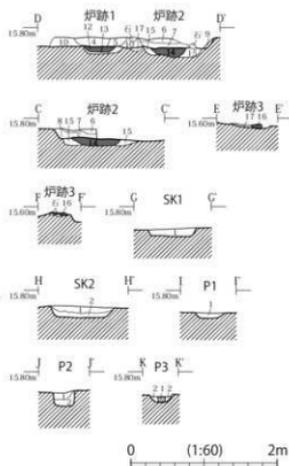
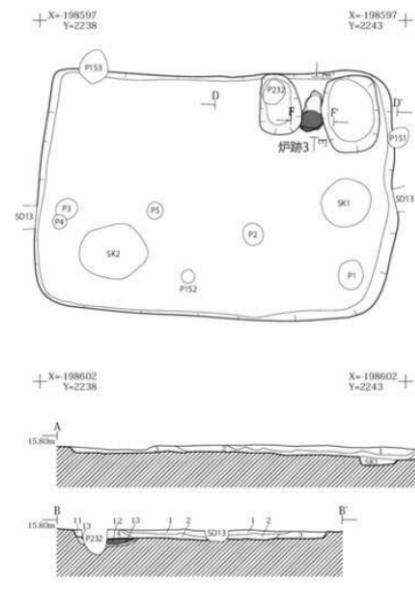
[堆積土] 17層に分層された。1～11層は住居堆積土、12～17層はが跡関連層位である。

第4節 鍛冶屋敷前遺跡

床面



炉跡・掘り方



第263図 S17 竪穴住居跡平面図・断面図

S17 竪穴住居跡断面表、堆積土性状表

遺構名	方向	平面形	方位	尺規・加軸・深さ (m)			
S17	方下	長方形	南偏西	WS	4.5 × 3.45 × 0.15		
寸法	平面形	断面形	尺規・加軸・深さ (m)	P・SK 番号	平面形	断面形	尺規・加軸・深さ (m)
P1	楕円形	遊形	0.40 × 0.35 × 0.07	P5	円形	-	0.25 × 0.20 × 0.10
P2	円形	U字形	0.30 × 0.30 × 0.20	SK1	円形	遊形	0.70 × 0.70 × 0.10
P3	円形	U字形	0.30 × 0.30 × 0.08	SK2	不整形楕円形	遊形	0.95 × 0.60 × 0.15
P4	円形	-	0.20 × 0.20 × 0.20	-	-	-	-

遺構名	層位	土色		備考	遺構名	層位	土色		備考
		1土色	2土色				1土色	2土色	
S17	1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	径 5 ~ 10mm の褐色砂質シルト・径 1 ~ 2mm の礫土を少量含む。	S17	13	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	径 5mm の礫土を少量含む。
	2	10YR4/3 に近い暗褐色	砂質シルト	径 20mm の礫 1・径 2 ~ 5mm の炭化物を少量含む。		14	5YR3/3 暗褐色	シルト	礫土。
	3	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	径 5 ~ 10mm の炭化物を少量含む。		15	10YR4/2 灰褐色	粘土質シルト	径 5mm の礫土を少量含む。
	4	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	径 5mm の礫土を多量に含む。	W3	10YR3/6 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の礫土・炭化物を少量含む。	
	5	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径 5mm の礫土を多量に含む。	P1	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	砂を多量に含む。
	6	10YR4/2 灰褐色	砂質シルト	径 5mm の礫土を少量含む。	P2	1	10YR2/3 暗褐色	砂質シルト	径 5mm の礫土・炭化物を少量含む。
	7	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	径 10mm の礫土を多量に含む。	P3	2	10YR2/2 暗褐色	粘土質シルト	径 2 ~ 30mm の礫土・径 5mm の炭化物を少量含む。
	8	10YR4/2 灰褐色	粘土質シルト	径 5mm の礫土を少量含む。	P3	1	10YR2/2 黒褐色	粘土	径 5mm の炭化物を少量含む。(付録)
	9	10YR4/2 灰褐色	粘土質シルト	径 30mm の礫土ブロックを含む。	2	10YR6/6 明灰褐色	砂質シルト	褐色礫土を少量含む。	
	10	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の礫土を少量含む。	SK1	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	径 2 ~ 30mm の礫土を少量含む。
	11	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	-	SK2	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	径 5mm の礫土を少量含む。
	12	5YR5/6 明灰褐色	シルト	礫土。	SK2	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	径 20mm の礫土を少量含む。



No.	記録番号	遺構名	層位	種類	尺規	形状	内面図	外面図	備考	写真掲載
1	D-035	S17	床土	土師器	高台付環	径 × 軸 × 高さ 4 × 4 × 4.0	口外口縁部 底面・口縁部両方より一定距離	内面図	高台付環面に付着物有り。	13.3
No.	記録番号	遺構名	層位	種類	尺規	形状	断面図	備考	写真掲載	
2	N-002	S17	1	金属製品	鉄鏝(鏝文)	径 × 軸 × 長さ 0.5 × 0.5 × 0.2925	厚さ 0.2mm 幅 0.55cm			13.4

第 264 図 S17 竪穴住居跡出土遺物

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大 15cm である。

[床面] 基本層 III 層を床面とし、概ね平坦である。

[その他の施設] 床面で土坑 2 基 (SK1・2)、炉跡 3 基、ピット 5 基 (P1 ~ 5) を検出した。SK1 は、住居東側に位置する。平面形は円形で、規模は長軸 70cm、短軸 70cm、深さ 10cm である。堆積土は単層である。SK2 は、住居南西側に位置する。平面形は不整形円形で、規模は長軸 95cm、短軸 80cm、深さ 15cm である。堆積土は 2 層である。炉跡 1 は、住居北東側、炉跡 2 の西側に位置する。平面形は不整形円形で、規模は長軸 60cm、短軸 45cm、深さ 10cm の掘り方を有する。炉跡 2 は、住居北東側、炉跡 1 の東側に位置する。平面形は不整形円形で、規模は長軸 70cm、短軸 50cm、深さ 15cm の掘り方を有する。炉跡 3 は、炉跡 1・2 の間に位置し、これらと重複関係にあり、炉跡 3 が古い。平面形は不整形円形と考えられ、規模は長軸 56cm、短軸 40cm、深さ 5cm の掘り方を有する。ピットの規模は長軸 20 ~ 40cm、短軸 20 ~ 35cm、深さ 7 ~ 20cm である。平面形は円形ないし楕円形で、断面形は U 字形ないし逆台形を基調とする。P3 で、径 11cm の柱痕跡を検出した。

[出土遺物] 住居堆積土、炉跡掘り方土、SK2、P2 から土師器、須恵器片、磁石、鉄鏝、釘が出土しており、土師器 1 点、鉄鏝 1 点を図示した。そのうち、床面直上から出土した土師器高台付環 (第 264 図 1) は本住居跡に伴うことから、年代は 10 世紀前半以降と考えられる。

#### 第4節 観治屋敷前遺跡

S118 竪穴住居跡 (第265～267図、図版5・6・13)

[位置] 調査区中央南側に位置する。

[重複関係] S113・14・17、SK18、P153・173～177・203・279～281・290・292～298・432と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は東西5.55m、南北5.20mである。平面形は方形である。周溝・掘り方は検出されていない。

[主軸方位] カマド基準でN7°-Eである。

[堆積土・構築土] 19層に分層された。1～4層は住居堆積土、5～14層はカマド内堆積土、15～19層はカマド関連層位である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大18cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層を床面とし、やや起伏する。住居中央付近で焼土範囲を1ヶ所検出した。

[カマド] 北壁の中央付近に付設されている。規模は左袖が長さ130cm、幅75cm、床面からの高さ5cmで、右袖が長さ90cm、幅80cm、床面からの高さ10cmである。燃焼部の規模は奥行105cm、幅95cm、奥壁高15cmで、奥壁は住居内に取まる。底面は起伏し、奥壁は外傾して立ち上がる。深さ5cmの掘り方を持つ。煙道部の規模は長さ135cm、幅20～25cm、深さ10cmである。底面は南端から煙出し部に向けて傾斜する。煙出し部の規模は長軸40cm、短軸35cm、深さ15cmである。底面は平坦である。

[その他の施設] 床面でピット6基(P1～5・7)を検出した。規模は長軸20～55cm、短軸15～45cm、深さ5～18cmである。平面形は円形ないし楕円形で、断面形はU字形ないし逆台形を基調とする。柱痕跡は確認されなかった。

[出土遺物] 住居堆積土から土師器、赤焼土器、須恵器、砥石、藍澤が出土しており、土師器2点、赤焼土器1点、須恵器7点、砥石1点を図示した。そのうち、床面直上から出土した須恵器環(第266図6)、須恵器甕(第267図2)は本住居跡に伴うことから、年代は9世紀前半頃と考えられる。

S119 竪穴住居跡 (第268・269図、図版6・14)

[位置] 調査区東側に位置する。

[重複関係] S115、SD4～9、P128・130～133・140～146・149・150・234～238・241・242・244～252・254・329～333・344～346・398・399・401・415・416・421・422・426・434と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は東西455cm、南北480cmである。平面形は、方形である。周溝・掘り方は検出されていない。

[主軸方位] カマド基準でN5°-Wである。

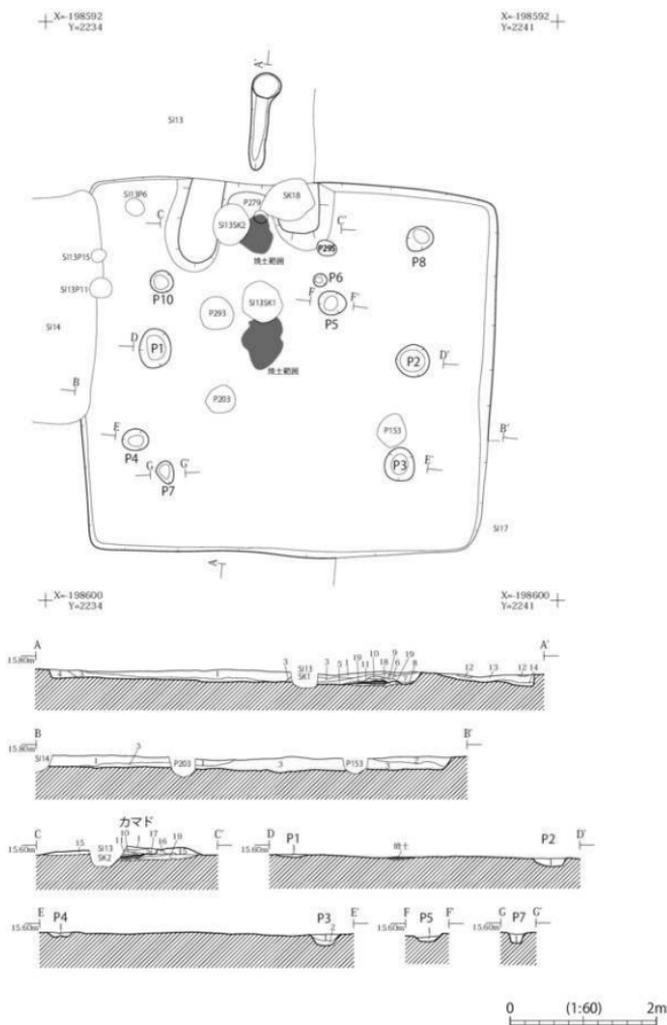
[堆積土・構築土] 10層に分層された。1～3層は住居堆積土、4～8層はカマド内堆積土、9・10層はカマド関連層位である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大20cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層を床面とし、概ね平坦である。

[カマド] 北壁の西側に付設されている。規模は左袖が長さ140cm、幅65cm、床面からの高さ10cmで、右袖が長さ145cm、幅65cm、床面からの高さ15cmである。右袖から礫が出土しており、カマド構築材と考えられる。燃焼部の規模は奥行150cm、幅55cm、奥壁高10cmで、奥壁は住居からやや張り出す。底面はやや窪み、奥壁は外傾して立ち上がる。煙道部の規模は長さ75cm、幅40～45cm、深さ20cmである。底面はやや起伏する。煙出し部の規模は長軸50cm、短軸40cm、深さ30cmである。底面は平坦である。

[その他の施設] 床面で土坑1基(SK1)、ピット5基(P1～5)を検出した。SK1は、住居北壁中央付近に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸60cm、短軸45cm、深さ5cmである。堆積土は単層である。ピットの規模は長



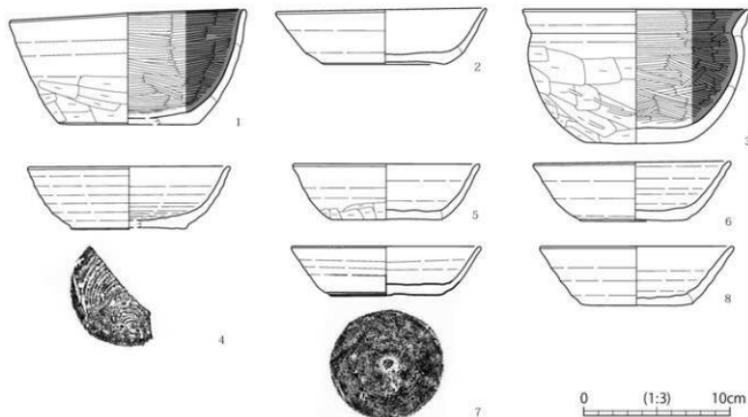
第265図 S118 竪穴住居跡平面図・断面図

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡

全土層内住居跡断面表、埋蔵土器記事

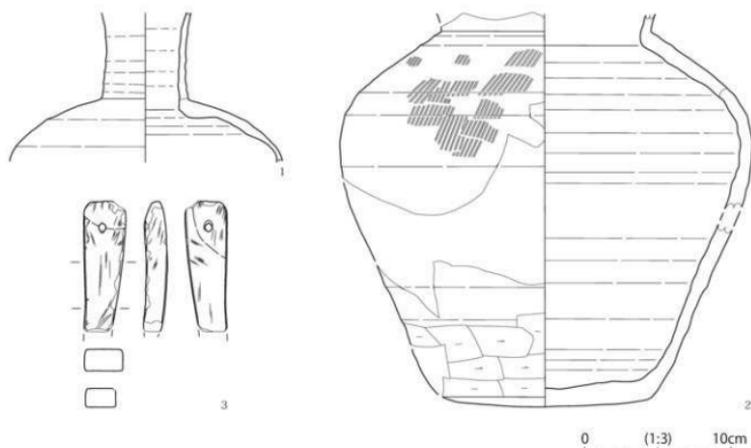
遺構名	形状	平面形	方位	長軸×短軸×厚さ (cm)	遺構名	形状	方位	長軸×短軸×厚さ (cm)
S18	土器	平面形	方位	5.5 × 5.20 × 0.18				
P番号	平面形	断面形	長軸×短軸×厚さ (cm)	P番号	平面形	断面形	長軸×短軸×厚さ (cm)	
P1	櫛目形	扇形	0.55 × 0.45 × 0.05	P6	円形	-	0.20 × 0.15 × -	
P2	円形	U字形	0.45 × 0.45 × 0.10	P7	櫛目形	逆三角形	0.30 × 0.25 × 0.10	
P3	櫛目形	U字形	0.45 × 0.40 × 0.18	P8	櫛目形	-	0.40 × 0.35 × -	
P4	櫛目形	逆三角形	0.55 × 0.30 × 0.05	P10	円形	-	0.30 × 0.30 × -	
P5	櫛目形	逆三角形	0.40 × 0.35 × 0.10					

遺構名	階位	土色	土質	備考	遺構名	階位	土色	土質	備考	
										番号
S18	1	10YR4.4 黒褐色	砂質シルト	径 5mm の硝子・炭化物を少量含む。	S18	14	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	径 20 ~ 30mm の硝子プロップ・径 20 ~ 30mm の炭化物を少量含む。	
	2	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硝子・炭化物を少量含む。		15	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	硝子質シルト	硝子の硝子を少量含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	径 5 ~ 8mm の硝子物を多量、径 5mm の硝子も少量含む。		16	10YR4/4 黒褐色	砂質シルト	-	-
	4	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径 5 ~ 8mm の硝子物を少量含む。		17	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	粘土質シルト	径 5mm の硝子も少量含む。
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	径 5 ~ 8mm の硝子物を多量に含む。		18	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	粘土質シルト	径 5mm の硝子も少量含む。
	6	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	径 5 ~ 8mm の硝子物を多量に含む。		19	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	砂質シルト	径 5mm の硝子も少量含む。
	7	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	径 5 ~ 8mm の硝子物を多量に含む。		P1	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径 5mm の硝子・炭化物を少量含む。
	8	10YR4/4 黒褐色	砂質シルト	径 10 ~ 20mm の硝子プロップを多量に含む。		P2	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	径 5mm の硝子・炭化物を少量含む。
	9	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	径 5 ~ 8mm の硝子物・径 5mm の硝子も少量含む。		P3	2	10YR4/4 黒褐色	砂質シルト	径 5mm の硝子物を少量含む。
	10	5YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	径 5 ~ 8mm の硝子も少量含む。		P4	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	径 5mm の硝子も少量含む。
	11	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	径 5 ~ 8mm の硝子も少量含む。		P5	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	径 5mm の硝子・炭化物を少量含む。
	12	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	径 20 ~ 30mm の硝子プロップを少量含む。		P7	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	径 10mm の砂質シルトプロップを多量に含む。
	13	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	径 20 ~ 30mm の硝子プロップ・径 20 ~ 30mm の炭化物を多量に含む。						



No.	図録番号	遺構名	階位	種類	形状	寸法×径深×底径 (cm)	外面装飾	内面装飾	備考	写真図録
1	D-038	S18	1	土器類	杯	16.2 × 径6 × 8.0	口々に調整 縁部下半へへう字文 底面 切り離し不明→手持ちへう字文	縁部部→底面へへう字文 黒色装飾		13.5
2	D-037	S18	1	赤褐色土器	杯	14.4 × 8.2 × 3.0	口々に調整 底面 自然剥落付	口々に調整	内面に付物有り。内外面無装飾。	13.6
3	D-039	S18	1	土器類	鉢	13.0 × 7.6 × 9.2	口々に調整 手持ちへう字文 底面 切り離し不明→手持ちへう字文	へう字文 黒色装飾		13.7
4	E-004	S13 壁土層・S18	1	灰器類	杯	13.8 × 径7.6 × 4.3	口々に調整 底面 自然剥落付	口々に調整	内面底面に灰器による厚層付。	13.8
5	E-026	S18	1	灰器類	杯	12.8 × 径7.6 × 3.8	口々に調整・手持ちへう字文 底面 切り離し不明→手持ちへう字文	口々に調整		13.10
6	E-002	S18	1	灰器類	杯	13.5 × 7.5 × 4.6	口々に調整 底面 切り離し不明→手持ちへう字文	口々に調整	内面に土層付。内外面に灰器による厚層付。	13.9
7	E-003	S18	1	灰器類	杯	13.0 × 7.6 × 3.4	口々に調整 底面 自然剥落付	口々に調整	内面に土層付。内外面に灰器による厚層付。	13.11
8	E-005	S18	1	灰器類	杯	13.4 × 7.6 × 4.1	口々に調整 底面 自然剥落付	口々に調整	内面に土層付。内外面に灰器による厚層付。	13.12

第 266 図 S18 竪穴住居跡出土遺物(1)



No.	図録番号	遺物名	部位	種類	出層	土層・底層・高さ(mm)	形状・図説	内装図説	備考	写真掲載
1	E-006	S18	1	須恵器	長頸瓶	- × - (10.5)	口枠の調整	口枠の調整		13-13
2	E-007	S18	1	須恵器	甕	× 14.0 × 17.3	口枠の調整 胴部1層：平行9 条 胴部2層：へこみ2条	口枠の調整 胴部：ユビナデ	厚紙糊着	13-14
No.	図録番号	遺物名	部位	種類	出層	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	単位(g)	備考	写真掲載
3	K4-001	S18	1	石製	硯石		190 × 29 × 1.5 55.84			13-15

第267図 S18 竪穴住居跡出土遺物(2)

軸 20～40cm、短軸 20～35cm、深さ 10cmである。平面形は円形ないしは楕円形で、断面形は逆台形を基調とする。柱痕跡は確認されなかった。

[出土遺物] 住居堆積土、カマド内堆積土、煙道、SK1、P4・5から土師器、須恵器、鉢片が出土しており、土師器 2点、須恵器 4点を図示した。そのうち、1層から土師器甕(第269図1)、土師器小型甕(第269図2)、須恵器環(第269図3～6)が出土したことから、年代は9世紀前半以前と考えられる。

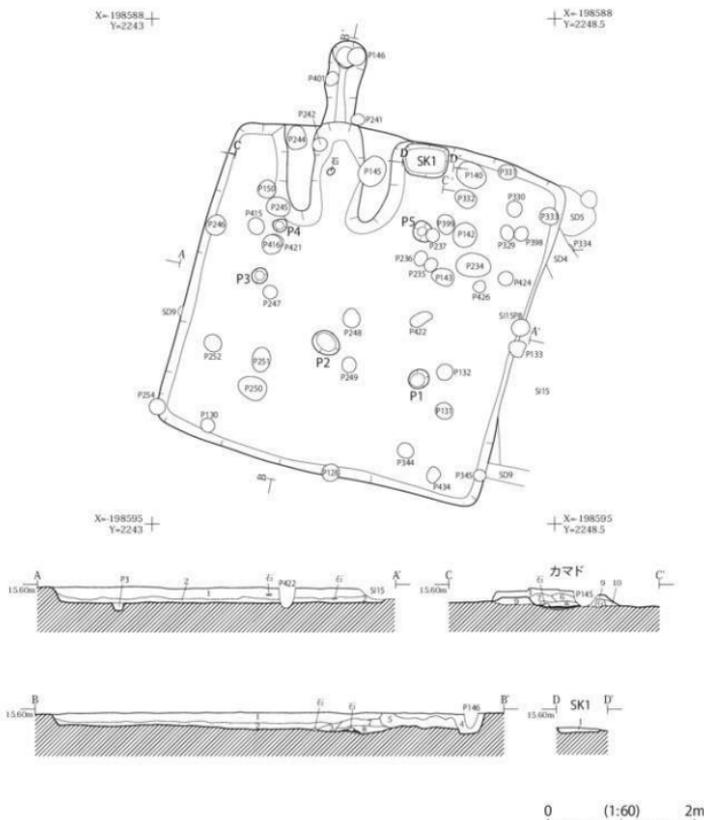
## 2) 土坑

SK13土坑(第270・271図、図版14)調査区西側で検出した。平面形は不整楕円形で、長軸方向はN-12°-Eである。規模は長軸86cm、短軸57cm、深さ8cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で、底面は平坦である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片、赤焼土器が出土している。そのうち1層から出土した赤焼土器1点(第271図1)を図示した。

SK14土坑(第270図)調査区西側で検出した。平面形は不整円形で、長軸方向はN-57°-Wである。規模は長軸75cm、短軸65cm、深さ13cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は皿形で、底面は平坦である。堆積土は2層に分層された。遺物は出土していない。

SK15土坑(第270図)調査区中央付近北側で検出した。SK16・22と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は不整楕円形で、長軸方向はN-77°-Wである。規模は長軸122cm、短軸57cm、深さ23cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形はU字形で、底面はやや起伏する。堆積土は2層に分層された。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

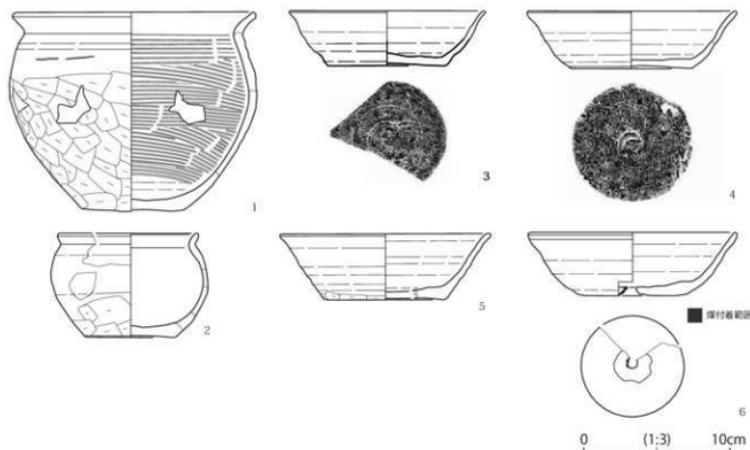
第4節 竪穴屋敷前遺跡



遺構名	カマド	平面形	方位	長軸・短軸・深さ (m)			
S19	北西	方形	N 6° E	4.80 × 4.55 × 0.20			
P番号	平面形	構造形	長軸・短軸・深さ (m)	P・SK番号	平面形	構造形	長軸・短軸・深さ (m)
P1	楕円形	-	0.20 × 0.25 × -	P4	円形	-	0.20 × 0.20 × -
P2	楕円形	-	0.40 × 0.25 × -	P5	円形	-	0.20 × 0.25 × -
P3	円形	逆L形	0.20 × 0.20 × -	SK1	長方形	逆L形	0.40 × 0.45 × 0.05

遺構名	層位	土色		備考	遺構名	層位	土色		備考
		上部	下部				上部	下部	
S19	1	10YR4/3 に近い 黄褐色	砂質シルト	層 50mm の腐化物・径 50mm の硝土を少量含む。 層 50mm の硝土を少量含む。 層 20~50mm の硝土ブロックを多数、径 50mm の腐化物を少量含む。 層 50mm の硝土を少量含む。	S19	6	10YR5/4 に近い 黄褐色	砂質シルト	径 20mm の硝土ブロックを少量含む。
	2	10YR4/6 黄褐色	粘土質シルト			7	10YR4/4 黄褐色	砂質シルト	径 10mm の硝土ブロックを少量含む。
	3	10YR4/6 黄褐色	粘土質シルト			8	10YR1/2 黄褐色	粘土質シルト	同層を多数、径 50mm の硝土を少量含む。
	4	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト			9	10YR5/4 に近い 黄褐色	砂質シルト	-
	5	10YR5/4 に近い 黄褐色	砂質シルト			10	10YR5/4 に近い 黄褐色	粘土質シルト	-
SK1	1	10YR4/3 に近い 黄褐色		層 18mm の硝土を少量含む。	SK1	10YR4/3 に近い 黄褐色		砂質シルト	-

第268図 S19 竪穴住居跡平面図・断面図



品目	遺物番号	遺物名	形状	種類	寸法(口径×高さ×重)	内面装飾	外面装飾	備考	写真ID	
1	D-040	SI19	1	土師器	甕	16.6×7.1×13.8	ロウロ装飾 下壁: 子持ちへろケズリ 底部: 切り離し不明→ヘラナジ	ロウロ装飾 ハケメ	内外面: 1層装、内面底部の一部に灰状物付着、外底摩滅	14.1
2	D-041	SI19	1	土師器	小甕	8.9×6.1×7.2	ロウロ装飾 底面: 子持ちへろケズリ 底面: 切り離し不明→子持ちへろケズリ	ロウロ装飾	内面: 1層装に付着物有り、底面、底縁	14.2
3	E-009	SI19	1	須恵器	杯	11.3.0×8.0×3.8	ロウロ装飾 底面: 目地へろケ	ロウロ装飾	内外面に火傷痕、内面1層装に自然剥離付着	14.4
4	E-008	SI19	1	須恵器	杯	11.4.2×8.4×4.0	ロウロ装飾 底面: 目地へろケ	ロウロ装飾	内外面に火傷痕	14.5
5	E-010	SI19	1	須恵器	杯	11.3.7×7.6×4.7	ロウロ装飾 下壁: 子持ちへろケズリ 底面: 切り離し不明→子持ちへろケズリ	ロウロ装飾	内面体部下部に赤ね焼付着	14.6
6	E-011	SI19	1	須恵器	杯	11.4.6×7.3×4.5	ロウロ装飾 底面: 切り離し不明	ロウロ装飾	底面に穿孔1ヶ所、焼成痕あり、穿孔部内と外面の一部に付着物有り	14.2

第269図 SI19 竪穴住居跡出土遺物

SK16 土坑 (第270図) 調査区中央付近北側で検出した。SK15・17と重複関係にあり、SK17より新しく、SK15より古い。平面形は、円形若しくは楕円形と考えられる。規模は南北34cm以上、東西48cm、深さ16cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形はU字形で、底面は平坦である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK17 土坑 (第270図) 調査区中央付近北側で検出した。SK16と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は楕円形で、長軸方向はN-41°Eである。規模は長軸83cm、短軸68cm、深さ34cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形はU字形で、底面は丸味をもつ。堆積土は2層に分層された。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK18 土坑 (第270図、図版6) 調査区中央付近で検出した。SI13・18、P279と重複関係にあり、SI13・18より新しく、P279より古い。平面形は不整楕円形で、長軸方向はN-84°Eである。規模は長軸75cm、短軸57cm、深さ24cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形はU字形で、底面は平坦である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片、礫が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK19 土坑 (第270図) 調査区中央北側で検出した。平面形は不整楕円形で、長軸方向はN-83°Wである。規模

#### 第4節 観治屋敷前遺跡

は長軸100cm、短軸57cm、深さ5cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は皿形で、底面はやや起伏する。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK20 土坑(第270図)調査区中央北側で検出した。平面形は隅丸長方形で、長軸方向はN-81°-Wである。規模は長軸96cm、短軸63cm、深さ15cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形はU字形で、底面は平坦である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK21 土坑(第270・271図、図版6・14)調査区中央南側で検出した。平面形は楕円形で、長軸方向はN-75°-Wである。規模は長軸111cm、短軸89cm、深さ19cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は皿形で、底面は起伏が激しい。堆積土は2層に分層された。土師器片、赤焼土器が出土しており、そのうち1層から出土した赤焼土器1点(第271図2)を図示した。

SK22 土坑(第270図)調査区中央付近北側で検出した。SK15と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不整形円形で、長軸方向はN-17°-Eである。規模は長軸72cm、短軸51cm以上、深さ18cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形はU字形で、底面は平坦である。堆積土は2層に分層された。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

#### 3) 溝跡

SD1 溝跡(第247・272図)調査区北東側で検出した。東西方向の溝跡で、東端は削平を受けている。SI15と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-81°-Eで、規模は長さ108cm以上、幅24cm、深さ5cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD2 溝跡(第247・272図)調査区北東側で検出した。北西から南東方向の溝跡である。SI15、SD3、P337と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-52°-Wで、規模は長さ117cm、幅38cm、深さ8cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD3 溝跡(第247・272図)調査区北東側で検出した。北西から南東方向の溝跡である。SI15、SD2・5、P335・336と重複関係にあり、SI15、P335・336より新しく、SD2・5より古い。方向はN-41°-Wで、規模は長さ98cm以上、幅48cm、深さ3cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

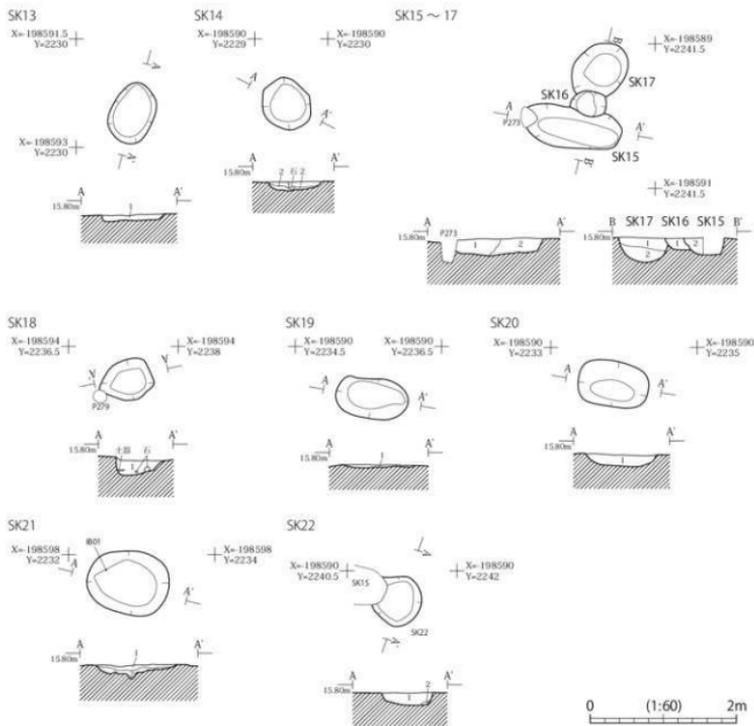
SD4 溝跡(第247・272図)調査区北東側で検出した。南北方向の溝跡である。SI15、SD5、P334・336と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-25°-Wで、規模は長さ160cm、幅53cm、深さ3cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD5 溝跡(第247・272図)調査区北東側で検出した。東西方向の溝跡である。SI19、SD4・6、P138と重複関係にあり、SI19より新しく、SD4・6、P138より古い。方向はN-75°-Wで、規模は長さ156cm、幅58cm、深さ4cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD6 溝跡(第247・272図)調査区北東側で検出した。東西方向の溝跡である。SI19、SD5と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-63°-Wで、規模は長さ114cm、幅35cm、深さ5cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD7 溝跡(第247・272図)調査区北東側で検出した。東西方向の溝跡である。SI19と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-79°-Wで、規模は長さ124cm、幅15cm、深さ4cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD8 溝跡(第247・272図)調査区東側で検出した。東西方向の溝跡である。SI19、P248・422と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-85°-Wで、規模は長さ363cm、幅43cm、深さ7cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。



遺構名	平面形	断面形	方位	直径×距離×高さ (m)	遺構名	平面形	断面形	方位	直径×距離×高さ (m)
SK13	平型楕円形	逆T形	N 42° E	0.86 × 0.57 × 0.08	SK18	平型楕円形	U字形	N 84° E	0.75 × 0.57 × 0.24
SK14	平型円形	皿形	N 57° W	0.75 × 0.65 × 0.13	SK19	平型楕円形	皿形	N 83° W	1.00 × 0.57 × 0.05
SK15	平型楕円形	U字形	N 77° W	0.221 × 0.57 × 0.23	SK20	楕円状方形	U字形	N 41° W	0.96 × 0.83 × 0.13
SK16	平型	U字形		0.341 × 0.48 × 0.10	SK21	楕円形	皿形	N 75° W	1.11 × 0.89 × 0.19
SK17	楕円形	U字形	N 41° E	0.831 × 0.68 × 0.34	SK22	平型円形	U字形	N 17° E	0.72 × 0.51 × 0.18

遺構名	層位	土色	土質	備考	遺構名	層位	土色	土質	備考
SK13	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	径 3 ~ 20mm の褐色片ブロックを多数、径 5mm の礫土を少量含む。	SK18	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	径 5mm の礫土を多数含む。
	2	10YR2/2 黒褐色	シルト	径 10 ~ 50mm の褐色砂質シルトブロックを多数、径 2 ~ 10mm の礫土を少量含む。		SK19	1	10YR3/3 に近い濃褐色	砂質シルト
SK14	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径 10mm の褐色シルトを多数、径 2 ~ 5mm の礫土を少量含む。	SK20	1	10YR3/3 に近い濃褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の褐色片ブロックを多数、径 2 ~ 5mm の礫土を少量含む。
	2	10YR1/7 黒色	粘土質シルト	径 5 ~ 25mm の褐色シルトブロックを多数、径 10mm の褐色シルトを多数、径 1mm の褐色シルトを少量含む。		SK21	2	10YR4/3 に近い濃褐色	シルト
SK15	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径 10 ~ 30mm の褐色片ブロックを多数、径 2 ~ 5mm の礫土を少量含む。	SK22	1	10YR4/3 に近い濃褐色	砂質シルト	径 30mm の褐色砂質シルトブロックを多数に含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	径 5 ~ 25mm の褐色シルトブロックを多数、径 10mm の褐色シルトを多数、径 1mm の褐色シルトを少量含む。		2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	
SK16	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径 10 ~ 30mm の褐色片ブロックを多数に含む。					
SK17	1	10YR4/3 に近い濃褐色	砂質シルト	径 2 ~ 3mm の褐色片を含む、径 2 ~ 5mm の礫土を少量含む。					
	2	10YR4/3 に近い濃褐色	砂質シルト						

第270図 SK13～22 土坑平面図・断面図

第4節 鍛冶屋敷前遺跡



図	図録番号	遺物名	単位	種別	材質	土層×底径×高さ(mm)	内面図説	外面図説	備考	写真図説
1	D-042	SK13	1	赤粘土器	小皿	8.7×3.8×1.9	口内の図説 底面・取り縁に不明→底の内付			14.7
2	D-043	SK21	1	赤粘土器	小皿	10×5.2×2.2	口内の図説 底面・口縁を向			14.8

第271図 SK13・21土坑出土遺物

SD9 溝跡 (第247・272図) 調査区東側で検出した。東西方向の溝跡である。SI15・19、P345・346・434と重複関係にあり、SI15・19、P345・346より新しく、P434より古い。方向はN-79°-Wで、規模は長さ228cm、幅24cm、深さ15cmである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD10 溝跡 (第247・272図) 調査区東側で検出した。東西方向の溝跡である。方向はN-80°-Wで、規模は長さ147cm、幅19cm、深さ7cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD12 溝跡 (第247・272図) 調査区東側で検出した。東西方向の溝跡で、SD10と同一の遺構と考えられる。SD13、P119と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-76°-Wで、規模は長さ225cm以上、幅19cm、深さ7cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD13 溝跡 (第247・272図) 調査区東側から中央で検出した。東西方向の溝跡で、東端は調査区外へ延びる。SI16・17、SD12・14・16、P116・282と重複関係にあり、SI16・17、SD12・14・16、P282より新しく、P116より古い。方向はN-82°-Eで、規模は長さ16.7m以上、幅65cm、深さ10cmである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD14 溝跡 (第247・272図) 調査区南東側で検出した。東西方向の溝跡で、東端は調査区外へ延びる。SD13・16・19・22～24・26・29と重複関係にあり、SD19・22～24・26・29より新しく、SD13・16より古い。方向はN-83°-Eで、規模は長さ8.00m以上、幅40cm、深さ5cmである。断面形は皿形と考えられる。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD16 溝跡 (第247・272図) 調査区南東側で検出した。北東から南西方向の溝跡である。SI16、SD13・14と重複関係にあり、SI16、SD14より新しく、SD13より古い。方向はN-55°-Eで、規模は長さ273cm以上、幅60cm、深さ15cmである。断面形はU字形である。堆積土は2層に分層された。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD17 溝跡 (第247・272図) 調査区北東側で検出した。南北方向の溝跡である。SI19と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-3°-Eで、規模は長さ50cm、幅17cm、深さ7cmである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD19 溝跡 (第247・272図) 調査区南東側で検出した。南北方向の溝跡である。SD14・20と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-10°-Eで、規模は長さ280cm以上、幅28cm、深さ8cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD20 溝跡 (第247・272図) 調査区南東側で検出した。南北方向の溝跡である。SD19・22と重複関係にあり、

本遺構が新しい。方向はN-33°-Eで、規模は長さ163cm、幅27cm、深さ3cmである。断面形は皿形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD22 溝跡(第247・272図)調査区南東側で検出した。南北方向の溝跡である。SD14・20と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-5°-Eで、規模は長さ240cm以上、幅18cm、深さ6cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD23 溝跡(第247・272図)調査区南東側で検出した。南北方向の溝跡である。SD14、P102・358と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-5°-Eで、規模は長さ378cm以上、幅27cm、深さ7cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD24 溝跡(第247・272図)調査区南東側で検出した。南北方向の溝跡である。SD14、P102～104と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-0°で、規模は長さ368cm以上、幅13cm、深さ5cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD26 溝跡(第247・272図)調査区南東側で検出した。南北方向の溝跡である。SD14と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-0°で、規模は長さ296cm以上、幅17cm、深さ9cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。SD19・20・22・23・24・26は1群の小溝状遺構群と思われる。

SD28 溝跡(第247・272図)調査区南東側で検出した。南北方向の溝跡である。方向はN-10°-Wで、規模は長さ43cm、幅16cm、深さ4cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD29 溝跡(第247・272図)調査区南東側で検出した。南北方向の溝跡である。SD14、P359と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-0°で、規模は長さ70cm以上、幅24cm、深さ6cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD30 溝跡(第247・272図)調査区東側で検出した。南北方向の溝跡である。P362・363と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-7°-Eで、規模は長さ50cm以上、幅16cm、深さ9cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD31 溝跡(第247・272図)調査区東側で検出した。南北方向の溝跡である。P400と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-10°-Eで、規模は長さ98cm、幅23cm、深さ6cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD35 溝跡(第247・272図)調査区東端で検出した。南北方向の溝跡で、北端は調査区外へ延びる。方向はN-4°-Wで、規模は長さ100cm以上、幅24cm、深さ11cmである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD36 溝跡(第247・272図)調査区東端で検出した。東西方向の溝跡である。方向はN-84°-Wで、規模は長さ60cm、幅15cm、深さ6cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

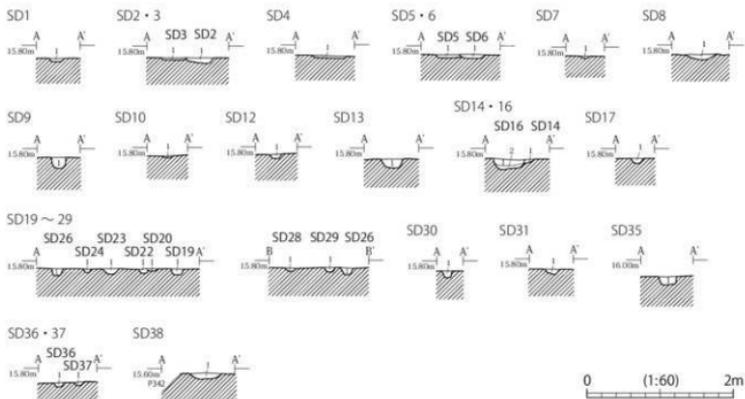
SD37 溝跡(第247・272図)調査区東端で検出した。東西方向の溝跡である。方向はN-88°-Wで、規模は長さ52cm、幅15cm、深さ5cmである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD38 溝跡(第247・272図)調査区東側で検出した。東西方向の溝跡である。SI15、P393と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-86°-Wで、規模は長さ252cm、幅42cm、深さ8cmである。断面形は皿形である。堆積土は単層である。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

#### 4) 性格不明遺構

SX7 性格不明遺構(第273図、図版6)調査区南東側で検出した。P156と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不整形円形と考えられ、遺構西側が溝状に掘り込まれている。長軸方向はN-10°-Eである。規模は長軸78

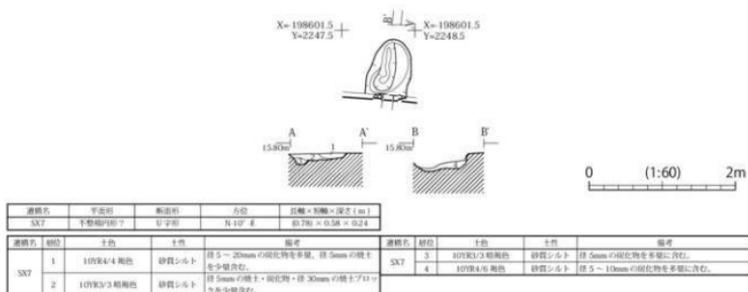
#### 第4節 観測屋敷前道路



観測名	平面図	断面図	寸法	道土・観土厚さ(m)	観測名	平面図	断面図	寸法	道土・観土厚さ(m)
SD1	観測	遊歩用	N 81° E	0.00 × 0.24 × 0.05	SD19	観測	遊歩用	N 10° E	0.280 × 0.28 × 0.038
SD2	観測	遊歩用	N 52° W	1.17 × 0.38 × 0.08	SD20	観測	遊歩用	N 20° E	1.63 × 0.27 × 0.03
SD3	観測	遊歩用	N 41° W	0.980 × 0.48 × 0.03	SD22	観測	遊歩用	N 5° E	0.248 × 0.18 × 0.06
SD4	観測	遊歩用	N 25° W	1.60 × 0.53 × 0.03	SD23	観測	遊歩用	N 5° E	0.378 × 0.27 × 0.07
SD5	観測	遊歩用	N 23° W	1.56 × 0.58 × 0.04	SD24	観測	遊歩用	N 47°	0.506 × 0.33 × 0.05
SD6	観測	遊歩用	N 63° W	1.14 × 0.35 × 0.05	SD26	観測	遊歩用	N 0°	0.250 × 0.17 × 0.09
SD7	観測	遊歩用	N 79° W	1.24 × 0.15 × 0.04	SD28	観測	遊歩用	N 10° W	0.43 × 0.16 × 0.04
SD8	観測	遊歩用	N 85° W	3.63 × 0.43 × 0.07	SD29	観測	遊歩用	N 0°	0.078 × 0.24 × 0.06
SD9	観測	自転車	N 79° W	2.28 × 0.24 × 0.15	SD30	観測	遊歩用	N 7° E	0.558 × 0.16 × 0.09
SD10	観測	遊歩用	N 80° W	1.47 × 0.19 × 0.07	SD31	観測	遊歩用	N 10° E	0.08 × 0.23 × 0.06
SD12	観測	遊歩用	N 70° W	0.220 × 0.19 × 0.01	SD33	遊歩用	自転車	N 4° E	1.028 × 0.24 × 0.11
SD13	観測	自転車	N 82° E	0.1670 × 0.65 × 0.10	SD36	観測	遊歩用	N 84° W	0.60 × 0.15 × 0.06
SD14	観測	自転車	N 83° E	8.00 × 0.40 × 0.05	SD37	観測	遊歩用	N 88° W	0.52 × 0.15 × 0.05
SD16	観測	自転車	N 55° E	2.73 × 0.60 × 0.15	SD38	観測	自転車	N 80° W	2.52 × 0.42 × 0.08
SD17	観測	自転車	N 3° E	0.50 × 0.17 × 0.07					

観測名	観測	土質	土質	備考	観測名	観測	土質	土質	備考
SD1	1	10YR4/2 灰褐色	粘土質シルト	径 20mm の腐敗植物土質シルトブロックを多数含む。	SD16	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗シルトを少量含む。
SD2	1	10YR4/1 褐色	粘土質シルト	径 10mm の腐敗植物土質シルトブロックを多数含む。		2	10YR4/3 黄褐色	シルト	径 1 ~ 10mm の腐敗シルトを多数含む。
SD3	1	10YR4/2 黒褐色	シルト	径 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。	SD17	1	10YR4/3 黄褐色	シルト	径 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。
SD4	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	径 10mm の腐敗植物土質シルトブロックを多数、径 5mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。	SD19	1	10YR4/3 黄褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。
SD5	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径 10mm の腐敗植物土質シルトブロックを多数、径 5mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。	SD20	1	10YR4/3 黄褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。
SD6	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	径 10mm の腐敗植物土質シルトブロックを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。	SD22	1	10YR4/3 黄褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。
SD7	1	10YR4/3 黄褐色	シルト	径 3 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1 ~ 10mm の腐敗シルトブロックを多数、径 2 ~ 3mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。	SD23	1	10YR4/3 黄褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。
SD8	1	10YR4/3 黄褐色	シルト	径 3 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 2 ~ 10mm の腐敗シルトブロックを多数、径 1 ~ 5mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。	SD24	1	10YR4/3 黄褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。
SD9	1	10YR4/4 褐色	シルト	径 3 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。	SD26	1	10YR4/3 黄褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。
SD10	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径 10mm の腐敗植物土質シルトを多数、径 1 ~ 5mm の腐敗シルトを少量含む。	SD28	1	10YR4/3 黄褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。
SD12	1	10YR4/4 褐色	シルト	径 3 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1 ~ 3mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。	SD29	1	10YR4/3 黄褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。
SD13	1	10YR4/4 褐色	シルト	径 3 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 10mm の腐敗植物土質シルトブロックを多数、径 2 ~ 3mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。	SD30	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1 ~ 3mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。
SD14	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	径 3 ~ 10mm の腐敗植物土質シルトブロックを多数、径 2 ~ 5mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。	SD31	1	10YR4/3 黄褐色	砂質シルト	径 2 ~ 5mm の腐敗シルトを多数、径 1 ~ 5mm の腐敗植物土質シルトを少量含む。

第272図 SD1 ~ 10・12 ~ 14・16・17・19・20・22 ~ 24・26・28 ~ 31・35 ~ 38 溝跡平面図・断面図



第273図 SX7 性格不明遺構平面図・断面図

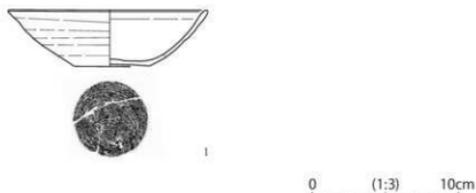
cm以上、短軸58m、深さ24cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形はU字形で、底面は起伏する。堆積土は4層に分層された。遺物は出土していない。

#### 5) ビット (第247・273・274図、図版14)

266基のビットを検出した。調査区東側に多く分布する。堆積土中より土師器片、赤焼土器、須恵器片、石製品、金属製品等が出土しており、P342から出土した赤焼土器1点(第274図1)を図示した。

#### (2) 遺構外出土遺物 (第275図、図版14)

縄文土器片、土師器片、須恵器片、石製品、金属製品、土製品が出土しており、基本層Ⅱ層から出土した土鈴1点(第275図1)を図示した。



品	登録番号	遺構名	層位	種類	図様	寸法(縦径×直径×高さ)	外装図型	内装図型	備考	写真図版
1	品014	P342	1	赤焼土器	棒	13.7 × 4.9 × 3.0	(1)ラウ図型 底面: 10YR4/6/9	(1)ラウ図型		149

第274図 ビット出土遺物

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡



No.	発見時期	遺構名	種類	構造	面積	出土・埋没・発見時期	調査・調査・調査	写真掲載
1	P002		Ⅱ	土築	主跡	東西×南北×高さ 4m (6.5) × (4.0) × 0.6 (27.2)	発掘・調査・調査・調査	14-10

第275図 遺構外出土遺物

### 3. III区の調査

III区では、基本層Ⅲ層上面（古代以降の遺構検出面）において、竪穴住居跡3軒、竪穴遺構4基、掘立柱建物跡1棟、鍛冶関連遺構3基、土坑3基、溝跡1条、性格不明遺構2基、ピット124基を検出した。SX2～5は、当初検出状況から性格不明遺構と考えSXとしたが、調査の結果、SX2はカマドを検出したことから竪穴住居跡とし、SX3・4は鍛冶関連遺構が多数出土し、SX5は掘り方を検出したことから竪穴遺構とした。ピットについては遺構配置図にのみ表示している。

#### (1) III層検出遺構と出土遺物（第276～298図、図版6～10・14～17）

##### 1) 竪穴住居跡

###### SI6 竪穴住居跡（第277・278図、図版8・9・16）

[位置] 調査区北西側に位置する。北側は調査区外へ延びる。調査区北壁際と西側の一部をトレンチにより削平される。

[規模・形態] 規模は東西380cm、南北225cm以上である。平面形は残存状況から、方形と考えられる。周溝は検出されていない。

[主軸方位] カマド基準でS-15°-Eである。

[堆積土・構築土] 10層に分層された。1・2層は住居堆積土、3～5層はカマド内堆積土、6～9層はカマド関連層位、10層は掘り方土である。

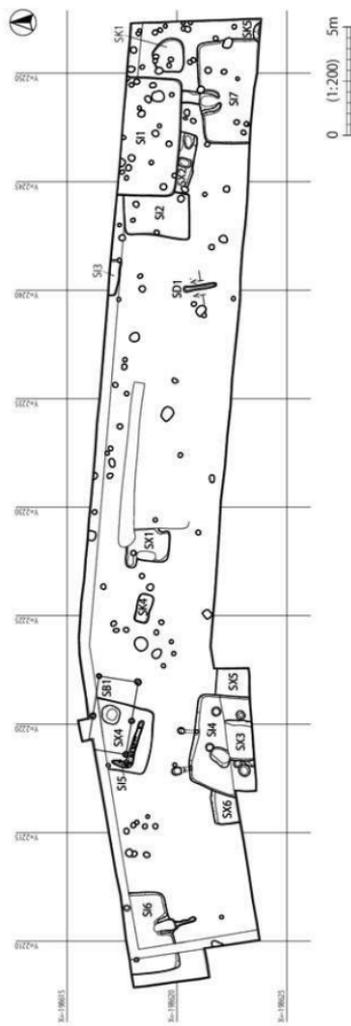
[壁面] 床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は床面から最大40cmである。

[床面] 掘り方土上面または基本層Ⅲ層を床面とし、起伏する。

[柱穴] 床面で2基のピット（P1・2）を検出した。規模や位置関係から、P1・2は主柱穴と考えられる。規模は長軸23～31cm、短軸20～28cm、深さ10～13cmである。平面形は不整形で、断面形はU字形及び逆台形である。堆積土はいずれも単層で、柱痕跡は確認されていない。

[カマド] 南壁の中央に付設されている。規模は左袖が長さ73cm、幅30cm、床面からの高さ30cmで、右袖が長さ80cm、幅20cm、床面からの高さ35cmである。両袖の奥壁付近で、構築材と考えられる礫が燃焼部側にやや内傾した状態で出土している。その一部が被熱していることから、カマド使用時に露出していたと考えられる。燃焼部の規模は奥行95cm、幅50cm、奥壁高20cmで、奥壁部分は住居壁面から張り出す。底面は中央がやや窪み、奥壁は外傾して立ち上がる。奥壁付近南東側で、被熱した礫が燃焼部側に内傾した状態で出土しており、出土状況から支脚と考えられる。また、礫には被熱した土師器が逆位で伏せた状態でかぶせてあり、支脚の一部としてカマド使用時よりそこにあったと考えられる。掘り方の規模は長軸165cm、短軸120cm、深さ20cmである。煙道部の規模は長さ95cm、幅13～20cm、深さ5cmである。底面はやや起伏し、奥壁付近は傾斜して低くなる。

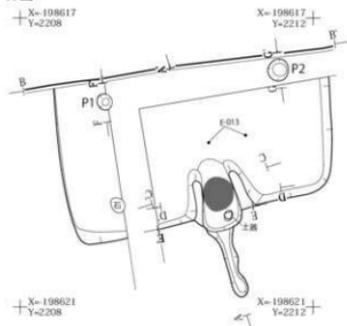
[掘り方] 深さ5cmである。底面はやや起伏し、北西側がやや深くなる。



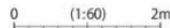
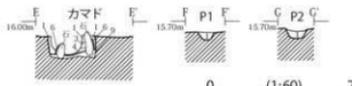
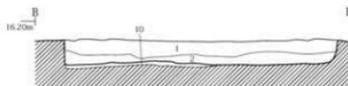
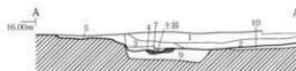
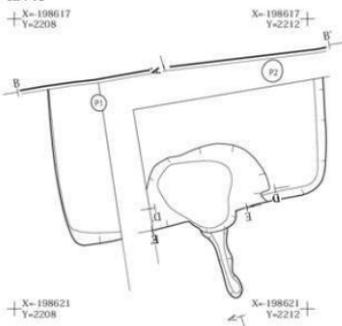
第 276 図 観音堂敷地遺跡 III 区遺構配置図

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡

##### 床面



##### 掘り方



遺構名	名	平面形	方位	長軸×短軸×厚さ (m)			
S16	床	楕円方形	S 15° E	3.80 × (2.25) × 0.33			
穴番号	平面形	掘削形	長軸×短軸×厚さ (m)	穴番号	平面形	掘削形	長軸×短軸×厚さ (m)
P1	楕円方形	U 字形	0.23 × 0.20 × 0.10	P2	半楕円形	掘削形	0.31 × 0.28 × 0.13

遺構名	層位	土質	特性	備考	遺構名	層位	土質	特性	備考	
S16	1	10YR5/6 弱黄褐色	粘土質シルト	マンガン酸化を多量、径 5mm の礫土を少量含む。	S16	8	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	径 5mm の礫土を少量含む。	
	2	10YR5/6 弱黄褐色	粘土質シルト			9	10YR3/3 の黄褐色	粘土	径 5mm の礫土・灰化物を少量含む。	
	3	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	径 10 ~ 20mm の礫土プロットを多量に含む。	10	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土質シルト	径 10 ~ 20mm の黄褐色粘質シルトプロットを少量含む。		
	4	10YR3/3 黄褐色	粘土	径 5mm の礫化物・灰を多量に含む。	P1	1	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	径 10 ~ 20mm の黄褐色粘土質シルトプロットを少量含む。	
	5	10YR5/6 弱黄褐色	粘土質シルト	珪酸塩プロットを多量に含む。		P2	1	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	砂を多量に含む。
	6	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	径 10 ~ 20mm の礫土・マンガン酸化を少量含む。						
	7	2.5YR5/6 弱赤褐色	シルト	粘土。						

第 277 図 S16 竪穴住居跡平面図・断面図

〔出土遺物〕住居堆積土、床面、カマドから土師器、須恵器、鉦津、土製品、礫が出土しており、土師器 3 点、須恵器 1 点、土製品 2 点を図示した。そのうち、カマド左袖から出土した土師器杯 (第 278 図 1)、床面直上から出土した須恵器甕 (第 278 図 4) は本住居跡に伴うことから、年代は 9 世紀後半頃と考えられる。

S17 竪穴住居跡 (第 279・280 図、図版 9・16)

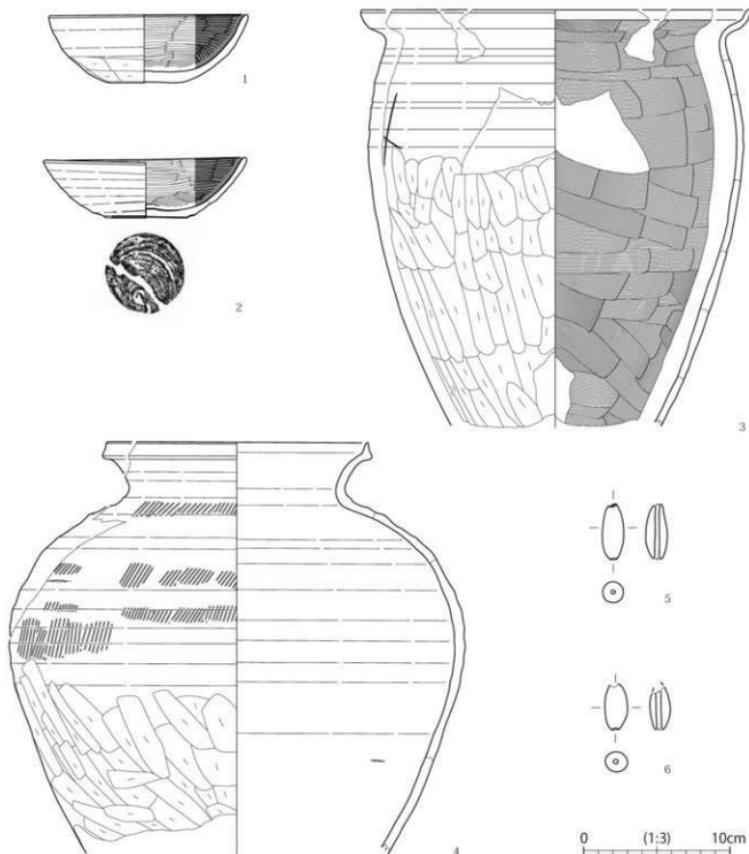
〔位置〕調査区南東側に位置する。南側は調査区外へ延びる。

〔重複関係〕S11、SK5、P6 ~ 9・11・12・94・95・309 と重複関係にあり、本遺構が古い。

〔規模・形態〕規模は東西 476cm、南北 275cm 以上である。平面形は残存状況から、方形と考えられる。柱穴・周溝は検出されていない。

〔主軸方位〕カマド基準で N-5°-W である。

〔堆積土・構築土〕7 層に分層された。1 ~ 2 層は住居堆積土、3 層はカマド内堆積土、4 ~ 6 層はカマド関連層位、7 層は掘り方埋土である。



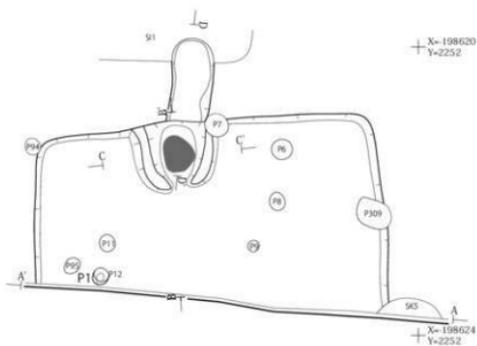
No.	図録番号	遺物名	材質	形状	器種	土厚×底径×器高 (cm)	外装調飾	内装調飾	備考	写真掲載
1	D-051	S6 カマド鉢	焼土	土師器	FF	13.6 × 5.3 × 4.7	ロケロ調飾 手持ちヘラケツリ 底面: 可成り平明→全面手持 ちヘラケツリ	ヘラミガキ 黒色地味		16.2
2	D-050	S6	I	土師器	FF	13.9 × 5.5 × 5.2	ロケロ調飾 底面: 斜板糸結び	ヘラミガキ 黒色地味		16.3
3	D-003	S6	3	土師器	葉	26.6 × × 28.6	ロケロ調飾 手持ちヘラケツリ	ロケロ調飾 ヘラナデ	外面: 斜板に斜釘「×」 外面: 斜板・内面: 斜板 土厚不齊。	16.4
4	F-013	S6	6	須恵器	葉	18.4 × × 28.5	ロケロ調飾 平行タタキ ヘラケツリ	ロケロ調飾	内面: 斜板に自然斜釘 有。	16.5
No.	図録番号	遺物名	材質	形状	器種	径×幅×高さ (cm)			整形・調飾・備考	写真掲載
5	F-003	S6	6	土師器	子持	3.5 × 1.4 × 0.6 5.0				16.6
6	F-004	S6	6	土師器	子持	3.2 × 1.6 × 0.7 4.5				16.7

第 278 図 S16 竪穴住居跡出土遺物

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡

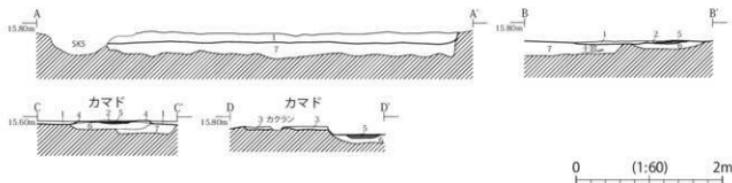
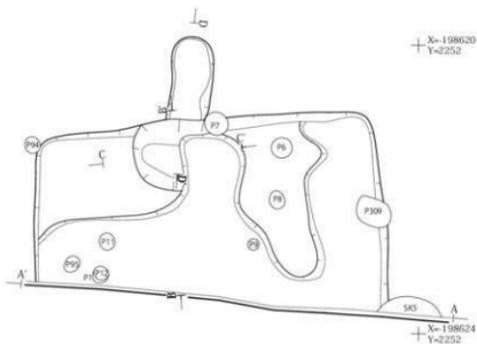
床面

X=198620  
Y=2246



掘り方

X=198620  
Y=2246



遺構名	カマド	平並石	方石	長幅×短幅×深さ (cm)
S17	あり	隅丸方石	N 0° W	4.76 × (2.73) × 0.16

遺構名	層位	土色	土質	備考	遺構名	層位	土色	土質	備考
S17	1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト		S17	5	5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土
	2	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の焼土・磁石物を少量含む。		6	10YR4/4 黄褐色	粘質シルト	径 5mm の焼土を少量含む。
	3	10YR4/3.5 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の焼土を少量含む。		7	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	
	4	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の磁石物を少量含む。					

第 279 図 S17 竪穴住居跡平面図・断面図



第280図 S17 竪穴住居跡出土遺物

No.	図録番号	遺物名	図例	種類	図録	長さ×幅×高さ (cm)	重さ (g)	形状・製作・用途	写真No.
1	P-005	S17	3	土器片	1	(2.0) × 1.2 × 0.5 (2.0)		ナシ	168

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大10cmである。

[床面] 掘り方埋土上面を床面とし、起伏する。

[カマド] 北壁の中央に付設されている。規模は左袖が長さ100cm、幅35cm、床面からの高さ2cmで、右袖が長さ80cm、幅30cm、床面からの高さ3cmである。燃焼部の規模は奥行100cm、幅50cm、奥壁高10cmで、奥壁部分は住居内に収まる。底面は中央がやや窪み、奥壁は外傾して立ち上がる。深さ10cmの掘り方を持つ。煙道部の規模は長さ115cm、幅50～55cm、深さ5cmである。底面は概ね平坦だが、奥壁付近はやや低くなる。

[その他の施設] 床面でピット1基(P1)を検出したが、P12と重複関係にあり、全容は不明である。

[掘り方] 深さ25cmである。底面は起伏し、中央と東壁際が不整形に掘り込まれる。

[出土遺物] 住居堆積土、掘り方埋土、カマドから土器器片、須恵器片、陶磁器片、土製品、礫が出土しており、土製品1点(土鐘)を図示した。時期決定の出来る遺物は出土しておらず、本住居跡の詳細な年代は不明であるが、重複関係にある10世紀前半以降の竪穴遺構と考えられるS11より古い竪穴住居跡と考えられる。

## 2) 竪穴遺構

### S11 竪穴遺構 (第281図、図版7)

[位置] 調査区北東側に位置する。北側は調査区外へ延びる。

[重複関係] S12・7、SX2、P14・56～63・76・77・80・81・83～87・91・328と重複関係にあり、S12・7、SX2より新しく、P14・56～63・76・77・80・81・83～87・91・328より古い。

[規模・形態] 規模は東西5.47m、南北267cm以上である。平面形は、残存状況から隅丸長方形と考えられる。柱穴・周溝・カマド・掘り方は検出されていない。

[主軸方位] 南壁基準でE-4°-Sである。

[堆積土] 2層に分層された。1・2層は竪穴堆積土である。

[壁面] 床面から緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大5cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層を床面とし、やや起伏する。

[出土遺物] 竪穴堆積土、床面から土器器片、金属製品が出土しているが、図示できる遺物はない。時期決定の出来る遺物がないことから、本遺構の詳細な時期は不明であるが、重複関係にある10世紀前半頃であるSX2より新しい竪穴遺構と考えられる。

### S12 竪穴遺構 (第282図、図版7)

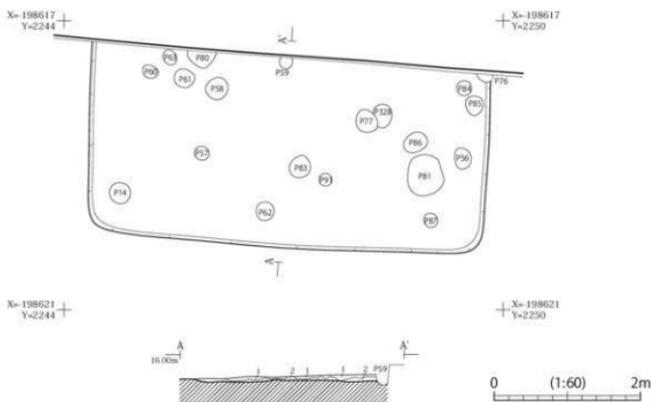
[位置] 調査区北東側に位置する。

[重複関係] S11、SX2、P13・16・92・301と重複関係にあり、SX2より新しく、S11、P13・16・92・301より古い。

[規模・形態] 規模は東西215cm、南北300cmである。平面形は、残存状況から長方形と考えられる。柱穴・周溝・カマド・掘り方は検出されていない。

[主軸方位] 西壁基準でN-3°-Eである。

第4節 鍛冶屋敷前遺跡

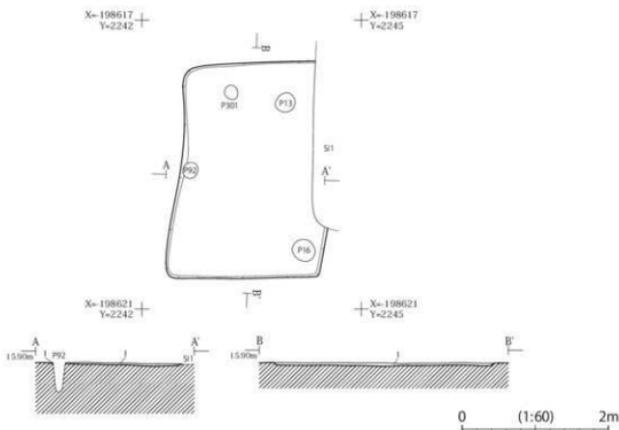


遺構名	方マド	平面図	方位	長幅・短幅・深さ (m)
S11	なし	縦長長方形	E-4°S	5.41 × (2.67) × 0.1

遺構名	傾斜	土質	土色	備考	遺構名	傾斜	土質	土色	備考
S11	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	径 20 ~ 30mm の炭角砕土質シルト・炭灰色 粘土質シルトブロックを多数含む。	S11	2	10YR8/1 黒灰色	粘土質シルト	径 10mm の炭角砕粘土質シルトブロックを少量含む。

第281図 S11 竪穴遺構平面図・断面図



遺構名	方マド	平面図	方位	長幅・短幅・深さ (m)
S12	なし	縦長長方形	N-3°E	3.00 × (2.15) × 0.04

遺構名	傾斜	土質	土色	備考
S12	1	10YR4/4 黒色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルトブロックを多数含む。

第282図 S12 竪穴遺構平面図・断面図

[堆積土] 単層である。1層は竪穴堆積土である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大5cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層を床面とし、概ね平坦である。

[出土遺物] 竪穴堆積土から土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。時期決定の出来る遺物がないことから本遺構の詳細な時期は不明であるが、10世紀前半頃の住居跡と考えられるSX2より新しいことから、10世紀前半以降の竪穴遺構と考えられる。

#### S13 竪穴遺構 (第283図、図版7)

[位置] 調査区北東側に位置する。北側は調査区外へ延びる。

[重複関係] P304と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は東西165cm、南北48cmである。平面形は、残存状況から隅丸長方形と考えられる。柱穴・周溝・カマド・掘り方は検出されていない。

[主軸方位] 南壁基準でE-10°-Nである。

[堆積土] 単層である。1層は竪穴堆積土である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大5cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層を床面とし、概ね平坦である。

[出土遺物] 竪穴堆積土から土師器片、須恵器片、石製品が出土しているが、図示できる遺物はない。時期決定の出来る遺物がないことから、本遺構の詳細な時期は不明である。

#### S14 鍛冶関連遺構 (第284～288図、図版7・8・14・15)

[位置] 調査区南西側に位置する。南側は調査区外へ延びる。

[重複関係] SX3・5・6と重複関係にあり、SX5・6より新しく、SX3より古い。

[規模・形態] 規模は東西462cm、南北295cm以上である。平面形は、残存状況から隅丸方形と考えられる。周溝・カマドは検出されていないが、北壁側で煙道2ヶ所を検出した。

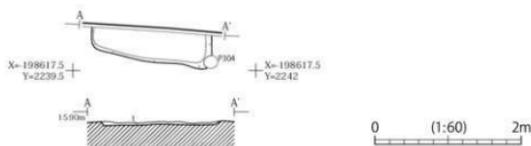
[主軸方位] 北壁基準でE-6°-Nである。

[堆積土・構築土] 8層に分層された。1～6層は竪穴堆積土、7・8層は掘り方埋土である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大33cmである。

[床面] 掘り方上面を床面とし、概ね平坦である。床面南側で被熱面を1ヶ所検出した

[柱穴] 床面で5基のピット(P1～5)を検出した。規模や位置関係から、P1・3～5は主柱穴と考えられる。規模は長軸36～54cm、短軸36～52cm、深さ4～9cmである。平面形は円形を主体とし、断面形は逆台形である。堆積土は1～2層に分層された。柱痕跡は確認されていない。その他のピットの規模は長軸43cm、短軸39cm、深



遺構名	名マド	平面形	方位	長軸・短軸・深さ (m)
S13	なし	隅丸長方形	E-10° 南	1.65 × 0.48 × 0.04

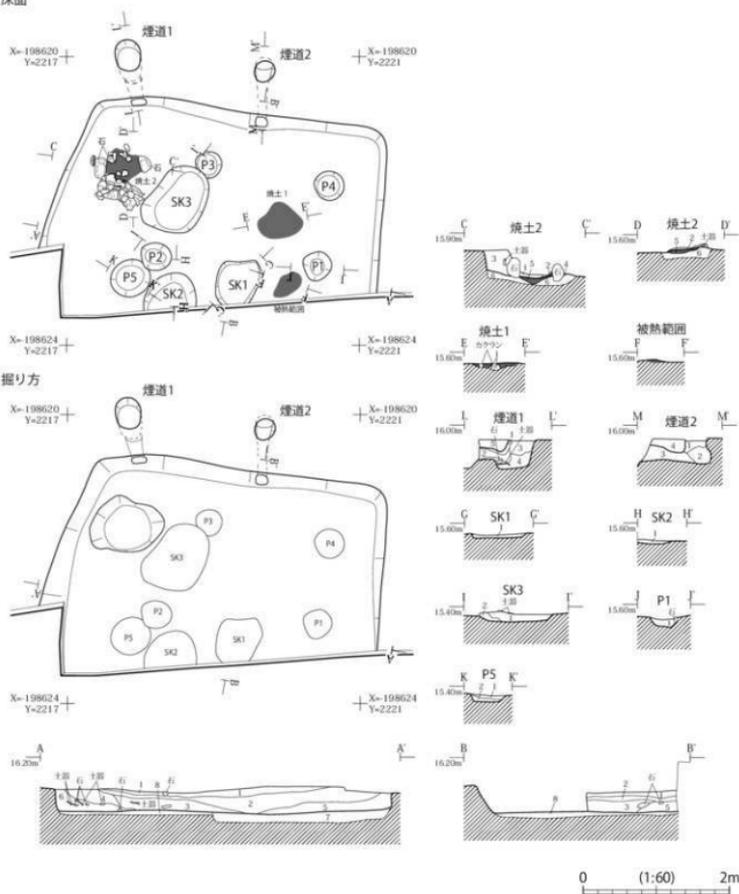
  

遺構名	部材	主軸	土作	備考
S13	1	10YR6/1 黄灰赤	船形シルト	高岡台シルト・高岡地粘土質シルトブロックモサ群層石。

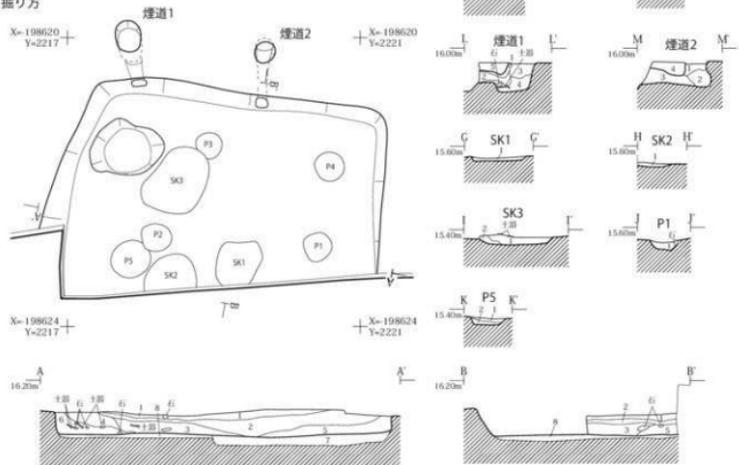
第283図 S13 竪穴遺構平面図・断面図

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡

床面



掘り方

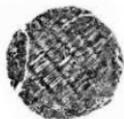
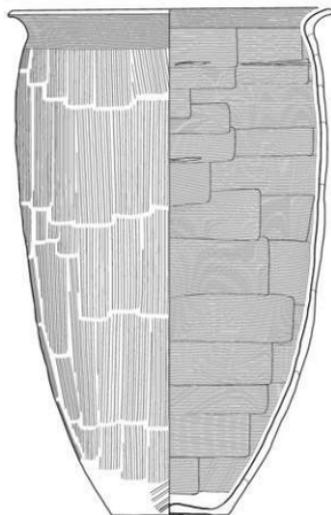


遺跡名	方マド	平面形	方位	長軸・短軸・深さ (m)			
S4	丸し	隅丸方形	E 45° N	4.62 × (2.95) × 0.35			
P 番号	平面形	楕圓形	長軸・短軸・深さ (m)	楕圓形			
P1	半楕圓	楕圓形	0.42 × 0.80 × 0.039	P5	半楕圓	楕圓形	0.54 × 0.52 × 0.039
P2	円形	楕圓形	0.43 × 0.39 × 0.039	SK1	半楕圓	楕圓形	0.400 × 0.58 × 0.04
P3	円形	楕圓形	0.36 × 0.36 × 0.04	SK2	半楕圓	楕圓形	0.500 × 0.68 × 0.05
P4	円形	楕圓形	0.40 × 0.40 × 0.03	SK3	半楕圓形	楕圓形	0.98 × 0.75 × 0.13

第284図 S4 鍛冶関連遺構平面図・断面図

S4 竪穴住居跡出土品目録

遺物名	部位	土色	土質	備考	遺物名	部位	土色	土質	備考	
S4	1	10YR6/6 黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒を多量、径 5mm の硝子・硝化物を少量含む。	機土 1	1	10YR6/6 黄褐色	シルト質粘土	硝子	
	2	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硝子・径 5mm の硝化物を少量含む。		2	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	径 10～30mm の硝子・硝化物を多量に含む。	
	3	10YR4/4 黄褐色	粘土	径 5mm の硝子・径 5～10mm の硝化物・硝子を多量に含む。		3	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硝子・径 5mm の硝化物を少量含む。	
	4	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硝化物を少量含む。		4	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	径 10mm の硝子を多量に含む。	
	5	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硝子・径 5mm の硝化物を少量含む。	機土 2	5	10YR5/6 黄褐色	シルト		
	6	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硝子・硝化物・硝子を多量に含む。		6	10YR3/2 に近い黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硝化物を少量含む。	
	7	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硝子を少量含む。		機土 3	1	20YR4/2 黄褐色	砂質シルト	
	8	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硝化物を少量含む。			2	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	径 5mm の硝子を少量含む。
P1	1	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	径 5～15mm の硝子を多量、径 5～10mm の硝化物を少量含む。	3		10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	径 5mm の硝子を少量含む。	
					4		10YR3/2 に近い黄褐色	粘土質シルト	機土ブロックを多量に含む。	
P5	2	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト		機土 1	1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	機土ブロックを多量に含む。	
										1
SK1	1	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	径 5mm の硝子・硝化物を少量含む。	機土 2	2	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	径 5～10mm の硝子を少量含む。	
										SK2
SK3	1	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	黄褐色機土ブロックを少量含む。	4	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト			



1



2



3



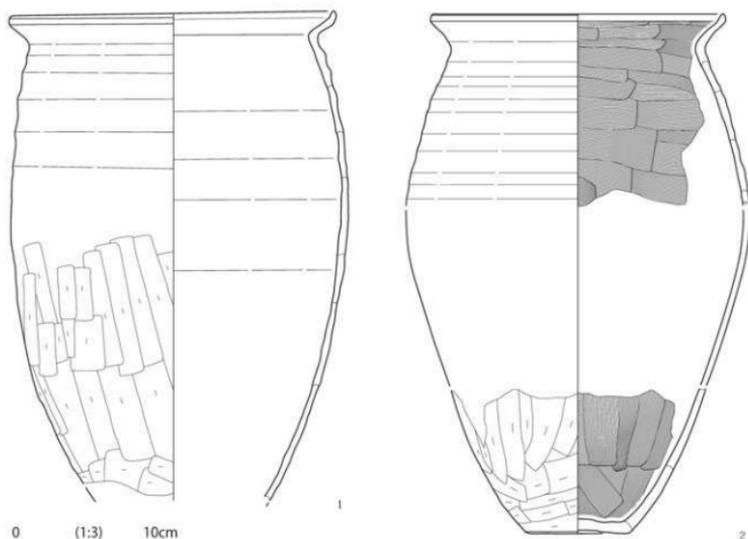
4

0 (1:3) 10cm

No.	記録番号	遺物名	部位	種類	形状	寸法×底径×部高 (mm)	外面装飾	内面装飾	備考	写真図版
1	C-003	S4	2	土師器	甕	22.3 × 8.0 × 41.0	ヨコナデ、ハツメ 青表紙の目印	ヨコナデ	外面に黄褐色。	14-14
2	D-002	S4	3	土師器	杯	16.5 × 8.4 × 5.7	ロウロ装飾 目印(ヘラウケ式) 既部: 切り揃し不明・相転(ヘラウケ式)	ヘラウケ目 黒色装飾	外面に黄褐色。	14-13
3	D-045	S4	8	土師器	杯	13.8 × 6.8 × 3.0	ロウロ装飾 既部: 切り揃し不明・手持ち(ヘラウケ式)	ヘラウケ目 黒色装飾	外面黄褐色。	14-11
4	D-046	S4	機土	土師器	杯	13.4 × 5.9 × 4.3	ロウロ装飾 手持ち(ヘラウケ式) 既部: 切り揃し不明・手持ち(ヘラウケ式)	ヘラウケ目 黒色装飾		14-12

第 285 図 S4 竪穴関連遺構出土遺物 (1)

第4節 鍛冶屋敷前遺跡



No.	図面番号	遺構名	種類	面積	用途	土層	上層・底層・断面の厚	外周設備	内周設備	備考	写真枚数
1	D-04R	S14	土築部	2	土築部	25.0 × 2	(3.4)	ロケロ調整 ベラウスウ	ロケロ調整	外周・内周に備付	15.7
2	D-001	S14 煙道1	4	土築部	煙	(20.0) × (7.0) × (36.0)		ロケロ調整 手持ベラウスウ 紅土・切り直し土磚・ベラウスウ	ロケロ調整 ベラウスウ	内周側部一底面に付存 物有り	15.8

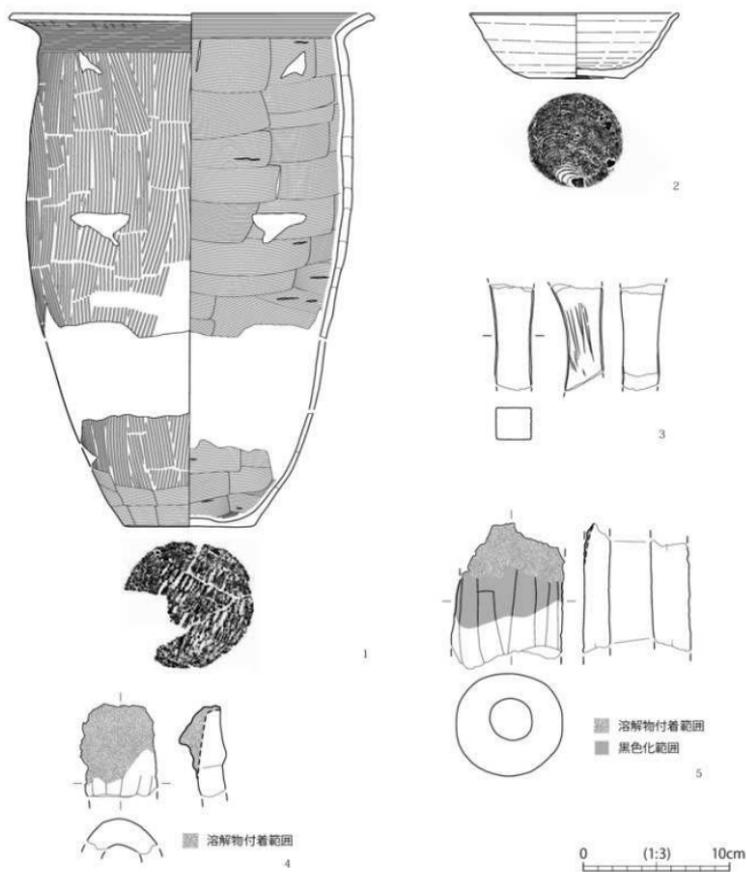
第286図 S14 鍛冶関連遺構出土遺物(2)

さ9cmである。平面形は円形で、断面形は逆台形である。柱痕跡は確認されていない。

[その他の施設] 煙道2ヶ所、床面で土坑3基(SK1~3)、焼土1・2を検出した。煙道1は北壁の西側に位置し、北西側に延びる。煙道部の規模は長さ95cm、幅18~30cm、深さ28cmである。底面は概ね平坦である。煙出し部の規模は長軸45cm、短軸35cm、深さ38cmである。煙道2は北壁の中央に位置し、北側に延びる。煙道部の規模は長さ90cm、幅12~20cm、深さ30cmである。底面は概ね平坦だが、住居北壁付近はやや高くなる。煙出し部の規模は長軸30cm、短軸28cm、深さ33cmである。SK1は床面中央南側に位置する。南側は調査区外へ延びる。平面形は不整形で、規模は長軸60cm以上、短軸58cm、深さ4cmである。堆積土は単層である。SK2は床面中央南側に位置する。南側は調査区外へ延びる。平面形は不整形で、規模は長軸50cm以上、短軸68cm、深さ5cmである。堆積土は単層である。SK3は床面中央西側に位置する。P3と重複関係にあり、P3より古い。平面形は不整形で、規模は長軸98cm、短軸75cm、深さ13cmである。焼土1は、住居東側に位置する。床面から深さ11cm程の凹み掘り込みを有する。焼土2は、住居北西に位置する。平面形が不整形円形で、規模が長軸102cm、短軸82cm、深さ14cmの掘り方を有する。焼土の東側及び西側に26~33cmの礫が出土している。2基の煙道と2ヶ所の焼土は、位置的に煙道1は焼土2に対応し、煙道2は焼土1に対応する排煙の施設である可能性が考えられる。

[掘り方] 深さ4~15cmである。底面は起伏し、中央が落ち込む。

[出土遺物] 竇穴堆積土、床面、掘り方埋土、焼土、SK1・2、煙道1・2から土師器、赤焼土器片、須恵器、陶磁



№	記録番号	遺構名	階位	種類	図種	寸法・底径・高さ・重	内装遺物	内装遺物	備考	写真掲載
1	D-049	S14	一階	土師器	甕	口径4.4 × 底径8.9 × 高さ33.5	ココナツ・ハクメー・ヘラナツ 乳器：骨表裏の付着・片持ナツ	ココナツ・ハクメー・ヘラナツ	内装の中層部	161
2	E-012	S14	8	灰産物	片	14.3 × 6.6 × 4.5	ロケの調整 灰産・土師器の片	ロケの調整		154
3	K-033	S14	2	石製品	砥石	長さ × 幅 × 厚さ 6cm 重さ 5g	砥石 × 幅 × 厚さ 6cm 重さ 5g		備考	152
4	P-000	S14	1	土製品	器1	径4.0 × (4.8) × 1.7 (厚1.40)	内装：ナツ 片持部・欠損部に溶解物が付着。最大孔径1.8cm	動物・遺物・備考		写真掲載
5	P-006	S14	床面直上	土製品	器1	径7.0 × 7.0 × 2.5 (厚2.66)	内装：ナツ 片持部・欠損部に溶解物が付着。孔径2.8cm			154

第287図 S14 鍛冶関連遺構出土遺物(3)

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡

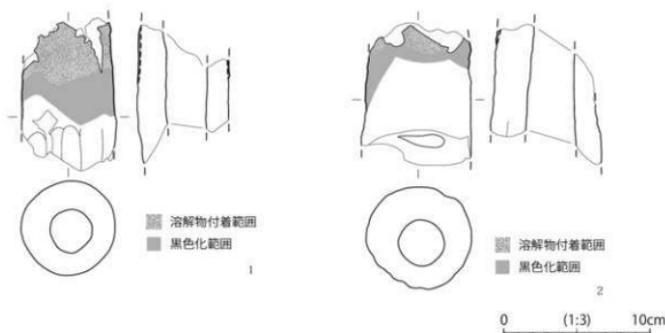


図	図録番号	遺構名	図記	種類	図種	長さ・幅・厚さ (cm)	深さ (cm)	形状・遺物・備考	写真枚数
1	P-006	S14	3	土師器	器1	(10.6 × 6.5 × 1.9)	(217.00)	片断部に溶解物が付着。孔径2.7cm。	15.5
2	P-007	S14	2	土師器	器1	(10.3 × 7.2 × 2.4)	(381.80)	片断部に溶解物が付着。孔径3.3cm。	15.6

第288図 S14 鍛冶関連遺構出土遺物(4)

器片、石製品、土製品、金属製品、鉛滓、礫が出土しており、土師器7点、須恵器1点、石製品1点、土製品(羽口)4点を図示した。そのうち、床面直上から出土した土師器環(第285図2)、掘り方埋土から出土した土師器環(第285図3)、須恵器環(第287図2)は本遺構に伴うことから、年代は9世紀後半頃と考えられる。鉛滓が平箱2箱分及び羽口(第287図4・5、第288図1・2)が床面直上や竪穴遺構堆積土中から出土しており、鍛冶関連遺構と考えられる。

#### SB1 掘立柱建物跡・S15 竪穴遺構(第289図、図版8)

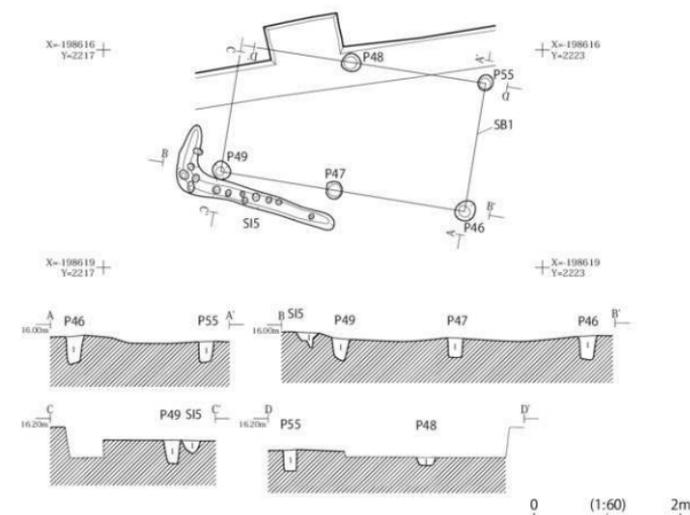
調査区北西側で検出した。調査時は同一遺構となる可能性を考えていたが、検討の結果、溝状の掘り込みは竪穴遺構の掘り方又は周溝の残存と判断しS15とした。柱穴については、掘立柱建物跡と判断しSB1としたが、ここでは合わせて報告する。SB1の北西側は調査区外に延びると考えられる。SX4と重複関係にあり、本遺構が新しい。規模は東西2間(北列総長185cm、南列西から157cm+180cm、総長337cm)、南北1間(東列総長180cm、中央列総長180cm)の側柱建物で、方向はN-81°-Wである。柱穴掘り方はいずれも円形で、規模は長軸22~27cm、短軸20~27cm、深さ11~37cmである。柱痕跡は検出されていない。

S15の残存規模は東西方向が212cm、南北方向が76cmで、幅18~38cm、深さ18cmである。平面形はL字形で、断面形はU字形または漏斗形である。底面で、工具痕跡を検出した。遺物はP46~49から土師器片、S15堆積土から土師器片、須恵器片、鉛滓、土製品が出土しているが、図示できる遺物はない。時期決定の出来る遺物は出土しておらず、本遺構の詳細な時期は不明である。

#### 3) 土坑

SK1土坑(第290図)調査区東側で検出した。P3・64~66・82と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不整形円形で、長軸方向はN-50°-Wである。規模は長軸164cm、短軸156cm、深さ7cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は皿形で、底面はやや起伏する。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK4土坑(第290図)調査区中央西側で検出した。平面形は隅丸長方形で、長軸方向はN-75°-Wである。規模は長軸133cm、短軸68cm、深さ5cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は皿形で、底面は平坦である。



遺構名	平面図		掘削方位		掘削・埋藏 (cm)			
S15			方位 N9°-W		3.37 × 1.8			
P 遺構	平面図	断面図	掘削・埋藏・深さ (cm)		P 遺構	平面図	断面図	掘削・埋藏・深さ (cm)
P46	円形	U字形	0.27 × 0.27 × 0.37		P49	円形	U字形	0.25 × 0.25 × 0.33
P47	円形	U字形	0.25 × 0.21 × 0.26		P55	円形	U字形	0.22 × 0.20 × 0.30
P48	円形	逆U形	0.27 × 0.26 × 0.14					
遺構名	カタド	平面図	方位	掘削・埋藏・深さ (cm)				
S15 内溝	なし	L字形		2.12 × 0.76 × 0.18				

遺構名   部位	土色	土質	備考	遺構名   部位	土色	土質	備考
S15 P46	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	S15 P49	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト
S15 P47	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	S15 P55	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト
S15 P48	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	S15	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト

注: 径 10mm の黒褐色粘土質シルトブロックを少量含む。  
注: 径 5mm の黒褐色粘土質シルトブロックを少量含む。  
注: 径 10 ~ 20mm の黒褐色粘土質シルトブロックを含む。黒褐色シルトブロックを少量含む。

第289図 S15 掘立柱建物跡・S15 掘り方平面図・断面図

堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK5 土坑 (第 290 図、図版 9) 調査区南東側で検出した。南側は調査区外へ延びる。S17 と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形、長軸方向とも不明である。規模は東西 89cm 以上、南北 31cm 以上、深さ 35cm である。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で、底面はやや起伏する。堆積土は 2 層に分層された。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

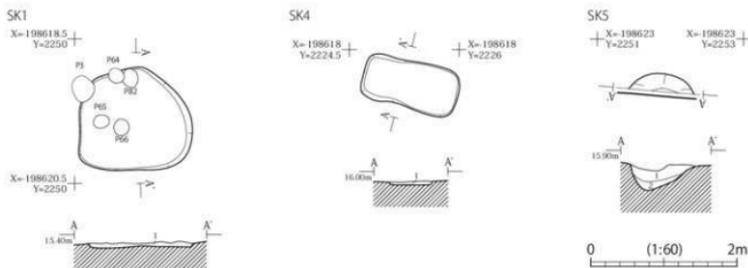
#### 4) 溝跡

SD1 溝跡 (第 276・291 図) 調査区東側で検出した。南北方向の溝跡である。方向は N-9°-W で、規模は長さ 150cm、幅 20cm、深さ 8cm である。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

#### 5) 竪穴住居跡・竪穴遺構・鍛冶関連遺構・性格不明遺構

SK1 性格不明遺構 (第 292 図) 調査区中央で検出した。一部を掘乱により削平される。P321 と重複関係にあり、

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡



遺構名	平面形	断面形	方位	長軸×短軸×深さ (m)	遺構名	平面形	断面形	方位	長軸×短軸×深さ (m)
SK1	不整形円形	鉢形	N 50° W	1.04 × 1.56 × 0.07	SK5	円形	逆円形		径 0.80 × 0.311 × 0.310
SK4	楕円長方形	鉢形	N 2° W	1.33 × 0.68 × 0.05					

遺構名	積層	土色	土質	備考	遺構名	積層	土色	土質	備考
SK1	1	10YR4/3に灰・褐色	粘土質シルト	径 20mmの炭粉色粘土質シルトブロックを少量含む。	SK5	1	10YR3/2 紫褐色	粘土質シルト	径 5mmの燻土粒・炭粒を少量含む。
SK4	1	10YR4/3に灰・褐色	粘土質シルト	炭粉色シルト・炭化物を少量含む。	SK5	2	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト	径 10mmの燻土粒を少量含む。

第290図 SK1・4・5土坑平面図・断面図

本遺構が古い。平面形は不整形で、長軸方向はN-3°-Eである。規模は長軸195cm、短軸154cm以上、深さ6cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は皿形で、底面はやや起伏する。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SX2 竪穴住居跡 (第293・294図、図版9・16・17)

[位置] 調査区北東側に位置する。北側は調査区外へ延びる。

[重複関係] S11・2、P15と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は東西407cm、南北340cm以上である。平面形は残存状況から、長方形と考えられる。柱穴・周溝は検出されていない。

[主軸方位] カマド基準でE-20°-Sである。

[堆積土・構築土] 11層に分層された。1～3層は住居堆積土、4～8層はカマド内堆積土、9・10層はカマド間連層位、11層は掘り方埋土である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大32cmである。

[床面] 掘り方埋土上面または基本層Ⅲ層を床面とし、やや起伏する。西・南壁沿い及び、カマド周辺を除く範囲で残存する。

[カマド] 東壁の南寄りに付設されている。両袖の上部は削平されており、基底部のみが残存している。規模は左袖が長さ1.05m、幅70cm、床面からの高さ15cmで、右袖が長さ115cm、幅55cm、床面からの高さ18cmである。燃焼部の規模は奥行45cm、幅40cm、奥壁高5cmで、奥壁部分は住居内に収まる。底面は奥壁付近が落ち込み、奥壁は外傾して立ち上がる。深さ15cmの掘り方を持つ。煙道部の規模は長さ60cm、幅20～45cm、深さ3～5cmで



遺構名	平面形	断面形	方位	長さ×幅×深さ (m)	遺構名	積層	土色	土質	備考
SD1	線形	逆円形	N 0° W	1.50 × 0.20 × 0.06	SD1	1	10YR4/2 灰褐色	粘土質シルト	径 20～30mmの炭粉色粘土質シルトブロックを少量含む。

第291図 SD1溝跡断面図

ある。底面は概ね平坦である。

[その他の施設] 床面は土坑2基(SK1・2)、ピット1基(P1)を検出した。SK1は住居南側に位置し、カマド右袖に近接する。平面形は楕円形で、断面形は皿形である。規模は長軸62cm、短軸42cm、深さ6cmである。堆積土は単層である。SK2は住居南東隅に位置し、カマド右袖に隣接する。平面形は不整楕円形で、断面形は逆台形である。規模は長軸68cm、短軸43cm、深さ8cmである。堆積土は単層である。規模や位置関係から、SK1・2は貯蔵穴と考えられる。P1の規模は径22cm、深さ9cmで、平面形は円形で、断面形は逆台形である。堆積土は単層で、柱痕跡は確認されていない。

[掘り方] 深さ4～12cmである。住居中央が僅かに掘り込まれる。底面はやや起伏する。

[出土遺物] 住居堆積土、床面、カマド、SK1・2から土師器、赤焼土器、須恵器片、金属製品、礫が出土しており、土師器7点、赤焼土器1点、鉄釘1点を図示した。そのうち、床面直上から出土した土師器耳皿(第294図8)、4層から出土した土師器環(第294図1)、SK2から出土した土師器環(第294図2)を伴うことから、年代は10世紀前半頃と考えられる。

#### SX3 鍛冶関連遺構(第292図、図版10)

SI4の南側を調査するため調査区南壁を拡張した際に検出された。

[位置] 調査区南側に位置する。南側は調査区外へ延びる。

[重複関係] SI4と重複関係にあり、本遺構が新しい。

[規模・形態] 規模は南北185cm、東西122cm以上である。平面形は、長方形と考えられる。

[主軸方位] 東壁基準でE-2°-Nである。

[堆積土・構築土] 2層に分層された。1・2層は竅穴堆積土である。

[壁面] 床面から緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大5cmである。

[床面] SI4の1層上面を床面とし、平坦である。床面で焼土5ヶ所を検出した。焼土1は床面の北西側に位置する。平面形は不整形で、規模は長軸45cm、短軸45cm、深さ10cmである。堆積土は2層に分層された。焼土2は床面の西側に位置する。平面形は不整形で、規模は長軸25cm、短軸20cm、深さ7cmである。堆積土は2層に分層された。焼土3は床面の南東側に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸15m、短軸10cmである。焼土4は床面の北東側に位置する。平面形は不整形で、規模は長軸60cm、短軸45cm、深さ8cmである。堆積土は2層に分層された。焼土5は床面の西側に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸10cm、短軸10cm、深さ2cmである。堆積土は2層に分層された。

[出土遺物] 堆積土から土師器片、赤焼土器片、須恵器片、石製品、鉾滓(碗形滓)が出土しているが、図示できる遺物はないため、本遺構の詳細な年代は不明である。鉾滓が平箱半箱分程出土しており、焼土を5ヶ所確認したこと、重複関係にあり出土遺物から9世紀後半頃の鍛冶関連遺構と考えられるSI4より新しい鍛冶関連遺構と考えられる。

#### SX4 鍛冶関連遺構(第295・296図、図版10・17)

[位置] 調査区北西側に位置する。北側は調査区外へ延びる。

[重複関係] SI5、SB1、P47～50と重複関係にあり、SI5、SB1より新しく、P47～50より古い。

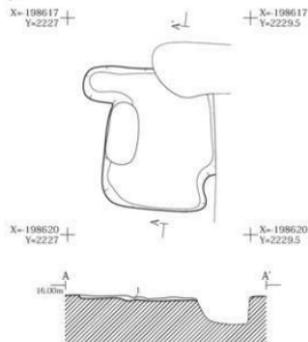
[規模・形態] 規模は東西305cm、南北334cmである。平面形は、残存状況から隅丸長方形と考えられる。周溝・柱穴・カマドは検出されていない。

[主軸方位] 南壁基準でN-80°-Wである。

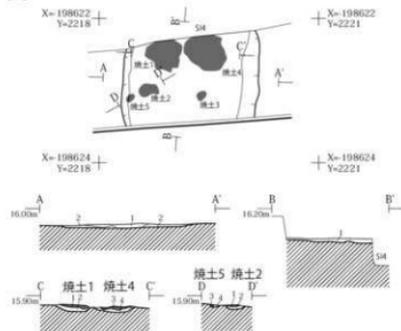
[堆積土・構築土] 11層に分層された。1～4層は堆積土、5～7層は焼土範囲の堆積土、8～11層は掘り方埋土である。

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡

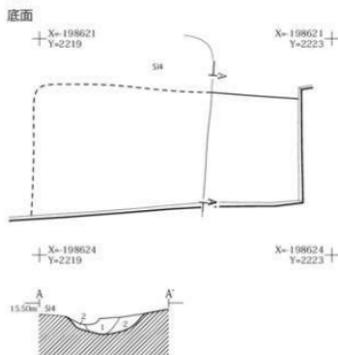
SX1



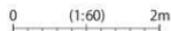
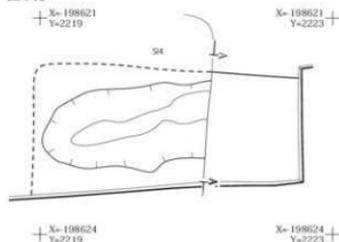
SX3



SX5



掘り方



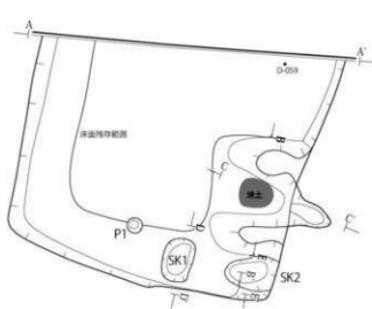
遺構名	平面形	断面形	方位	長軸×短軸×深さ (m)	遺構名	平面形	断面形	方位	長軸×短軸×深さ (m)
SX1	半圆形	矩形	N 3° E	1.95 × (1.54 × 0.06)	SX3	半圆形	断面形	N 48° W	13.62 × 1.55 × 0.23
SX3	长方形	矩形	E 2° N	1.85 × (1.22 × 0.05)					

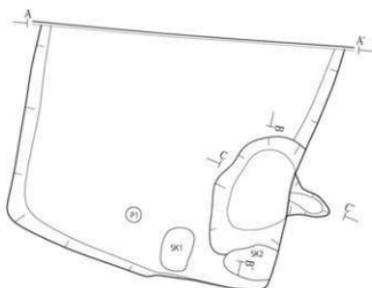
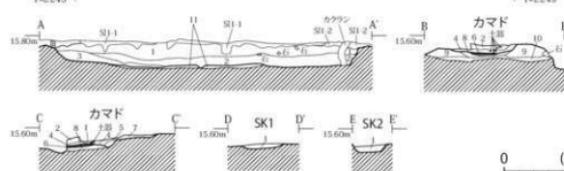
遺構名	層位	土色	土質	備考	遺構名	層位	土色	土質	備考
SX1	1	10YR3/1 黄褐色	砂質シルト	厚 20～30mm の黄褐色粘土質シルトブロック・厚 5mm の焼土を少量含む。	SX3	1	2.5YR3/6 赤褐色	シルト	焼土。
	2	10YR2/2 黄褐色	粘土質シルト	厚 5mm の焼土を少量含む。		2	2.5YR3/2 暗赤褐色	シルト	焼土。炭滓を少量含む。
SX3	1	10YR4/6 灰黄褐色	粘土	厚 5mm の焼土・炭化物を少量含む。	2・5	3	2.5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土。
	2	10YR4/6 灰黄褐色	シルト	焼土。		4	2.5YR3/2 暗赤褐色	シルト	焼土。炭滓を少量含む。
SX5	1	2.5YR3/2 暗赤褐色	シルト	焼土。炭滓を少量含む。	SX5	1	10YR3/6 黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
焼土	1・4	2.5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土。		2	10YR3/6 黄褐色	粘土質シルト	炭滓を少量含む。
	4	2.5YR3/2 暗赤褐色	シルト	焼土。炭滓を少量含む。					

第 292 図 SX3 鍛冶関連遺構、SX5 竈穴遺構、SX1 性格不明遺構平面図・断面図

底面

X=198617  
Y=2243X=198617  
Y=2249X=198621  
Y=2243

掘り方

X=198617  
Y=2243X=198621  
Y=2249X=198617  
Y=2249X=198621  
Y=2243X=198621  
Y=2249

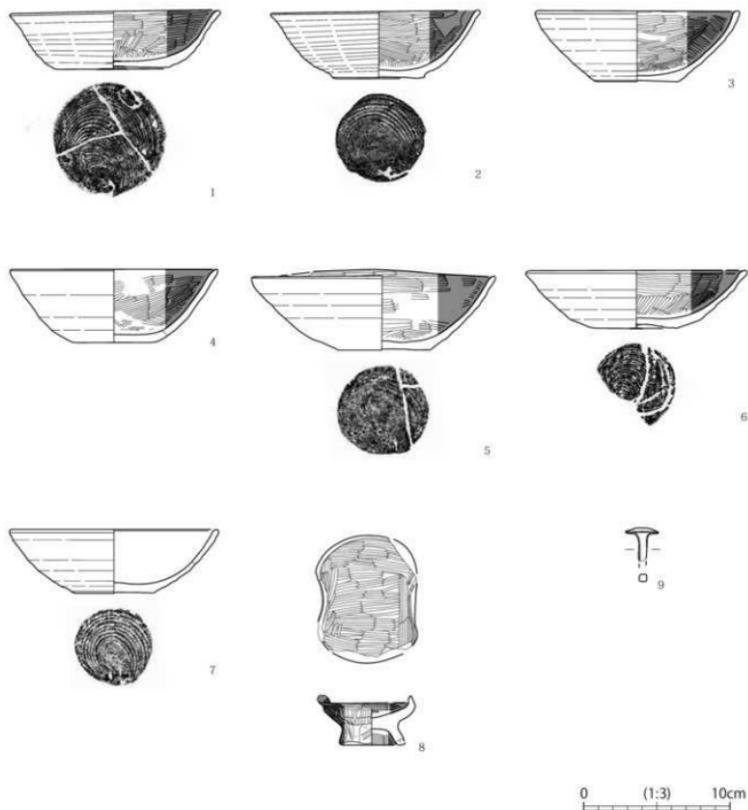
遺構名	平面形	敷設形	方位	面積・対称・厚さ (m)			
SK2	長方形	-	E 20° S	4.07 × 0.40 × 0.32			
P番号	平面形	敷設形	面積・対称・厚さ (m)	SK番号			
P1	円形	逆円形	0.22 × 0.22 × 0.09	SK1	平面形	敷設形	面積・対称・厚さ (m)
				SK2	平面形(逆円)	逆円形	0.62 × 0.42 × 0.06

遺構名	部位	土質	備考	遺構名	部位	土質	備考
SK2	1	10YR5/8 黄褐色	黒色粘土質シロントコを少量含む。	SK2	7	10YR5/8 黄褐色	砂質シロト
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土		8	10YR4/3 紅褐色	粘土
	3	10YR4/4 褐色	粘土		9	10YR5/4 紅褐色	粘土
	4	10YR5/4 紅褐色	粘土質シロト		10	10YR4/4 褐色	粘土質シロト
	5	10YR5/2 黄褐色	粘土		11	10YR4/4 褐色	粘土
	6	10YR5/2 黄褐色	粘土		SK1	1	10YR4/4 褐色
				SK2	1	10YR5/6 黄褐色	粘土質シロト

第293図 SK2 竪穴住居跡平面図・断面図

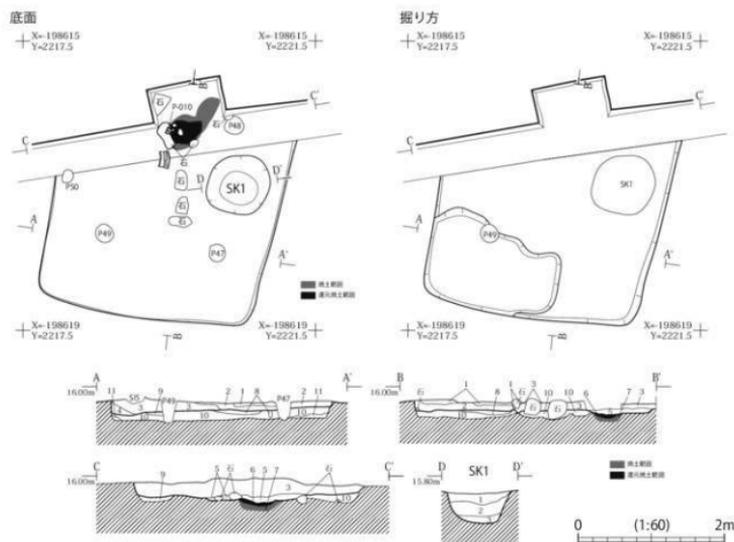
第4節 鍛冶屋敷前遺跡



№	登録番号	遺物名	時代	種別	器種	寸法・底径×器高(mm)	内面装飾	外面装飾	備考	写真図版
1	D-054	SKZ 土器	4	十部器	鉢	14.4 × 7.2 × 3.0	口内凹線 底面：目焼赤褐色	へろ土付赤 黒色胎理		16.3
2	D-053	SKZ/SKZ	1	十部器	鉢	14.3 × 6.2 × 4.7	口内凹線 底面：目焼赤褐色	へろ土付赤 黒色胎理		16.10
3	D-056	SKZ	1	十部器	鉢	14.08 × 5.8 × 4.9	口内凹線 底面：目焼赤褐色	へろ土付赤 黒色胎理		17.1
4	D-007	SKZ	1	十部器	鉢	14.2 × 6.4 × 5.1	口内凹線 底面：切り離し不明	へろ土付赤 黒色胎理	内面厚縁、外縁凹筋。	17.2
5	D-052	SKZ	1	十部器	鉢	16.6 × 6.1 × 5.1	口内凹線 底面：目焼赤褐色	へろ土付赤 黒色胎理	内面厚縁。	17.3
6	D-058	SKZ	2	十部器	鉢	15.31 × 5.5 × 4.0	口内凹線 底面：目焼赤褐色	へろ土付赤 黒色胎理		17.4
7	D-055	SKZ	1	赤褐色土器	鉢	14.8 × 5.5 × 4.4	口内凹線 底面：目焼赤褐色	口内凹線	外面底面に付着物有り、焼熱。	17.6
8	D-059	SKZ	鉄器	土師器	耳環	16.6 × 4.5 × 3.5	へろ土付赤 裏行線：へろ字式 口内へろ土付赤 黒色胎理	へろ土付赤 黒色胎理 高行線 口内へろ土付赤		17.5

№	登録番号	遺物名	時代	種別	器種	寸法・幅×厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真図版
9	SK-004	SKZ	2	金属製品	鉄釘	22.3 × 2.3 × 0.5	0.04	先端欠け、中央より右なし、木眼の付着なし。	17.7

第 294 図 SKZ 竪穴住居跡出土遺物



遺構名	築設期	構造形式	方位	規模・形状・深さ (m)
SX4	縄文後古期	竪穴式	南東・西	(3.3m × 3.05 × 0.3)
SK1	中古期	竪穴式	南東・西	(0.82 × 0.82 × 0.4)

遺構名	層位	土層		備考	遺構名	層位	土層		備考
		下層	上層				下層	上層	
SX4	1	10YR3/4に5:1黄褐色	砂質シルト	底層を多量に含む。	SK4	8	10YR4/4褐色	粘土質シルト	
	2	10YR4/4褐色	粘土質シルト	底層を少量含む。		9	10YR4/4褐色	粘土質シルト	
	3	10YR4/4褐色	粘土質シルト	底層・小礫を少量含む。		10	10YR4/6褐色	粘土質シルト	厚5mmの炭化物を少量含む。
	4	10YR4/4褐色	粘土質シルト	底層を多量、小礫を少量含む。		11	10YR4/6褐色	粘土質シルト	
	5	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	厚5mmの炭化物を多量に含む。		SK1	1	10YR3/3に1:1黄褐色	粘土質シルト
6	10Y3/1オリーブ褐色	粘土質シルト	グライズ。	2	10YR3/2黄褐色	砂質シルト	厚5~20mmの炭化物・厚5mmの底層を少量含む。		
7	5YR3/3暗赤褐色	砂質シルト		3	10YR3/2黄褐色	砂質シルト	厚5~20mmの炭化物を多量に含む。		

第295図 SX4 竪穴関連遺構平面図・断面図

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大20cmである。

[床面] 掘り方直土上面を床面とし、起伏する。床面に鍛冶が跡と考えられる焼土範囲1ヶ所を検出した。住居跡の中央やや北側に位置する。焼土範囲の規模は長軸90m、短軸40cm、深さ20cmである。西側で羽口、中央で鋳滓が出土している。焼土範囲及びその付近で、12~38cmの礫が数点出土している。

[その他の施設] 床面で土坑1基(SK1)を検出した。SK1は床面中央南側に位置する。平面形は不整形円形で、断面形は逆台形である。規模は長軸89cm、短軸82cm、深さ40cmである。堆積土は3層に分層された。が跡と考えられる焼土範囲1ヶ所を検出した。住居跡の中央やや北側に位置する。焼土範囲の規模は長軸90m、短軸40cm、深さ20cmである。焼土範囲の西側で羽口の破片が出土した。通風孔が炉跡の中心に向かって設置されており、鍛冶が機能がいた状況で残存していると考えられる。また、中央で鋳滓が出土している。焼土範囲及びその付近で、12~38cmの礫が数点出土している。

[掘り方] 深さ4~12cmである。

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡

[出土遺物] 堆積土、掘り方埋土、SK1、焼土範囲から土師器片、須恵器、陶磁器片、石製品、金属製品、鉛滓（碗形滓）、土製品、礫が出土しており、須恵器2点、羽口1点を図示した。須恵器甕（第296図1・2）は堆積土からの出土であり、本遺構の詳細な年代は不明である。鍛冶跡に羽口（第296図3）を設置した状況で残存する焼土範囲があり、鉛滓も出土していることから鍛冶関連遺構と考えられる。

5X5 竪穴遺構（第292図、図版10）

[位置] 調査区南西側に位置する。東側及び南側は調査区外へ延びる。

[重複関係] S14と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は東西362cm以上、南北155cm以上である。平面形は不明である。柱穴・周溝・カマドは検出されていない。

[主軸方位] 北壁基準でN-88°-Wである。

[堆積土・構築土] 2層に分層された。1・2層は竪穴堆積土である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大15cmである。

[床面] 基本層Ⅲ層を床面とし、丸みを持つ。

[掘り方] 深さ4～12cmである。底面は中央がやや深くなる。

[出土遺物] 遺物は出土していないため、本遺構の詳細な年代は不明であるが、出土遺物から9世紀後半以降の住居跡と考えられるS14より古いことから、9世紀後半以前の竪穴遺構と考えられる。

SX6 性格不明遺構（第297・298図、図版10・17）調査区南西側で検出した。南側は調査区外へ延びる。S14と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不明で、規模は東西138cm以上、南北116cm以上、深さ50cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で、底面は概ね平坦である。堆積土は3層に分層された。堆積土中より土師器、須恵器片、金属製品が出土しており、土師器1点（第298図1）を図示した。

#### 6) ビット（第275図）

124基のビットを検出した。調査区全体に分布する。堆積土中より土師器片、須恵器片、石製品、金属製品、土製品が出土しているが、図示できる遺物はない。

#### (2) 遺構外出土遺物

土師器片、須恵器片、陶磁器片、石製品、金属製品、土製品、礫が出土しているが、図示できる遺物はない。

#### 4. まとめ

鍛冶屋敷前遺跡は仙台市太白区富沢字鍛冶屋敷前・熊前にあり、自然堤防上に立地する縄文時代及び奈良～中世の遺跡である。平成26年度にⅠ～Ⅲ区で計358㎡の調査を行い、古代以降の遺構群が検出された。

#### (1) 遺構について

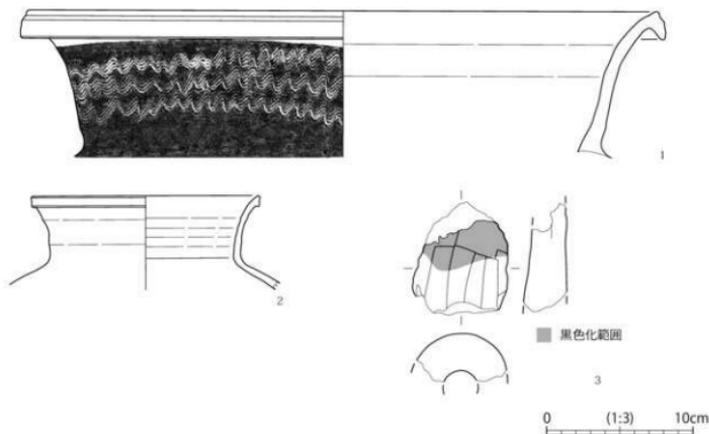
1) 古代以降の遺構は基本層Ⅲ層上面で検出された。

Ⅰ区—竪穴住居跡1軒、柱列1列、柵列2列、土坑3基、溝跡9条、ビット35基

Ⅱ区—竪穴住居跡11軒、土坑10基、溝跡29条、性格不明遺構1基、ビット266基

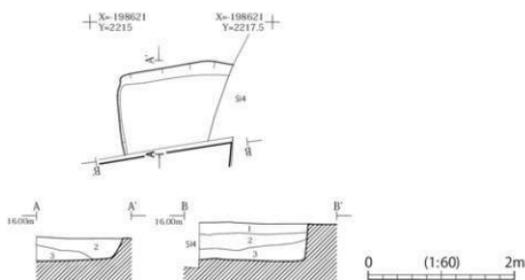
Ⅲ区—竪穴住居跡3軒、竪穴遺構4基、掘立柱建物跡1棟、鍛冶関連遺構3基、土坑3基、溝跡1条、性格不明遺構2基、ビット124基

2) Ⅰ区のS11 竪穴住居跡は、カマド煙道の煙出しビットのみを検出した。遺物は出土しておらず、遺構の詳細な年代は不明である。調査区中央南側で検出したSA1・2はいずれも東西方向に並ぶ柱列跡で、平行して延びる。SA3は、調査区北西側で検出した4基のビットで構成される柱列跡である。3基で柱痕跡を検出した。SA3もSA1・2同様、東西方向に延びる。溝跡は9条検出した。そのうち8条の溝跡は主軸方向に違いがあるものの、概ね東西方向に延びる。



No.	登録番号	遺物名	数量	種別	材質	寸法・底径・高さ(mm)	所在地	内面装飾	備考	写真掲載
1	E-014	SX4	3	須恵器	土	(45.0) × × (10.1)	江戸川遺跡 溝状文	江戸川遺跡	内面に自然釉付着。	17-8
2	E-015	SX4	1	須恵器	土	15.7 × × (6.5)	江戸川遺跡	江戸川遺跡		17-9
No.	登録番号	遺物名	数量	種別	材質	寸法・底径・高さ(mm)	所在地	装飾・調子・釉薬		写真掲載
3	P-010	SX4	6	土製瓦	土	(7.8) × 底径 × 2.9 (17.1)	西原・ナナ	復元底径 2.6cm.		17-10

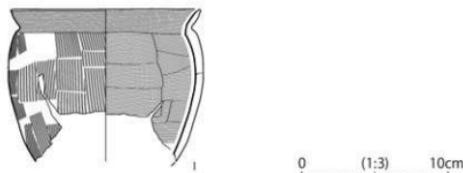
第 296 図 SX4 鍛冶関連遺構出土遺物



遺物名	平面形	断面形	方位	長軸×短軸×深さ(m)	遺物名	層位	土色	土質	備考
SX6	不明	断面形	方位	16.00 × 0.16 × 0.3	1	10YR6/3 土色 微粉砂	粘土質土(上)	層 2 - 5mm の粗粒砂・砂 5mm の粘土を少量含む。	
					2	10YR6/4 褐色	粘土質土(中)	層 5mm の粘土・炭化物を少量含む。	
					3	10YR6/6 褐色	粘土質土(下)	層 3 - 5mm の粘土・炭化物を少量含む。	

第 297 図 SX6 性格不明遺構平面図・断面図

#### 第4節 鍛冶屋敷前遺跡



No.	発掘番号	遺構名	期	構造	用途	土質・形状・高さ (cm)	伴出遺物	内部遺物	備考	写真図版
1	C-002	SX6	I	土壁造	溝	(13.5) 0.8 × (10.5)	ココナデ 銅器: ハナメ	ココナデ ヘラナデ	内部に付着物あり。外周溝壁。内周溝壁。	17-11

第298図 SX6性格不明遺構出土遺物

3) II区では、竪穴住居跡11軒を検出した。平面形は方形及び長方形と考えられるものが主体を占める。長辺の規模は4m以上、6m未満の中型のものが主体を占める。カマドが付設される壁面は、SI9・13～16 竪穴住居跡は東壁、SI8・11・18・19 竪穴住居跡は北壁に付設される。SI10・12・17 竪穴住居跡はカマドが検出されていない。出土遺物及び重複関係から、SI19 竪穴住居跡は9世紀前半以前、SI18 竪穴住居跡は9世紀前半頃、SI14 竪穴住居跡は9世紀前半以降、SI12 竪穴住居跡は9世紀後半頃、SI10 竪穴住居跡は9世紀後半～10世紀前半以前、SI8・11・9・15～17 竪穴住居跡は10世紀前半と考えられる。SI13 竪穴住居跡は時期決定の出来る遺物は出土していないが、重複関係にあるSI14・18 竪穴住居跡より新しいことから9世紀前半以降と考えられる。

溝跡は調査区東側に集中して検出されているが、SD13・14・16以外の溝跡については、小溝状遺構群の一部と考えられる。大別では、SD19～29等の南北方向のA群と、SD1～9・36～38等の東西方向のB群に分けられる。

4) III区では、竪穴住居跡3軒、竪穴遺構4基、掘立柱建物跡1棟、鍛冶関連遺構3基を検出した。鋳型はみられないが鋳造に関連する遺構である可能性も考えられる。SI4、SX3・4は床面で被熱範囲や焼土を検出し、羽口や碗形滓を含む銹滓が多量に出土していることから、鍛冶関連遺構と考えられる竪穴住居跡、竪穴遺構、鍛冶関連遺構の平面形は、隅丸長方形と考えられるものが主体を占める。長辺の規模は、4m未満の小型のものが主体を占める。竪穴住居跡3軒のうち、カマドが付設される壁面は、SI6 竪穴住居跡は南壁、SI7 竪穴住居跡は北壁、SX2 竪穴住居跡は東壁に付設される。規模の違いによる差異はみられない。SI1～3、SX5 竪穴遺構及びSI4、SX3・4 鍛冶関連遺構ではカマドは検出されていない。出土遺物から、SI6 竪穴住居跡及びSI4 竪穴遺構は9世紀後半頃、SX2 竪穴住居跡は10世紀前半頃の竪穴住居跡と考えられる。SI7 竪穴住居跡、SI1～3 竪穴遺構、SB1 掘立柱建物跡・SI5 掘り方、SX3 鍛冶関連遺構からは時期決定の出来る遺物は出土していないが、SI1・2は重複関係にあるSX2より新しいことから10世紀前半以降、SI7は重複関係にあるSI1より古いことから10世紀前半以前、SX3は重複関係にあるSI4より新しいことから9世紀後半以降と考えられる。SX5 竪穴遺構は遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、重複関係にあるSI4より古いことから9世紀後半以前と考えられる。

5) III区の竪穴住居跡と鍛冶関連遺構の関係について、竪穴住居跡は調査区東側及び西側に分布し、鍛冶関連遺構は西側に分布する。竪穴住居跡の年代は9世紀後半～10世紀前半頃と考えられ、鍛冶関連遺構の年代は9世紀後半以降と考えられる。竪穴住居跡と鍛冶関連遺構は、繋がりや示唆する遺物や直接の重複関係等はないが、各遺構の年代が重なる時期があることから、同時期に存在した可能性も考えられる。

#### (2) 遺物について

出土遺物は平箱 17 箱である。

#### 1) 古代以降

I 区では、基本層Ⅲ層上面遺構及び遺構外から土師器、赤焼土器、須恵器、石製品、金属製品が出土しているが、細片のため詳細な年代等は不明である。

II 区では、基本層Ⅲ層上面遺構及び遺構外から縄文土器、土師器、赤焼土器、須恵器、陶磁器、石製品、金属製品、土製品が出土している。SI19 竪穴住居跡の住居堆積土から土師器環や土師器甕が出土しており、9 世紀前半以前の遺物と考えられる。SI18 竪穴住居跡の住居堆積土、床面から土師器環、土師器鉢、赤焼土器環、須恵器環、須恵器甕、須恵器長頸瓶が出土しており、9 世紀前半の遺物と考えられる。SI14 竪穴住居跡の住居堆積土、カマド構築土から土師器環、土師器甕が出土しており 9 世紀前半以降の遺物と考えられる。SI13 竪穴住居跡の住居堆積土、カマド内堆積土、SK1～3、P2・4・5・7・8・13・14 から土師器片、須恵器片、鉦澤が出土している。SI12 竪穴住居跡の床面から土師器環、土師器甕が出土しており、9 世紀後半の遺物と考えられる。SI10 竪穴住居跡の住居堆積土から土師器環、土師器甕が出土しており、9 世紀後半～10 世紀前半以前の遺物と考えられる。SI8・11 竪穴住居跡の住居堆積土、床面から土師器環、赤焼土器環が出土しており、10 世紀前半の遺物と考えられる。SI9 竪穴住居跡の住居堆積土、SK1、カマド内堆積土、カマド袖から土師器環、土師器甕、須恵器甕が出土しており、10 世紀前半の遺物と考えられる。SI15 竪穴住居跡のカマド内堆積土、SK1 から土師器環、土師器甕、赤焼土器環が出土しており、10 世紀前半の遺物と考えられる。SI16 竪穴住居跡の住居堆積土、SK1 から土師器環、土師器高台付杯、土師器甕、赤焼土器環が出土しており、10 世紀前半の遺物と考えられる。また、床面から鉄鏃(雁又鏃)が出土している。SI17 竪穴住居跡の床面から土師器高台付杯が出土しており、10 世紀前半の遺物と考えられる。また、住居堆積土から鉄鏃(雁又鏃)が出土している。

III 区では、基本層Ⅲ層上面遺構及び遺構外から土師器、赤焼土器、須恵器、陶磁器片、石製品、金属製品、鉦澤、土製品、礫が出土している。SI6 竪穴住居跡の住居堆積土、床面、カマド内堆積土から土師器環、土師器甕、須恵器甕が出土しており、9 世紀後半の遺物と考えられる。また、カマド袖からは土師が 2 点出土している。SI4 鍛冶関連遺構の掘り方埋土から土師器環、須恵器環が出土しており、9 世紀後半の遺物と考えられる。また、破片や細片ではあるが羽口が多く出土しており、鉦澤も多量に出土している。SX3 竪穴遺構の竪穴堆積土から土師器片、赤焼土器片、須恵器片、石製品、鉦澤が出土している。鉦澤は、SI4 や SX4 の数量には及ばないが、平箱平箱分程出土している。SX2 竪穴住居跡の住居堆積土、床面、カマド内堆積土、SK2 から土師器環、土師器耳皿、赤焼土器環が出土しており、10 世紀前半の遺物と考えられる。また、住居堆積土から鉄釘が 1 点出土している。SI7 竪穴住居跡の住居堆積土、掘り方埋土、カマド内堆積土から土師器片、須恵器片、陶磁器片、土製品、礫が出土している。SI2 竪穴遺構の竪穴堆積土から土師器片が出土している。SI3 竪穴遺構の竪穴堆積土から土師器片、須恵器片、石製品が出土している。SI1 竪穴遺構の竪穴堆積土、床面から土師器片、金属製品が出土している。SX4 の竪穴堆積土、掘り方埋土、SK1、焼土範囲から土師器片、須恵器、陶磁器片、石製品、金属製品、鉦澤、土製品、礫が出土している。また、伊跡と考えられる焼土範囲西側で羽口片が残されたままの状態出土しており、多量の鉦澤も出土している。SB1 掘立柱建物跡・SI5 掘り方の P46～49 から土師器片、SI5 堆積土から土師器片、須恵器片、鉦澤、土製品が出土している。



## 鍛冶屋敷前遺跡写真図版





I区全景(西から)



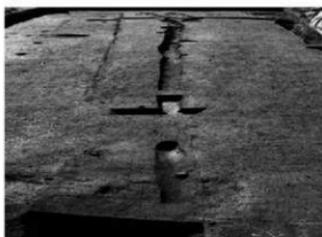
I区 SA1全景(西から)



I区 SA2全景(西から)



I区 SA3全景(西から)



I区 SD1全景(東から)



I区 SD4全景(東から)



I区 SD7全景(南から)



I区 SD9全景(西から)

写真図版1 鍛冶屋敷前遺跡(1)

第4節 鍛冶屋敷前遺跡



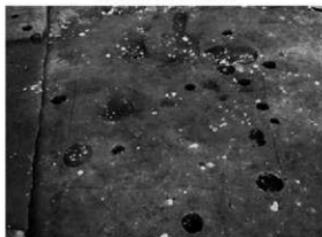
II区全景(東から)



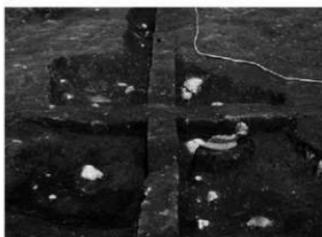
II区SD13全景(西から)



II区S18全景(南から)



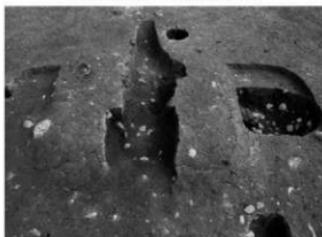
II区S11全景(南から)



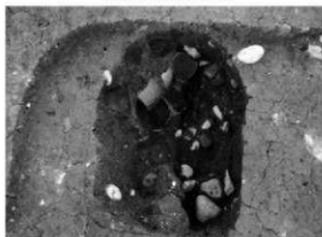
II区S11カマド1断面E(南から)



II区S19全景(西から)



II区S19カマド全景(西から)



II区S19-SK1内遺物出土状況(北から)

写真図版2 鍛冶屋敷前遺跡(2)



II区 S10 全景 (南から)



II区 S12 全景 (南から)



II区 S13 全景 (西から)



II区 S13 断面 A (南から)



II区 S13 カマド断面 C (西から)



II区 S13 カマド断面 D (南から)



II区 S13 カマド全景 (西から)



II区 S14 全景 (西から)

写真図版3 鍛冶屋敷前遺跡(3)

第4節 鍛冶屋敷前遺跡



II区 S114 カマド全景 (西から)



II区 S115 全景 (西から)



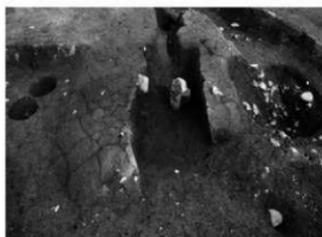
SD1 II区 S115 カマド全景 (西から)



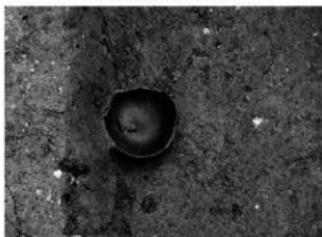
II区 S115 遺物 (D-026) 出土状況 (東から)



II区 S116 全景 (西から)



II区 S116 カマド全景 (西から)

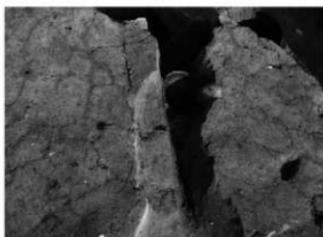


II区 S116 遺物 (D-029) 出土状況 (北から)



II区 S116 カマド支脚出土状況 (西から)

写真図版4 鍛冶屋敷前遺跡(4)



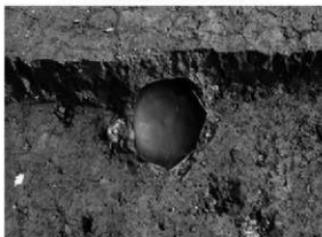
II区 S16 煙道部遺物出土状況 (西から)



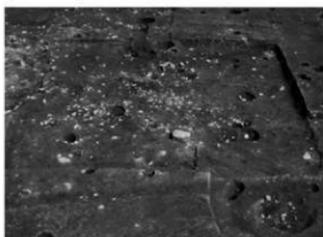
II区 S16-SK1 遺物出土状況 (南から)



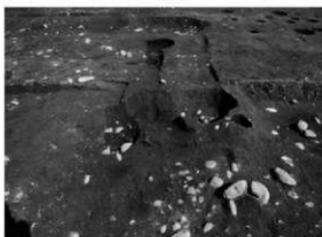
II区 S17 全景 (南から)



II区 S17 遺物 (D-035) 出土状況 (北から)



II区 S18 全景 (南から)



II区 S18 カマド全景 (南から)



II区 S18 遺物 (E-004) 出土状況 (東から)



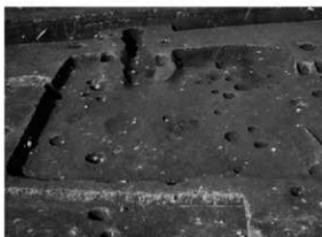
II区 S18 遺物 (E-005) 出土状況 (南から)

写真図版5 鍛冶屋敷前遺跡(5)

第4節 鍛冶屋敷前遺跡



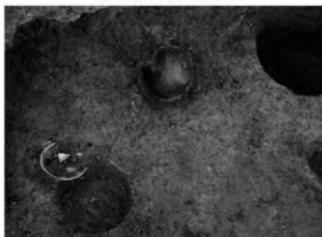
II区 SI18 遺物 (E-003) 出土状況 (南から)



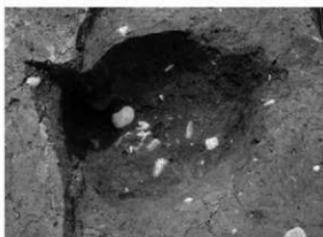
II区 SI19 全景 (南から)



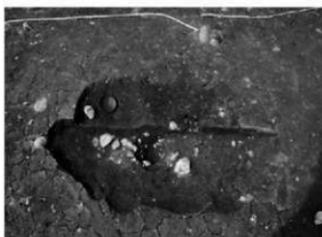
II区 SI19 カマド全景 (南から)



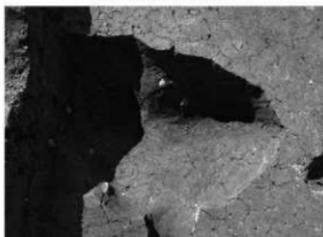
II区 SI19 遺物 (D-041) 出土状況 (南から)



II区 SK18 全景 (北から)



II区 SK21 遺物 (D-043) 出土状況 (南から)



II区 SX7 全景 (東から)



III区東側全景 (東から)

写真図版6 鍛冶屋敷前遺跡(6)



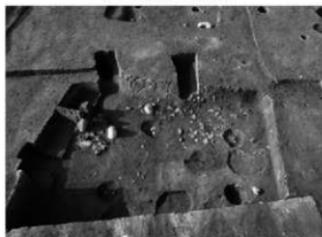
Ⅲ区 S11 全景 (南から)



Ⅲ区 S12 全景 (南から)



Ⅲ区 S13 断面 A (南から)



Ⅲ区 S14 全景 (南から)



Ⅲ区 S14 焼土 2 検出状況 (南から)



Ⅲ区 S14 焼土 2 上部遺物出土状況 (東から)



Ⅲ区 S14 焼土 2 遺物出土状況 (南から)



Ⅲ区 S14 焼土 1 検出状況 (南東から)

写真図版7 鍛冶屋敷前遺跡(7)

第4節 鍛冶屋敷前遺跡



III区 S14 煙道1 断面 L(東から)



III区 S14 煙道1 遺物出土状況(東から)



III区 S14 煙道2 全景(南から)



III区 S14 煙道2 断面 M(東から)



III区 S15 検出状況(南西から)



III区 S16 全景(北から)



III区 S16 カマド全景(北から)

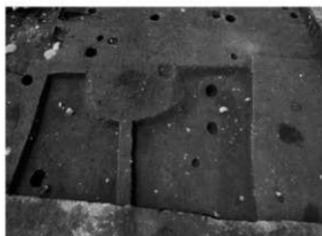


III区 S16 遺物出土状況(北から)

写真図版8 鍛冶屋敷前遺跡(8)



Ⅲ区 S16 カマド内遺物 (D-051) 出土状況 (北から)



Ⅲ区 S17 残出状況 (南から)



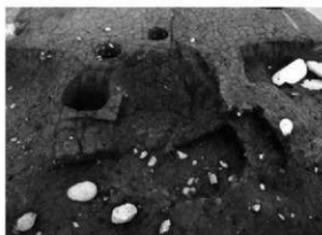
Ⅲ区 S17 カマド断面 D (東から)



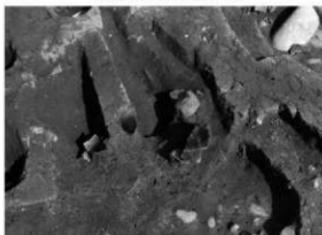
Ⅲ区 SK5 断面 A (北から)



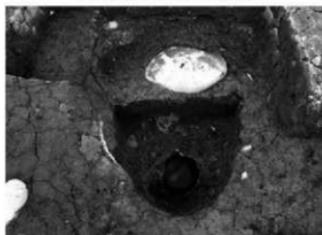
Ⅲ区 SX2 全景 (北西から)



Ⅲ区 SX2 カマド全景 (西から)



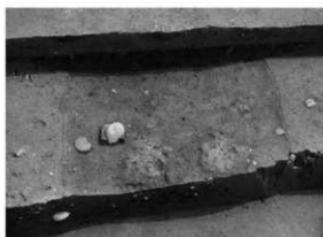
Ⅲ区 SX2 カマド内遺物出土状況 (西から)



Ⅲ区 SX2-SK2 遺物 (D-053) 出土状況 (西から)

写真図版9 鍛冶屋敷前遺跡(9)

第4節 鍛冶屋敷前遺跡



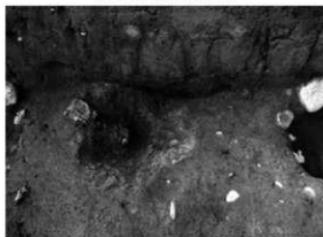
Ⅲ区 SX3 横出状況(北から)



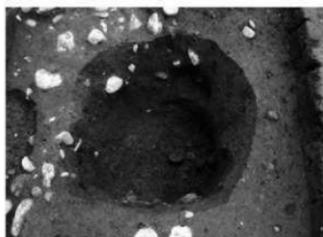
Ⅲ区 SX4 全景(南から)



Ⅲ区 SX4 炉跡拡張部横出状況(南から)



Ⅲ区 SX4 炉跡羽口(IP-010) 残存状況(南から)



Ⅲ区 SX4-SK1 全景(南から)



Ⅲ区 SX4 掘り方全景(南から)

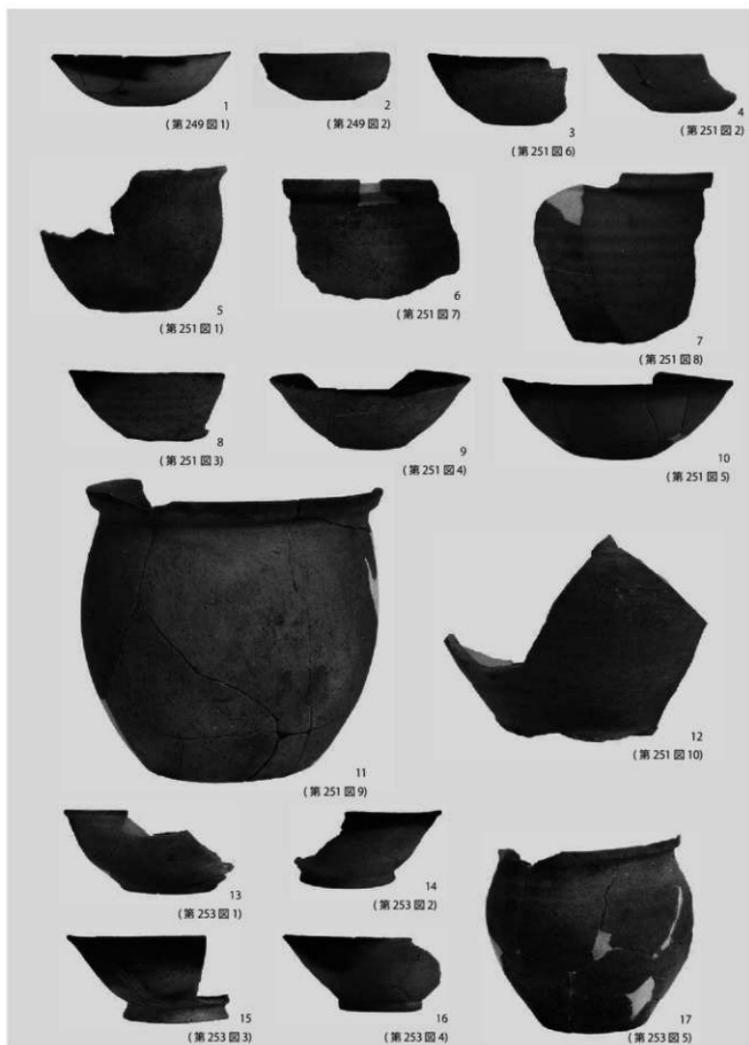


Ⅲ区 SX5 断面 A(西から)

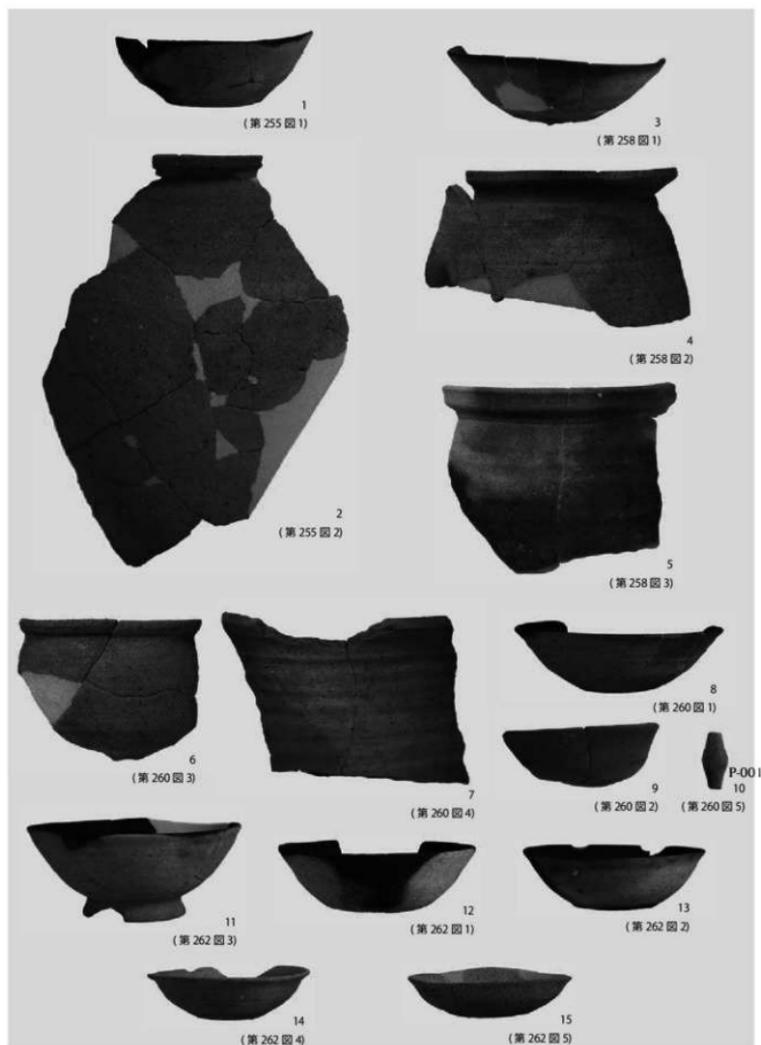


Ⅲ区 SX6 全景(北から)

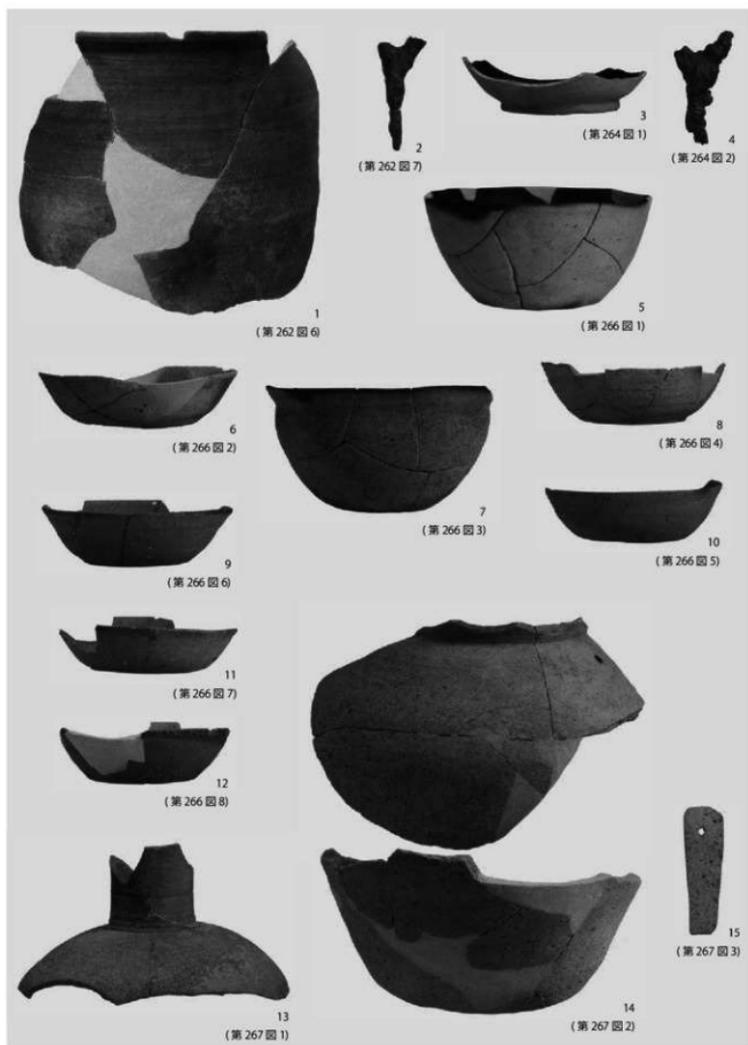
写真図版 10 鍛冶屋敷前遺跡(10)



写真図版 11 鍛冶屋敷前遺跡出土遺物(1)

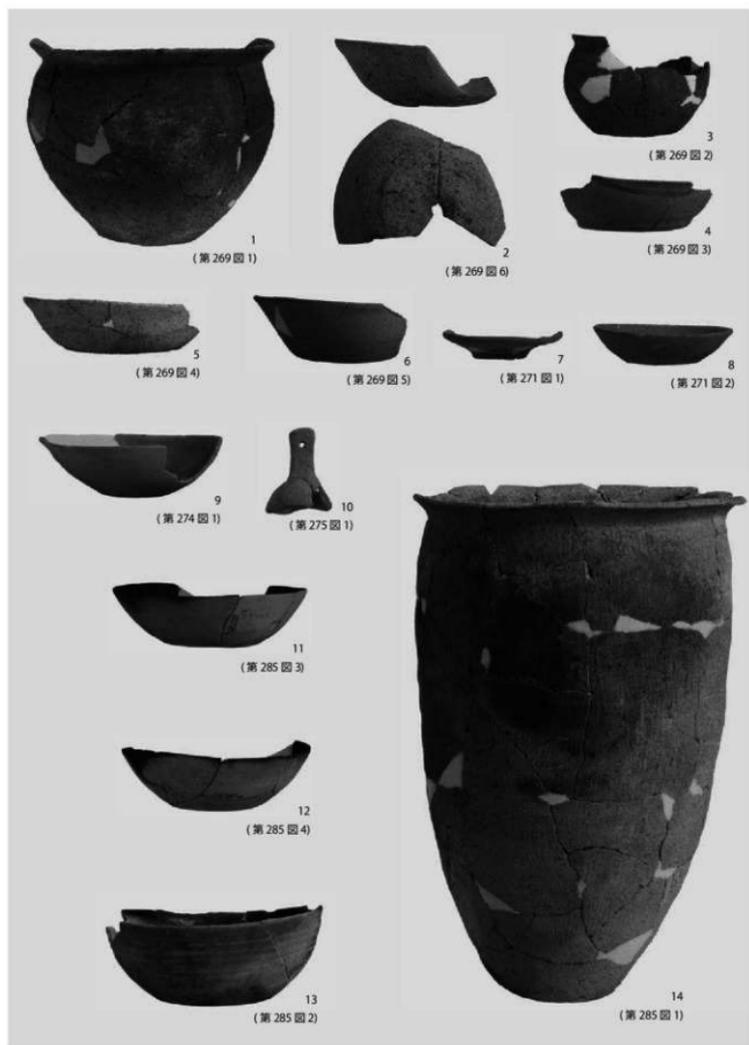


写真図版 12 鍛冶屋敷前遺跡出土遺物(2)

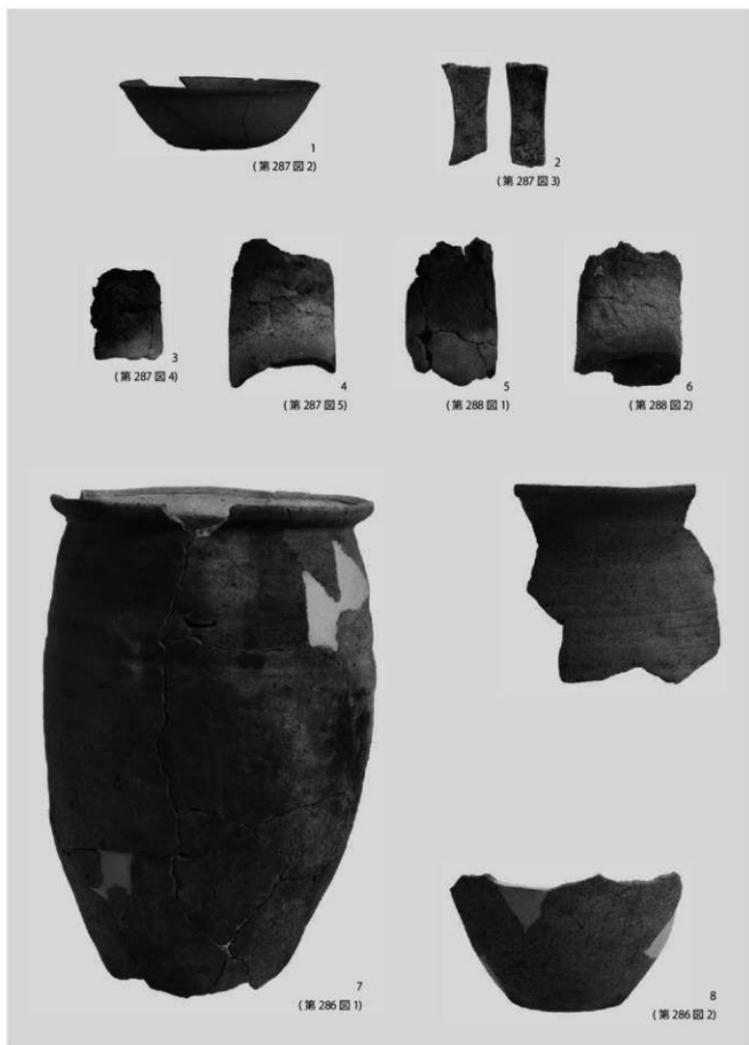


写真図版 13 鍛冶屋敷前遺跡出土遺物(3)

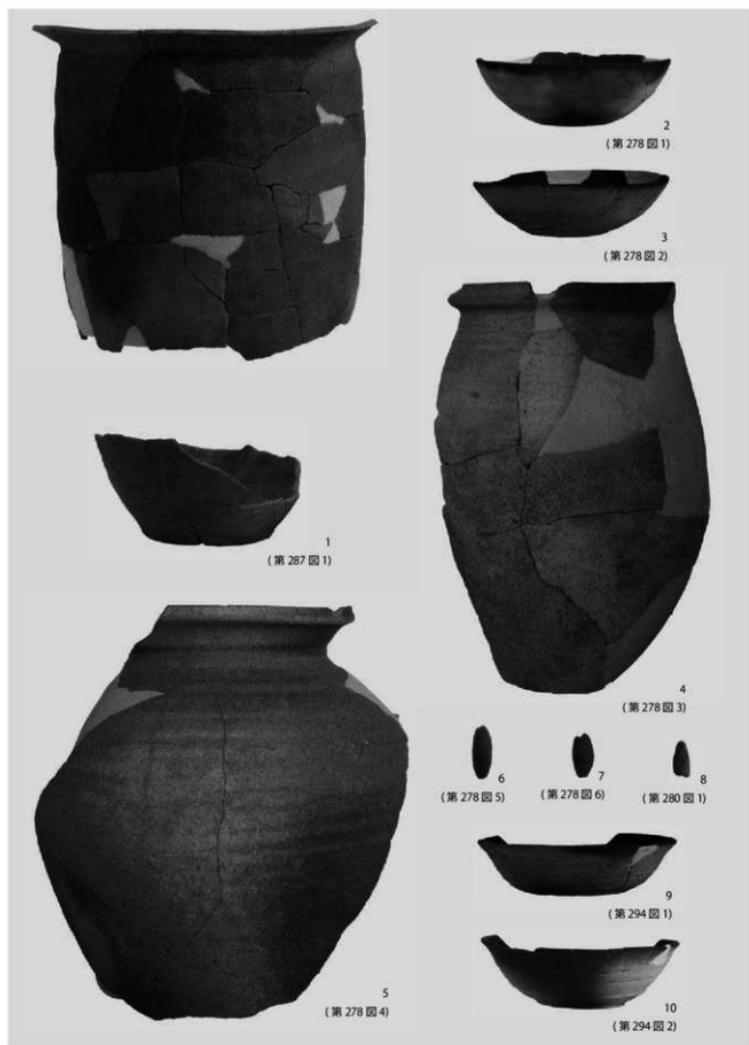
第4節 鍛冶屋敷前遺跡



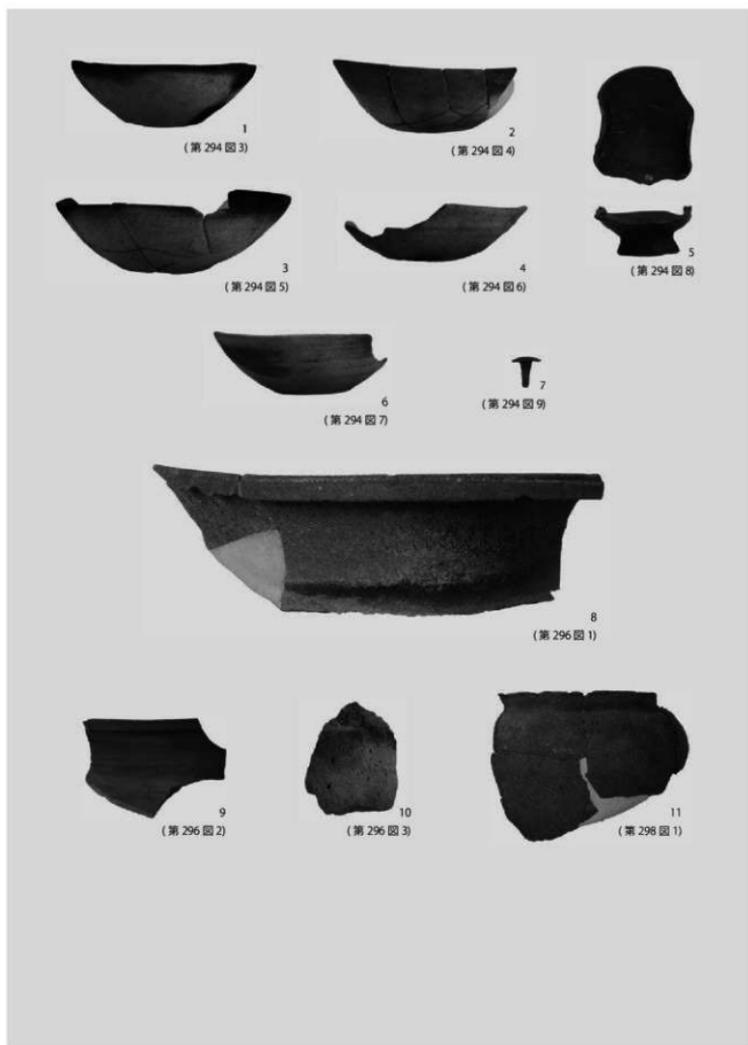
写真図版 14 鍛冶屋敷前遺跡出土遺物(4)



写真図版15 鍛冶屋敷前遺跡出土遺物(5)



写真図版 16 鍛冶屋敷前遺跡出土遺物(6)

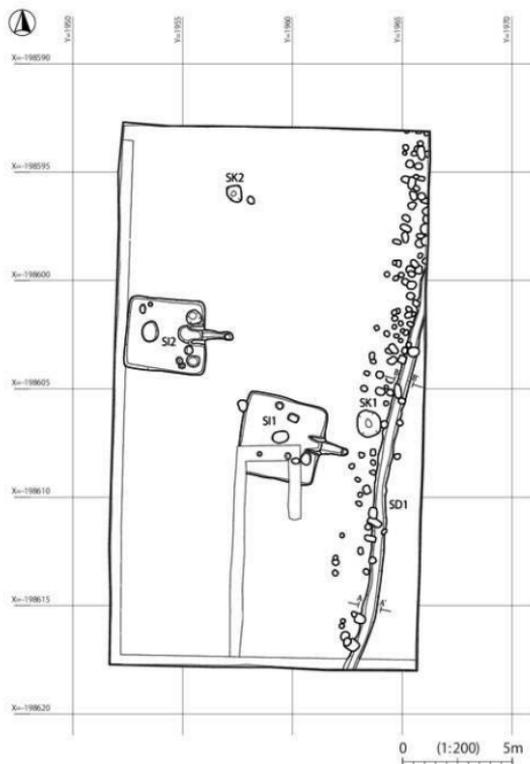


写真図版 17 鍛冶屋敷前遺跡出土遺物(7)

## 第5節 京ノ中遺跡

### 1. 平成26年度の調査

本区画整理事業に伴い平成25年度に確認調査(1-8区)を実施した結果、調査区北側で竪穴住居跡が検出され、土師器片、須恵器片、石製品、炭化物が出土した。そのため、確認調査1-8区周辺を京ノ中遺跡として新規に遺跡登録し、平成26年度に本発掘調査を実施した。本発掘調査では基本層Ⅲ層上面(古代以降の遺構検出面)において、竪穴住居跡2軒、土坑2基、溝跡1条、ピット113基を検出した。ピットは建物等の組み合わせを検討したが、明確なものは確認されなかった。ピットについては遺構配置図にのみ表示している。



第299図 京ノ中遺跡遺構配置図

## (1) III層検出遺構と出土遺物(第299図、図版1)

## 1) 竪穴住居跡

## SI1 竪穴住居跡(第300・301図、図版1)

[位置] 調査区中央やや南側に位置する。南西部を確認調査によって検出している。

[重複関係] P107と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は東西385cm、南北377cmである。平面形は方形である。柱穴・周溝は検出されていない。

[主軸方位] カマド基準でE-13°Sである。

[堆積土・構築土] 23層に分層された。1～5層は住居堆積土、6～15層はカマド内堆積土、16～22層はカマド関連層位、23層は掘り方埋土である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大36cmである。

[床面] 掘り方埋土上面を床面とし、概ね平坦である。

[カマド] 東壁の中央に付設されている。規模は左袖が長さ84cm、幅25cm、床面からの高さ22cmで、右袖が長さ79cm、幅34cm、床面からの高さ23cmである。左袖からは直立した礫が、右袖からは土師器片と内傾した礫が出土した。いずれも構築材と考えられる。また、右袖の礫は、その一部が被熱していることから、カマド使用時に露出していたと考えられる。燃焼部の規模は奥行61cm、幅61cm、奥壁高10cmで、奥壁は住居内に収まる。底面は中央付近が緩やかに低くなる。奥壁付近北側でほぼ直立し被熱した礫が出土しており、出土状況から支脚と考えられる。また、被熱した土師器環が逆位で出土しており、支脚を構成していたものと考えられる。掘り方の規模は長軸163cm、短軸88cm、深さ15cmである。平面形は南北方向の不整楕円形で、南北両端がビット状に落ち込む。煙道部の規模は長さ123cm、幅59cm、深さ20cmで、底面は煙出し部に向かって緩やかに傾斜する。煙出し部の規模は長軸32cm、短軸30cm、深さ33cmで、底面から土師器片や礫が出土している。

[その他の施設] 床面で土坑2基(SK1・2)、ビット5基(P1～3、P5・6)を検出した。SK1は住居南東に位置し、カマド右袖に隣接する。規模は長軸60cm、短軸47cm、深さ13cmで、平面形は不整楕円形で、断面形は逆台形である。堆積土は2層に分層された。土師器片、礫が出土している。SK2は住居中央付近に位置する。規模は長軸77cm、短軸53cm、深さ4cmで、平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。堆積土は単層である。規模や位置関係から、SK1は貯蔵穴と考えられる。ビットは、規模は長軸23～49cm、短軸23～35cm、深さ8～14cmで、平面形は概ね楕円形もしくは円形である。いずれも柱痕跡は確認されていない。

[掘り方] 深さ4～12cmである。底面はやや起伏し、南東側がやや低くなる。

[出土遺物] 住居堆積土、床面、カマド、SK1、P1・2から土師器、赤焼土器片、須恵器片、土製品、礫が出土しており、土師器4点、土製品1点を図示した。そのうち、床面直上から出土した土師器環(第301図2)から、年代は9世紀後半頃と考えられる。

## SI2 竪穴住居跡(第302図、図版1)

[位置] 調査区中央付近西側に位置する。

[規模・形態] 規模は東西372cm、南北333cmである。平面形は方形である。柱穴・周溝は検出していない。

[主軸方位] カマド基準でE-4°Sである。

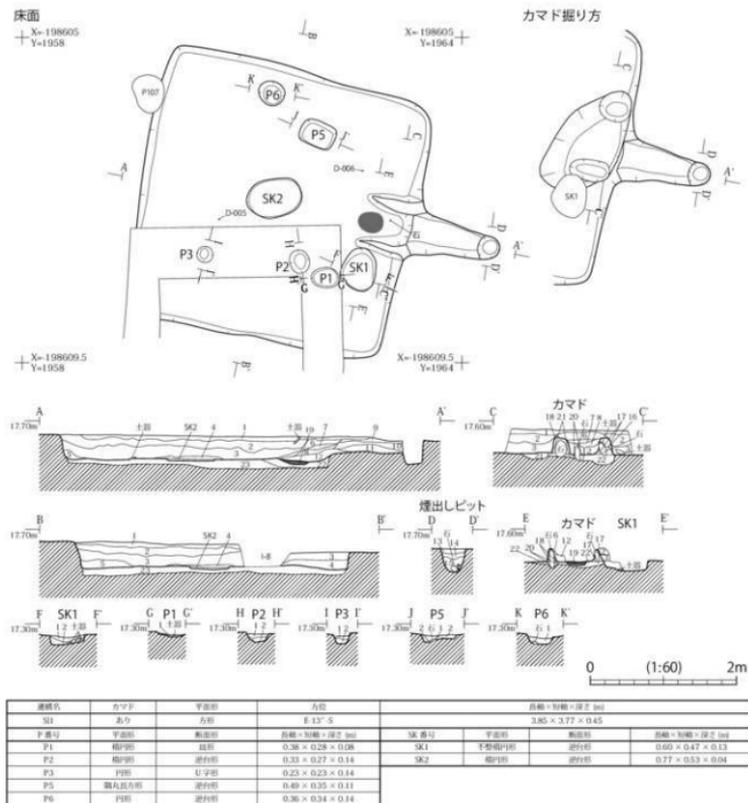
[堆積土・構築土] 15層に分層された。1～4層は住居堆積土、5～9層はカマド内堆積土、10～14層はカマド関連層位、15層は掘り方埋土である。

[壁面] 床面から直線的に外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大27cmである。

[床面] 掘り方埋土上面を床面とし、平坦である。SK2の東側で被熱範囲を確認した。

[カマド] 東壁の中央に付設されている。規模は左袖が長さ85cm、幅38cm、床面からの高さ31cmで、右袖が長さ

第5節 京ノ中遺跡



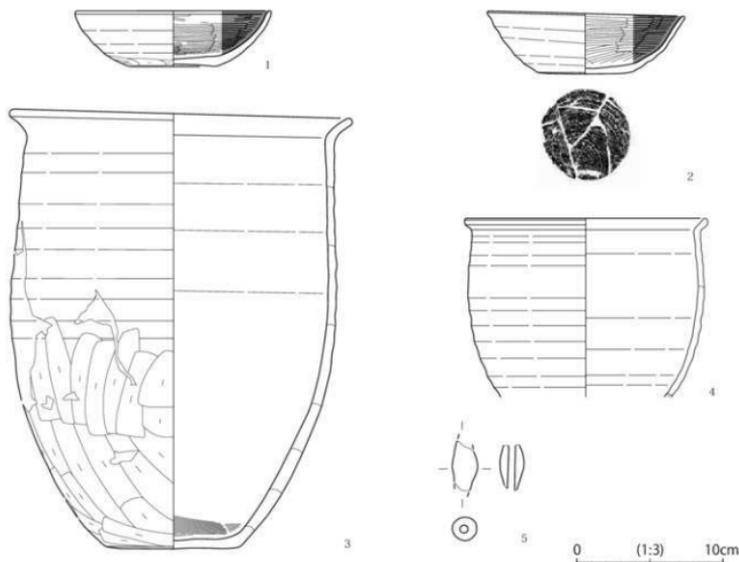
第300図 S11 竪穴住居跡平面図・断面図

76cm、幅32cm、床面からの高さ29cmである。右袖からは礫がほぼ直立した状態で出土しており、構築材と考えられる。燃焼部の規模は奥行110cm、幅81cm、奥壁高17cmで、奥壁は住居内に取まる。北半部は深さ15cmほど楕円形の土坑状に掘りこまれる。奥壁付近東側で、上下両端が欠損し被熱した礫がほぼ直立した状態で出土しており、出土状況から支脚と考えられる。また、被熱した土師器環が逆位で出土しており、支脚を構成していたものと考えられる。掘り方の規模は長軸153cm、短軸82cm、深さ11cmで、平面形は南北方向の不整楕円形である。煙道部の規模は長さ140cm、幅43cm、深さ12cmで、底面は平坦である。煙出し部の規模は長軸40cm、短軸35cm、深さ17cmである。

[その他の施設] 床面で土坑3基(SK1～3)、ピット5基(P3・4・7～9)を検出した。SK1は住居北東隅に位置し、

S1 壁穴居跡層出土品表

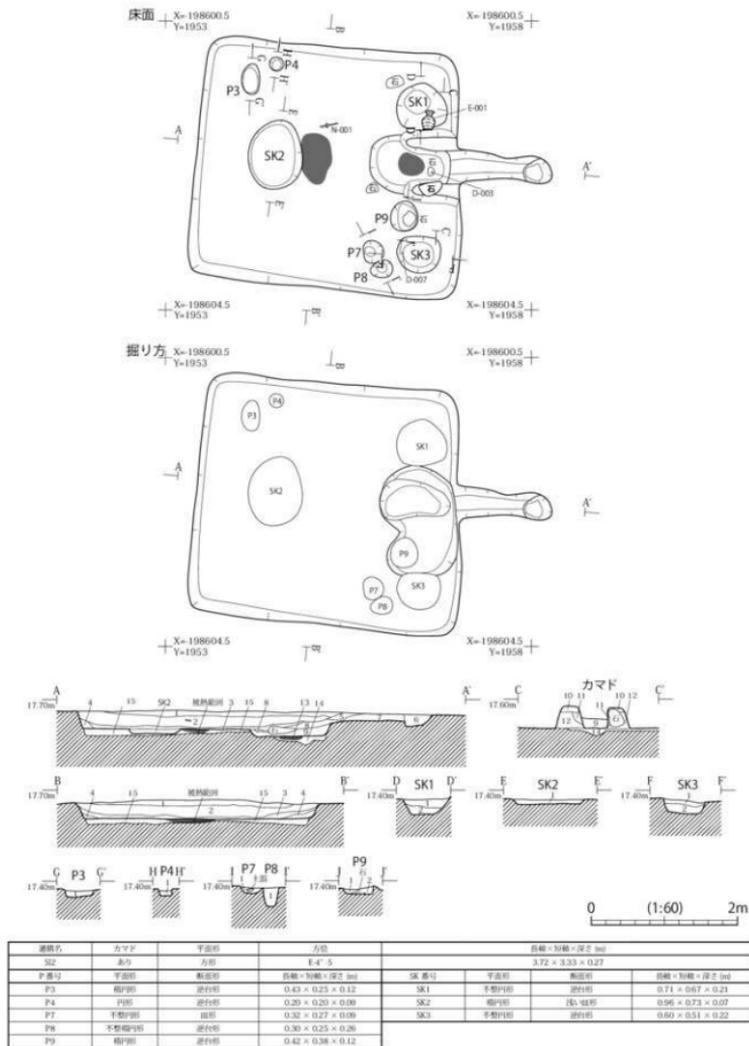
遺物名	類別	土色	備考		遺物名	類別	土色	備考		
			形状	数量				形状	数量	
S1	1	10YR4/4 褐色	シルト	径 1mm の黒褐色シルト・径 5～10mm の黒褐色シルト・アロックスを含む。径 3～10mm の灰白色シルトを少量含む。	S1	15	10YR2/3 黒褐色	シルト	径 5mm の黒褐色シルト・径 5mm の粘土を少量含む。	
	2	10YR4/4 褐色	シルト	径 1～3mm の黒褐色シルト・径 5～10mm の黒褐色シルト・アロックスを含む。径 1mm の白色シルトを微量含む。		16	10YR4/4 褐色	シルト	径 2mm の黒褐色シルトを微量含む。	
	3	10YR4/4 褐色	シルト	径 1～3mm の黒褐色シルト・径 5～10mm の細粒の黄土・アロックスを微量含む。		17	10YR3/4 褐色	砂質シルト	径 2～5mm の粘土を含む。灰白色物を少量含む。	
	4	10YR3/4 褐色	シルト	径 1mm の黒褐色シルトを微量含む。		18	10YR4/4 褐色	シルト	径 5～20mm の粘土を少量含む。	
	5	10YR4/4 褐色	シルト	砂を含む。径 1mm の黒褐色シルトを微量含む。		19	2.5YR4/3 赤褐色	シルト	径 5mm の粘土を少量含む。	
	6	10YR3/4 褐色	シルト	径 1～2mm の粘土・径 1mm の白色シルトを微量含む。		20	7.5YR4/3 褐色	シルト	径 5mm の粘土を少量含む。	
	7	10YR3/4 褐色	シルト	径 1～3mm の粘土を少量含む。		21	10YR3/4 褐色	シルト	径 5～20mm の粘土を微量多量に含む。	
	8	10YR3/4 褐色	シルト	径 3～40mm の粘土を多量。径 5mm の黒褐色シルトを少量含む。		22	10YR3/4 褐色	シルト	砂・灰白色物を微量含む。	
	9	10YR4/3 に近い黒褐色	シルト	径 3mm の黒褐色シルト・径 10mm の粘土を少量含む。		23	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径 1～2mm の粘土を含む。	
	10	7.5YR3/3 黒褐色	シルト	径 5mm の赤褐色シルト・径 5～20mm の粘土を多量。径 10mm の黒褐色シルトを微量含む。		1	10YR4/4 褐色	シルト	径 2mm の粘土・径 3～5mm の灰白色物を少量含む。	
	11	10YR3/3 褐色	シルト	径 10mm の黒褐色アロックス・径 5～10mm の細粒の粘土を少量含む。		SK1	2	10YR3/4 褐色	砂質シルト	径 2～5mm の粘土を多量。径 2～5mm の灰白色物を少量含む。
	12	7.5YR2/3 黒褐色	シルト	径 10～20mm の粘土を含む。		PI1	1	7.5YR3/4 褐色	シルト	径 1mm の黒褐色シルトを多量。径 5～20mm の灰白色物を少量含む。
	13	7.5YR3/4 褐色	シルト	径 5mm の黒褐色シルトを多量に含む。		PI2	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径 1mm の黒褐色シルトを微量含む。
	14	10YR3/4 褐色	粘土質シルト	径 5mm の黒褐色シルトを少量含む。		PI3	1	10YR4/4 褐色	シルト	
				PI4	2	10YR4/4 褐色	砂			
				PI5	2	10YR3/4 褐色	砂	径 1mm の白色シルト・径 2mm の黒褐色シルトを微量含む。		
				PI6	1	10YR4/4 褐色	砂	径 20mm の粘土を少量含む。		



No.	登録番号	遺物名	類別	形状	数量	寸法・径厚・高さ(mm)	外装図	内装図	備考	写真図版		
1	D-001	S1	6	土師器	片	13.4 × 6.5 × 3.8	口ケの図解 子持・ヘラケツウ 底面・断面		ヘラミガキ 黒色地埋	無し	2.1	
2	D-006	S1	6	土師器	片	13.6 × 6.5 × 4.3	口ケの図解 底面・口縁断面		ヘラミガキ 黒色地埋		2.2	
3	D-005	S1	6	土師器	片	23.0 × 9.2 × 30.4	口ケの図解	ヘラケツウ	口ケの図解	スビナデ	外面埋付存。	2.3
4	D-012	S1	22	土師器	片	16.6 × 7 × 11.2	口ケの図解		口ケの図解			2.4
No. <th>登録番号</th> <th>遺物名</th> <th>類別</th> <th>形状</th> <th>数量</th> <th>寸法・径厚・高さ(mm)</th> <th>外装図</th> <th>内装図</th> <th>備考</th> <th>写真図版</th>	登録番号	遺物名	類別	形状	数量	寸法・径厚・高さ(mm)	外装図	内装図	備考	写真図版		
5	P-001	S1	2	土師器	片	13.5 × 1.7 × 6.0	底面		ナデ	形状・測厚・備考	2.5	

第 301 図 S1 壁穴住居跡出土遺物

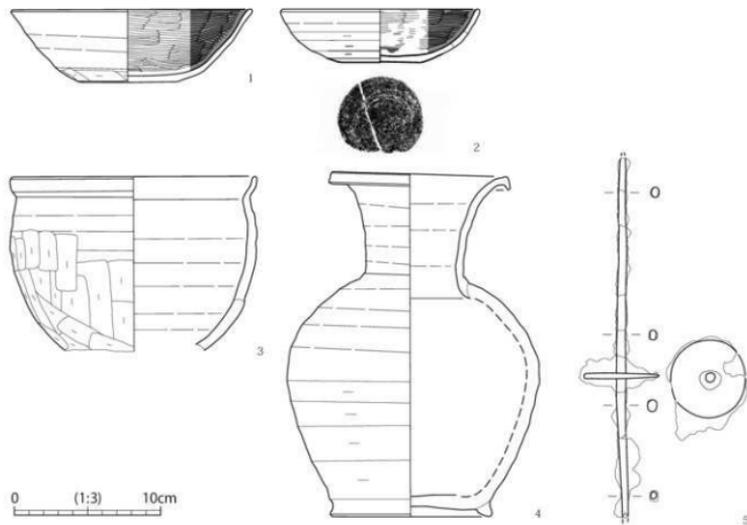
第5節 京ノ中遺跡



第302図 SI2 竪穴住居跡平面図・断面図

S12 竪穴住居跡構造土壁記録

遺構名	壁位	土色	土質	備考	遺構名	壁位	土色	土質	備考
S12	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径 20mm の炭化シルト・径 10～30mm の炭化色シルトがフロックを多量。径 2～10mm の炭化色シルトがフロックを少量含む。	S12	14	10YR4/4 褐色	シルト	同化物・焼土を微量含む。
	2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径 10mm の炭化色シルトを少量。径 5～10mm の炭化色シルト・径 10mm の炭化物を少量。径 1mm の炭化色シルト・径 1～3mm の焼土を微量含む。	SK1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
									2
	3	10YR4/6 褐色	シルト	径 1～5mm の炭化色シルトを多量。径 1～2mm の炭化物を微量含む。	SK2	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
									4
	5	10YR3/3 暗褐色	シルト	径 2～5mm の焼土・径 2mm の炭化物を微量含む。	SK3	2	10YR4/3 に 3:1 混濁褐色	砂質シルト	
									6
	7	10YR3/3 暗褐色	シルト	径 2～5mm の焼土・径 2mm の炭化物を少量含む。	F4	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
									8
	9	7.5YR2/3 暗褐色	シルト	径 5～20mm の炭化色シルトを多量。径 1mm の炭化色シルトを少量含む。	F8	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
									10
	11	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	径 10～20mm の炭化色シルトを多量。径 2mm の炭化色シルトを微量含む。	2	10YR3/3 暗褐色	シルト		
12								10YR3/4 暗褐色	シルト
	13	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	径 10～20mm の炭化色シルトを多量。径 2～5mm の炭化色シルトを少量含む。					



0 (1:3) 10cm

No.	記録番号	遺構名	壁位	種類	距離	11時×直径×部高(φ)	内面装飾	外面装飾	備考	写真掲載
1	D-003	S12	9	土師器	坪	16.3 × 6.6 × 5.1	口ケの装飾 縁下下端・子付ちみ少すべし 底面「切り藤し半明」子付ちへウケズリ	へウミ付手 黒色地埋	底面	2.6
2	D-004	S12-P7	1	土師器	坪	(3.6) × 5.7 × 3.7	口ケの装飾 底面 切り藤し半明	へウミ付手(底面縁部方向) 黒色地埋	内面一部装飾	2.7
3	D-007	S12	1	土師器	溝	17.0 × φ(2.4)	口ケの装飾 下至へウケズリ	口ケの装飾		2.8
4	E-001	S12	底面	灰被器	垂	11.9 × 11.8 × 23.9	口ケの装飾 底面へウケズリ 底面 切り藤し半明・高子飾付 内縁部子付ち装飾 首寸半立	口ケの装飾		2.9
No.	記録番号	遺構名	壁位	種類	距離	径×幅×高さ(mm)	底面	外面	備考	写真掲載
3	N-011	S12	底面	灰被器	柱跡	φ4.9 × 5.5 × 0.8 部高4.20		縁輪・底面埋 高麗瓦型		2.10

第 303 図 S12 竪穴住居跡出土遺物

## 第5節 京ノ中遺跡

カマド左軸に隣接する。規模は長軸71cm、短軸67cm、深さ21cmで、平面形は不整形である。堆積土は2層に分層された。SK2は住居中央西側に位置する。規模は長軸96cm、短軸73cm、深さ7cmで、平面形は楕円形である。堆積土は単層である。SK3は住居南東隅に位置する。規模は長軸60cm、短軸51cm、深さ22cmで、平面形は不整形である。堆積土は2層に分層された。規模や位置関係から、SK1・3は貯蔵穴と考えられる。ピットの規模は長軸20～43cm、短軸20～38cm、深さ9～26cmで、平面形は楕円形もしくは円形を主体とする。いずれも柱痕跡は確認されていない。

[掘り方] 深さ3～10cmである。底面はやや起伏する。

[出土遺物] 住居堆積土、床面、カマド、SK1～3、P7・8・10から土師器、赤焼土器片、須恵器、木製品、金属製品、土製品、礫が出土しており、土師器3点、須恵器1点、金属製品1点を図示した。そのうち、床面直上から出土した須恵器壺(第303図4)、P7から出土した土師器環(第303図2)、カマド内堆積土から出土した土師器環(第303図1)から、年代は9世紀後半頃と考えられる。

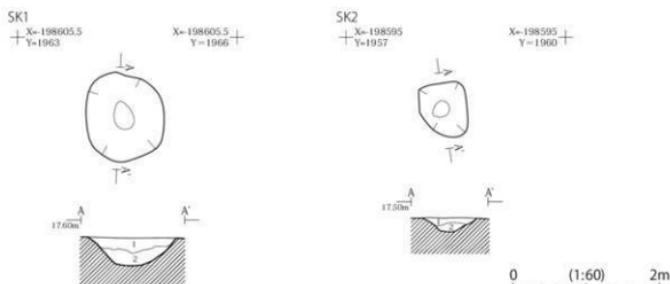
### 2) 土坑

SK1土坑(第304図)調査区中央で検出した。平面形は不整形形で、長軸方向はN-3°-Wである。規模は長軸124cm、短軸106cm、深さ39cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で、底面は丸みを持つ。堆積土は2層に分層された。遺物は出土していない。

SK2土坑(第304図)調査区北側で検出した。平面形は不整形形で、長軸方向はN-42°-Wである。規模は長軸85cm、短軸65cm、深さ19cmである。壁面はやや外反して立ち上がる。断面形は逆台形で、底面は平坦である。堆積土は2層に分層された。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

### 3) 溝跡

SD1溝跡(第299・305図)調査区東側で検出した。南北方向の溝跡で、両端は調査区外へ延びる。多数のピットと重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-11°-Eで、規模は長さ17.46m以上、幅66cm、深さ24cmである。断面形は逆台形である。堆積土は3層に分層された。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。



遺構名	平面図	断面図	方位	長軸×短軸×深さ(m)	遺構名	平面図	断面図	方位	長軸×短軸×深さ(m)
SK1	不整形円	逆台形	N 3° W	1.24 × 1.06 × 0.39	SK2	不整形円	逆台形	N 42° W	0.85 × 0.65 × 0.19

遺構名	層位	土色	土質	備考	遺構名	層位	土色	土質	備考
SK1	1	20/6/1 灰色	シルト砂質	厚5～10mmの明褐色シルト・酸化鉄を少量含む。	SK2	1	2.0/7/2 灰褐色	砂質シルト	マンガン粒を微量含む。
	2	10/8/4 黄褐色	シルト	厚5～10mmの明褐色シルト・酸化鉄を多量に含む。		2	2.5/3/2 暗灰褐色	砂質シルト	厚1～2mmの暗土を少量、マンガン粒を微量含む。

第304図 SK1・2土坑平面図・断面図



第305図 SD1 溝跡断面図

## 4) ビット (第299図)

113基のビットを検出した。SD1西側に沿うように分布する。17基がSD1と重複関係にあり、いずれもビットが新しい。堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

## (2) 遺構外出土遺物

土師器片、須恵器片、石製品が出土しているが、図示できる遺物はない。

## 2. まとめ

京ノ中遺跡は仙台市太白区富田字京ノ中にあり、自然堤防上に立地する古代の遺跡である。平成26年度に358㎡の調査が行われ、古代以降の遺構群が検出された。

## (1) 遺構について

1) 古代以降の遺構は基本層Ⅲ層上面で検出された。

竪穴住居跡2軒、土坑2基、溝跡1条、ビット113基

2) SI1・2竪穴住居跡はいずれも東壁にカマドが付設されており、出土遺物から9世紀後半頃の竪穴住居跡と考えられる。

3) ビットは、SD1の西側に沿うように分布する。

## (2) 遺物について

出土遺物は平箱2箱である。全体的に小破片が多く、図示できる遺物は少ない。

## 1) 古代以降

基本層Ⅲ層上面遺構及び遺構外から土師器、赤焼土器、須恵器、石製品、金属製品、土製品、礫が出土している。

SI1の床面直上から土師器環が出土しており、9世紀後半頃の遺物と考えられる。SI2の床面直上から須恵器壺が、P7、カマド内堆積土からは土師器環が出土している。これらも9世紀後半頃の遺物と考えられる。



## 京ノ中遺跡写真図版





調査区全景 (北から)



SI1 全景 (西から)



SI1 カマド断面 (西から)



SI2 全景 (西から)



SI2 カマド断面 (西から)



SI2 遺物 (E-001) 出土状況 (東から)

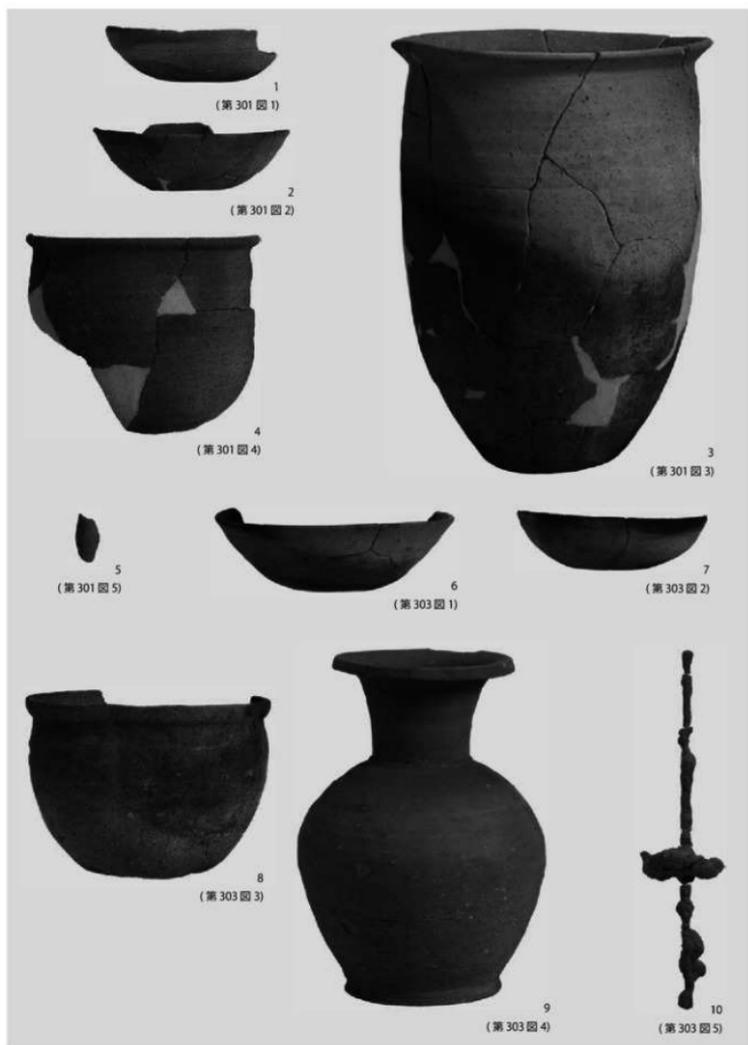


SI2 遺物 (N-001) 出土状況 (北から)



SI2 遺物 (D-004) 出土状況 (西から)

写真図版1 京ノ中遺跡



写真図版2 京ノ中遺跡出土遺物

## 第6節 川前遺跡

### 1. IV a1～3層の調査

基本層IV a層上面(縄文時代の遺構検出面)において、この時期に帰属する遺構は検出されなかった。

#### (1) 遺物包含層出土遺物(第308～337図、図版1～4・8～25)

IV a1～3層は、縄文時代の遺物包含層である。IV a1層は、層厚20～40cmあり、各調査区で確認されている。IV a2層は、A区でのみ確認され層厚は30～60cmである。この層から多くの遺物が出土しており、全体の半数近い、平箱で28箱分の遺物が出土している。土偶や岩偶、岩版、線刻礫、石刀等のほとんどこの層から出している。特に焼土や炭化物を多く含み、細別で19層に分層された。A区東壁や西壁の観察から、SI2 竪穴住居跡北側部分で特に厚く堆積しており、北に向かって徐々に傾斜し、層厚が薄くなる。東西ベルトの観察でも東に向かって厚くなっていく状況があることから、後述する、IV a3層上にIV a2層がマウンド状に盛り上がっているような堆積状況を呈している。

IV a3層は、A区北側のみで確認された。層厚は6.4～7.0cmを測り、IV a1・2層に比して薄い、東西の調査区外へと広がる。

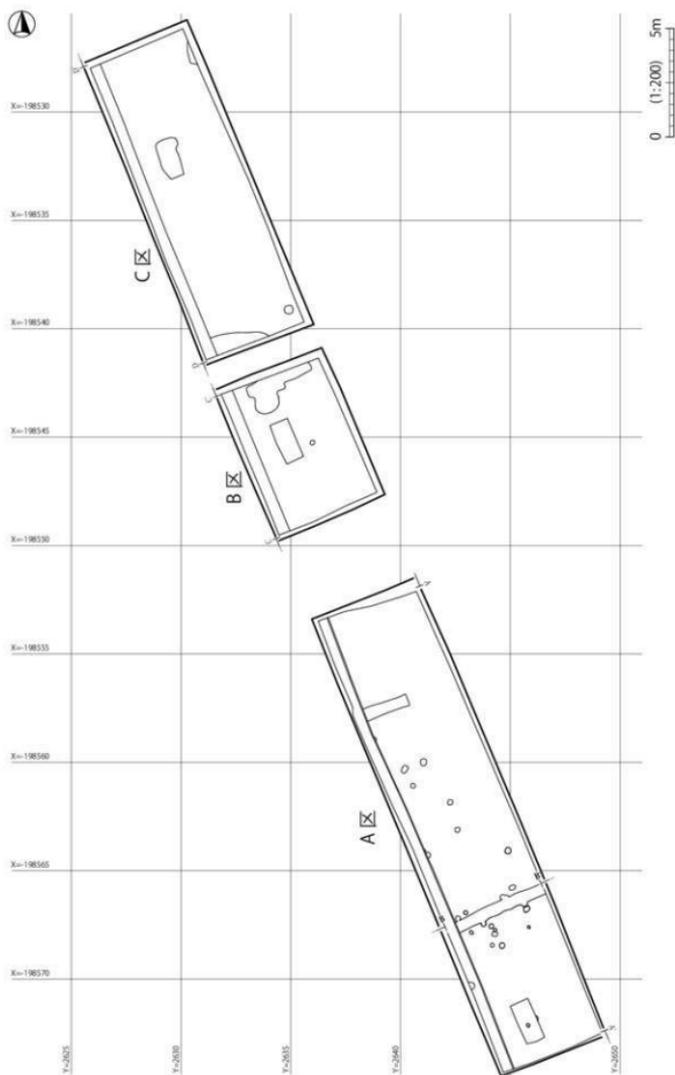
各層から縄文土器、打製石器、磨製石器、礫石器、石製品、土製品が多量に出土している。出土した縄文土器は、ほとんどが縄文時代晩期の大洞式土器であり、僅かに縄文時代後期後葉の瘤付土器(金剛弁式)が出土している。また、石製品では岩偶、イモ貝形石製品、線刻礫、石刀等、仙台市内で出土例が少ない遺物も出している。この他に、土偶や耳飾等、種別、器種において豊富な遺物が出土している。

IV a1層から出土した遺物のうち、深鉢形土器17点(第308図1～7、第309図1～7、第310図1・2、第311図1)、鉢形土器8点(第312図2～9)、浅鉢形土器10点(第311図10～13、第312図1・2、第313図2～5)、壺形土器4点(第312図3～5、第313図1)、注口土器2点(第312図6・7)、蓋1点(第312図8)、台付1点(第312図9)、動物形土偶1点(第313図6)、土偶1点(第313図7)、ミニチュア土器3点(第313図8～10)、石鏃2点(第314図1・2)、石錐2点(第314図3・4)、石匙1点(第314図5)、挿器1点(第314図6)、磨製石斧3点(第314図7・8、第315図1)、不明石製品1点(第315図2)を図示した。

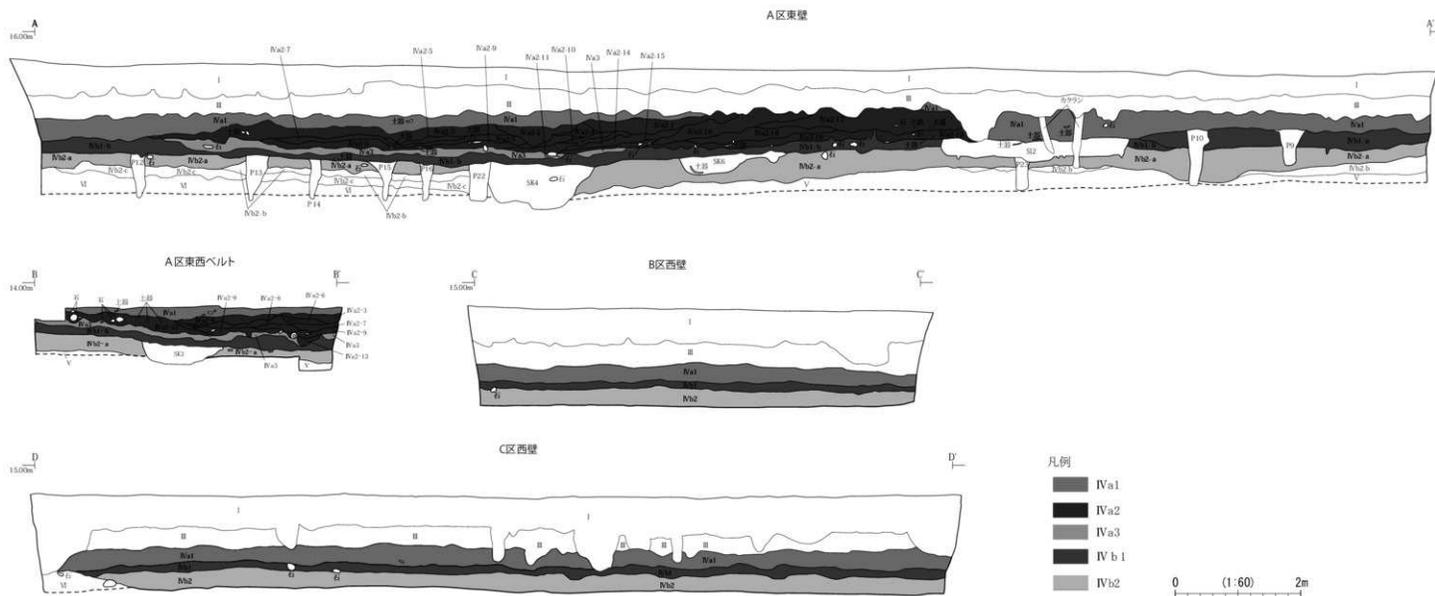
深鉢形土器は、所謂「半精製土器」である。口脣部に突起または刻目文が施され、口縁部文様帯の幅は狭く、口縁部と胴部の境界に沈線を横的に巡らし、胴部に単筋の縄文または非結束縄文が施される土器が多くみられる。また、口縁部と胴部の境に最大径を有する土器は、この部位が急角度で屈曲している。胴部上位に最大径を有する土器はこの部位に丸味を有する。口縁部文様帯に、櫛歯状工具による刺突が施されたものがみられる。壺形土器は概ね胴部中位に最大径を有し、頸部は内傾する。第314図2の石鏃は、表面基部付近に厚みが残っており、これを取り除こうと、幾度か剝離を行っている痕跡が観察される。未完成品である。第315図2の不明石製品は、断面の形状や敲打の後に磨が行われていることから、磨製石斧の転用が考えられる。

IV a2層から出土した遺物のうち、深鉢形土器14点(第315図3～6、第316図1～4、第317図1～5、第318図1)、鉢形土器7点(第318図2～7、第319図1)、浅鉢形土器28点(第318図8・9、第319図2～9、第320図1～8、第321図1、第322図1、第326図2～4、第327図1～5)、小型鉢5点(第322図2～6)、台付鉢1点(第322図7)、壺形土器13点(第322図8～10、第323図1～7、第324図1・5、第325図1)、注口土器3点(第324図2～4)、蓋1点(第326図1)、鉢形土器1点(第328図1)、香炉形土器1点(第328図2)、ミニチュア土器1点(第328図3)、耳飾1点(第328図4)、土偶1点(第328図5)、石鏃10点(第329図1～10)、石錐4点(第330図1～4)、石匙3点(第330図5～7)、挿器1点(第330図8)、打製石斧1点(第330図9)、磨製石斧2点(第331図1・2)、敲石3点(第331図3～5)、石刀3点(第332図1～3)、岩偶1

第6節 川前遺跡



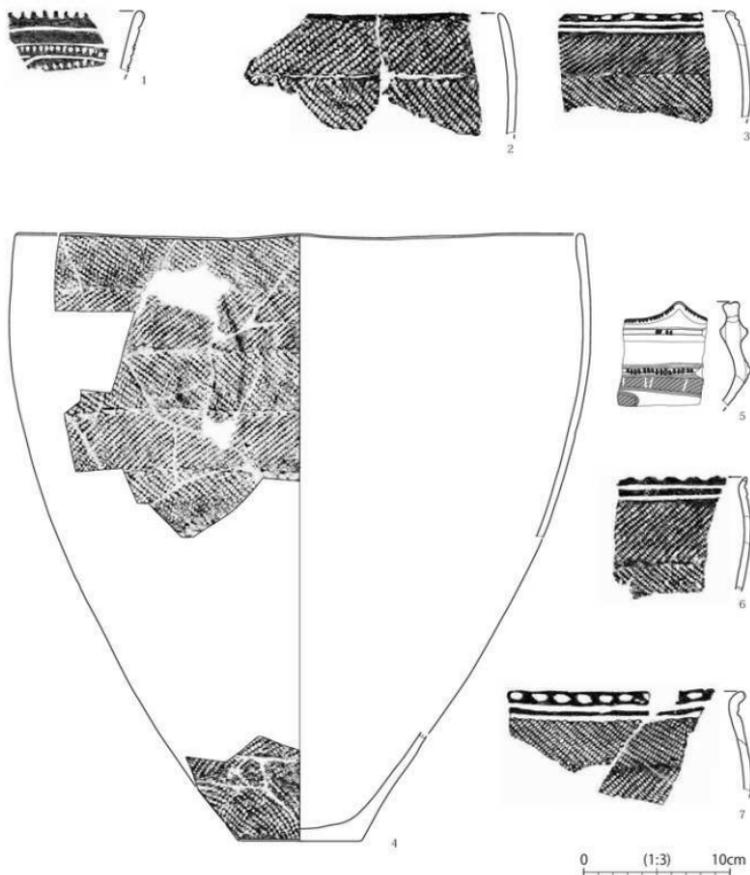
第306図 川前遺跡Ⅳa層遺構配置図



基本層序	土色	土質	備考	基本層序	土色	土質	備考	基本層序	土色	土質	備考	基本層序	土色	土質	備考
I	10YR4/4 褐色	シルト	層1～2mmの炭化物を多数に含む。	N a2 7	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトブロック、層1～2mmの炭化物を含む。	N a2 14	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトブロックを層下部に多数、層1～10mmの炭化物を含む。	N a2 4	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトブロック、砂を多数、層1～10mmの炭化物を含む。
II	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	褐色土を多数含む。炭化物を多数に含む。	N a2 8	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層1～10mmの炭化物、層1～5mmのハリスを含む。	N a2 15	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトブロック、層1～20mmの炭化物、層1～20mmのハリス、層1～30mmのハリスを多数含む。	N a2 5	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	褐色砂質シルト、層10～30mmの炭化物を含む。
IV a1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	層1～10mmの炭化物を多数含む。	N a2 9	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	褐色土を多数含む。層1～20mmのハリスを多数含む。	N a2 16	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトブロックを多数、層1～10mmの炭化物、層1～20mmのハリスを含む。	N a2 6	10YR4/4 褐色	シルト	褐色砂質シルトを多数、層10mmの炭化物、層10mmのハリスを多数含む。
IV a2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	層1～10mmの炭化物を多数、層1～5mmのハリスを含む。	N a2 10	10YR4/4 褐色	砂質シルト	褐色土を多数含む。層1～20mmの炭化物、層1～20mmのハリスを多数含む。	N a2 17	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層1～10mmの炭化物、層1～30mmのハリス、層20～50mmの炭化物を含む。	N a2 c	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	褐色土を多数、褐色粘土質シルトブロックを含む。
IV a2.1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	層1～10mmの炭化物を多数、層1～5mmのハリスを含む。	N a2 11	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	褐色土を多数含む。層1～5mmの炭化物、層1～20mmのハリスを含む。	N a2 18	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層1～5mmの炭化物、層1～30mmのハリスを含む。	V	10YR6/6 黄褐色	砂	褐色土を多数含む。
IV a2.2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層1～10mmの炭化物を多数、層1～5mmのハリスを含む。	N a2 12	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層1～20mmのハリスを含む。	N a2 19	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	層2～10mmの炭化物を多数、層1～10mmのハリス、褐色粘土質シルトブロックを多数含む。	M	10YR3/4 暗褐色	砂	注50～300mmを多数に含む。
IV a2.3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	褐色土を多数含む。層1～30mmの炭化物、層10mmのハリスを含む。	N a2 13	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	層1～30mmの炭化物を多数に含む。	N a3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	褐色土を多数含む。				

第307図 川前遺跡A～C区基本層序図

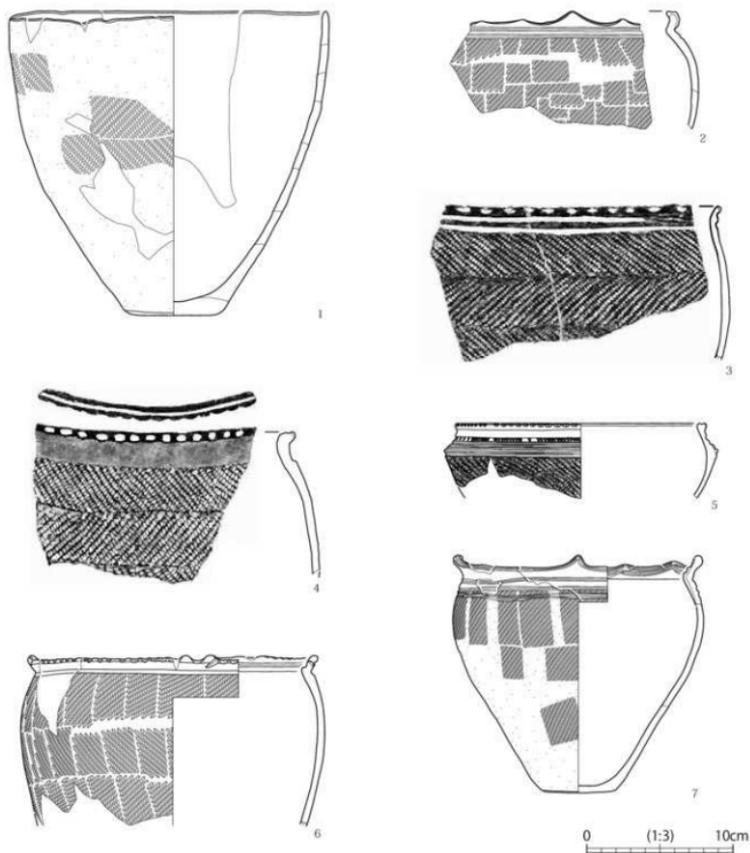




No.	片群番号	遺物区	形状	種類	図様	文様等		備考	写真枚数
						外周	内周		
1	A-014	A区	IV a1	縄文土器	深鉢	外周：1段部；斜行文（1線部）；波線文（斜行文）	内周：3段部		8.1
2	A-018	A区	IV a1	縄文土器	深鉢	外周：1線部；斜行文（1線部）；波線文（斜行文）	内周：3段部		8.2
3	A-096	A区	IV a1	縄文土器	深鉢	外周：1段部；斜行文（1線部）；波線文（斜行文）	内周：3段部		8.3
4	A-090	A区	IV a1	縄文土器	深鉢	外周：1段部；斜行文（1線部）；波線文（斜行文）	内周：3段部		8.4
5	A-016	A区	IV a1	縄文土器	深鉢	外周：1段部；斜行文（1線部）；波線文（斜行文）	内周：3段部		8.5
6	A-011	A区	IV a1	縄文土器	深鉢	外周：1段部；斜行文（1線部）；波線文（斜行文）	内周：3段部		8.6
7	A-085	A区	IV a1	縄文土器	深鉢	外周：1段部；斜行文（1線部）；波線文（斜行文）	内周：3段部		8.7

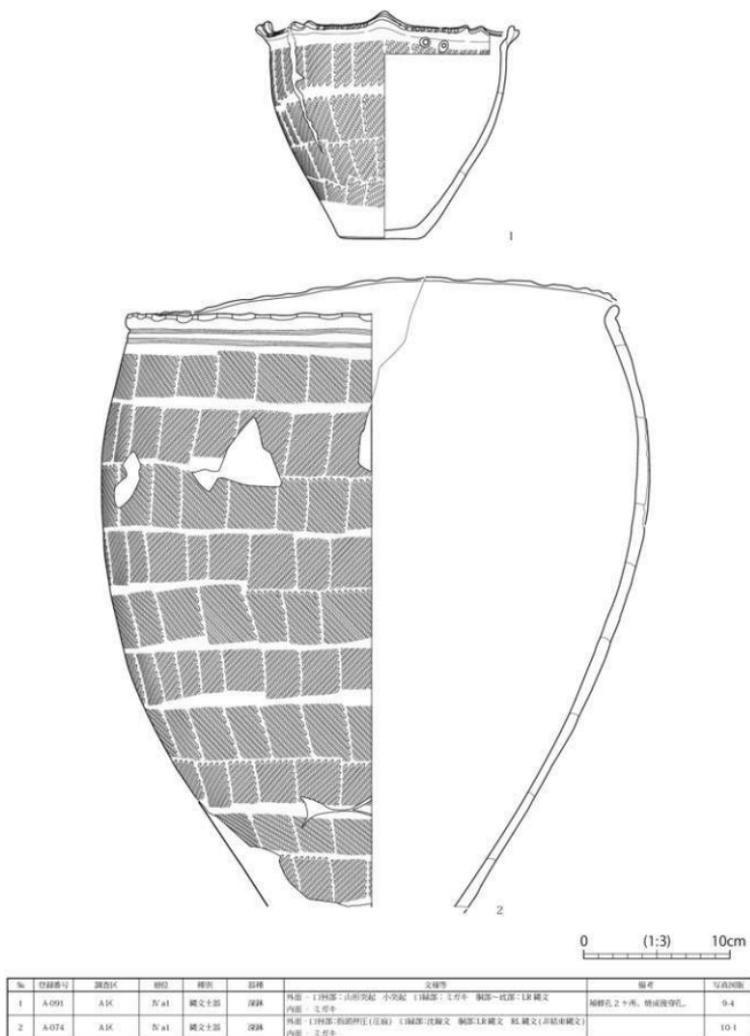
第308図 IV a1層(A区)遺物包含層出土遺物(1)

第6節 川前遺跡



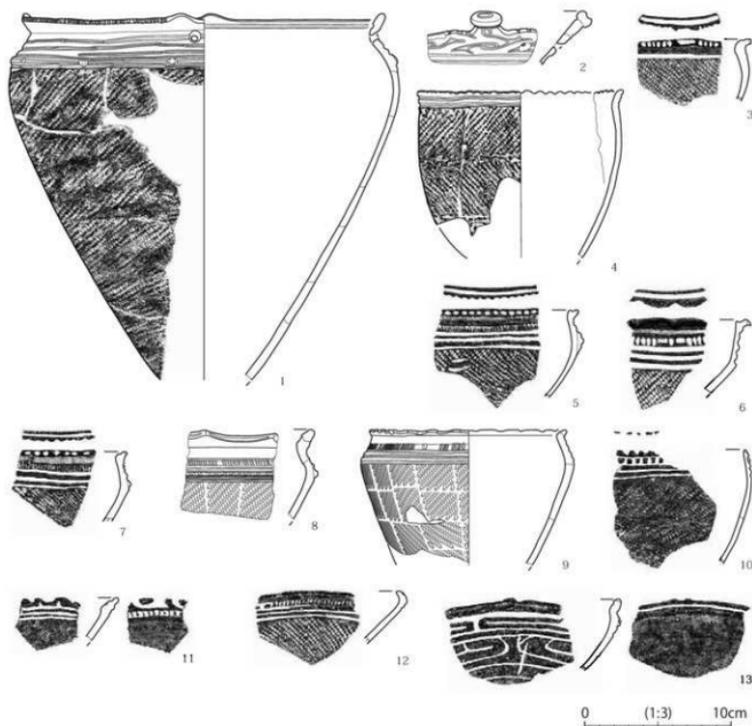
No.	登録番号	調査区	形状	種類	文様等	備考	写真図版
1	A-001	A区	IV a1	縄文土器	外面：上縁部・紐部：L系縄文 紅・縄文（井形束縄文） 内面：L字半	内面は厚縁部直、内面にL字半付着。	8-8
2	A-019	A区	IV a1	縄文土器	外面：上縁部：小突起配 小突起 沈線文（縁部：沈線文 L字半 縞部：L系縄文 内面：L字半		8-9
3	A-027	A区	IV a1	縄文土器	外面：上縁部：斜目文 上縁部：沈線文 L字半 縞部：L系縄文 紅・縄文（井形束縄文） 内面：L字半		8-10
4	A-015	A区	IV a1	縄文土器	外面：上縁部：沈線文（縁部：斜目文 縞部：L字半 縞部：L系縄文 紅・縄文（井形束縄文） 内面：L字半		8-11
5	A-083	A区	IV a1	縄文土器	外面：上縁部：斜目文 沈線文（縁部：沈線文 斜目文 縞部：L系縄文 L系縄文 内面：L字半	内面にL字半付着。	9-1
6	A-082	A区	IV a1	縄文土器	外面：上縁部：小突起 斜目文 沈線文（縁部：斜目文 縞部：L系縄文 紅・縄文（井形束縄文） 内面：L字半		9-2
7	A-004	A区	IV a1	縄文土器	外面：上縁部：小突起 沈線文（縁部：沈線文 縞部：L系縄文	内面は厚縁部直。	9-3

第309図 IV a1層(A区)遺物包含層出土遺物(2)



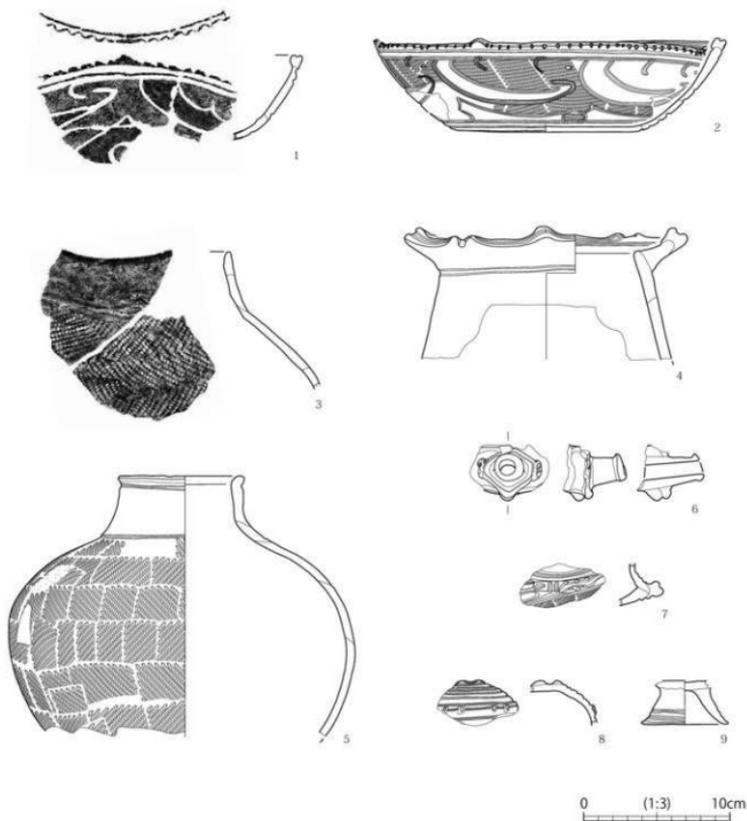
第310図 IV a1層(A区)遺物包含層出土遺物(3)

## 第6節 川前遺跡



No.	登録番号	調査区	層位	種別	形状	分類		写真
						外部	内部	
1	A-008	A区	IV a1	織文土器	深鉢	外部：1筋部：小突起 斜日文 1筋部：沈線文 筋部：段沈線文 斜日文 1筋部 内部：1筋部：沈線文 1筋部：筋部	織刺孔10个，横成線穿孔。	9-5
2	A-025	A区	IV a1	織文土器	鉢	外部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部 内部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部	織刺孔10个，横成線穿孔。	9-6
3	A-017	A区	IV a1	織文土器	鉢	外部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部 内部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部	内部に灰化層付着。	9-7
4	A-010	A区	IV a1	織文土器	鉢	外部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部 内部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部	内部に灰化層付着。	9-8
5	A-030	A区	IV a1	織文土器	鉢	外部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部 内部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部	内部に灰化層付着。	9-9
6	A-031	A区	IV a1	織文土器	鉢	外部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部 内部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部		9-10
7	A-032	A区	IV a1	織文土器	鉢	外部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部 内部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部	内部面に灰化層付着。	9-11
8	A-033	A区	IV a1	織文土器	鉢	外部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部 内部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部	内部に中層付着，外部に灰化層付着。	9-12
9	A-002	A区	IV a1	織文土器	鉢	外部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部 内部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部		10-2
10	A-013	A区	IV a1	織文土器	浅鉢	外部：1筋部：斜日文 1筋部：斜日文 1筋部：筋部 内部：1筋部：斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部	内部に灰化層付着。	10-3
11	A-012	A区	IV a1	織文土器	浅鉢	外部：1筋部：斜日文 1筋部：斜日文 1筋部：筋部 内部：1筋部：斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部		10-4
12	A-020	A区	IV a1	織文土器	浅鉢	外部：1筋部：斜日文 1筋部：斜日文 1筋部：筋部 内部：1筋部：斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部	内部 埋藏部。	10-5
13	A-034	A区	IV a1	織文土器	浅鉢	外部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部 内部：1筋部：突起 斜日文 1筋部：筋部 筋部：筋部		10-6

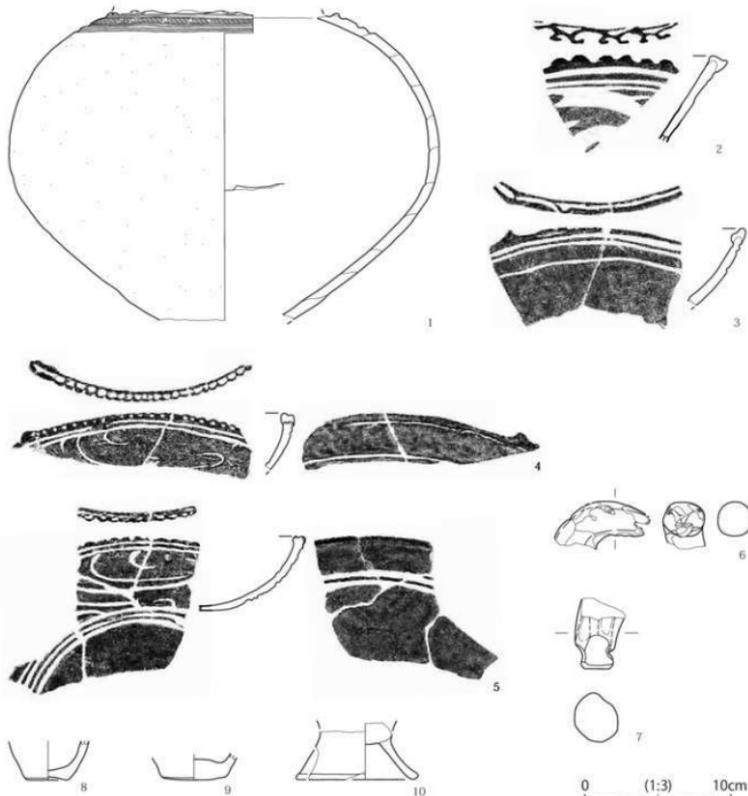
第311图 IV a1層(A区)遺物包含層出土遺物(4)



№	登録番号	調査区	層位	種別	形状	変修等	備考	写真図版
1	A-087	A区	IV a1	縄文土器	浅鉢	内面：土丹部；小穴足 内面文 斜目文 1線部；沈線文 胴部：1線縄文 沈線文 横溝縄文 内面 胴部：横線文	内面中央部、内面厚縁部。	10.7
2	A-006	A区	IV a1	縄文土器	浅鉢	内面：土丹部；小穴足 沈線文 斜目文 1線部；沈線文 胴部：1線縄文 沈線文(部形文) 横溝縄文 底部；沈線文 内面 1線部；沈線文 土丹部 胴部～底部；土丹部		10.8
3	A-084	A区	IV a1	縄文土器	甕	内面：1線部～胴部；土丹部 胴部：1線縄文 縦縄文(赤結帯縄文) 内面～土丹部		11.1
4	A-028	A区	IV a1	縄文土器	甕	内面：土丹部；土丹部小穴足 小穴足 斜目文 斜目文 沈線文 1線部～胴部；土丹部 沈線文 内面～土丹部		11.2
5	A-005	A区	IV a1	縄文土器	甕	内面：土丹部～胴部；沈線文 土丹部 胴部～胴部；縦縄文 1線縄文(赤結帯縄文) 内面 土丹部～胴部；土丹部 胴部～胴部；土丹部		11.3
6	A-022	A区	IV a1	縄文土器	片口土器	内面：片口部；陸線文 斜目文 土丹部	内面片口部に赤筋有り。胴部部分に黒色物付着。	11.4
7	A-024	A区	IV a1	縄文土器	片口土器	内面：片口部；陸線文 陸線文 1線縄文 内面～土丹部		11.5
8	A-021	A区	IV a1	縄文土器	甕	内面：土丹部；陸線文 沈線文 胴部；陸線文 沈線文 内面～土丹部		11.6
9	A-089	A区	IV a1	縄文土器	片付	内面：胴部；沈線文	内面厚縁部。	11.7

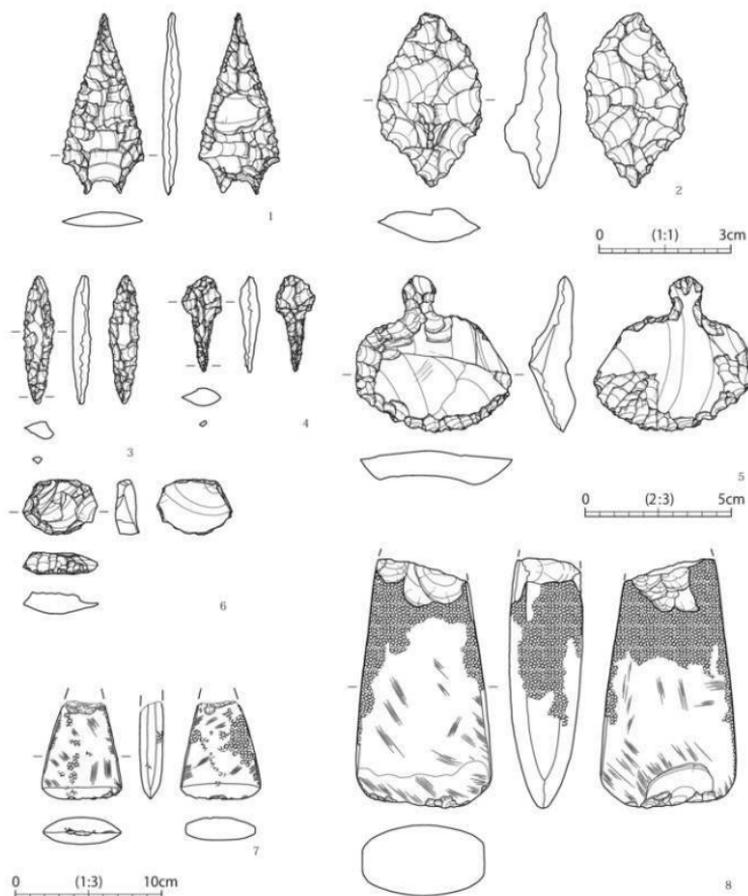
第312図 IV a1層(A区)遺物包含層出土遺物(5)

第6節 川前遺跡



No.	登録番号	調査区	期別	種類	説明	寸法等		数量	位置・埋没・備考	写真掲載	
						長さ×幅×厚さ(mm)	重さ(g)				
1	A-007	A区	IV a1	縄文土器	甕	外面：紅彩；外面：1段縄文 洗線文 横線文 横線文；底面：十字 内面：紅彩；底面：十字		1	外面紅彩、内面赤漆塗。底面	11.8	
2	A-029	A区	IV a1	縄文土器	洗鉢	外面：1段縄文；洗線文 1段縄文 洗線文 横線文 横線文 内面：十字		1	外面紅彩、内面赤漆塗。底面	11.9	
3	A-023	A区	IV a1	縄文土器	洗鉢	外面：1段縄文；小突起 洗線文 1段縄文 洗線文 内面 十字 内面：横線文		1	外面紅彩、内面赤漆塗。底面	11.10	
4	A-026	A区	IV a1	縄文土器	洗鉢	外面：1段縄文；小突起 洗線文 1段縄文 洗線文 横線文 横線文 内面：横線文；洗線文 十字		1	外面紅彩、内面赤漆塗。底面	11.11	
5	A-088	A区	IV a1	縄文土器	洗鉢	外面：1段縄文；紅彩文 洗線文 1段縄文 横線文 横線文 横線文；底面：内面、十字、横線文 洗線文		1	外面紅彩、内面赤漆塗。底面	11.12	
No.	登録番号	調査区	期別	種類	説明	長さ×幅×厚さ(mm)		重さ(g)	数量	位置・埋没・備考	写真掲載
6	P-001	A区	IV a1	土製土器	動物形土器		× × × (2.0)	112.40	1	外面 十字 動物形より目を紅彩文により目を作出。	12.1
7	P-003	A区	IV a1	土製土器	土器		(2.3) × (2.3) × (2.2)	112.84	1	十字	12.2
8	P-002	A区	IV a1	土製土器	土器		× × × (7.30)		1	外面 底面：十字 内面 底面：十字 × 1.8 × (1.8)	12.3
9	P-004	A区	IV a1	土製土器	土器		× × × (3.90)		1	外面 底面：十字 内面 底面：十字 内面赤漆塗。底面 × 2.8 × (1.2)	12.4
10	P-005	A区	IV a1	土製土器	土器		× × × (20.0)		1	外面 内面：十字 内面 白漆；十字 × 15.0 × (2.6)	12.5

第313図 IV a1層(A区)遺物包含層出土遺物(6)

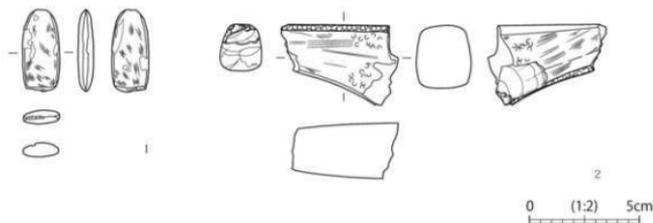


No.	発掘番号	調査区	層位	種類	部類	石種	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真図版
1	Ka 003	A区	IV a1	打製石頭	石鏃	閃岩	4.2×1.8×0.6	1.91		12.6
2	Ka 009	A区	IV a1	打製石頭	石鏃	閃岩	4.8×2.4×1.3	6.78	未成込。	12.7
3	Ka 017	A区	IV a1	打製石頭	石鏃	鉄石英	4.4×1.0×0.6	2.48	先端部摩滅	12.8
4	Ka 025	A区	IV a1	打製石頭	石鏃	閃岩	3.3×1.4×0.7	1.59		12.9
5	Ka 032	A区	IV a1	打製石頭	石鏃	閃岩	5.1×5.5×1.6	25.53		12.10
6	Ka 022	A区	IV a1	打製石頭	鏃頭	閃岩	1.9×2.5×0.75	3.85		12.11
7	Ka 002	A区	IV a1	磨製石斧	磨製石斧	砂岩	14.51×4.7×1.0	125.74	底部欠損	12.12
8	Ka 006	A区	IV a1	磨製石斧	磨製石斧	安山岩	11.4×6.1×3.2	134.50	底部欠損	12.13

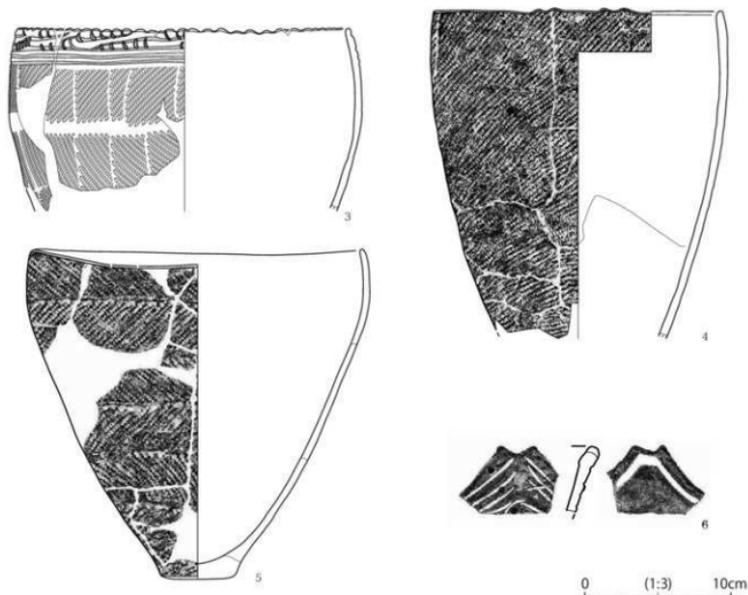
第314図 IV a1層(A区)遺物包含層出土遺物(7)

第6節 川前遺跡

IV a1 層

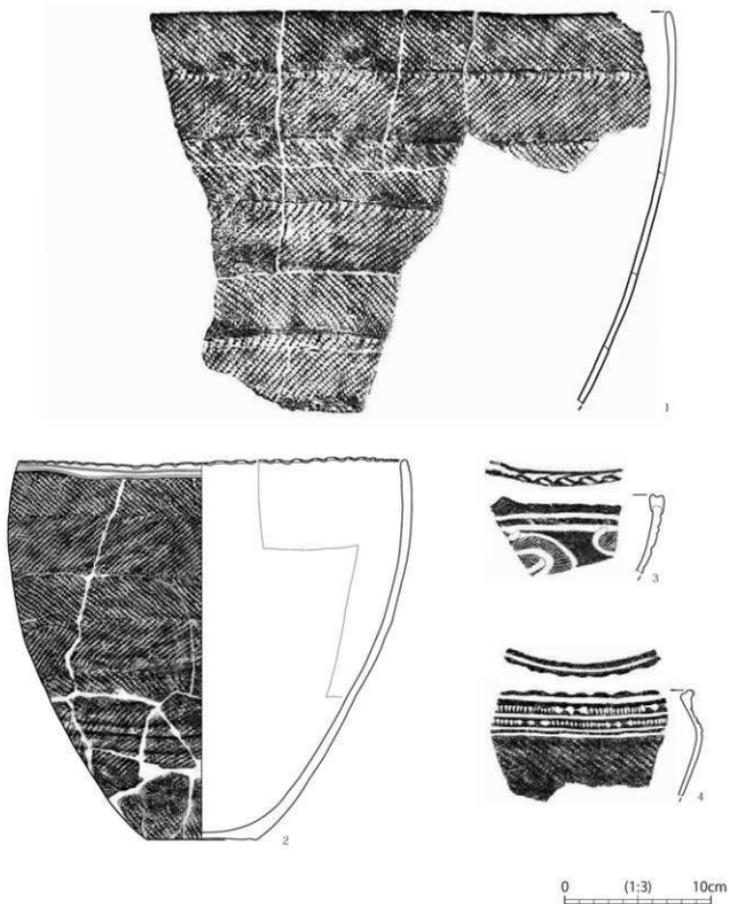


IV a2 層



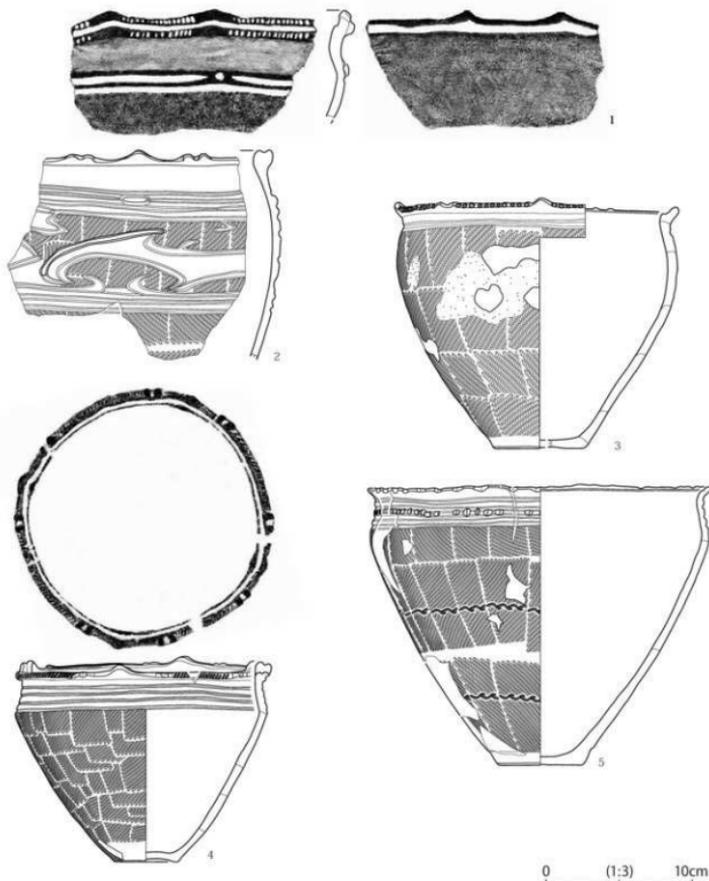
No.	発掘番号	遺物区	地区	種別	説明	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真掲載
1	B3-001	A区	IV a1	磨製石器	磨製石片	板状石	3.8 × 1.6 × 0.7	6.45		12-14
2	B4-016	A区	IV a1	石器類	有柄石器類	縞肌板状石	5.1 × 3.7 × 2.4	73.50	磨製石片中の断面のみ。	12-15
No.	発掘番号	遺物区	地区	種別	説明	石材			備考	写真掲載
3	A-108	A区	IV a2	縄文土器	深鉢	外面：1押部：拍付文 1編部：波線文(手触状文) 内面：1編部：波線文 1取縁部：粗縄文(非粘着縄文) 内底：凸条				12-16
4	A-037	A区	IV a2	縄文土器	深鉢	外面：1押部：凸条配 1編部～取縁部：粗縄文 内底：凸条				13-1
5	A-112	A区	IV a2	縄文土器	深鉢	外面：1編部～取縁部：粗縄文 1取縁部(非粘着縄文)				13-2
6	A-050	A区	IV a2	縄文土器	深鉢	外面：1編部：波線(縞) 小突起 波線文 取縁部 内面：1編部：波線文				13-3

第315図 IV a1層(A区)遺物包含層出土遺物(8)・IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(1)



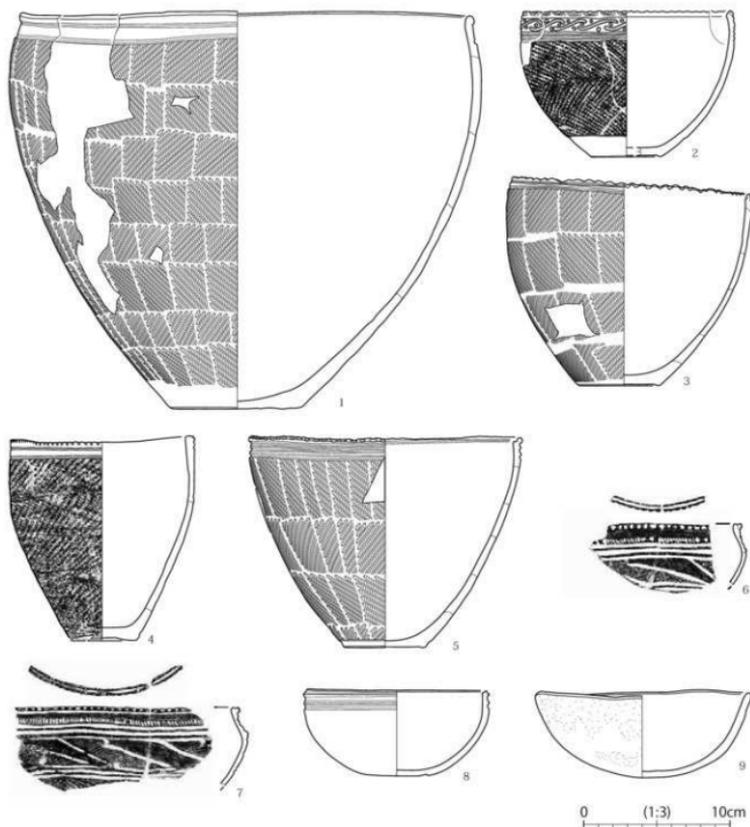
No.	発掘番号	調査区	層位	種類	図様	文様等		備考	写真枚数
						外面	内面		
1	A-053	A区	IV a2	縄文土器	深鉢	外面：1.縞部-縞部；絨、縄文。2.赤、縄文（赤結糸縄文）。内面：3.赤。			13.4
2	A-120	A区	IV a2	縄文土器	深鉢	外面：1.縞部-斜目文。1.縞部；沈線文。縞部-斜部；絨、縄文。2.赤、縄文（赤結糸縄文）。内面：3.赤。			14.1
3	A-114	A区	IV a2	縄文土器	深鉢	外面：1.縞部；小点配。沈線文。輪土縞部付。縞状工具押付による斜目文。1.縞部；沈線文。絨、縄文。縞部縞文。沈線文。内面：3.赤。			13.5
4	A-041	A区	IV a2	縄文土器	深鉢	外面：1.縞部；沈線文。斜目文。1.縞部；沈線文。斜目文。縞部；絨、縄文。内面：3.赤。			13.6

第316図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(2)



No.	登録番号	調査区	層位	種類	形種	土質等		備考	写真No.
						外面	内面		
1	A-054	A区	B-a2	縄文土器	深鉢	外面：1199部：赤褐色小突起 斜目文 1163部：黄褐色文 斜目文 土器半 編織目 黄褐色文 沈黙文 内面：沈黙文	内面赤褐色編織目。	14.2	
2	A-097	A区	B-a2	縄文土器	深鉢	外面：1199部：赤褐色小突起 斜目文 沈黙文 1163部：黄褐色文 編織目 1164部：黄褐色文 沈黙文 赤褐色文 赤褐色文 内面：土器半 編織目	編織目上半と下半では透す編織目柄を使用している。	14.3	
3	A-100	A区	B-a2	縄文土器	深鉢	外面：1199部：小突起 赤褐色文 斜目文 1163部：黄褐色文 土器半 編織目 1164部：編織目 1165部：赤褐色文 斜目文 1166部：黄褐色文 土器半 編織目	内面に黄褐色付着。	14.4	
4	A-071	A区	B-a2	縄文土器	深鉢	外面：1199部：赤褐色小突起 沈黙文 斜目文 1163部：黄褐色文 編織目 1164部：黄褐色文 内面：土器半 編織目	内外面に黄褐色付着。	14.5	
5	A-113	A区	B-a2	縄文土器	深鉢	外面：1199部：斜目文 1163部：黄褐色文 斜目文 編織目 編織目 編織目 1164部：黄褐色文 内面：土器半 1199部：黄褐色文		14.6	

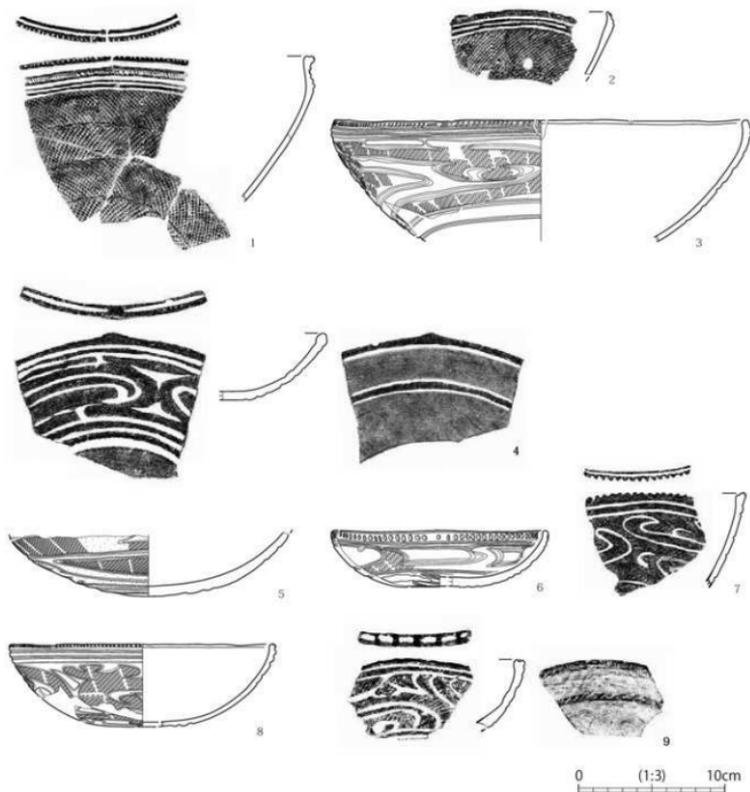
第317図 IV a2層(A区) 遺物包含層出土遺物(3)



No.	色絵番号	調査区	形状	群別	器種	文様等		備考	写真図版
						外周	内面		
1	A-121	A区	IV a2	縄文土器	深鉢	外周：1.罫部；2.空部；罫部～底部；1.麻織文；内面：2.空部			15.1
2	A-035	A区	IV a2	縄文土器	鉢	外周：1.罫部；2.洗線文；1.罫部；2.洗線文；1.5段巻（平歯状文）；洗線文；罫部；1.麻織文；1.麻織文（非粘着罫文）；底部：2.空部；内面：2.空部			15.2
3	A-073	A区	IV a2	縄文土器	鉢	外周：1.罫部；2.洗線文；罫部～底部；1.麻織文；麻織文；内面：1.罫部；2.洗線文；1.罫部～底部；2.空部			15.3
4	A-106	A区	IV a2	縄文土器	鉢	外周：1.罫部；2.洗線文；罫部；1.麻織文；内面：2.空部	内面に炭化物付着。		15.4
5	A-072	A区	IV a2	縄文土器	鉢	外周：1.罫部；2.洗線文；罫部；1.麻織文；1.麻織文（非粘着罫文）；底部：2.空部；内面：2.空部	内面に炭化物付着。		15.5
6	A-080	A区	IV a2	縄文土器	鉢	外周：1.罫部；2.洗線文；洗線文；罫部；1.麻織文；洗線文；1.麻織文（非粘着罫文）；内面：2.空部	内面に炭化物付着。		15.6
7	A-079	A区	IV a2	縄文土器	鉢	外周：1.罫部；2.洗線文；洗線文；罫部；1.麻織文；1.麻織文（非粘着罫文）；内面：2.空部	内面に炭化物付着。		15.7
8	A-081	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周：1.罫部；2.洗線文；1.罫部；2.洗線文；罫部～底部；2.空部；底面：2.洗線文；内面：2.空部	内周部に赤土塗布中心残存。		15.8
9	A-101	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周：2.空部；内面：2.空部	外周に中層灰。		15.9

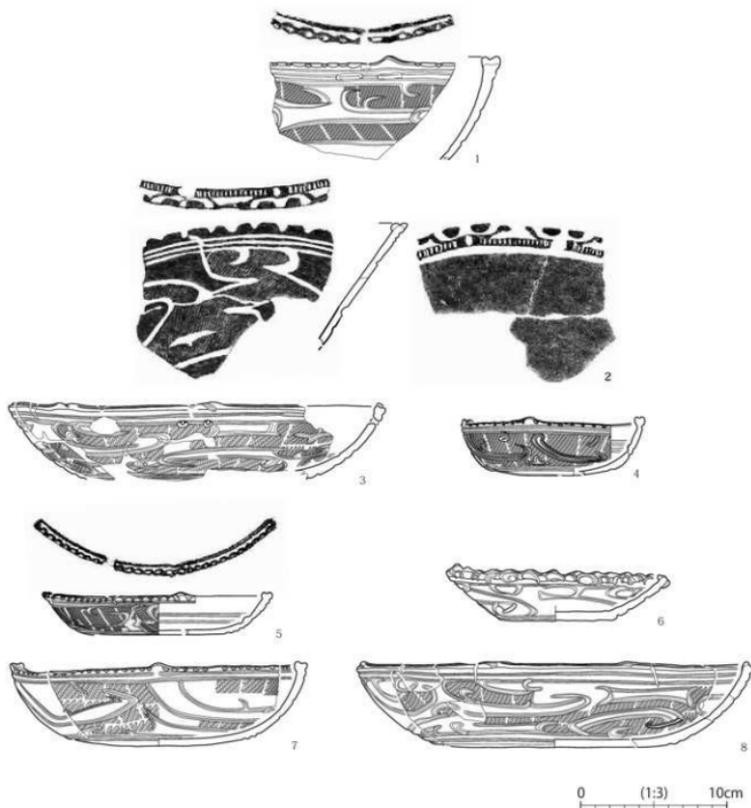
第318図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(4)

第6節 川前遺跡



No.	登録番号	調査区	層位	種別	形状	文様		備考	写真掲載
						外周	内面		
1	A-098	A区	IV a2	縄文土器	鉢	外周・上唇部: 沈線・斜行文・横線・沈線文・斜行文・横線・短・縄文・L形縄文(赤 結車縄文) 沈線文 内面・土器半	内面に炭化物付着。	16.1	
2	A-060	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周・L形縄文・斜行文・沈線文・横線・L形縄文 内面・土器半	外周に炭化物付着。	16.2	
3	A-038	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周・上唇部: 斜行文・L形縄文・横線・L形縄文 沈線文(雲形文) 横溝 縄文 内面・土器半		16.3	
4	A-077	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周・上唇部: 小突起 沈線文・L形縄文・横線・L形縄文 沈線文 横溝 縄文 沈線文(人形文) 横溝: 沈線文 横線: 沈線文 内面・L形縄文・土器半 横溝: L形縄文 横溝縄文 横溝縄文 土器半 横溝: 土器半		16.4	
5	A-049	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周・横溝・横溝・L形縄文・沈線文(雲形文) 横溝縄文 内面・土器半	外周に炭化物付着。外周横溝。	16.5	
6	A-066	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周・上唇部: 斜行文・L形縄文・横線・横溝・L形縄文 沈線文 横溝縄文 内面・土器半	内面に炭化物付着。内面横溝。	16.6	
7	A-045	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周・上唇部: 斜行文・斜行文・L形縄文・横線・L形縄文 沈線文(雲形文) 内面・土器半		16.7	
8	A-050	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周・上唇部: 斜行文・L形縄文・横線・L形縄文 沈線文 横溝縄文 内面・土器半	内周部に炭化物付着。	16.8	
9	A-043	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周・上唇部: 斜行文・小突起・横溝(横溝・横溝)・L形縄文 沈線文 横溝: L形縄文 沈線文(二文文) 横溝縄文 内面・横溝・L形縄文・横線文(二文文) 横溝縄文		16.9	

第 319 図 IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (5)



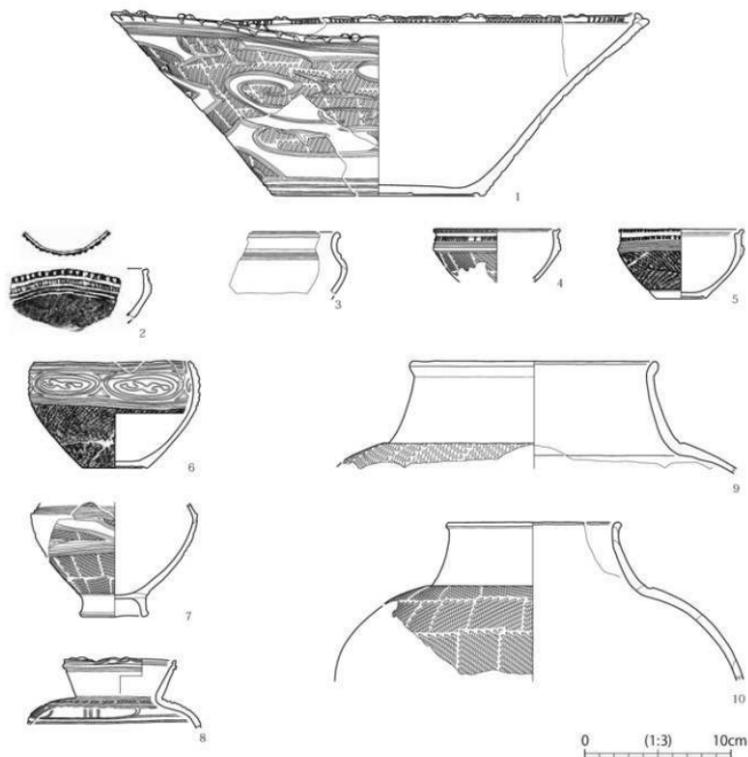
No.	登録番号	調査区	層位	種別	形状	文様等	備考	写真図例
1	A-103	A区	IVa2	縄文土器	浅鉢	外面：1/4部部：小突起 沈線文 斜目文 1/4部部：沈線文 胴部：L状縄文 沈線文 胴部縄文 内面：3/4部部		16-10
2	A-076	A区	IVa2	縄文土器	浅鉢	外面：1/4部部：小突起 1/4部部：沈線文 胴部：H状縄文 沈線文 胴部縄文 沈線文(雲形文) 内面：1/4部部：斜目文 胴部：3/4部部		16-11
3	A-040	A区	IVa2	縄文土器	浅鉢	外面：1/4部部：小突起 沈線文 1/4部部：沈線文 胴部：L状縄文 沈線文(雲形文) 胴部縄文 内面：3/4部部 胴部：沈線文	胴部にZ字溝。一部は赤彩を残す。外面に凹凸状付着。	16-12
4	A-067	A区	IVa2	縄文土器	浅鉢	外面：1/4部部：小突起 沈線文 斜目文 1/4部部：沈線文 胴部：L状縄文 胴部縄文(雲形文) 胴部縄文 内面：1/4部部：3/4部部 胴部：L状縄文 3/4部部		16-13
5	A-102	A区	IVa2	縄文土器	浅鉢	外面：1/4部部：斜目文 1/4部部：沈線文(雲形文) 胴部：L状縄文 沈線文 内面：1/4部部：3/4部部 胴部：H状縄文 胴部：L状縄文 3/4部部		16-14
6	A-105	A区	IVa2	縄文土器	浅鉢	外面：1/4部部：小突起 沈線文 1/4部部：沈線文 胴部：L状縄文(雲形文) 3/4部部 内面：1/4部部：小突起 1/4部部：L状縄文 3/4部部		16-15
7	A-075	A区	IVa2	縄文土器	浅鉢	外面：1/4部部：小突起 沈線文 斜目文 1/4部部：沈線文 胴部：L状縄文 胴部：L状縄文 胴部縄文 内面：3/4部部	内外面中平滑。	16-16
8	A-051	A区	IVa2	縄文土器	浅鉢	外面：1/4部部：小突起 沈線文 1/4部部：沈線文 胴部：L状縄文 沈線文(雲形文) 胴部縄文 胴部：沈線文 内面：3/4部部		16-17

第320図 IVa2層(A区)遺物包含層出土遺物(6)



No.	登録番号	調査区	標目	標記	品種	名称等		備考	写真枚数	
						外周・上内面・空面	内面・底面			
I	A-119	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周・上内面・空面	浅鉢文(1)編部・底面	浅鉢文(1)人形部印文	編部 縄文・底面	17.1

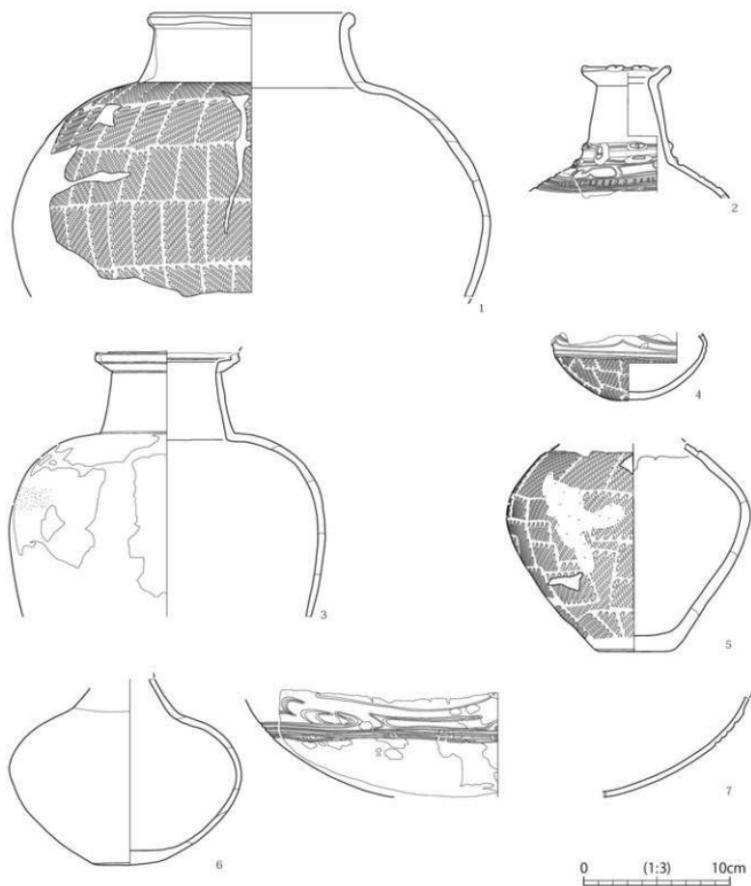
第321図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(7)



No.	発掘番号	調査区	層位	種類	図種	文様等		備考	写真掲載
						外周	内面		
1	A-003	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外周：上押部：斜日文、沈線文、上縁部：沈線文、胴部：上縁文、沈線文(点状文)	胴内縁文、胴部：沈線文、底面：沈線文		17.2
2	A-056	A区	IV a2	縄文土器	小型鉢	外周：上押部：沈線文、点状文、斜日文、点字	内面：点字		17.3
3	A-058	A区	IV a2	縄文土器	小型鉢	外周：上縁部～胴部：点字、胴部：段沈線文	内面：点字	内外面に赤彩塗布が施す。内外面中心部減。	17.4
4	A-055	A区	IV a2	縄文土器	小型鉢	外周：上押部：斜日文、沈線文、上縁部：斜日文、沈線文、胴部：沈線文、上縁文、内面：点字		内面中心部減。	17.5
5	A-063	A区	IV a2	縄文土器	小型鉢	外周：上押部：斜日文、点状文、上縁部：斜日文、沈線文、胴部：上縁文、上縁文(点状赤線文)	内面：点字		17.6
6	A-095	A区	IV a2	縄文土器	小型鉢	外周：上縁部：沈線文、沈線文(点状文)、上縁部：斜日文、沈線文、胴部：上縁文、上縁文(点状赤線文)	内面：点字	内外面に赤彩塗布が施す。	17.7
7	A-036	A区	IV a2	縄文土器	有付鉢	外周：上押部：上縁部、胴部：点字、斜日文、点字	内面：点字	内外面に赤彩塗布が施す。	17.8
8	A-065	A区	IV a2	縄文土器	甕	外周：上押部：上縁部、胴部：点字、斜日文、点字	内面：点字		17.9
9	A-061	A区	IV a2	縄文土器	甕	外周：上縁部～胴部：点字、斜日文、点字	内面：点字		17.10
10	A-111	A区	IV a2	縄文土器	甕	外周：上縁部～胴部：点字、斜日文、上縁部(点状赤線文)	内面：上縁部～胴部：点字、斜日文		18.1

第322図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(8)

第6節 川前遺跡



No.	記録番号	調査区	層位	種類	器種	土質等	
						備考	写真図版
1	A-107	A区	IV a2	縄文土器	甕	外周：I土層部～III層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 胴部：B土層文 I土層文（非粘赤縄文） 内周：I土層部～III層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 外周：I土層部；土器中（縦位） 胴部：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文）	18.2
2	A-096	A区	IV a2	縄文土器	甕	外周：I土層部～III層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 胴部：B土層文 I土層文（非粘赤縄文） 内周：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 外周：I土層部；土器中（縦位） 胴部：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文）	内外周両面に朱引を施かに残す。
3	A-118	A区	IV a2	縄文土器	甕	外周：I土層部～III層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 胴部：B土層文 I土層文（非粘赤縄文） 内周：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 外周：I土層部；土器中（縦位） 胴部：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文）	18.4
4	A-094	A区	IV a2	縄文土器	甕	外周：I土層部～III層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 胴部：B土層文 I土層文（非粘赤縄文） 内周：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 外周：I土層部；土器中（縦位） 胴部：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文）	内外面に朱引を施かに残す。
5	A-093	A区	IV a2	縄文土器	甕	外周：I土層部～III層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 胴部：B土層文 I土層文（非粘赤縄文） 内周：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 外周：I土層部；土器中（縦位） 胴部：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文）	18.6
6	A-104	A区	IV a2	縄文土器	甕	外周：I土層部～III層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 胴部：B土層文 I土層文（非粘赤縄文） 内周：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 外周：I土層部；土器中（縦位） 胴部：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文）	内外面に朱引を施かに残す。 内外面に朱引を施かに残す。内外面に朱引を施かに残す。
7	A-116	A区	IV a2	縄文土器	甕	外周：I土層部～III層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 胴部：B土層文 I土層文（非粘赤縄文） 内周：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文） 外周：I土層部；土器中（縦位） 胴部：I土層部；土器中（縦位） 口部：B土層文（非粘赤縄文）	18.8

第323図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(9)



0 (1:3) 10cm

No.	発掘番号	調査区	層位	種類	形状	文様等	備考	写真枚数
1	A.110	A区	IV a2	縄文土器	甕	外底：土線部～須部；土字部 胴部：1区縄文 底部：土字部 内底：土字部 十字		19.1
2	A.064	A区	IV a2	縄文土器	片（口土部）	外底：胴部；沈線文（雲形文）		19.2
3	A.062	A区	IV a2	縄文土器	片（口土部）	外底：胴部；1区縄文 沈線文 胴部：短沈線文 沈線文 胴部：1区縄文 沈線文 内底：土字部	片（口部）縁部有り。	19.3
4	A.078	A区	IV a2	縄文土器	片（口土部）	外底：胴部；1区縄文 沈線文 胴部：沈線文 胴部：1区縄文 沈線文 胴部：沈線文 内底：土字部		19.4
5	A.117	A区	IV a2	縄文土器	甕	外底：土線部；沈線文 土線部～須部；土字部 胴部：沈線文 胴部：1区縄文（非 短沈線文） 内底：土線部～須部；土字部 底部～胴部；十字		19.5

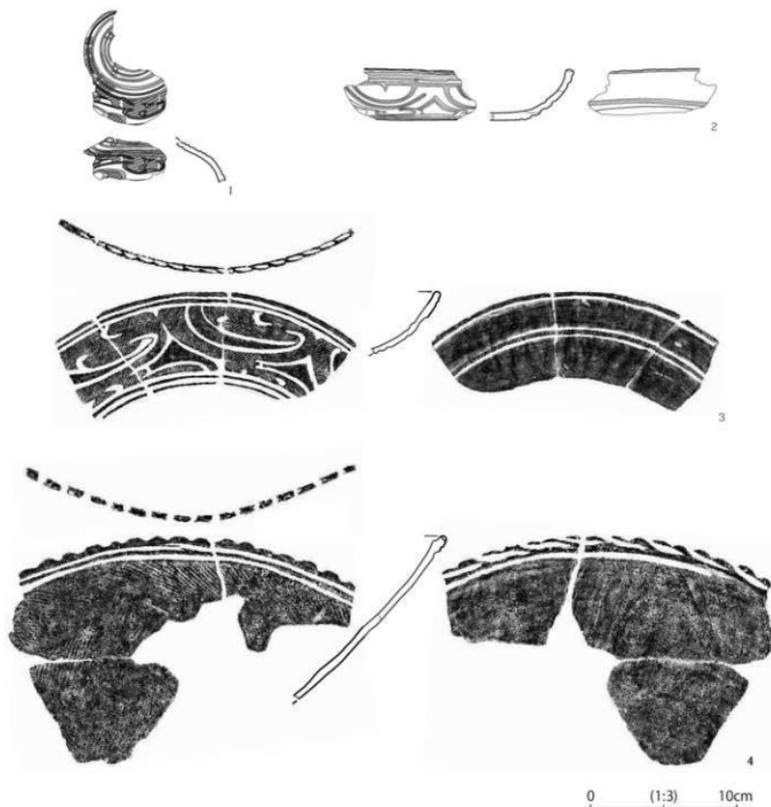
第324図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(10)



品	登録番号	調査区	層位	種別	器種	文様等	備考	写真画像
1	A-070	A区	IV a2	縄文土器	甕	外面：1.渦部-渦部；土器中 紅塗；洗刷文・縦線 渦部-渦部；土器中 内面：1.渦部-渦部；土器中 紅塗-紅塗；十字		201

第325図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(11)

点(第333図1)、イモ貝形石製品1点(第333図2)、線刻碟2点(第334図1・2)、有孔石製品1点(第334図3)を図示した。IV a1層と同様、深鉢形土器の主体は半精製土器である。羊歯状文を口縁部無文帯に施すものがみられる。浅鉢形土器の出土量が多い。文様は、縄文を施文後、沈線を施し、それにより区画された内側または外側に磨消縄文を施し、雲形文や入組み雲形文が施されている。壺形土器は、胴部中位に最大径を有するもの他に、胴

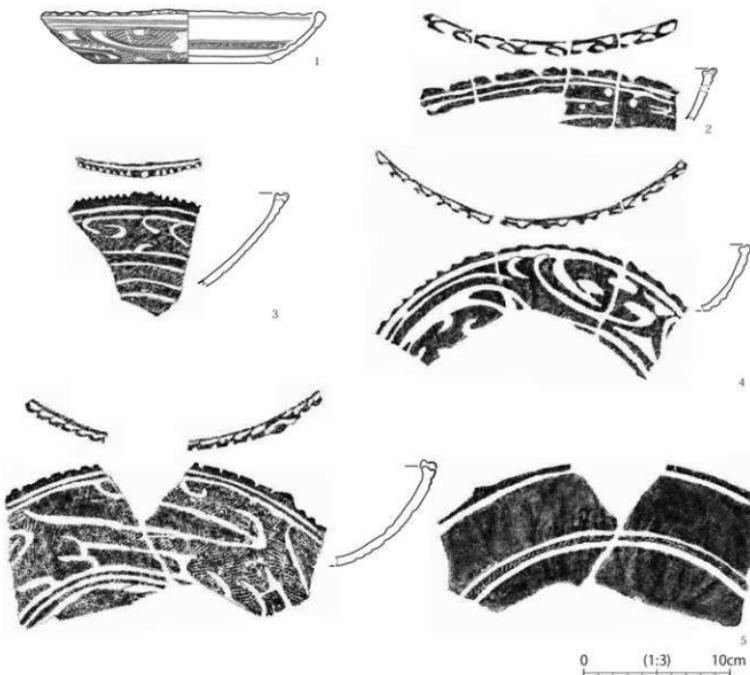


No.	登録番号	調査区	層位	種別	器種	文様等	備考	写真図版
1	A-048	A区	IV a2	縄文土器	蓋	外面：天月部：沈線文、胴部：1本縄文、沈線文、磨消縄文	外面に赤彩を施かに残す。	19.6
2	A-068	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外面：1本縄文、和文文、1本縄部：沈線文、磨消、沈線文、沈部：沈線文 内面：3本中、磨消、沈線文		19.7
3	A-115	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外面：1本縄部：和文土器による押文、1本縄部：沈線文、1本縄文(雲形文)、沈線文、磨消縄文、沈線文、内面：1本縄部：3本中、磨消、1本縄部：磨消縄文、沈線文		19.8
4	A-042	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢	外面：1本縄部：磨消1本、1本縄部：沈線文、磨消、和文、1本縄文(非和文系縄文) 内面：3本中、1本縄部：沈線文	磨消面著。	19.9

第326図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(12)

## 第6節 川前遺跡

部上位に最大径を有するものもみられる。また、頸部から口縁部へ大きく外傾するものがみられる。耳飾は、頸部に赤彩を僅かに残している。土偶は、板状を呈しており、頸部、胴部、腰部を区画するように沈線が横位に巡る。頭部表面に刺突が1ヶ所、胴部裏面に沈線による円が1ヶ所施される。一方の腕の端部及び両脚が欠損する。石鐏の多くは、頁岩または黒曜石を石材としている。有茎鐏と無茎鐏のいずれも出土しており、基部の端部だけ張り出すものもみられる。石錐は、頁岩を石材としている。つまみ部を有するものと無いものいずれも出土している。石刀はいずれも粘板岩を石材としている。第332図2・3は、いずれも刀身部が湾曲する。第332図1は、刀身部を欠損しているが、直刀状を呈すると考えられる。第333図1の岩偶は、A区南側付近で、俯せの状態に頭部をやや北東方向に向けて出土した。やや扁平な楕円形の凝灰岩を素材としていると考えられる。胴部下半は、欠損

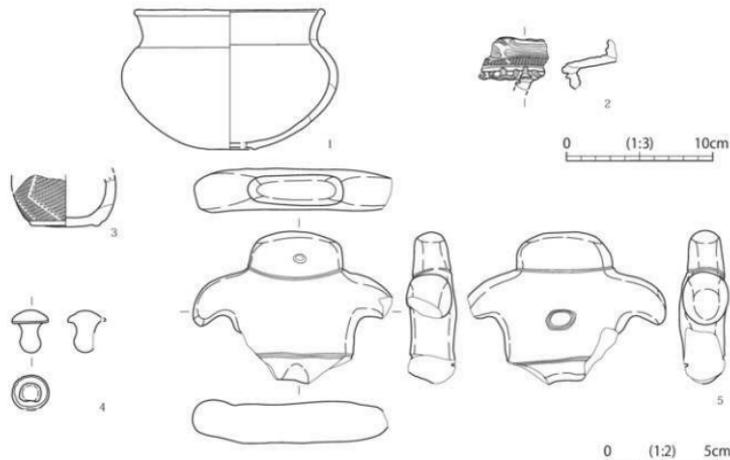


No.	登録番号	調査区	単位	種類	形態	土質等		備考	写真図版
						外周	内周		
1	A-099	A区	IV a2	縄文土器	直刀	外周：1995a-編部・1&編文(50x3x2.5文)	瀬戸編文	外周中々厚減	19-10
2	A-039	A区	IV a2	縄文土器	直刀	外周：1編部・3号半・編部・段状編文・1&編文・3号半	瀬戸編文	胴部径2.5cm、横溝等付。	19-11
3	A-044	A区	IV a2	縄文土器	直刀	外周：1995a・1995a・和日文・1編部・1&編文・沈線文・内周・3号半	瀬戸編文	1995aに赤彩を僅かに残す。	19-12
4	A-047	A区	IV a2	縄文土器	直刀	外周：1995a・和日文・和日文・1編部・沈線文・編部・沈線文(雲形文)	瀬戸編文		21-1
5	A-066	A区	IV a2	縄文土器	直刀	外周：1995a・沈線文・和日文・小穴部・1編部・沈線文・編部・1&編文・沈線文(雲形文)	瀬戸編文		21-2

第327図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(13)

していると考えられる。ケズリにより、腕部が作出されている。第333図2のイモ貝形石製品は、A区中央付近で渦巻の面を上に向けて出土した。凝灰岩を石材としている。中央に1ヶ所孔が穿たれている。第334図1の線刻礫は、凝灰岩を石材としている。表裏両面に線刻が施され、上端と下端にクランク状の線刻が施される。第334図2の線刻礫は、調査区北側付近で出土した。扁平でやや楕円形の凝灰岩を石材にしていると考えられる。表裏両面に線刻が施されている。第334図3の有孔石製品は、凝灰岩を石材としている。孔が2ヶ所縦位に並べて穿たれている。

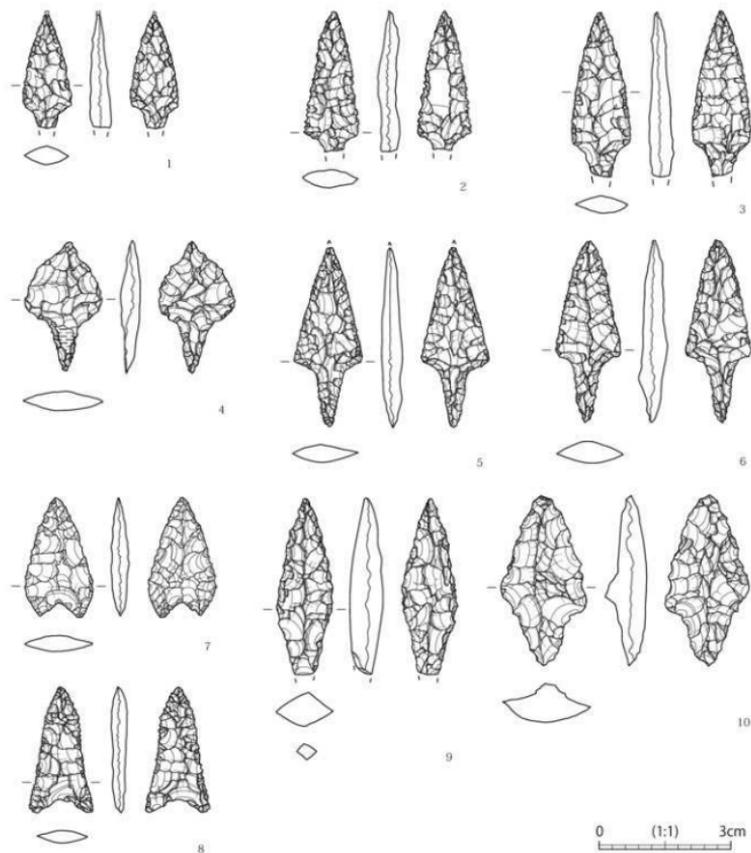
IV a3層及びB・C区IV a層から出土した遺物のうち、深鉢形土器6点(第334図4～8、第335図1)、鉢形土器1点(第337図2)、浅鉢形土器1点(第335図2)、小型鉢1点(第335図3)、壺形土器5点(第335図4～7、第337図6)、注口土器2点(第335図8・9)、ミニチュア土器1点(第337図3)、石鏝1点(第336図1)、尖頭器1点(第337図4)、搔器1点(第336図2)、磨製石斧2点(第336図3・4)、石錘1点(第336図5)、線刻礫1点(第336図6)、打製の円盤状石製品1点(第337図1)、敲石1点(第337図5)が出土した。深鉢形土器の口縁文様帯には横位沈線の他に、三叉文、玉抱き三叉文、魚眼状三叉文が多くみられる。壺形土器は、胴部中位に最大径を有する。頸部は、内傾するもの他に、外反するものもみられる。第336図4の磨製石斧は、蛇紋岩を石材としている。右側縁部に、擦切技法の痕跡を残す。第336図6の線刻礫は、やや厚みのある楕円礫を素材としている。上下端に敲打痕を、側縁にケズリの痕跡を残す。線刻は、表面にのみ3条横位に施されている。



№	図録番号	調査区	層位	種別	形態	文様等	備考	写真掲載
1	A-052	A区	IV a2	縄文土器	鉢	外周・1線部～内周：ミ字巾 内周・ミ字巾	内周部に赤彩を僅かに残す。	21-3
2	A-057	A区	IV a2	縄文土器	浅鉢形土器	外周・線部～1線部・内周・線部・刻目文・線部・沈線文		21-4
№	図録番号	調査区	層位	種別	形態	文様等	備考	写真掲載
3	P-006	A区	IV a2	土製品	ミニチュア土器	ミ字巾 × × × 0.85倍	外周・内周・1線部文・ミ字巾・内周・ミ字巾・内周・ミ字巾	21-5
4	P-013	A区	IV a2	土製品	瓦器	1.9 × 1.7 × .271	ミ字巾 裏面に赤彩を僅かに残す。	21-6
5	P-012	A区	IV a2	土製品	土鏝	刃縁 × 2.3 × 2.6 刃厚0.9	左側縁部、両側部欠損	21-7

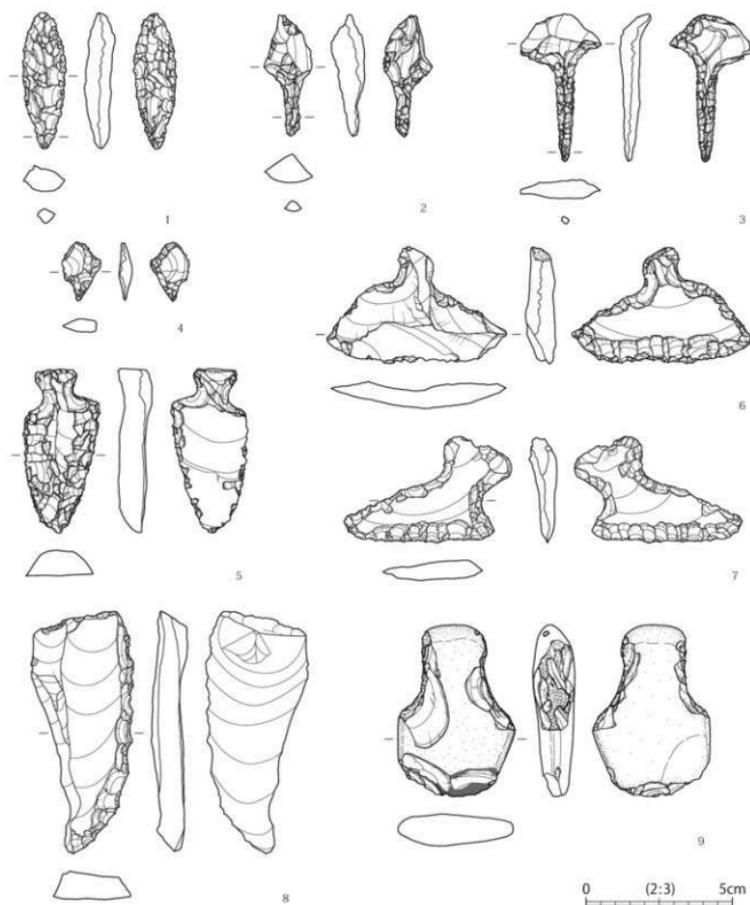
第328図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(14)

第6節 川前遺跡



No.	登録番号	調査区	層位	種別	部種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	備考	写真掲載
1	Ka 027	A区	IV a2	打製石函	石鏃	頁岩	(2.2) × 1.1 × 0.5 (1.18)			21-8
2	Ka 029	A区	IV a2	打製石函	石鏃	石灰岩	(3.2) × 0.9 × 0.4 (1.38)			21-9
3	Ka 034	A区	IV a2	打製石函	石鏃	頁岩	(3.8) × 1.4 × 0.5 (1.99)			21-10
4	Ka 035	A区	IV a2	打製石函	石鏃	頁岩	3.1 × 1.8 × 0.5 (1.36)			21-11
5	Ka 041	A区	IV a2	打製石函	石鏃	頁岩	4.2 × 1.6 × 0.5 (1.71)			21-12
6	Ka 028	A区	IV a2	打製石函	石鏃	頁岩	4.2 × 1.5 × 0.5 (2.27)		アスファルト付蝕。	21-13
7	Ka 006	A区	IV a2	打製石函	石鏃	砂岩	2.8 × 1.6 × 0.4 (1.02)			21-14
8	Ka 007	A区	IV a2	打製石函	石鏃	礫石	2.9 × 1.4 × 0.4 (1.03)		形跡僅残。アスファルト付蝕。	21-15
9	Ka 002	A区	IV a2	打製石函	石鏃	頁岩	(4.1) × 1.3 × 0.8 (3.02)		付着物有り。	21-16
10	Ka 008	A区	IV a2	打製石函	石鏃	礫石	3.9 × 2.0 × 0.9 (3.93)		未成形。	21-17

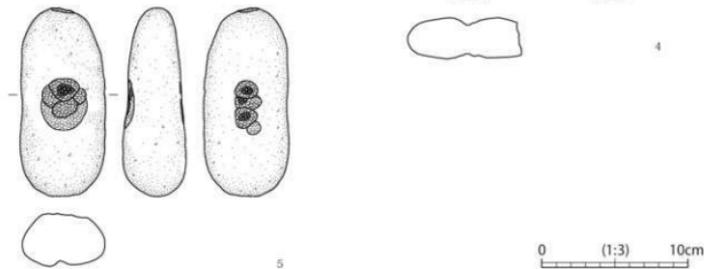
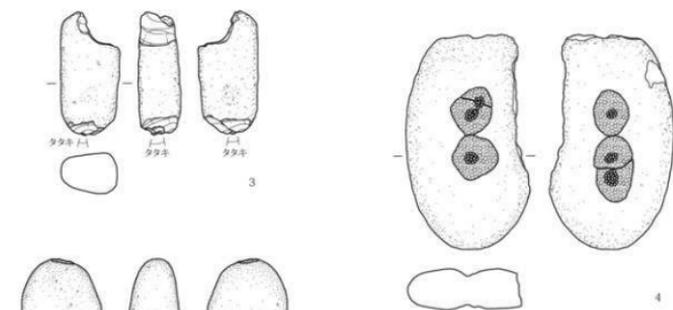
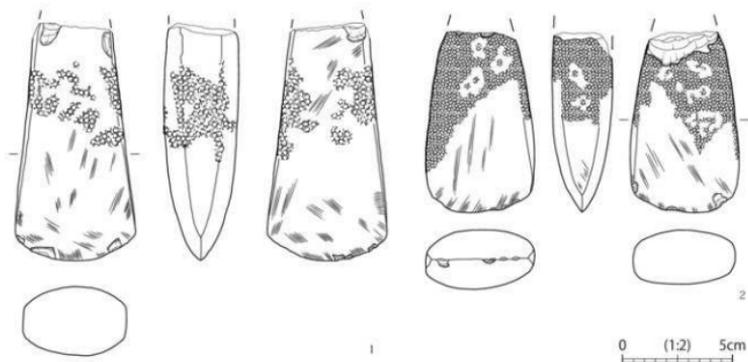
第 329 図 IV a2 層 (A 区) 遺物包含層出土遺物 (15)



No.	登録番号	遺存区	層位	種別	形状	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真図版
1	Ka 006	A区	IV a2	打製石函	石鏃	斑岩	4.7 × 1.5 × 0.9	6.69		21.18
2	Ka 030	A区	IV a2	打製石函	石鏃	斑岩	4.2 × 1.6 × 1.3	4.51		21.19
3	Ka 018	A区	IV a2	打製石函	石鏃	斑岩	5.3 × 2.7 × 0.7	4.26		21.20
4	Ka 019	A区	IV a2	打製石函	石鏃	鉄石系	2.0 × 1.2 × 0.5	0.80		21.21
5	Ka 010	A区	IV a2	打製石函	石鏃	斑岩	5.7 × 2.4 × 0.9	14.11		22.1
6	Ka 011	A区	IV a2	打製石函	石鏃	斑岩	4.1 × 6.1 × 1.5	15.07		22.2
7	Ka 013	A区	IV a2	打製石函	石鏃	斑岩	3.6 × 3.6 × 0.9	10.3		22.3
8	Ka 021	A区	IV a2	打製石函	鏃頭	斑岩	8.3 × 3.5 × 8.0	29.75	断面に黒色物付着。	22.4
9	Ka 020	A区	IV a2	打製石函	打製石鏃	斑岩	11.0 × 8.1 × 2.2	274.82		22.5

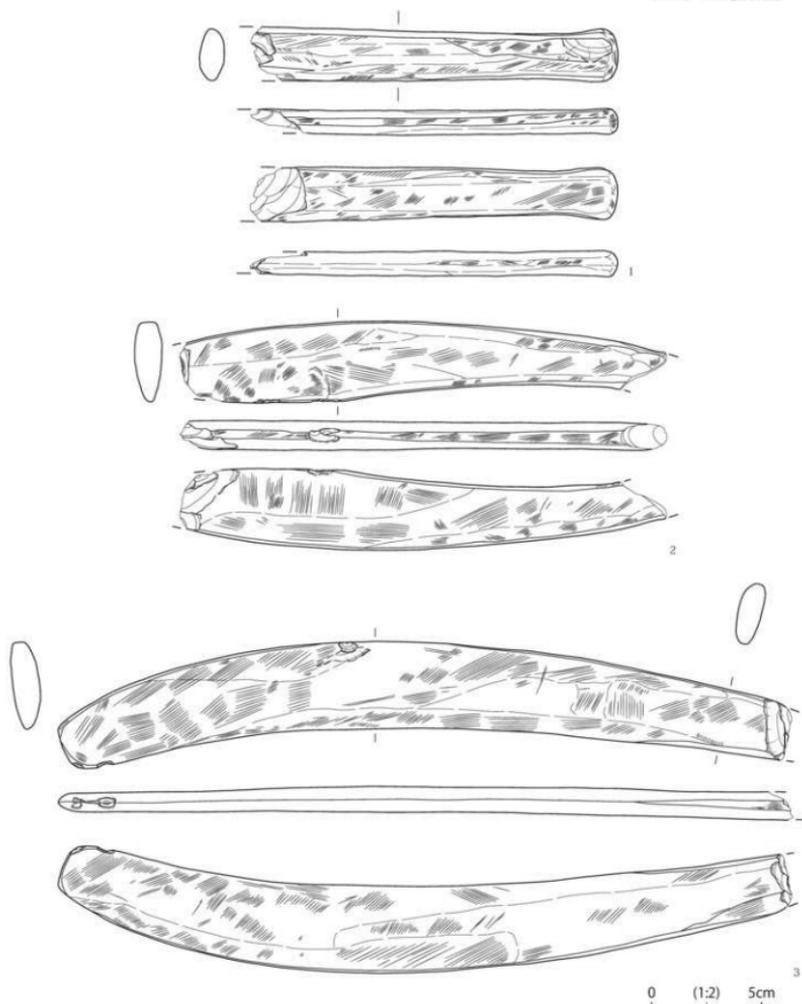
第330図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(16)

第6節 川前遺跡



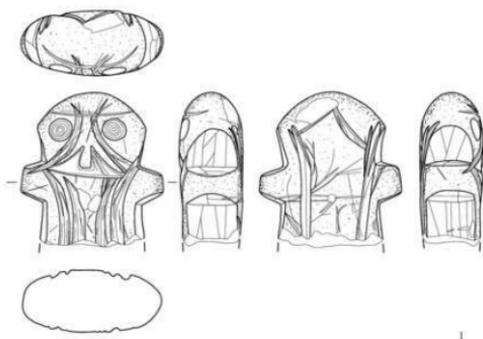
No.	登録番号	調査区	層位	種類	刃種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真No.
1	Ks-003	A区	IV a2	磨製石器	葉形石矛	緑閃石	111.0 × 5.5 × 3.1	100.200		局部×9倍
2	Ks-004	A区	IV a2	磨製石器	葉形石矛	砂岩	18.2 × 4.2 × 2.5	176.54		局部×9倍
3	Ks-009	A区	IV a2	磨製石器	短石	白灰岩片	8.6 × 3.2 × 2.7	148.81		22.8
4	Ks-003	A区	IV a2	磨製石器	円石	砂岩	119.8 × 8.0 × 2.8	560.54		22.6
5	Ks-007	A区	IV a2	磨製石器	円・扁石	緑閃石	11.0 × 5.7 × 3.8	245.78		22.10

第331図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(17)

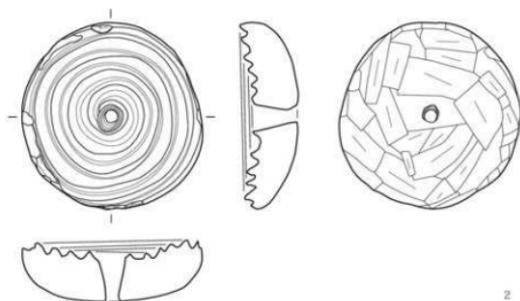


No.	登録番号	調査区	層位	種類	形種	石種	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真掲載
1	Rd 006	A区	IV a2	石製品	石片	粘板岩	116.7 × 2.4 × 1.2 (77.8)		先端部欠損。	22-11
2	Rd 007	A区	IV a2	石製品	石片	粘板岩	22.2 × 3.6 × 1.3 (155.6)		先端部、側部欠損。	22-12
3	Rd 008	A区	IV a2	石製品	石片	粘板岩	23.4 × 4.9 × 1.2 (219.8)		先端部欠損。	23-1

第332図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(18)



1



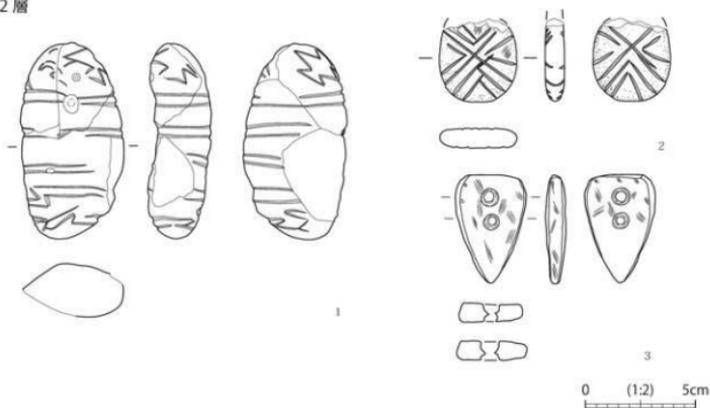
2

0 (1:2) 5cm

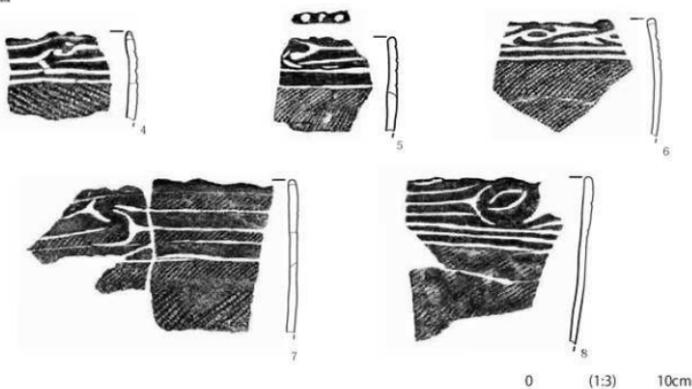
No.	発掘層号	調査区	掘削	層位	遺構	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真枚数
1	K6-009	A区	IV a2	右側法	石俵	燧石片	27.3 × 6.5 × 2.8 (87.8%)			23.2
2	K6-011	A区	IV a2	右側法	石俵(石片置込)	燧石片	8.0 × 8.4 × 3.0 (101.8%)		厚紙1枚貼	23.3

第333図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(19)

## IV a2 層



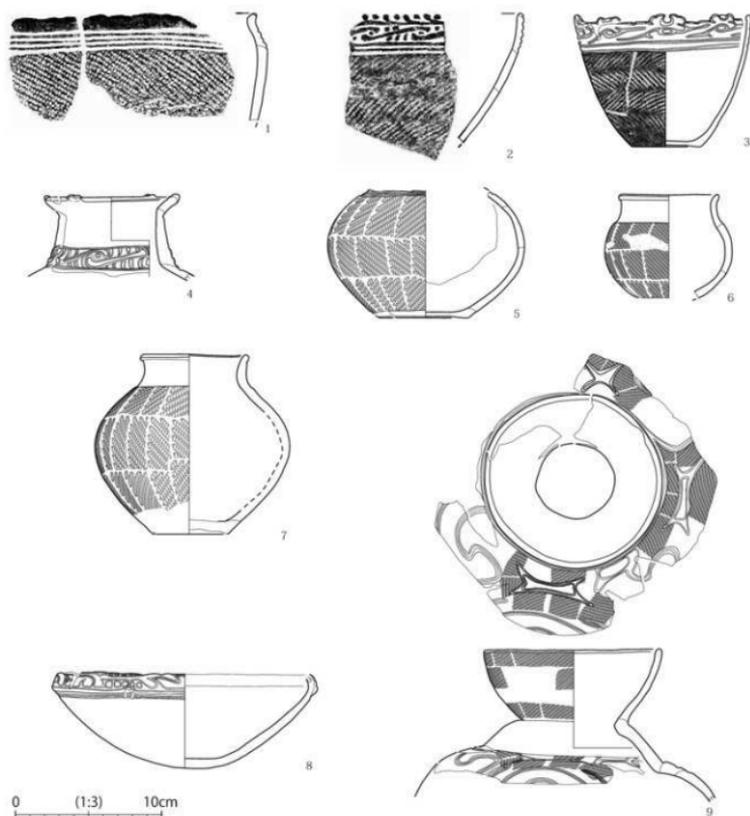
## IV a3 層



№	登録番号	調査区	部位	種類	器種	石群	長さ・幅・厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真掲載
1	K4-010	A区	IV a2	石製品	輪切器	麻切刃	9.2 × 4.9 × 3.8	52.04		23.4
2	K4-003	A区	IV a2	石製品	輪切器	麻切刃	(2.8) × 3.5 × 0.8	(11.6)g	上部欠色	23.5
3	K4-002	A区	IV a2	石製品	有孔石製品	麻切刃	3.0 × 3.3 × 0.9	16.53	厚さ 2.7mm	23.6
№	登録番号	調査区	部位	種類	器種	石群	全像等		備考	写真掲載
4	A-125	A区	IV a3	縄文土器	深鉢	片原	外周・1(内縁)・中(底) 黒紋(黒) 1(縁部) 浅緑文 浅緑文(土胎中・又文)			23.7
5	A-163	A区	IV a3	縄文土器	深鉢	片原	外周・1(内縁)・中(底) 黒紋(黒) 1(縁部) 浅緑文(黒縁部・又文) 浅緑文(内周)・土胎中			23.8
6	A-131	A区	IV a3	縄文土器	深鉢	片原	外周・1(内縁)・中(底) 黒紋(黒) 1(縁部) 浅緑文(土胎中・又文) 浅緑文(内周)・土胎中			23.9
7	A-128	A区	IV a3	縄文土器	深鉢	片原	外周・1(内縁)・中(底) 黒紋(黒) 1(縁部) 浅緑文(土胎中・又文) 浅緑文(内周)・土胎中			24.1
8	A-164	A区	IV a3	縄文土器	深鉢	片原	外周・1(内縁)・中(底) 黒紋(黒) 1(縁部) 浅緑文(内周)・又文) 浅緑文(内周)・土胎中			24.2

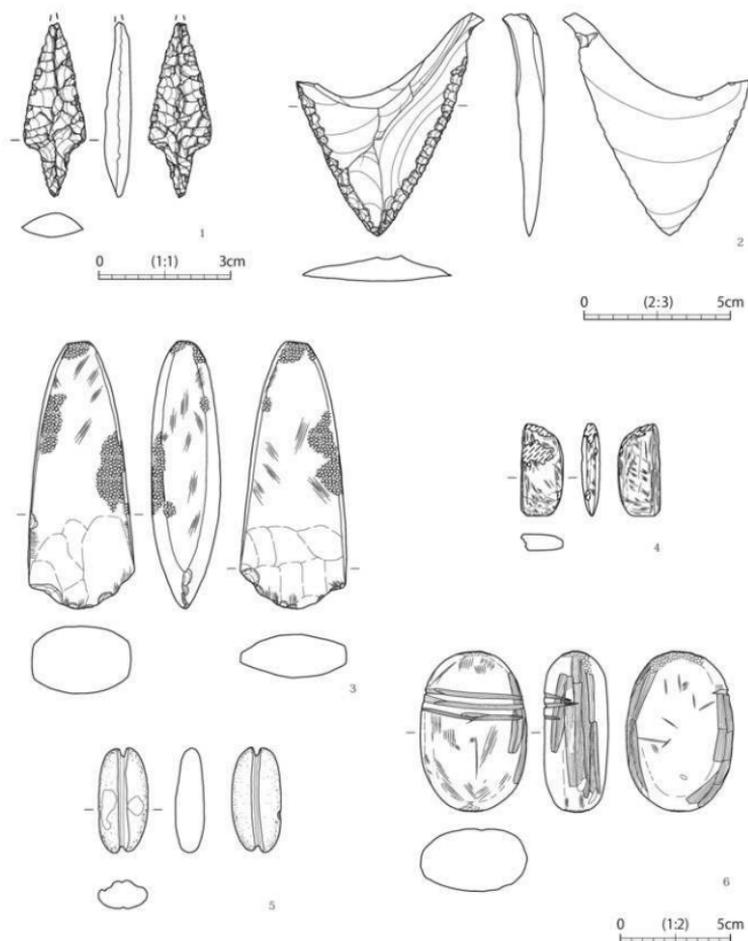
第334図 IV a2層(A区)遺物包含層出土遺物(20)・IV a3層(A区)遺物包含層出土遺物(1)

第6節 川前遺跡



№	登録番号	調査区	地層	種類	器種	土器名	備考	写真図例
1	A-127	A区	IV a3	縄文土器	深鉢	内面：1段部：小波打/縞 1段部：波線文、土器名、刷部：縦、横文 内面：土器名		24.3
2	A-129	A区	IV a3	縄文土器	浅鉢	内面：1段部：斜日文 1段部：波線文(玉粒を伴った文) 波線文、刷部：1段横文 内面：土器名		24.4
3	A-109	A区	IV a3	縄文土器	小型鉢	内面：1段部：斜紋 斜日文 1段部：波線文(魚骨状/文文) 刷部：1段横文、縦、横文(点状を横文) 内面：土器名		24.5
4	A-132	A区	IV a3	縄文土器	甕	内面：1段部：小波打 波線文 1段部：刷部：土器名、30部：波線文(玉粒を伴った文) 1段横文、内面：1段部：波線文、1段部：刷部：土器名	内外面に赤彩を施すに特す。	24.6
5	A-124	A区	IV a3	縄文土器	甕	内面：刷部：波線文、1段横文、縦、横文(点状を横文) 底部：刷部横文 内面：十字		24.7
6	A-130	A区	IV a3	縄文土器	甕	内面：1段部：刷部：土器名、底部：刷部：縦、横文、内面：土器名		24.8
7	A-122	A区	IV a3	縄文土器	甕	内面：1段部：刷部：土器名、底部：刷部：縦、横文、縦、横文(点状を横文) 内面：1段部：刷部：土器名、底部：刷部：十字		24.9
8	A-123	A区	IV a3	縄文土器	片口土器	内面：刷部：波線文(字面状文) 刷部横文、刷部：底部：土器名		24.10
9	A-126	A区	IV a3	縄文土器	片口土器	内面：1段部：1段横文、刷部：土器名、底部：1段横文、波線文(点状を伴った)、刷部、横文、内面：1段部：土器名、底部：刷部：十字		24.11

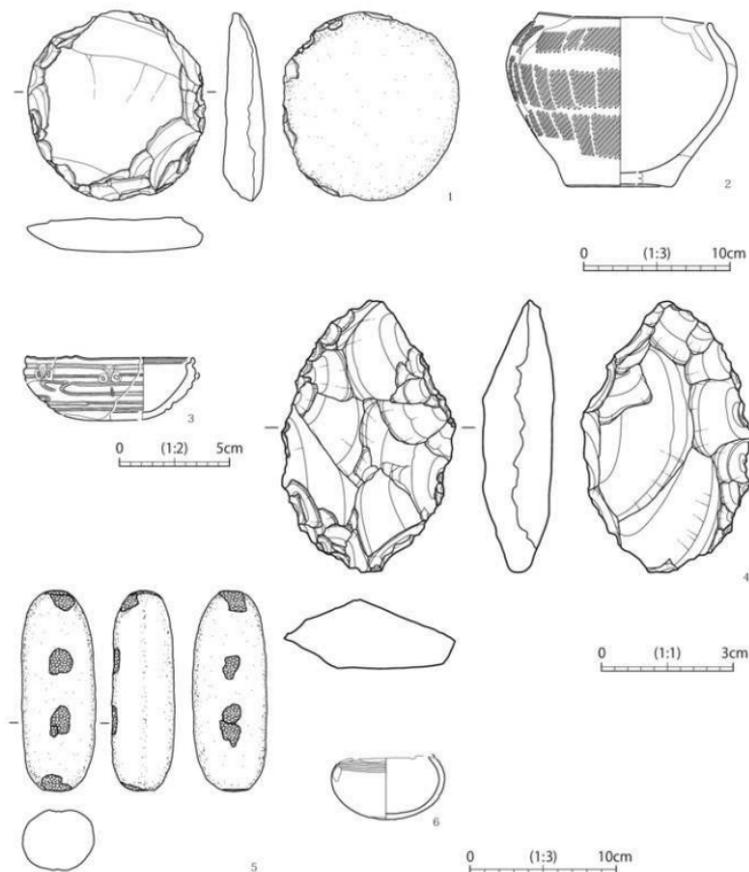
第335図 IV a3層(A区)遺物包含層出土遺物(2)



品	登録番号	調査区	層位	種類	材質	石種	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真掲載
1	Ka-001	A区	IV a3	打製石器	石鏃	鉄石	4.11 × 1.5 × 0.6 (2.30)			25.1
2	Ka-003	A区	IV a3	打製石器	鏃頭	河石	7.7 × 5.6 × 0.8 (19.10)			25.2
3	Kb-007	A区	IV a3	磨製石器	磨製石鏃	河石	17.4 × 4.9 × 3.1 (240.90)			25.3
4	Kb-005	A区	IV a3	磨製石器	磨製石鏃	燧石	4.2 × 1.9 × 0.7 (10.12)		磨製程度	25.4
5	Kd-015	A区	IV a3	打製石	石鏃	河石	4.8 × 2.1 × 1.3 (12.03)			25.5
6	Kd-004	A区	IV a3	打製石	磨製鏃	燧石	7.4 × 4.85 × 2.9 (74.80)			25.6

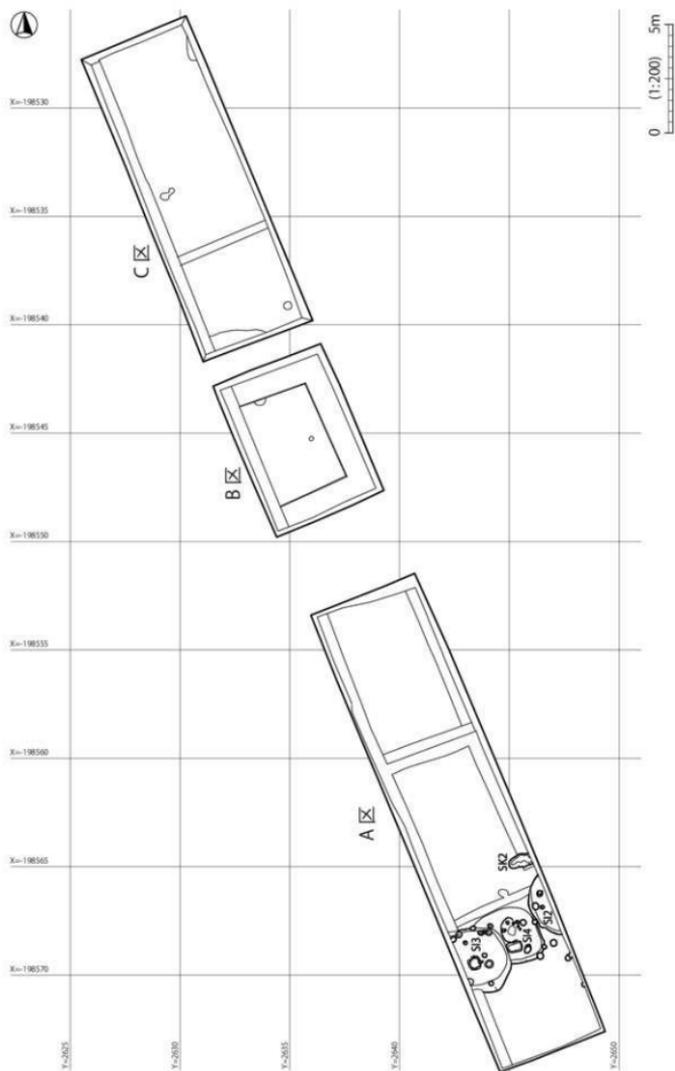
第336図 IV a3層(A区)遺物包含層出土遺物(3)

第6節 川前遺跡



No.	図録番号	調査区	単位	種別	品種	文様等	備考	写真掲載	
2	A-040	B区	IV a	縄文土器	鉢	外面：1編部：三つ弁・編部：1段縄文	外面中々厚減	25.6	
6	A-090	C区	IV a	縄文土器	甕	外面：編部：浅縄文・編部-底部：三つ弁・底面：浅縄文 内面：編部-底面：十字	外面中々の厚	25.6	
No.	図録番号	調査区	単位	種別	品種	器型・形状・厚さ等(単位：mm)	器型・形状・厚さ等	写真掲載	
3	P-007	B区	IV a1	土器類	ヒコチホア 土器	---X---X--- 00.30	外面：1段縄文・中間段：1編部・浅縄文・編部-底面・ 底面：浅縄文・三つ弁・内面：1編部・浅縄文・1編 部-底面・三つ弁・浅縄文・(打痕) * --- 底面	25.10	
No.	図録番号	調査区	単位	種別	品種	寸法	器型・形状・厚さ等(単位：mm)	備考	写真掲載
1	Ka-038	A区	IV a3	打製石器	石鏃	縦長形	131 × 12.0 × 2.7 425.18		25.7
4	Ka-015	B区	IV a	打製石器	尖頭部	長短形	6.3 × 3.9 × 1.6 34.92		25.11
5	Ka-084	C区	IV a	磨石器	門+磨石	縦長形	13.8 × 5.1 × 4.3 363.60		25.12

第337図 IV a3層(A区)遺物包含層出土遺物(4)・IV a層(B・C区)遺物包含層出土遺物



第 338 図 川前遺跡V b) 竪横構配平面図

## 第6節 川前遺跡

### 2. IV b1 層の調査

基本層IV b1層上面(縄文時代の遺構検出面)において、竪穴住居跡3軒、土坑1基、ピット16基を検出した。ピットは建物等の組み合わせを検討したが、明確なものは確認されなかった。ピットについては遺構配置図にのみ表示している。

#### (1) IV b1 層検出遺構と出土遺物(第338～348図、図版4～7・25～29)

##### 1) 竪穴住居跡

###### S12 竪穴住居跡(第339・340図、図版5・25・26)

[位置] 調査区南側に位置する。東側は調査区外へ延びる。

[重複関係] P1・4と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は南北295cm以上、東西93cm以上である。平面形は円形と考えられる。柱穴・周溝・掘り方は検出されていない。

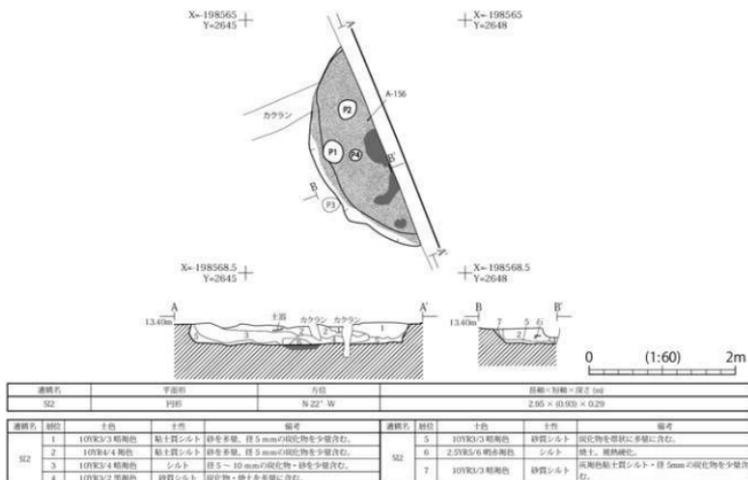
[堆積土] 7層に分層された。1～7層は住居堆積土である。

[壁面] 西・南壁は床面からやや外傾して立ち上がり、北壁は床面から内湾して立ち上がる。壁高は床面から最大29cmである。

[床面] 基本層IV b層を床面とし、概ね平坦である。全体に炭化物が検出された。

[炉] 住居中央付近で、炉跡と考えられる被熱範囲を検出した。平面形は不整形である。最も赤色硬化した範囲が炉として機能していた範囲と考えられる。

[出土遺物] 住居堆積土から縄文土器、礫石器が出土しており、深鉢形土器3点(第340図1～3)、注口土器2点(第340図4・5)を図示した。住居堆積土から縄文時代後期末葉～晩期初頭の土器が出土し、本住居跡が縄文時代晩期の遺物包含層に覆われていることから、本住居跡の時期は縄文時代後期末葉～晩期初頭と考えられる。



第339図 S12 竪穴住居跡平面図・断面図

## S13 竪穴住居跡(第341・342図、図版5・6・26)

[位置] 調査区南側に位置する。西側は調査区外へと延びる。

[重複関係] S14、P28・29・31・32と重複関係にあり、S14より新しく、P28・29・31・32より古い。

[規模・形態] 規模は南北321cm以上、東西216cmである。平面形は不整形円形と考えられる。柱穴・周溝は検出されていない。

[堆積土・構築土] 8層に分層された。1・2層は住居堆積土、3～5層は跡関連層位、6～8層は掘り方埋土である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大20cmである。

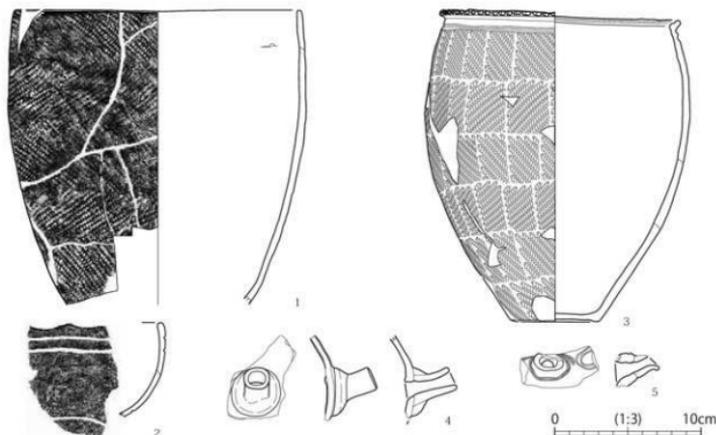
[床面] 掘り方埋土上面を床面とし、やや起伏する。住居南側で立石を検出した。長さ20cm程の棒状の自然礫で、被熱の痕跡はない。掘り方は無く、住居掘り方埋土中の縄文土器を貫通していた。

[炉] 住居中央付近で検出した。規模は長軸63cm、短軸60cmで、平面形は円形である。4～25cmの礫が配された石組である。長軸73cm、短軸71cm、深さ5cmで、平面形が不整形円形の掘り方を有する。

[その他の施設] 床面で6基のピット(P1～6)を検出した。規模は長軸17～38cm、短軸12～35cm、深さ8～24cmである。平面形は不整形円形ないし不整形円形で、断面形はU字形ないし逆台形を呈する。

[掘り方] 深さ22～31cmである。住居東側は瓢箪型に掘り込まれる。

[出土遺物] 住居堆積土、P3・5・6、掘り方埋土から縄文土器、打製石器、礫石器が出土しており、深鉢形土器4点(第324図1～4)、鉢形土器1点(第342図5)、石匙1点(第342図6)、石錘1点(第342図7)を図示した。掘り方埋土から縄文時代後期後葉の土器が出土し、本住居跡が縄文時代晩期の遺物包含層に覆われていることから、

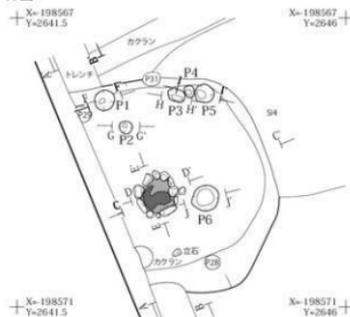


No.	図録番号	遺物の名	単位	層位	材質	形状	備考	写真掲載
1.	A-156	S12	1	縄文土器	深鉢	内面・底・縁文 [朱縄文(赤紐朱縄文)] 内面・口唇弁		25-13
2.	A-153	S12	2	縄文土器	深鉢	内面・口唇部(底唇)縁文 [朱縄文(赤紐朱縄文) 朱縄文] 内面・口唇弁	内面朱縄文	25-14
3.	A-318	S12	6	深鉢	深鉢	内面・口唇部(底唇)縁文 [朱縄文(赤紐朱縄文) 朱縄文] 内面・口唇弁	内面朱縄文	26-1
4.	A-155	S12	3	縄文土器	口付土器	内面・口唇部(底唇)縁文 [朱縄文(赤紐朱縄文) 朱縄文] 内面・口唇弁	内面朱縄文	26-2
5.	A-154	S12	1	縄文土器	口付土器	内面・口唇部(底唇)縁文 [朱縄文(赤紐朱縄文) 朱縄文] 内面・口唇弁	内面朱縄文	26-3

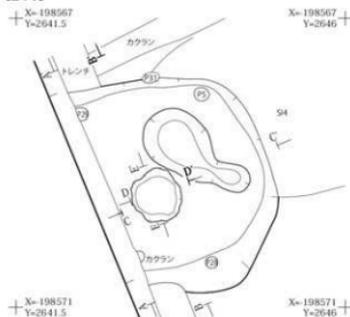
第340図 S12 竪穴住居跡出土遺物

第6節 川前遺跡

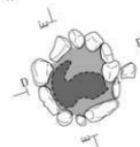
床面



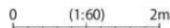
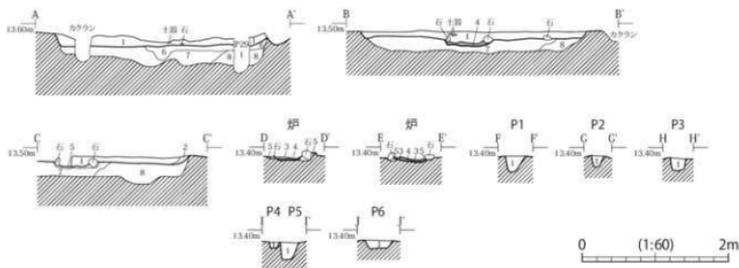
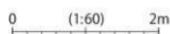
掘り方



炉



炉掘り方



遺構名		平面図		断面図		目録		目録・知数・段差 (mm)	
S3		本型内部		N 28° W				3.21 × (2.16) × 0.20	
番号	平面図	断面図	目録・知数・段差 (mm)		番号	平面図	断面図	目録・知数・段差 (mm)	
P1	本型内部	U字部	0.28 × 0.27 × 0.21		P4	本型内部	U字部	0.17 × 0.12 × 0.08	
P2	本型内部	U字部	0.18 × 0.16 × 0.15		P5	本型内部	U字部	0.27 × 0.25 × 0.24	
P3	本型内部	U字部	0.25 × 0.17 × 0.17		P6	本型内部	凹形部	0.38 × 0.35 × 0.11	

遺構名	部位	土色	土質	備考	遺構名	部位	土色	土質	備考		
S3	1	10YR5/3 軽褐色	砂質シルト	に濃い黄褐色粘土質シルトブロック・径5mmの腐植物を少量含む。	S3	7	10YR3/3 軽褐色	シルト	径10～30mmの腐植物質シルトブロックを少量含む。径5mmの腐植物を少量含む。		
	2	10YR3/3 軽褐色	砂質シルト	径5mmの腐植物を少量含む。		8	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	径10mmの腐植物質シルトブロックを少量含む。		
	3	10YR3/3 軽褐色	砂質シルト	径5mmの腐植物を少量含む。		P1	1	10YR3/4 軽褐色	粘土質シルト	軽褐色砂質シルトを少量含む。径5mmの腐植物を少量含む。	
	4	5YR4/6 赤褐色	シルト	粘土、炭粉混入。軽褐色粘土質シルト・径5mmの腐植物を少量含む。			P2	1	10YR3/4 軽褐色	粘土質シルト	径2mmの腐植物を少量含む。
	5	10YR3/3 軽褐色	砂質シルト				P3	1	10YR3/4 軽褐色	粘土質シルト	径5mmの腐植物を少量含む。
	6	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	径10～30mmの腐植物質粘土質シルトブロック・径5mmの腐植物を少量含む。			P4	1	10YR3/4 軽褐色	粘土質シルト	径5mmの腐植物を少量含む。
					P5	1	10YR3/4 軽褐色	粘土質シルト	径5mmの腐植物を少量含む。		
					P6	1	10YR3/4 軽褐色	粘土質シルト	径5mmの腐植物を少量含む。		

第341図 S33 竪穴住居跡平面図・断面図



## 第6節 川前遺跡

本住居跡の時期は縄文時代後期末葉～晩期初頭と考えられる。

### SI4 竪穴住居跡 (第343・344 図、図版6・26・27)

[位置] 調査区南側に位置する。

[重複関係] SI3、P3・5・6・8・30・31と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は南北276cm、東西170cm以上である。平面形は不整形円形と考えられる。柱穴・周溝は検出されていない。

[堆積土・構築土] 11層に分層された。1・2層は住居堆積土、3・4層は炉跡内堆積土、5～9層は炉跡関連層位、10・11層は掘り方埋土である。

[壁面] 床面から外傾して立ち上がる。壁高は床面から最大9cmである。

[床面] 掘り方埋土上面及び基本層IV b1層を床面とし、やや起伏する。

[炉] 住居中央付近で検出した。規模は長軸78cm、短軸54cmで、平面形は楕円形と考えられる。炉の南西側で14～17cm程の自然礫が出土しており、北東側では礫の採取痕を検出した事から石組炉と考えられる。これら自然礫のうち、接合関係が確認出来たものがあり、自然礫を破砕して炉石として使用していることが考えられる。長軸1.15m、短軸77cm、深さ3cmで、平面形が不整形楕円形と考えられる掘り方を有する。

[その他の施設] 床面で土坑1基(SK1)、ピット2基(P1・2)を検出した。SK1は、住居南側に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸69cm、短軸45cm、深さ20cmである。堆積土は2層である。規模と位置関係から、貯蔵穴ないし炉跡に関連する遺構と考えられる。ピットの規模は長軸25cm、短軸9～21cm、深さ6cmである。平面形は不整形円形ないし楕円形で、断面形は逆台形を呈する。

[掘り方] 深さ9cmである。住居南東側を僅かに掘り込む。底面は概ね平坦である。

[出土遺物] 住居堆積土、炉跡掘り方埋土、SK1から縄文土器、石製品が出土しており、深鉢形土器1点(第344図1)、注口土器2点(第344図2・3)、小型鉢1点(第344図4)を図示した。図示はしていないが、住居堆積土から縄文時代後期末葉の土器が出土し、本住居跡が縄文時代晩期の遺物包含層に覆われていることから、本住居跡の時期は縄文時代後期末葉～晩期初頭と考えられる。

### 2) 土坑

SK2土坑(第345図、図版6)調査区南側で検出した。東側は調査区外へ延びる。平面形は不整形で、長軸方向はN-67°Eである。規模は長軸104cm以上、短軸65cm、深さ15cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は皿形で、底面は起伏する。堆積土は2層に分層された。堆積土中より縄文土器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

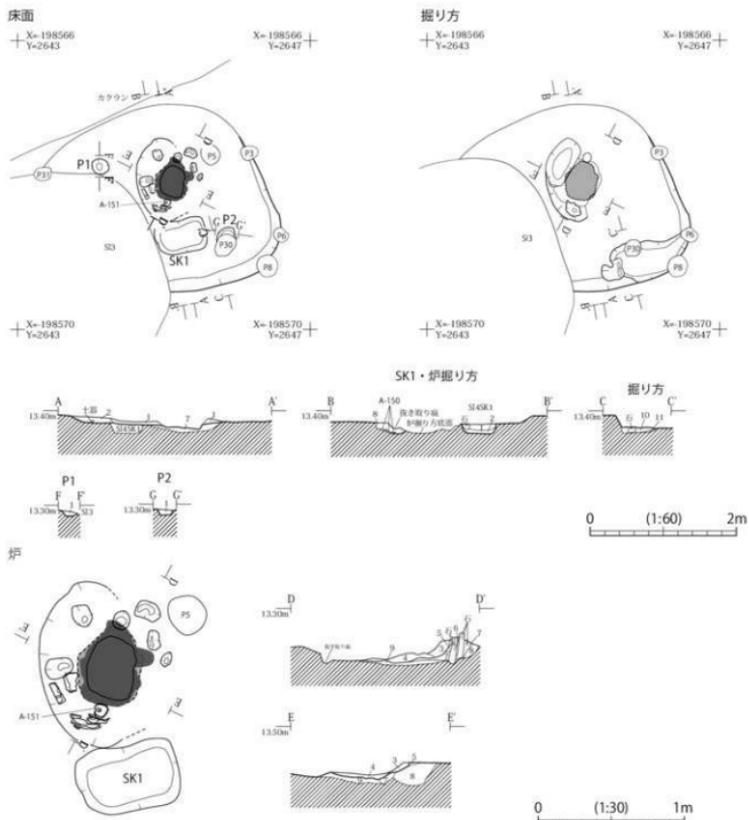
### 3) ピット(第338図)

16基のピットを検出した。A区南側の竪穴住居跡付近に集中する。堆積土中より縄文土器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

### (2) IV b1層出土遺物(第346～348図、図版27～29)

IV b1層は、遺物包含層である。層厚は、18～30cmを測り、各調査区において確認された。緩やかに起伏しており、A区南側から北へ向かって緩やかに下り、B区から北へ向かって緩やかに上がる。

縄文土器、打製石器、磨製石器、礫石器、石製品、土製品が出土しており、深鉢形土器5点(第346図1～4、第348図6)、鉢形土器3点(第346図5、第347図1、第348図5)、浅鉢形土器2点(第347図2・3)、台付鉢1点(第347図4)、壺形土器4点(第346図6、第347図5～7)、器種不明土器1点(第347図8)、土偶2点(第347図9、第348図1)、不明土製品1点(第347図10)、石鏃1点(第348図2)、石錐1点(第348図3)、蔽石1点(第348図4)、を図示した。深鉢形土器の口縁部文様帯には、三叉文や玉抱き三叉文が施されている。



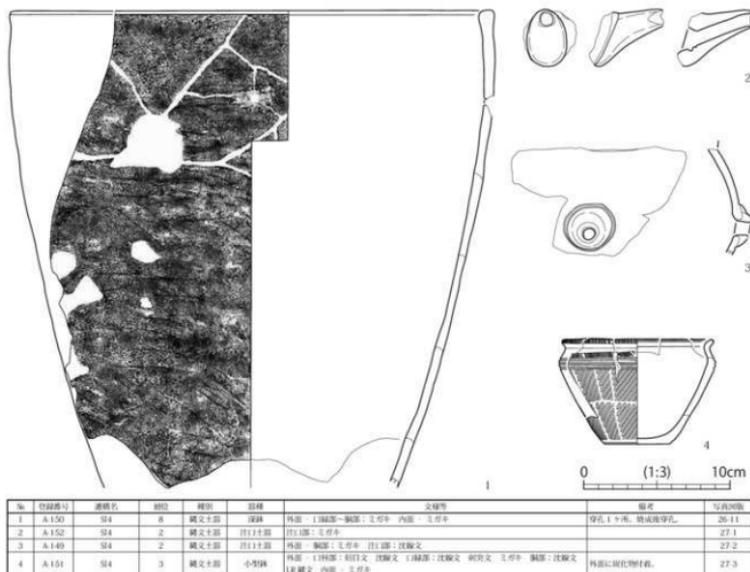
遺構名	平面形	方位	長軸×短軸×深さ(m)
S14	半楕円形	北27°西	(2.70) × (1.70) × 0.09
P1	半楕円形	南48°西	0.25 × 0.21 × 0.06
P2	半楕円形	南47°西	0.25 × 0.09 × 0.06
SK1	長方形	南47°西	0.69 × 0.45 × 0.20

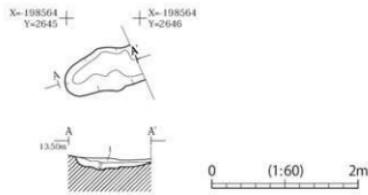
遺構名	階位	土色	土層	備考		遺構名	階位	土色	土層	備考	
				厚	説明					厚	説明
S14	1	10YR4/3に濃い黄褐色	砂質シルト	厚 10 ~ 20 mmの褐色シルトブロックを少量含む。		S14	9	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	厚 2 ~ 3 mmの炭化物を少量含む。	
	2	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	厚 5 mmの炭化物を少量含む。			10	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	厚 5 ~ 10 mmの炭化物・砂粒を多量に含む。	
	3	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト			11	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	厚 5 mmの炭化物を少量含む。		
	4	5YR6/6 赤褐色	シルト	焼土。		P1	1	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	厚 5 mmの炭化物を多量に含む。	
	5	10YR4/4 黄褐色	砂質シルト				P2	1	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	厚 2 mmの炭褐色粘土を少量、厚 5 mmの炭化物を多量に含む。
	6	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト			SK1		1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	厚 5 ~ 10 mmの炭化物・砂を多量に含む。
	7	10YR4/3に濃い黄褐色	砂質シルト	褐色色砂質シルトブロック・厚 10 mmの焼土を少量含む。			2	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	厚 5 mmの炭化物を少量含む。	
	8	10YR4/3に濃い黄褐色	砂質シルト	厚 5 mmの炭化物を少量含む。							

第 343 図 S14 竪穴住居跡平面図・断面図

第6節 川前遺跡



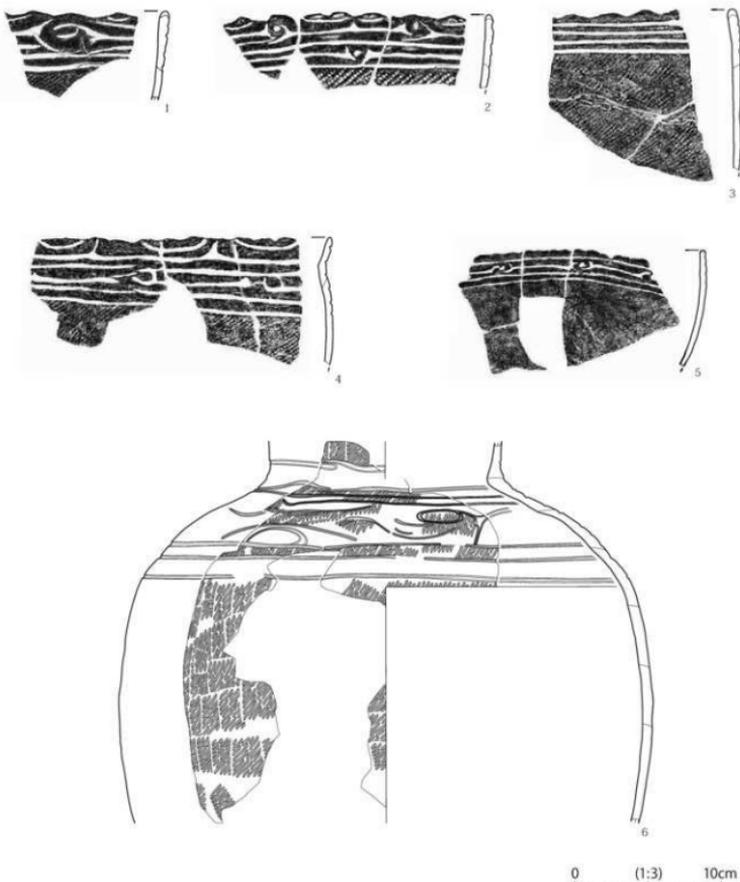
第344図 SS4 竪穴住居跡出土物



遺物名	平面形	断面形	方位	直径×幅(深さ) (m)	遺物名	単位	土色	土性	備考
SK2	不明形	矩形	N-67° E	0.041 × 0.05 × 0.15	SK2	1	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	径1~5mmの炭化物を微量含む。
					SK2	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	径0~10mmの炭化物を多数含む。

第345図 SK2 土坑平面図・断面図

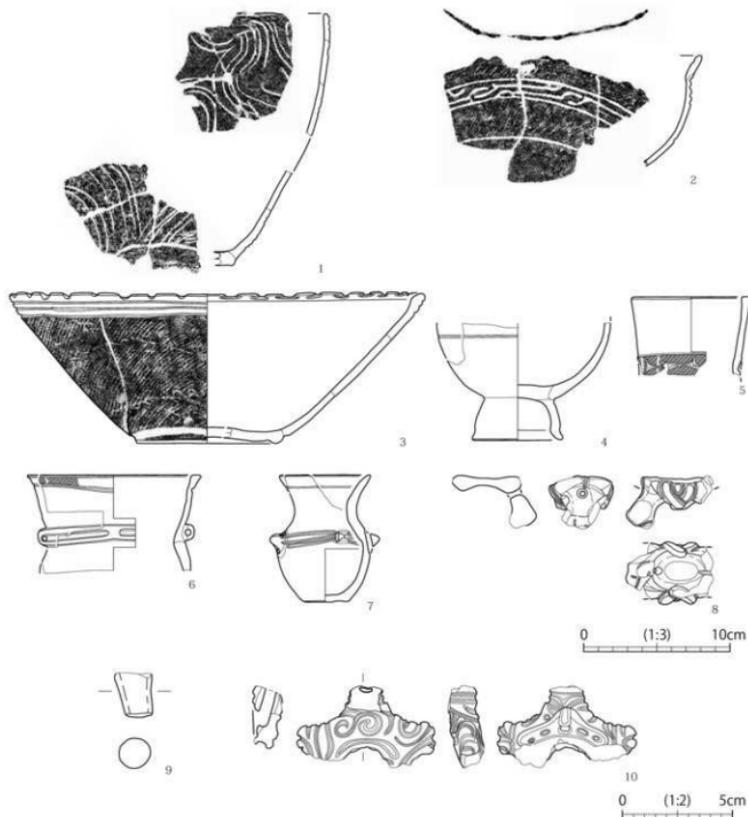
鉢形土器は、第347図1の様に櫛歯状工具による蛇行した条線を施すものもみられる。第347図6・7の壺形土器は、頸部や胴部に橋状突手や瘤状突起が施されている。第347図10は不明土製品である。全体に沈線で文様が施されており、裏面の凹みには5個の瘤状突起が施されている。僅かではあるが、全体に赤彩が残る。第348図1は土偶の脚部である。膝部には沈線による円形が施され、大腿部にも沈線が施されている。第348図2は石籤である。頁岩を石材にしている。縁辺部にのみ調整が行われている。



No.	登録番号	調査区	単位	種類	仕様	文様等		番号	写真回数
						外周	内周		
1	A-138	A区	IV b1	織文土器	深鉢	外周：1.押部：流石1線 1.縁部：沈線文 沈線文(3文文) 胴部：1.赤織文 内周：3.竹文			27.4
2	A-142	A区	IV b1	織文土器	深鉢	外周：1.押部：流石1線 1.縁部：流石沈線文 沈線文(玉粒並3文文) 沈線文 胴部：1.赤織文 内周：3.竹文			27.5
3	A-134	A区	IV b1	織文土器	深鉢	外周：1.押部：流石1線 1.縁部：沈線文 胴部：1.赤織文 内周：3.竹文			27.6
4	A-145	A区	IV b1	織文土器	深鉢	外周：1.押部：流石1線 1.縁部：沈線文 胴部：1.赤織文 沈線文 内周：3.竹文			27.7
5	A-140	A区	IV b1	織文土器	鉢	外周：1.押部：小流石1線 1.縁部：沈線文 沈線文(玉粒並3文文) 1.赤織文 内周：3.竹文			27.8
6	A-002	A区	IV b1	織文土器	甕	外周：1.縁部：1.赤織文 沈線文 胴部：1.赤織文 沈線文 底周の反側1.赤織文 内周：3.竹文			27.9

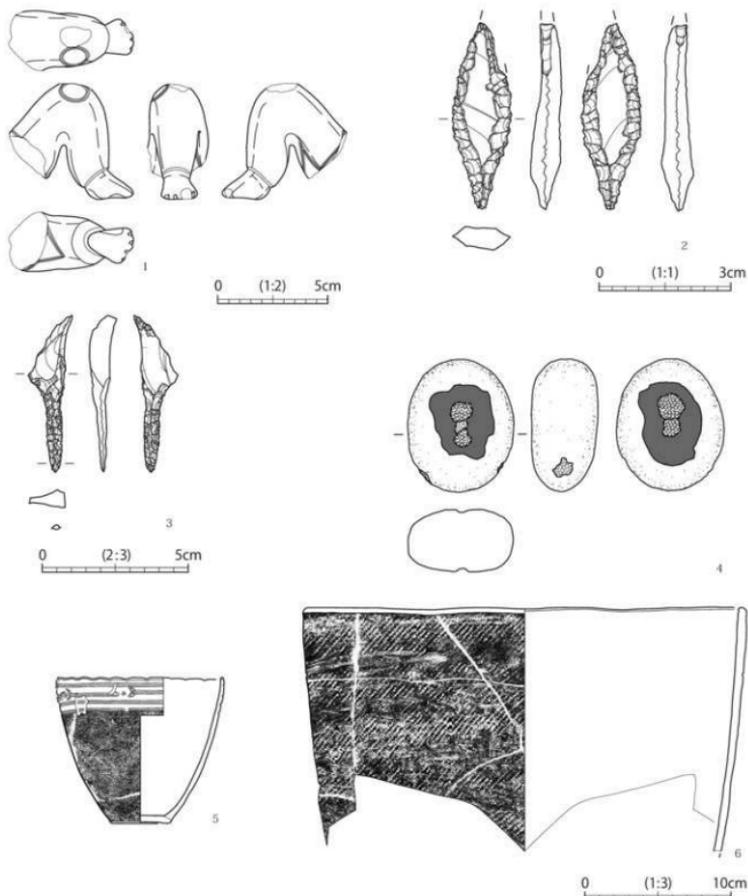
第346図 IV b1層(A区)遺物包含層出土遺物(1)

第6節 川前遺跡



No.	登録番号	調査区	図記	種類	図様	説明等		備考	写真掲載	
						寸法・幅・厚さ(mm)	重さ(g)			
1	A-143	A区	IV b1	縄文土器	鉢	外面：上縁部：波線文、胴部：垂線状波線文、底面：波線文、内面：无文 内面：上縁部：小突起、胴部：波線文、底面：波線文(三叉文)、胴部：波線文、上縁部文、无文			27.10	
2	A-141	A区	IV b1	縄文土器	浅鉢	外面：上縁部：波線文、上縁部：波線文、胴部：上縁部文、内面：无文 内面：无文			28.1	
3	A-136	A区	IV b1	縄文土器	浅鉢	外面：上縁部：斜直文、上縁部：波線文、胴部：上縁部文、内面：无文 内面：无文			28.2	
4	A-144	A区	IV b1	縄文土器	付付鉢	外面：胴部：波線文、胴部-付付部：无文、内面：胴部：无文、付付部：十字 内面：无文			内面は厚縁部内。	28.3
5	A-130	A区	IV b1	縄文土器	甕	外面：上縁部：无文、胴部：波線文、上縁部文(三叉文)、内面：十字 内面：无文			内面部に赤彩を施す。	28.4
6	A-165	A区	IV b1	縄文土器	甕	外面：上縁部：上縁部文、胴部：波線文、波線文、底面：波線文 内面：无文				28.5
7	A-133	A区	IV b1	縄文土器	甕	外面：上縁部：波線文、上縁部-付付部：无文、内面：胴部：波線文、波線文、底面-付付部：无文 内面：上縁部-付付部：无文、底面-付付部：十字				28.6
8	A-319	A区	IV b1	縄文土器	不明	外面：波線文			厚さ1.5cm、破断面あり。	28.7
No.	登録番号	調査区	図記	種類	図様	寸法・幅・厚さ(mm)	重さ(g)	形状・器型・備考	写真掲載	
9	P011	A区	IV b1	土製品	土鏡	φ21 × 厚さ × 径 × 径	0.62	十字	28.8	
10	P008	A区	IV b1	土製品	不明土製品	× × × 径 × 径	116.50	外面：波線文、内面：波線文、胴部：1.5cm厚縁部あり。 底面に赤彩を施す。	28.9	

第347図 IV b1層(A区)遺物包含層出土遺物(2)



No.	発掘層号	調査区	面别	形状	纹様	長さ×幅×厚さ(mm) 断面(mm)		製作・装飾・備考		写真掲載	
						長さ	幅	文字	装飾文		
1	Ka 010	A区	底面	土瓦片	不詳	40.8 × 40.7	—	十字	透眼文	底面に透眼文	29-10
2	Ka 024	A区	底面	打製石器	石鏃	—	底面×幅×厚さ(mm) 断面(mm)	—	—	—	29-11
3	Ka 016	A区	底面	打製石器	石鏃	—	(4.3) × 1.4 × 0.7 (2.67)	—	—	乳歯部欠損	29-12
4	Ka 005	B区	底面	打製石器	石鏃	—	5.4 × 1.3 × 0.6 (2.65)	—	—	—	29-13
5	発掘層号	調査区	面别	形状	纹様	—		—		—	—
5	A.135	B区	底面	縄文土器	鉢	—		内面・199線・底面・194線・195線文・196線文(土粉中)・交叉文	裏面・198線文	内面に灰化層付着	29-1
6	A.137	B区	底面	縄文土器	深鉢	—		内面・198線・裏面・194線文・195線文	内面	土粉中	29-2

第348図 IV b1層(A・B区)遺物包含層出土遺物(3)

## 第6節 川前遺跡

### 3. IV b2 層の調査

基本層IV b2 層上面（縄文時代の遺構検出面）において、土坑5基、ピット16基を検出した。ピットは建物等の組み合わせを検討したが、明確なものは確認されなかった。ピットについては遺構配置図にのみ表示している。

#### (1) IV b2 層検出遺構と出土遺物（第349～352図、図版7・29）

##### 1) 土坑

SK3 土坑（第350図、図版7）A区北側付近で検出した。P25と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不整形楕円形で、長軸方向はN-26°-Wである。規模は長軸157cm、短軸110cm、深さ30cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で、底面はやや起伏する。堆積土は3層に分層された。堆積土中より縄文土器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK4 土坑（第350図）A区北側付近で検出した。東側は調査区外へ延びる。平面形は不整形と考えられ、長軸方向は不明である。規模は東西108cm以上、南北139cm、深さ64cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で、底面は起伏する。堆積土は3層に分層された。堆積土中より縄文土器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK5 土坑（第350図）A区北側で検出した。平面形は円形で、長軸方向はN-10°-Eである。規模は長軸119cm、短軸97cm、深さ17cmである。壁面は大きく外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で、底面は平坦である。堆積土は2層に分層された。堆積土中より縄文土器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK6 土坑（第350・351図、図版7・29）A区中央東側で検出した。平面形は不明で、長軸方向は不明である。規模は南北103cm以上、東西42cm以上、深さ28cmである。壁面は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形で、底面は平坦である。堆積土は2層に分層された。堆積土中より縄文土器が出土しており、壺形土器1点（第351図1）を図示した。

SK8 土坑（第350図）A区北側で検出した。平面形は円形で、長軸方向はN-87°-Eである。規模は長軸67cm、短軸58cm、深さ15cmである。壁面は東壁が外傾して立ち上がり、西壁はやや垂直に立ち上がる。断面形は逆台形で、底面は平坦である。堆積土は2層に分層された。堆積土中より縄文土器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

##### 2) ピット（第349図）

16基のピットを検出した。A区北側付近に集中する。堆積土中より縄文土器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

#### (2) IV b2 層出土遺物（第352図、図版29）

IV b2 層は、遺物包含層である。層厚は、25～35cmを測り、各調査区において確認された。IV b1 層同様、A区南側から緩やかに下り、B区からまた緩やかに上がる。

縄文土器、礫石器、石製品が出土しており、鉢形土器2点（第352図1・2）、台付浅鉢1点（第352図3）、敲石1点（第352図4）を図示した。深鉢形土器の口縁部文様帯には、魚眼三叉文または、櫛歯状工具による刻目文が施されている。第352図3は台付浅鉢である。無文であるが、脚部に窓部が残存する。

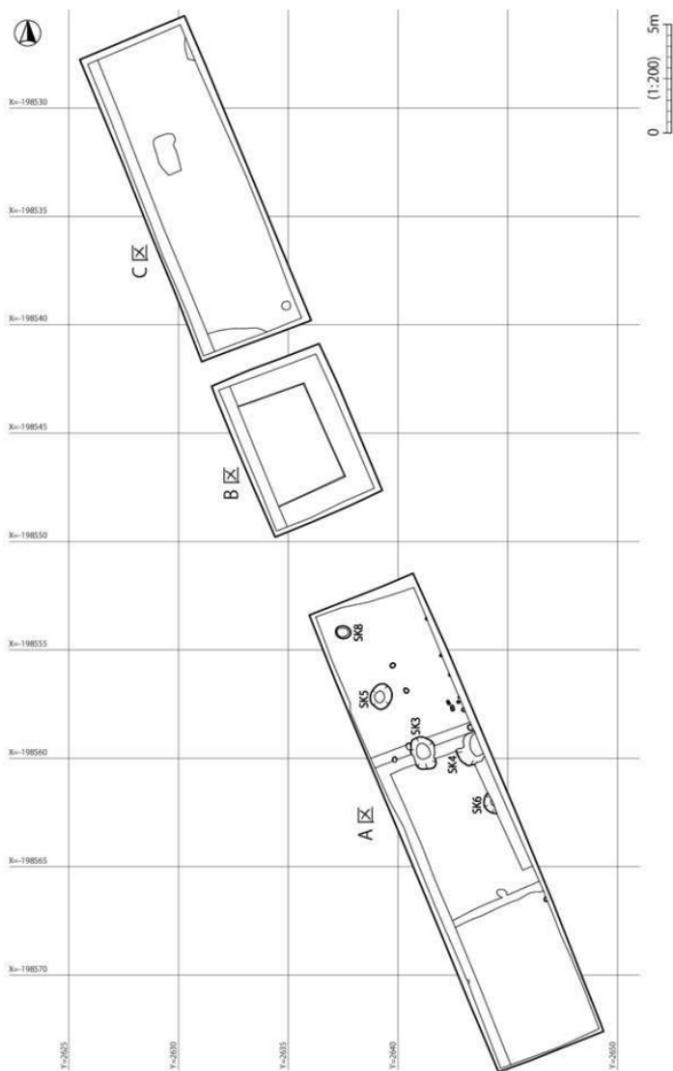
## 4. まとめ

川前遺跡は仙台市太白区富沢字川前にあり、自然堤防上に立地する縄文時代の遺跡である。平成27年度にA～C区で計240㎡の調査が行われ、縄文時代の遺構群が検出された。

### (1) 遺構について

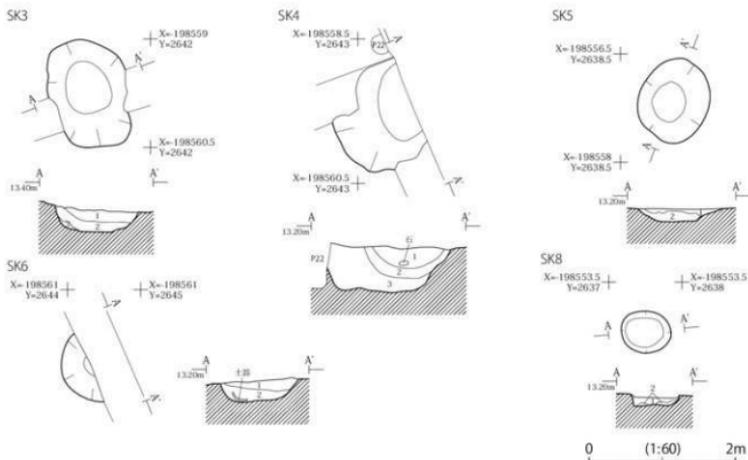
1) 縄文時代の遺構は基本層IV b1・2層上面で検出された。

IV b1 層上面—竪穴住居跡3軒、土坑1基、ピット16基



第 349 図 川筋運送V b2 層遺構配平面図

## 第6節 川前遺跡



遺跡名	平面図	断面図	方位	面積×距離×深さ(m)	遺跡名	平面図	断面図	方位	面積×距離×深さ(m)
SK3	半楕円形	逆断面	N 26° W	1.07 × 1.10 × 0.30	SK6	円形	逆断面	-	1.03 × 0.42 × 0.28
SK4	半楕円	逆断面	-	(1.00 × 1.30 × 0.64	SK8	円形	逆断面	N 67° E	0.67 × 0.58 × 0.15
SK5	円形	逆断面	N 10° E	1.19 × 0.97 × 0.17					

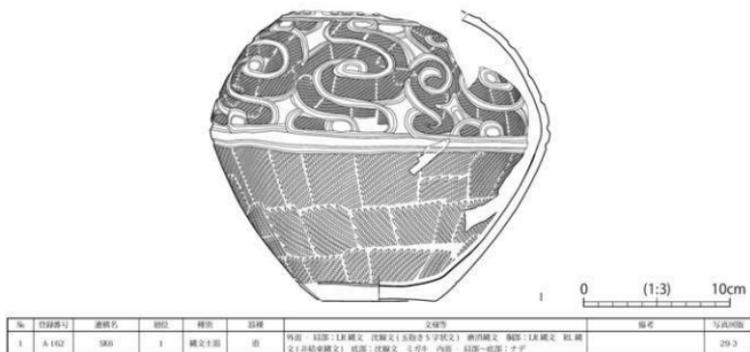
  

遺跡名	層位	土色	土性	備考	遺跡名	層位	土色	土性	備考	
SK3	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	径 1 ~ 5mm の黄褐色粘土質シルト・径 1 ~ 5mm の炭化物を少量含む。	SK5	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	径 5 ~ 10mm の褐色シルトを少量、炭化物を微量含む。	
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	径 1 ~ 10mm の炭化物を少量含む。		SK6	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径 1 ~ 3mm の炭化物を微量含む。
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物を微量含む。	SK8		1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	径 10 ~ 15mm の炭化物を少量含む。
SK4	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	径 1 ~ 10mm の炭化物を少量含む。		SK8	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	径 1 ~ 5mm の炭化物を微量含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	径 1 ~ 5mm の炭化物を微量含む。	SK8		1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	径 100 ~ 200mm の黄褐色粘りブロックを少量、径 5 ~ 10mm の炭化物を少量含む。
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	径 10 ~ 30mm の黄褐色粘土質シルトブロックを少量、径 1 ~ 5mm の炭化物を微量含む。			SK8	2	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト
SK5	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	径 10 ~ 50mm の褐色シルトブロック・径 1 ~ 10mm の炭化物を微量含む。						

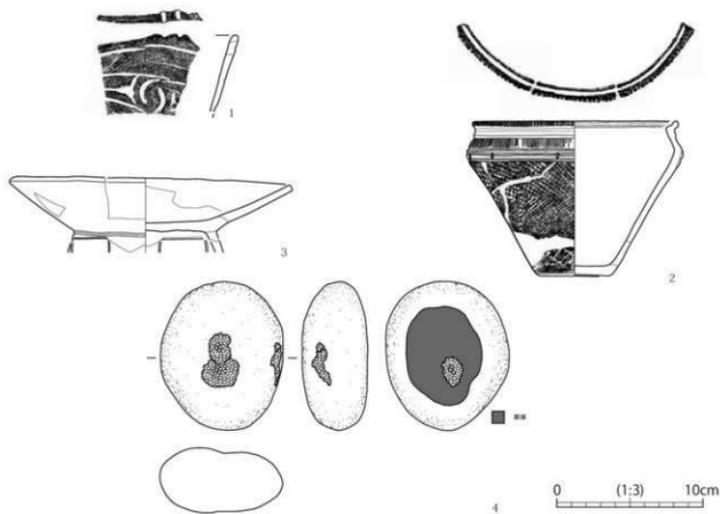
第 350 図 SK3～8 土坑平面図・断面図

### IV b2 層上面—土坑 5 基、ピット 16 基

- 2) SI2～4 竪穴住居跡では、いずれも炉跡ないし炉跡と考えられる被熱範囲を検出した。そのうち SI3・4 は、石組炉であった。石組炉は、いずれも掘り方を有し、掘り方内に自然礫を配している。炉内に土器は埋設されていない。SI2 床面で、全体に広がる炭化物を検出した。ただし、床面や壁面の広範囲に及ぶ被熱が検出されなかったことや、炭化材が検出されなかった事から火災住居跡では無いと考えられる。SI3 では、住居南側で長さ 20cm 程の棒状の自然礫を使用した立石を検出した。掘り方は確認されなかった。住居南壁付近で検出した事から、出入口施設に関連するものと考えられる。SI4 で検出した炉跡は、南東側のみ炉石を残していたが、北東側に炉石の採取跡と考えられる小規模の落ち込みを検出したことにより、本来この炉跡が石組炉であったと考えられる。SI2～4 竪穴住居跡の時期については、出土遺物や縄文時代晩期の遺物包含層である IV a1・2 層との関係から、縄文時代後期末葉～晩期初頭と考えられる。
- 3) 土坑は、IV b1 層上面で 1 基、IV b2 層上面で 5 基を検出した。そのうち、IV b2 層上面で検出した SK3・6 では、他 4 基の土坑に比して縄文土器片が多く出土している。
- 4) IV a1～3・IV b1・2 層は遺物包含層である。IV a1 層は、各調査区で確認されたが、IV a2 層は A 区のみ



第351図 SK6土坑出土遺物



発掘番号	調査区	層位	種類	図様	文様等	備考	写真掲載	
1	A-147	A区	IV b2	縄文土器	糸	外面：1.押部：小突起・斜段 1.編部：沈殿文・黒彩文・沈殿文(角形区・文文)・内面：五字半	29.4	
2	A-148	A区	IV b2	縄文土器	糸	外面：1.押部：沈殿文・斜段文 1.編部：斜段文・沈殿文・横溝-横溝：L・黒織文・赤土織文(角形赤織文)・内面：五字半	29.5	
3	A-146	C区	IV b2	縄文土器	行列浅鉢	外面：1.編部-横溝：五字半・内面：五字半 器4中後・内面：1.編部-横溝：五字半・内面：十字	29.6	
発掘番号	調査区	層位	種類	図様	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	備考	写真掲載
4	Re-006	C区	IV b2	礫石器	磨+打+磨石	10.2 × 8.3 × 4.7	SK6-29	29.7

第352図 IV b2層(A・B区)遺物包含層出土遺物

ば全面で確認され、IV a3層はA区の北側で確認された。IV a2層は、細別19層に細分され、焼土や多量の炭化物を含む。最も多くの遺物が出土している。北方向から南方向へ、西方向から東方向へと層が厚くなる。平面範囲の東西は、調査区外へと広がる。IV a3層上にマウンド状の高まりを呈する。縄文時代晩期大洞式土器が主体的に出土した。また、石製品で岩偶や線刻礫、イモ貝形石製品等も出土した。IV b1・2層は、それぞれ調査区全体で確認された。A区南側から緩やかに下り、B区付近で緩やかに上がる。IV b1層からも、多量の縄文土器に混じって線刻礫が出土している。

(2) 遺物について

出土遺物は平箱68箱である。

1) 縄文土器

基本層IV a1～3・IV b1・2層の遺物包含層及び遺構から多量に出土した。概観すると、縄文時代晩期大洞式土器を主体としており、僅かに縄文時代後期後葉竈付土器(金剛寺式)が出土した。器種は鉢形が最も多く、その内、深鉢形が多く次いで浅鉢形が多く出土した。鉢形以外では、壺形土器が多く小型から大型のものど大きさも幅広く出土している。また、注口土器、台付、器台、蓋、異形土器等、豊富な種類の器種が出土した。

2) 打製石器

製品として最も多いのは石鏃で、有茎鏃、無茎鏃いずれも出土しており、無茎鏃の中でも、凹基無茎鏃や平基無茎鏃も出土している。他に、石錐はつまみ部が有るものと無いものいずれも出土している。石匙は、横型・縦型いずれも出土している。使用されている石材は、主に頁岩である。

3) 磨製石器

磨製石斧が多量に出土した。第336図4は、擦切技法により製作された磨製石斧である。擦り切りの痕跡を右側縁部に残す。

4) 礫石器

敲石、磨石が多く出土した。石材は、砂岩、安山岩、凝灰岩が主である。敲石の中には、磨面を共うものもみられる。

5) 石製品

岩偶は、A区IV a2層から出土した。長さ7.1cm、幅6.5cm、厚さ2.8cmを測る。胴部下半は欠損する。凝灰岩を石材とし、ケズリにより腕部を作出する。頭部表面に目が作出され、表裏面には刻みにより沈線が施される。イモ貝形石製品は、A区IV a2層から出土した。長さ8.6cm、幅8.4cm、厚さ3.0cmを測る。凝灰岩を石材とし、中央に1ヶ所孔が穿たれており、これを起点にした場合、右回りで溝が刻みにより作出されている。第334図1の線刻礫は、A区IV a2層から出土した。凝灰岩を石材とし、2条一對の線刻を横位に4段、上端にギザギザ状の線刻、下端にクランク状の線刻を施す。第334図2の線刻礫は、A区IV a2層から出土した。凝灰岩を石材とし、表裏面にX字状及び山形状の線刻を施す。第336図6の線刻礫は、A区IV a3層から出土した。凝灰岩を石材とし、上下端に敲打、両側縁にケズリの調整を残す。表面にのみ3条の線刻を横位に施す。

6) 土製品

A区IV a2層から、板状土偶が出土している。脚部は欠損している。頭部、胴部、腰部を区画するように、沈線が横位に巡る。頭部表面に刺突を1ヶ所、胴部裏面に沈線による円が1ヶ所施される。同じく、動物形土偶頭部も出土している。刺突により目を、刻目により口を作出している。他に、耳飾が出土しており、茎部に赤彩が残る。A区IV b1層から、土偶脚部が出土している。膝部に沈線による円が1ヶ所、大腿部に沈線が2条施される。同じく、第347図10は器種不明であるが、全体に沈線が施され、頂部には貫通孔が施される。僅かではあるが、全体に赤彩が残る。この土製品については、三脚玉土製品あるいは土冠と称されるものであると考えられる。

## 川前遺跡写真図版





A区東壁断面(北西から)



B区西壁断面(東から)



C区西壁断面(東から)



A区IV a2層調査区全景(南から)



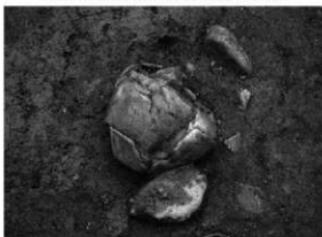
A区IV a1層遺物(A-007)出土状況(北から)



A区IV a1層遺物(A-091)出土状況(北から)



A区IV a1下層遺物出土状況(東から)



A区IV a2層遺物(A-003)出土状況(南から)

写真図版1 川前遺跡(1)

第6節 川前遺跡



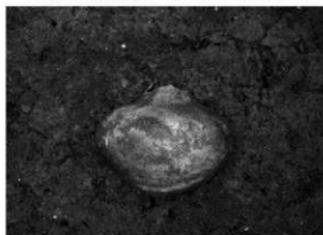
A区IV a2層遺物 (A-070) 出土状況 (東から)



A区IV a2層遺物 (A-075・113) 出土状況 (南から)



A区IV a2層遺物 (A-093) 出土状況 (南から)



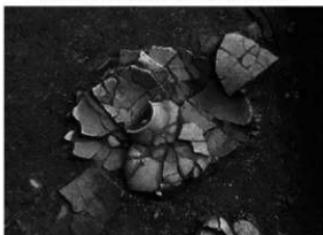
A区IV a2層遺物 (A-104) 出土状況 (南から)



A区IV a2層遺物 (A-105) 出土状況 (南から)



A区IV a2層遺物 (A-112) 出土状況 (南から)



A区IV a2層遺物 (A-117) 出土状況 (西から)



A区IV a2層遺物 (A-118) 出土状況 (東から)

写真図版2 川前遺跡(2)



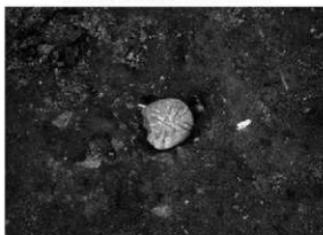
A区IV a2層遺物 (A-120) 出土状況 (北から)



A区IV a2層遺物出土状況 (東から)



A区IV a2層遺物 (Kd-002) 出土状況 (南から)



A区IV a2層遺物 (Kd-003) 出土状況 (南から)



A区IV a2層遺物 (Kd-006) 出土状況 (北から)



A区IV a2層遺物 (Kd-007) 出土状況 (南から)



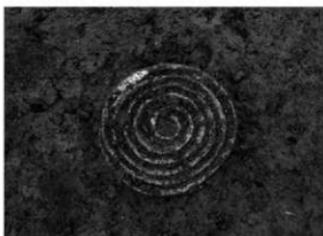
A区IV a2層遺物 (Kd-008) 出土状況 (西から)



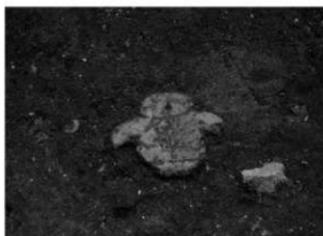
A区IV a2層遺物 (Kd-009) 出土状況 (北から)

写真図版3 川前遺跡(3)

第6節 川前遺跡



A区IV a2 下層遺物 (Kd-011) 出土状況 (東から)



A区IV a2 層遺物 (P-012) 出土状況 (北から)



A区IV a3 層調査区全景 (南から)



A区IV a3 層遺物 (Kb-007) 出土状況 (北から)



A区IV a3 層遺物 (Kd-015) 出土状況 (東から)



A区IV b1 層調査区全景 (南から)



B区IV b1 層調査区全景 (南から)

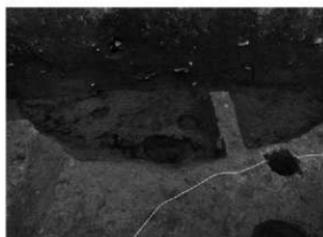


C区IV b1 層調査区全景 (北から)

写真図版4 川前遺跡(4)



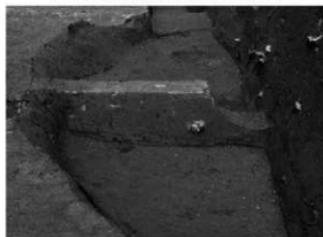
A区 S12 全景 (西から)



A区 S12 焼土・炭化物検出状況 (西から)



A区 S12 断面 A (西から)



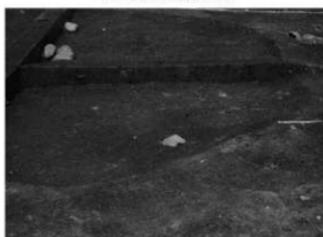
A区 S12 断面 B (南から)



A区 S13 全景 (東から)



A区 S13 断面 B (東から)



A区 S13 断面 C (南から)



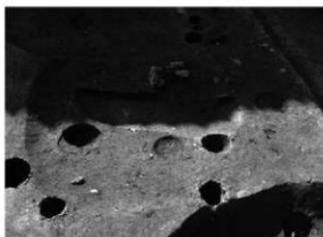
A区 S13 炉全景 (東から)

写真図版5 川前遺跡(5)

第6節 川前遺跡



A区 S13 立石出土状況(東から)



A区 S14 全景(東から)



A区 S14 床面施設全景(東から)



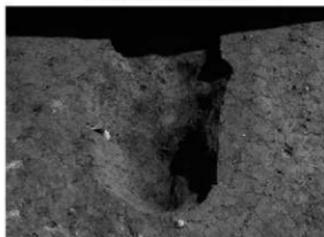
A区 S14 炉全景(北東から)



A区 S14-SK1 断面A(西から)



A区 S14 炉掘り方遺物(A-150)出土状況(西から)

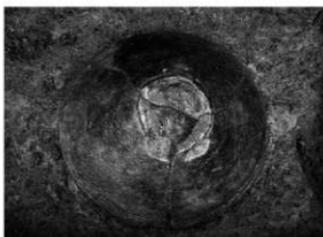


A区 SK2 全景(西から)



A区 IV b1 層遺物(A-133)出土状況(北から)

写真図版6 川前遺跡(6)



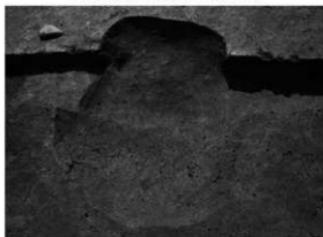
A区IV b1層遺物(A-136)出土状況(西から)



B区IV b2層調査区全景(南から)



C区IV b2層調査区全景(北から)



A区SK3全景(南から)



A区SK6全景(西から)



C区IV b2層遺物(A-146)出土状況(東から)

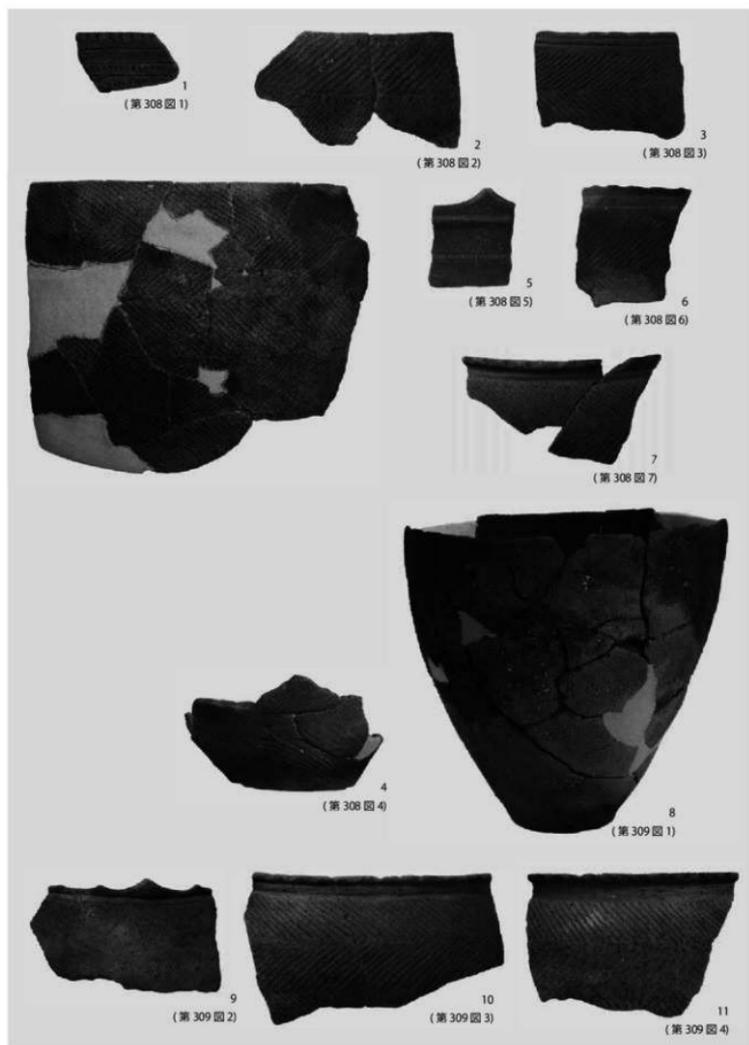


C区IV b2層遺物出土状況(南から)

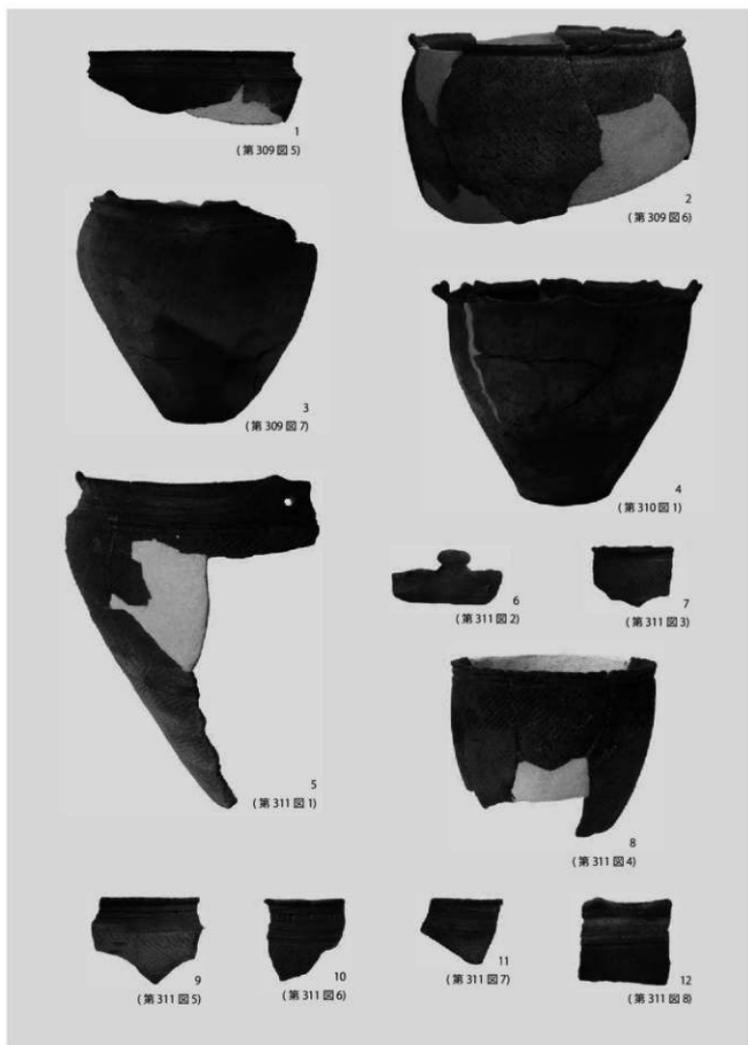


C区IV b2層遺物出土状況(南から)

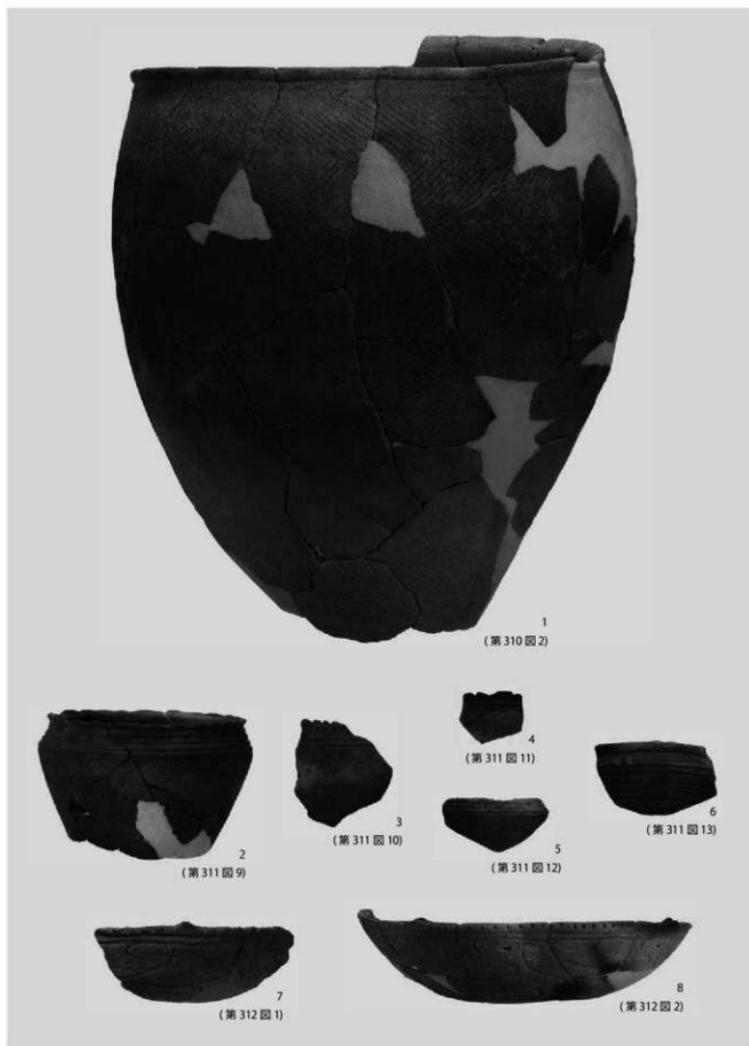
写真図版7 川前遺跡(7)



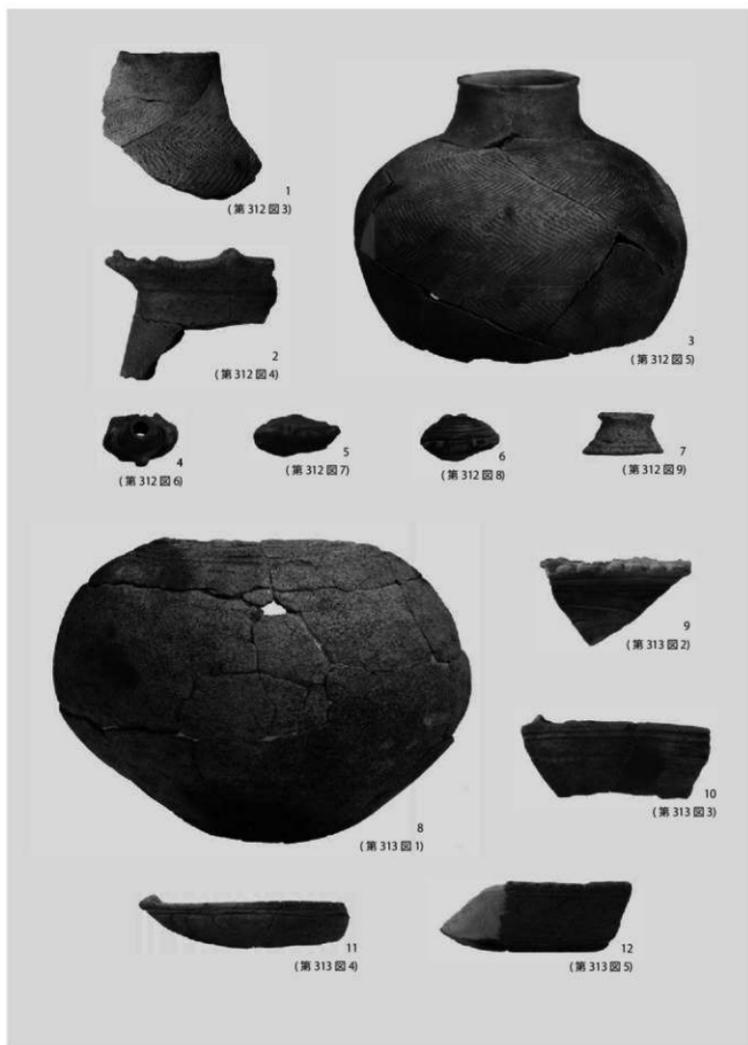
写真図版8 川前遺跡出土遺物(1)



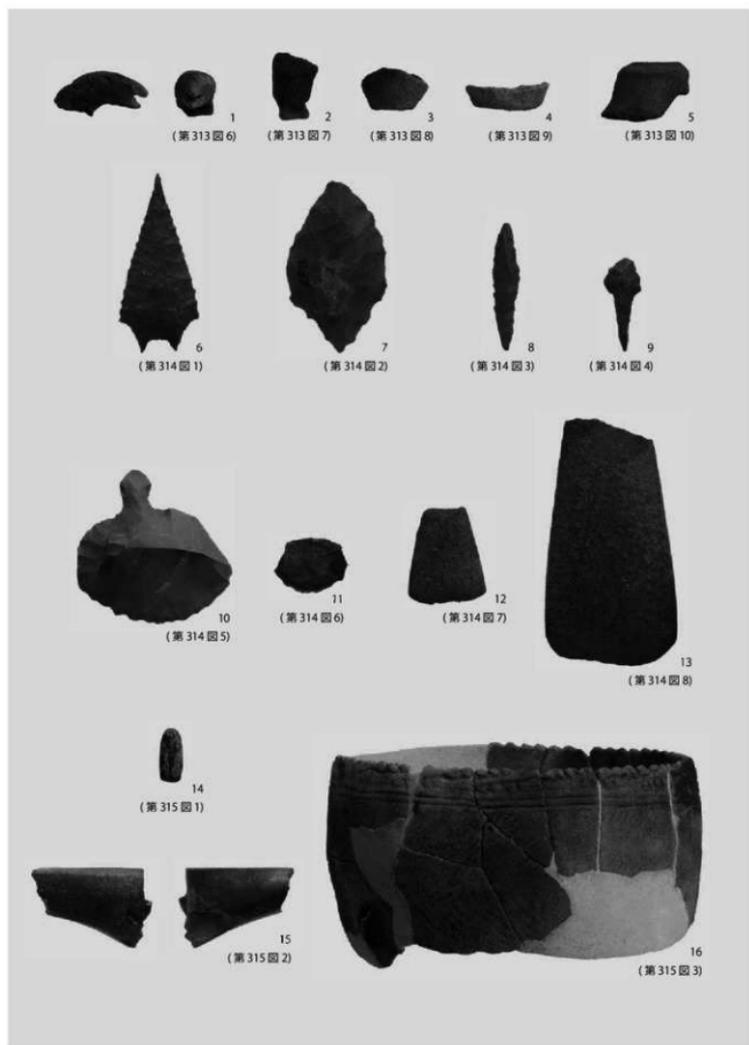
写真図版9 川前遺跡出土遺物(2)



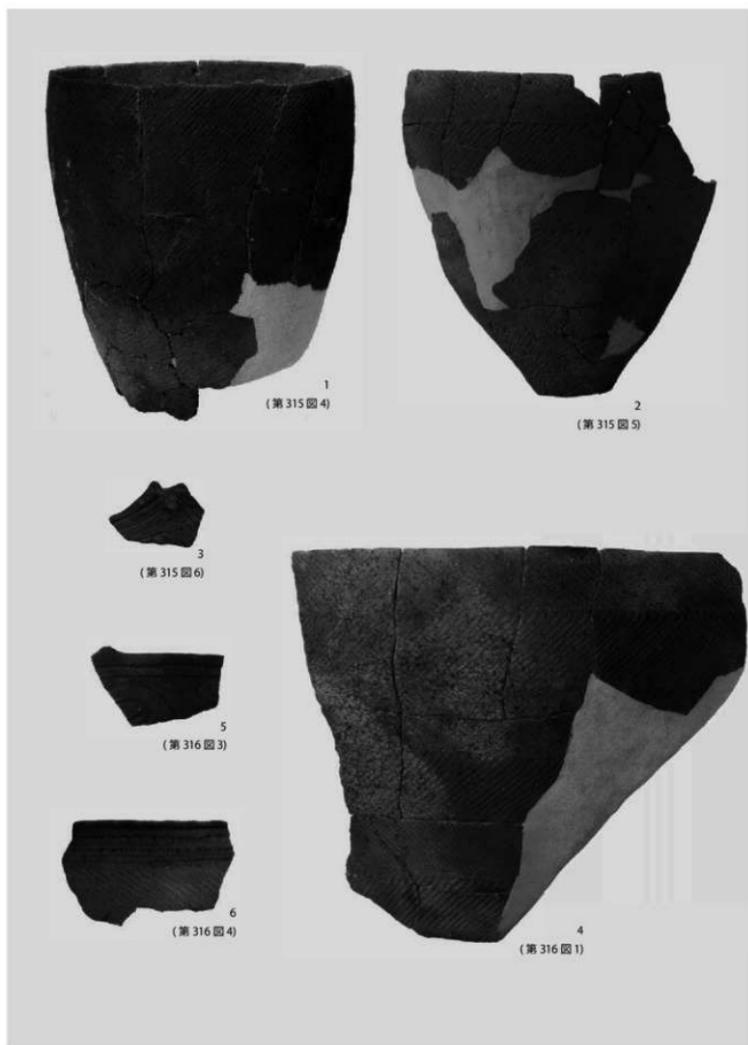
写真図版10 川前遺跡出土遺物(3)



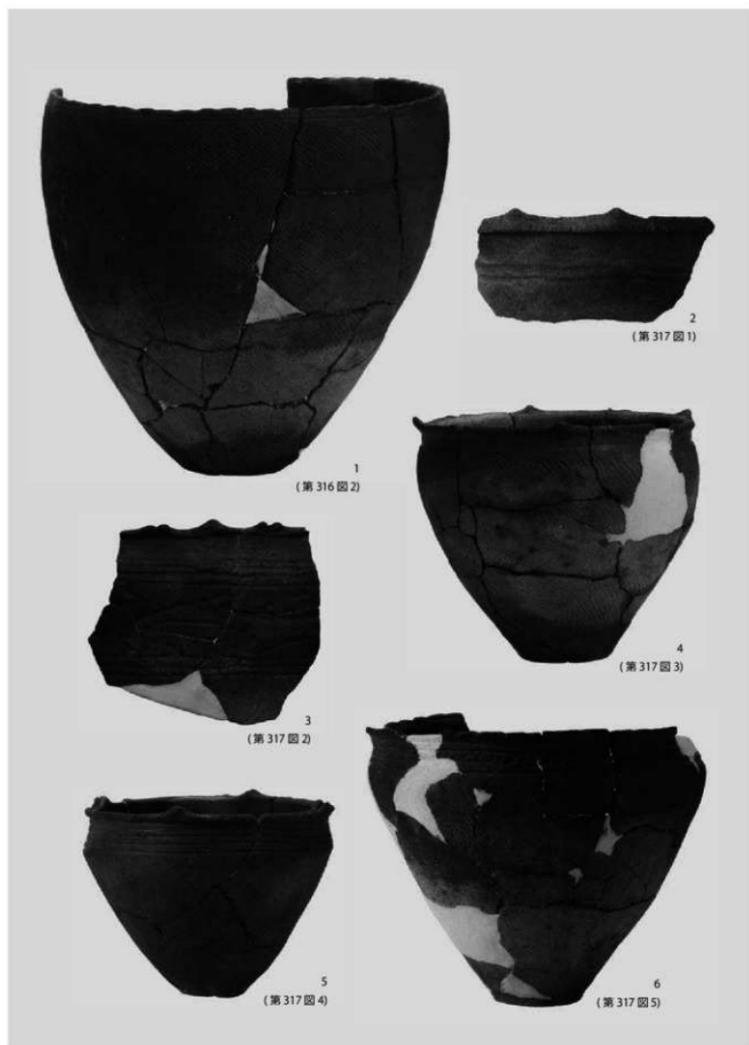
写真図版11 川前遺跡出土遺物(4)



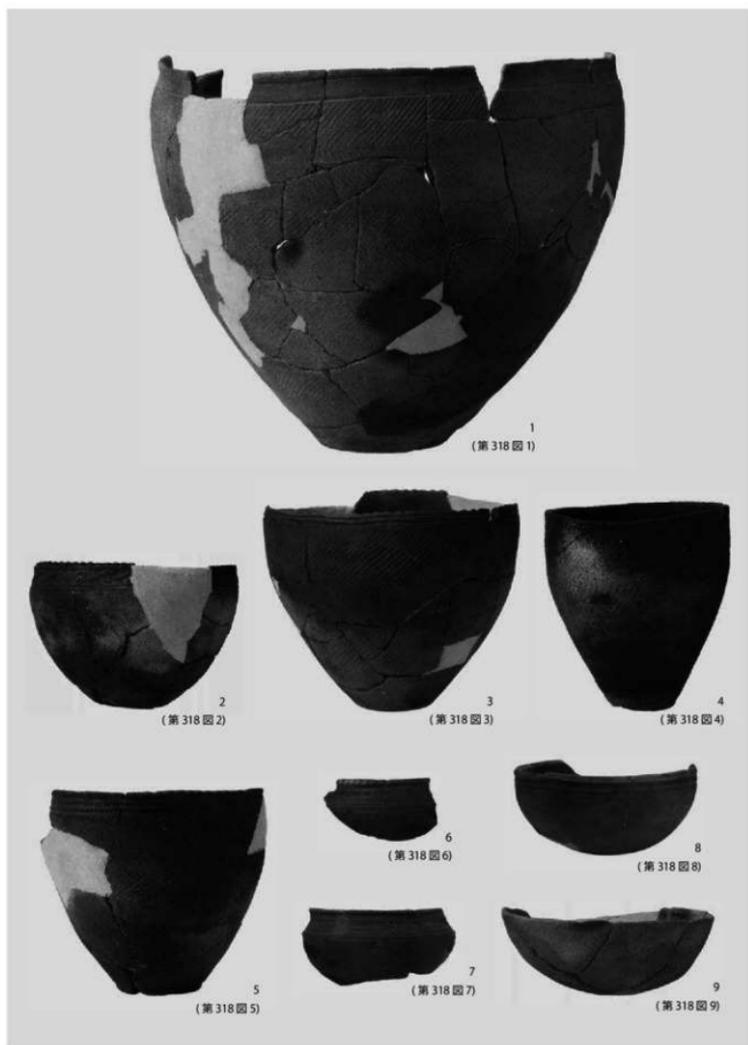
写真図版12 川前遺跡出土遺物(5)



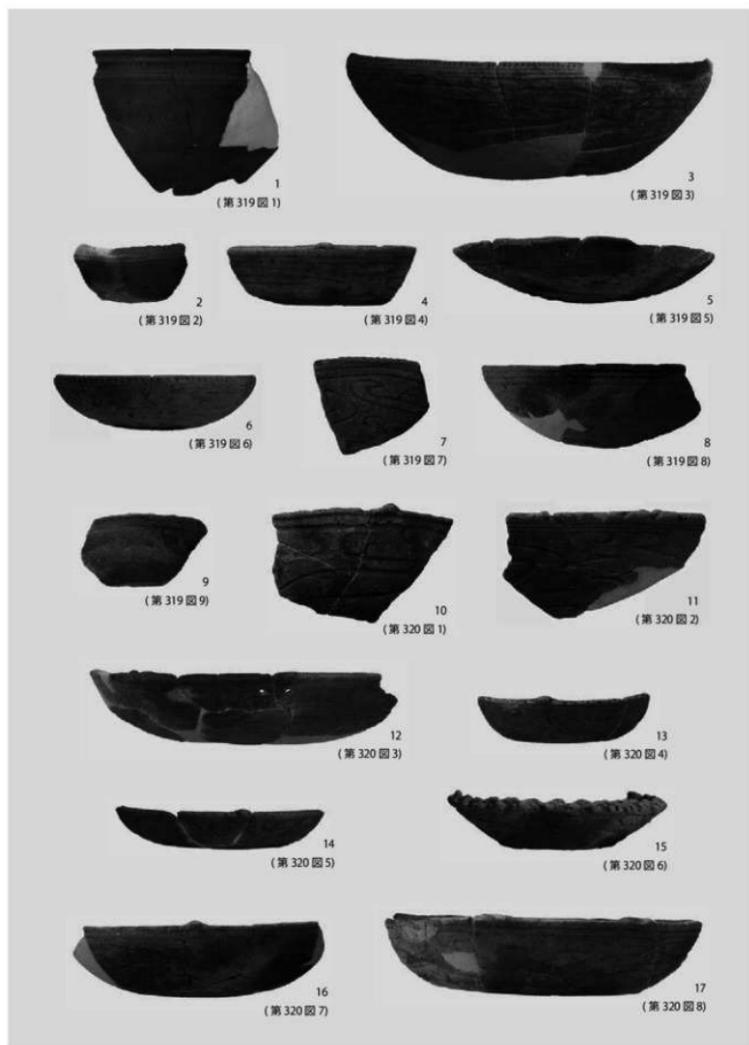
写真図版13 川前遺跡出土遺物(6)



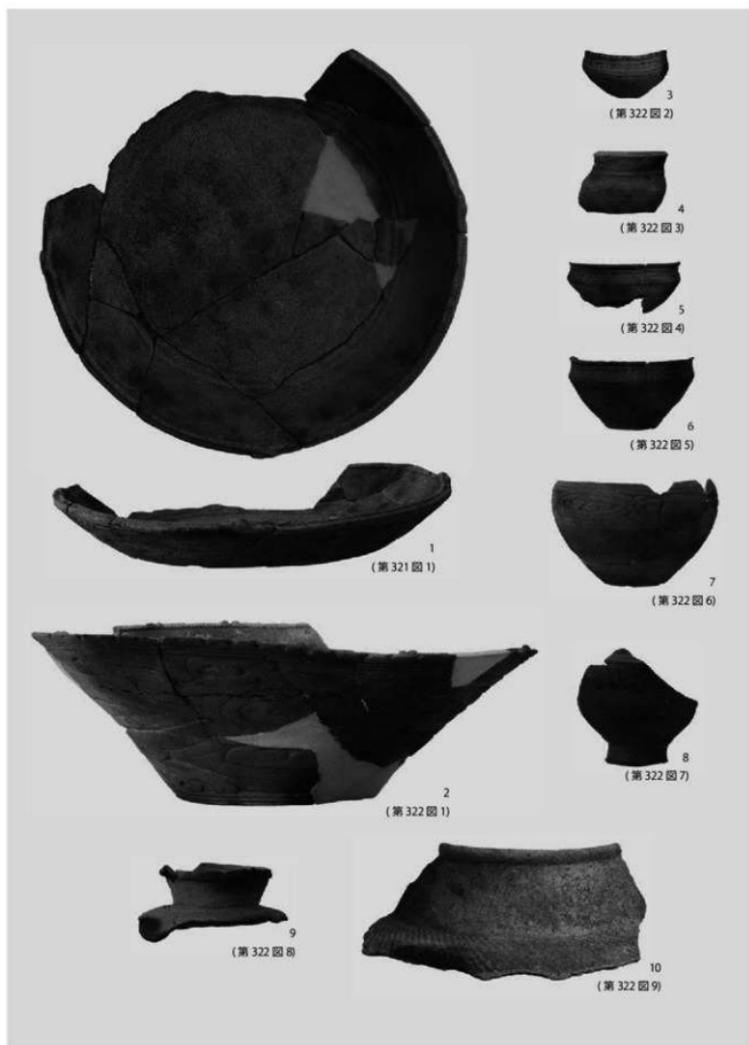
写真図版14 川前遺跡出土遺物(7)



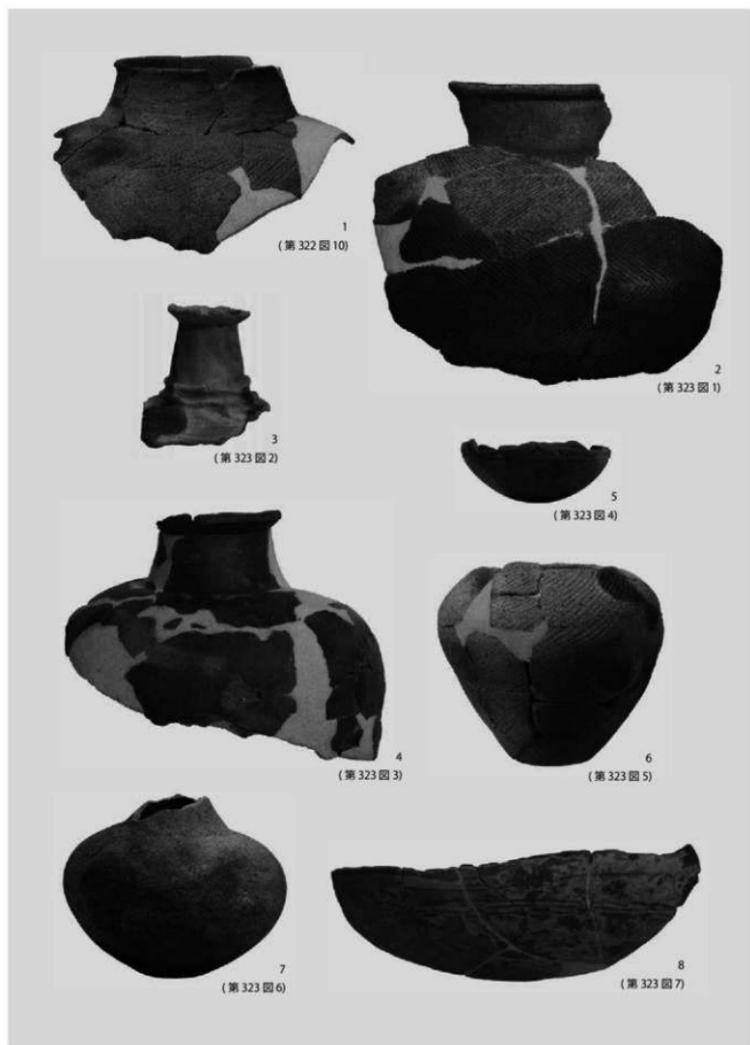
写真図版15 川前遺跡出土遺物(8)



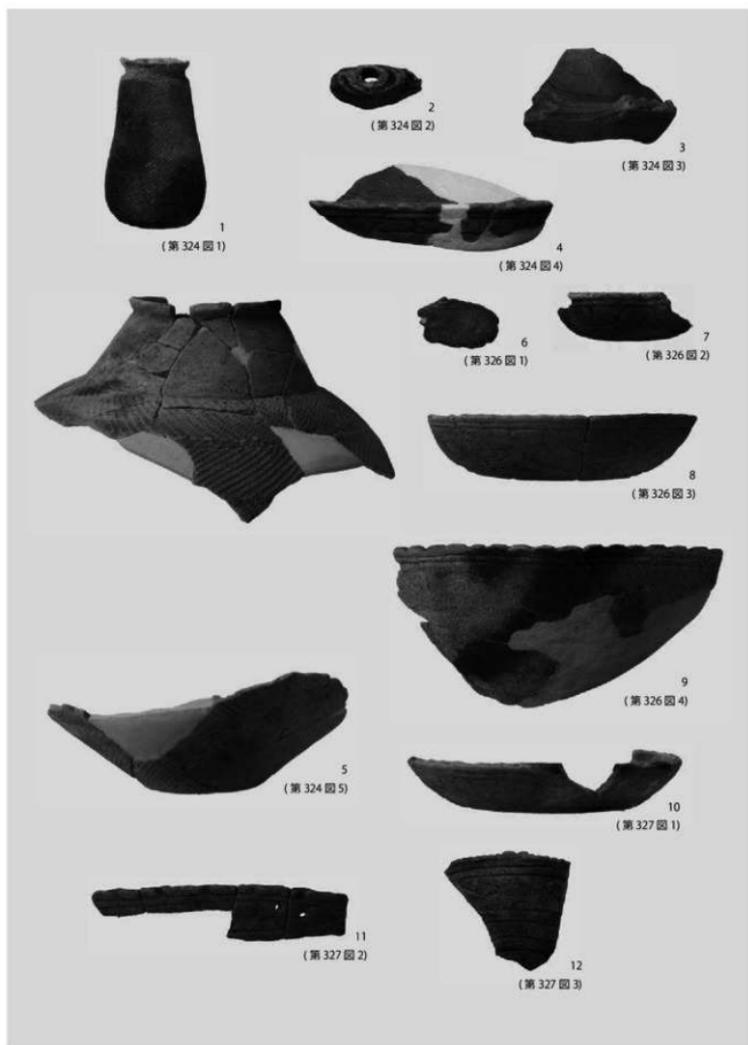
写真図版16 川前遺跡出土遺物(9)



写真図版17 川前遺跡出土遺物(10)



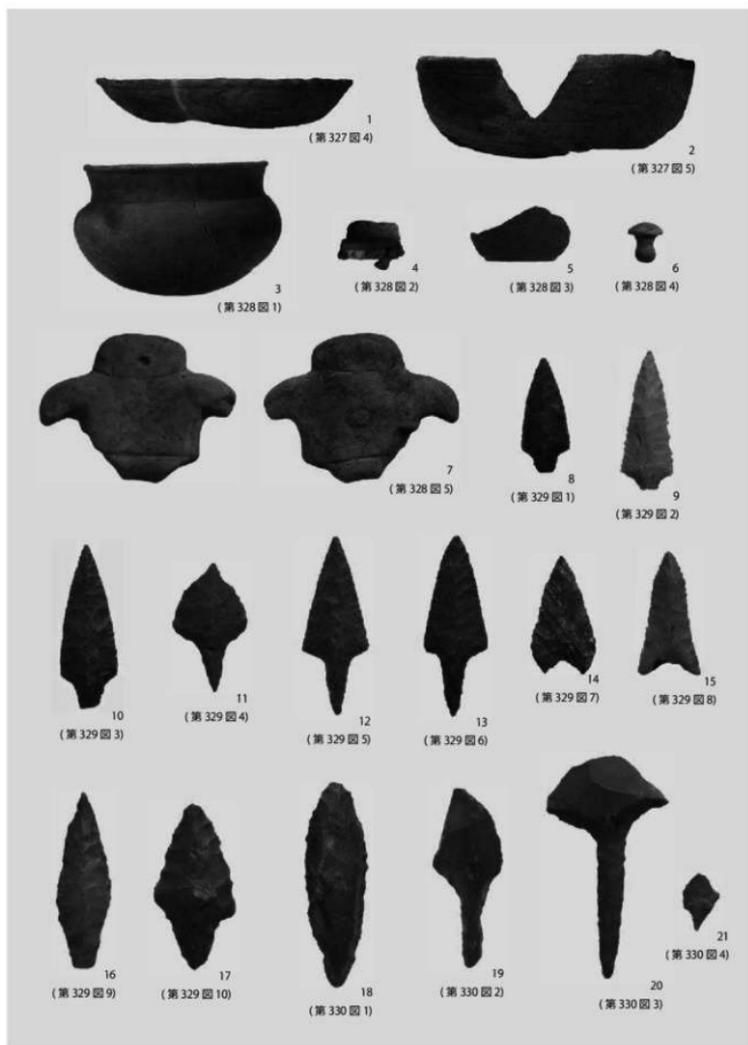
写真図版18 川前遺跡出土遺物(11)



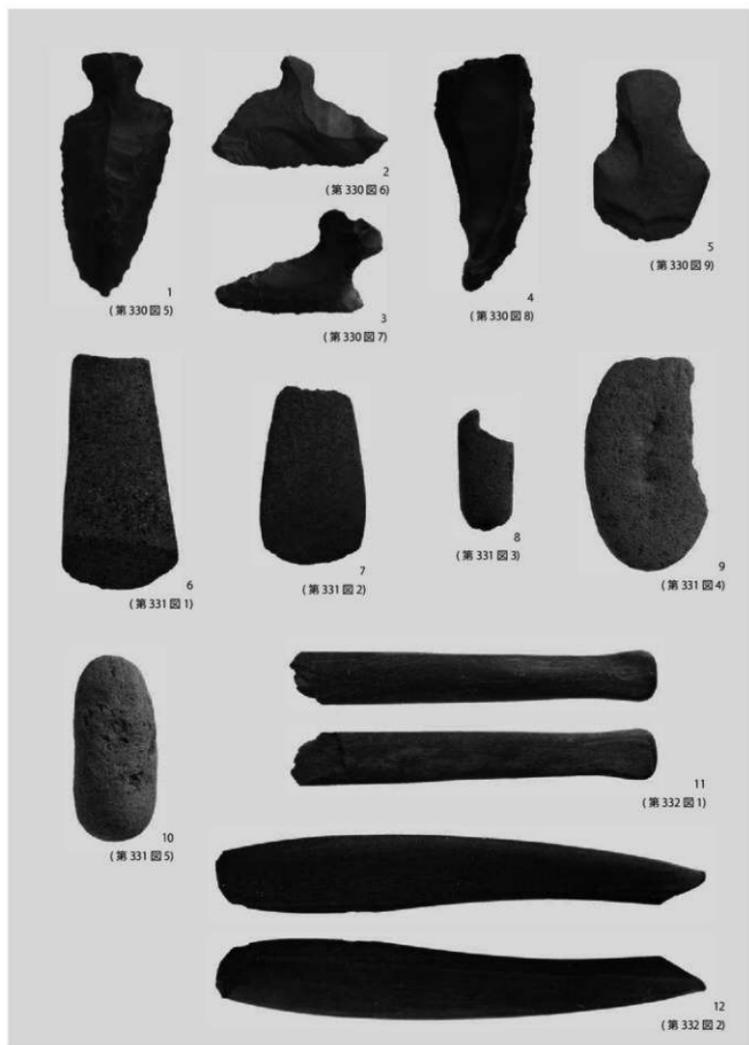
写真図版19 川前遺跡出土遺物(12)



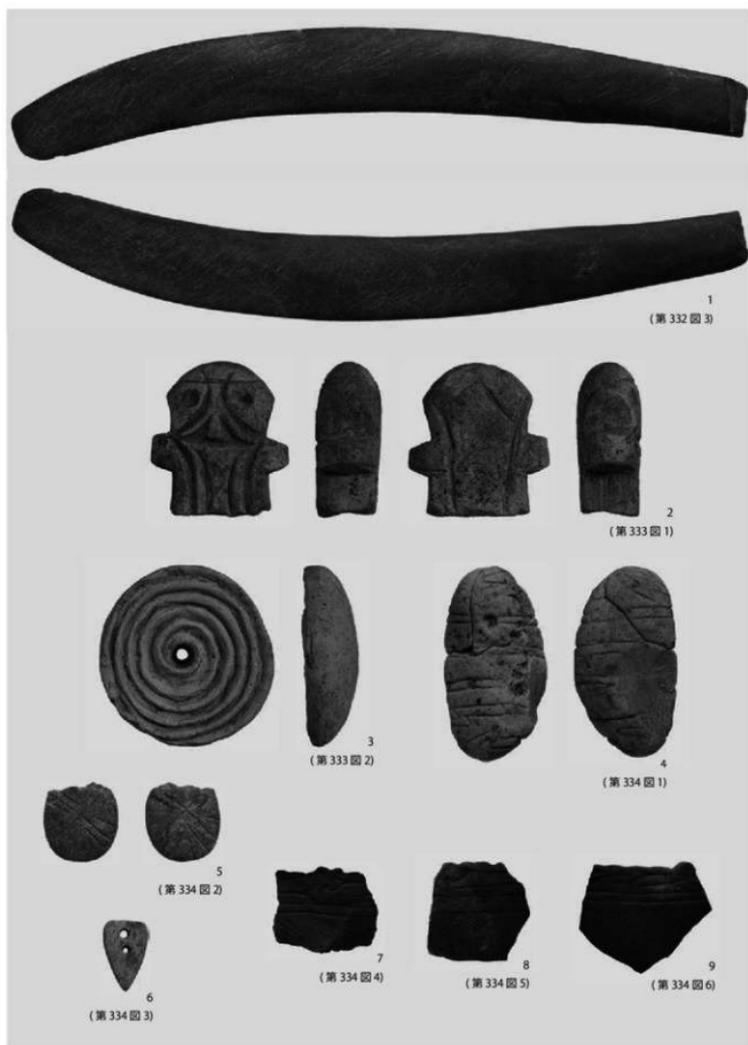
写真図版20 川前遺跡出土遺物(13)



写真図版21 川前遺跡出土遺物(14)



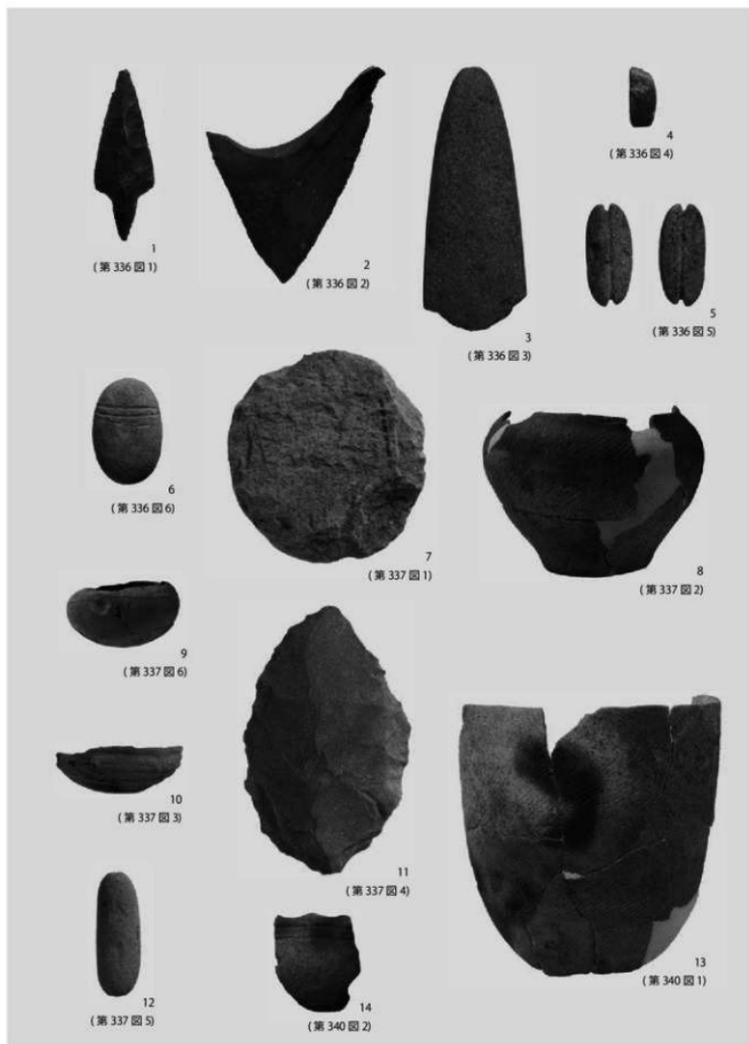
写真図版22 川前遺跡出土遺物(15)



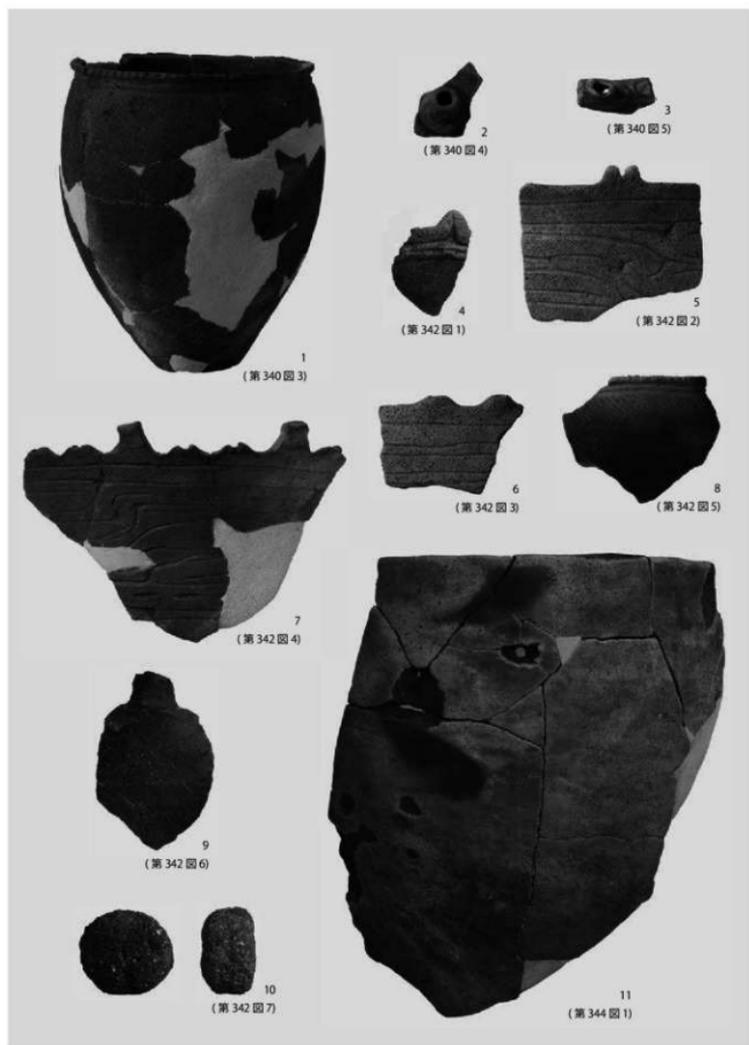
写真図版23 川前遺跡出土遺物(16)



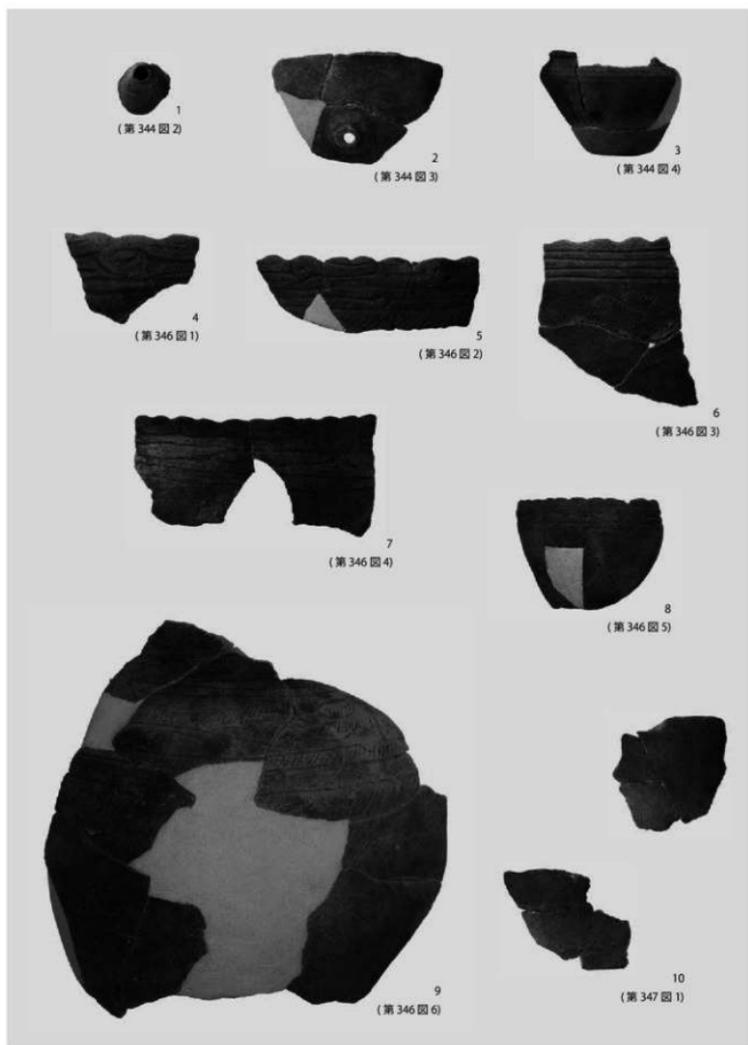
写真図版24 川前遺跡出土遺物(17)



写真図版25 川前遺跡出土遺物(18)



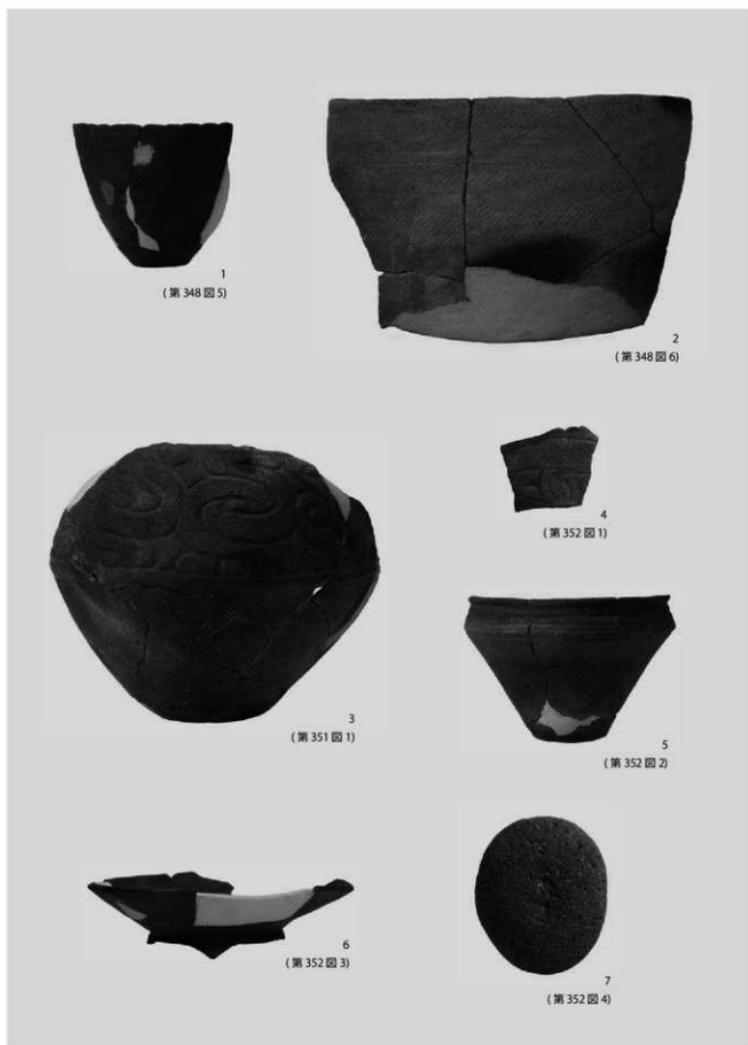
写真図版26 川前遺跡出土遺物(19)



写真図版27 川前遺跡出土遺物(20)



写真図版28 川前遺跡出土遺物(21)

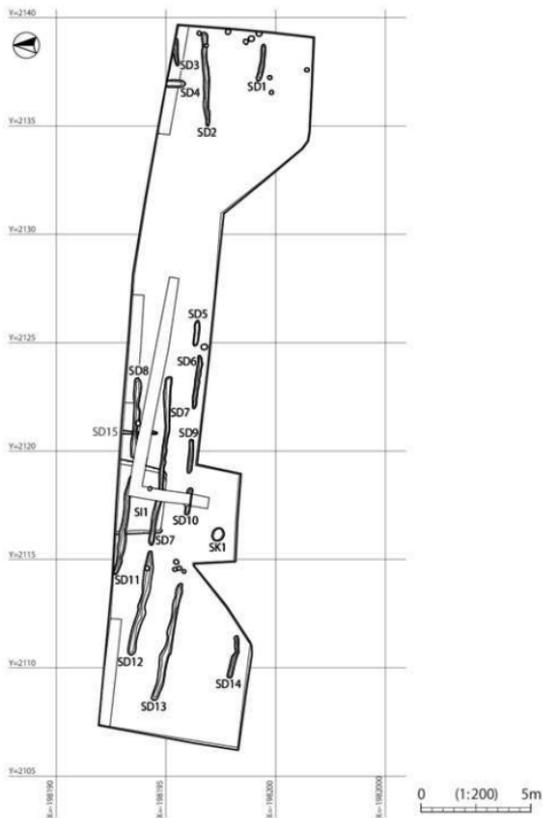


写真図版29 川前遺跡出土遺物(22)

## 第7節 宮崎遺跡

### 1. 平成27年度の調査

本区画整理事業に伴い平成26年度に試掘調査(V-22区)を実施した結果、土師器片、須恵器片が出土したこと、調査区壁断面の状況から、竪穴住居跡の検出が想定された。そのため、試掘調査V-22区周辺を宮崎遺跡として新規に遺跡登録し、平成27年度に本発掘調査を実施した。本発掘調査では、基本層Ⅲ層上面(古代以降の遺構検出面)において、竪穴遺構1基、土坑1基、小溝状遺構群4群、ピット16基を検出した。ピットは建物等の組み合わせを検討したが、明確なものは確認されなかった。ピットについては遺構配置図にのみ表示している。



第353図 宮崎遺跡遺構配置図

## (1) Ⅲ層検出遺構と出土遺物(第353～357図、図版1)

## 1) 竪穴遺構

SI1 竪穴遺構(第354・355図、図版1)

[位置] 調査区中央やや西側に位置する。北側は調査区外へ延びる。東壁の一部及び南側を試掘調査によって検出している。

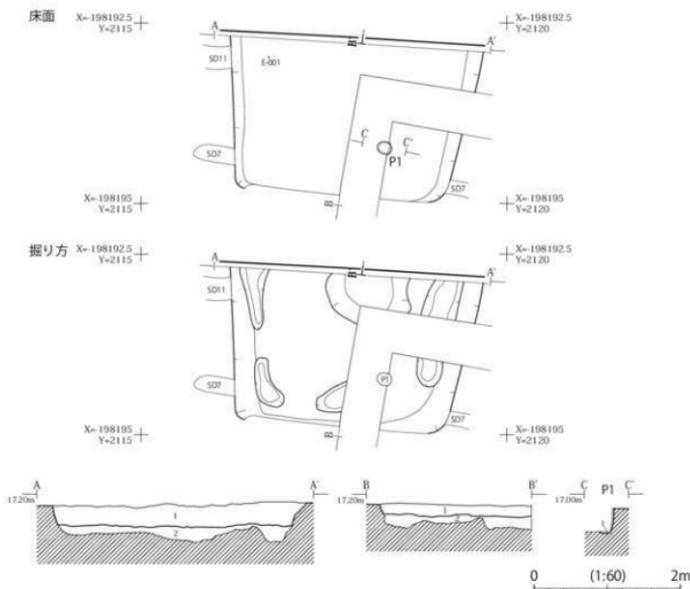
[重複関係] 小溝状遺構群Ⅲ群SD7・11と重複関係にあり、本遺構が古い。

[規模・形態] 規模は東西345cm、南北220cm以上である。平面形は、残存状況から方形を呈すると考えられる。柱穴・周溝・カマドは検出されていない。

[主軸方位] 西壁基準でN-2°-Wである。

[堆積土・構築土] 2層に分層された。1層は遺構堆積土、2層は掘り方り土である。

[壁面] 東壁は床面からやや外傾して立ち上がり、中位で大きく外傾する。西壁は床面からやや外傾して立ち上がる。



遺構名	カマド	平面形	方位	長軸×短軸×深さ(m)
SI1	なし	方形	N-2°-W	3.45×0.220×0.34
P番号	平面形	構造形	長軸×短軸×深さ(m)	
P1	U字形	U字形	0.220×0.175×0.44	

遺構名	層位	土色	土質	備考	遺構名	層位	土色	土質	備考
SI1	1	10YR4/3に濃い黄褐色	砂質シルト	径20～30mmの高規格シルトブロックを多数、南西面に長さ1～15mmの焼土ブロックを散見していた。	P1	1	10YR4/3に濃い黄褐色	シルト	径20～30mmの高規格シルトブロックを散見していた。
	2	10YR4/3に濃い黄褐色	粘土質シルト	径10～20mmの周縁部粘土質シルトブロックを散見していた。					

第354図 SI1 竪穴住居跡平面図・断面図

## 第7節 宮崎遺跡

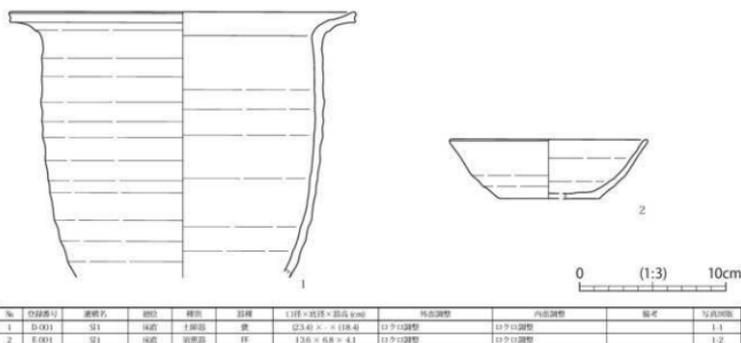
壁高は床面から最大34cmである。

[床面] 掘り方埋土上面を床面とし、やや起伏する。

[その他の施設] 床面でビット1基(P1)を検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸20cm、短軸17cm、深さ44cmである。柱痕跡は確認されていない。

[掘り方] 深さ3～24cmである。底面は壁際と中央部が落ち込む。

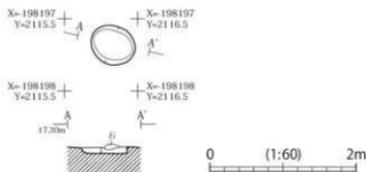
[出土遺物] 遺構堆積土から縄文土器片、土師器、須恵器、礫が出土しており、土師器1点、須恵器1点を図示した。そのうち、床面直上から出土した土師器甕(第355図1)、須恵器坏(第355図2)から、年代は9世紀中頃～9世紀後半と考えられる。



第355図 S1 竪穴住居跡出土遺物

## 2) 土坑

SK1土坑(第356図、図版1)調査区中央やや西側で検出した。平面形は楕円形で、長軸方向はN-66°-Wである。規模は長軸62cm、短軸53cm、深さ9cmである。壁面は、東壁は底面から垂直に立ち上がり、西壁は外傾して立ち上がる。断面形はU字形で、底面は平坦である。堆積土は単層である。堆積土中より加工痕がある被熱した礫が出土しているが、図示できる遺物はない。



遺物名	平面図	断面図	方位	長軸×短軸×深さ(m)	遺物名	種類	土名	土作	備考
SK1	楕円形	U字形	N 66° W	0.62 × 0.53 × 0.09	SK1	1	1070R/4 相模砂	砂質シルト	1径 200 mmの被熱礫を含む。

第356図 SK1土坑平面図・断面図

## 3) 小溝状遺構群

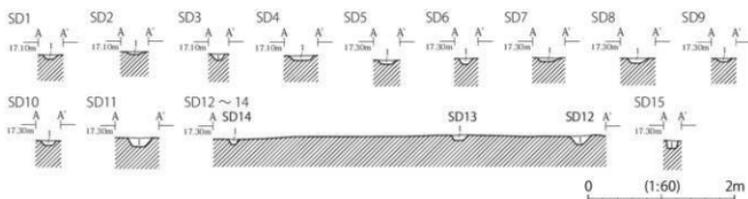
小溝状遺構を15条検出した。堆積土には灰白色火山灰を含んでいる。検出状況等から、SD1～3をI群、SD4をII群、SD5～14をIII群、SD15をIV群とし、4群に大別した。また、重複関係から、IV群→III群の変遷がたどれる。

I群(第353・357図)調査区東側で検出した。東西方向の小溝状遺構群で、3条の小溝で構成される。SD2はP16と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はSD1はN-81°-Wで、SD2・3はN-83～88°-Eである。規模は長さ0.96～4.32m、幅20～36cm、深さ5～9cmである。小溝の間隔は、106～215cmである。堆積土は単層である。SD2の堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

II群(第353・357図)調査区東側で検出した。南北方向の溝跡で、北端は調査区外に延びる。方向はN-2°-Eで、規模は長さ87cm以上、幅38cm、深さ6cmである。堆積土は単層である。堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

III群(第353・357図)調査区中央～西側で検出した。東西方向の4列からなる小溝状遺構群で、10条の小溝で構成される。SI1、SD15、P10・11と重複関係にあり、SI1、SD15より新しく、P10・11より古い。方向はN-78～88°-Wで、規模は長さ118cm～7.77m、幅20～43cm、深さ4～12cmである。小溝の間隔は、100～278cmである。堆積土は単層である。SD8・11～14の堆積土中より土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

IV群(第353・357図)調査区中央で検出した。南北方向の溝跡で、北端は調査区外へ延び、南側は確認調査区V-22により削平される。SD8と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-2°-Eで、規模は長さ157cm、幅16cm、深さ12cmである。堆積土は単層である。遺物は出土していない。



遺構名	平面形	断面形	方位	長さ×幅×深さ(m)	遺構名	平面形	断面形	方位	長さ×幅×深さ(m)
SD1	直線	逆折形	N 81° W	1.71 × 0.23 × 0.06	SD9	直線	逆折形	N 85° W	1.55 × 0.22 × 0.05
SD2	直線	逆折形	N 88° E	4.32 × 0.36 × 0.05	SD10	直線	逆折形	N 81° W	1.24 × 0.23 × 0.07
SD3	直線	逆折形	N 83° E	0.96 × 0.20 × 0.09	SD11	直線	逆折形	N 82° W	(4.50) × 0.34 × 0.12
SD4	直線	逆折形	N 2° E	0.87 × 0.38 × 0.06	SD12	直線	逆折形	N 79° W	4.86 × 0.39 × 0.12
SD5	直線	逆折形	N 83° W	1.18 × 0.28 × 0.06	SD13	直線	逆折形	N 78° W	5.50 × 0.43 × 0.07
SD6	直線	逆折形	N 84° W	2.45 × 0.23 × 0.08	SD14	直線	逆折形	N 80° W	1.97 × 0.23 × 0.07
SD7	直線	逆折形	N 84° W	7.77 × 0.32 × 0.04	SD15	直線	U字形	N 2° E	0.57 × 0.16 × 0.12
SD8	直線	逆折形	N 88° W	(3.37) × 0.28 × 0.07					

遺構名	層位	土色	土質	備考	遺構名	層位	土色	土質	備考
SD1	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック)を少量含む。	SD9	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック)を少量含む。
SD2	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック・灰白色火山灰ブロック)を少量含む。	SD10	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック・灰白色火山灰ブロック)を少量含む。
SD3	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック)を少量含む。	SD11	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック・灰白色火山灰ブロック)を少量含む。
SD4	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック)を少量含む。	SD12	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック・灰白色火山灰ブロック)を少量含む。
SD5	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック)を少量含む。	SD13	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック・灰白色火山灰ブロック)を少量含む。
SD6	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック)を少量含む。灰白色火山灰ブロックを量産含む。	SD14	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック・灰白色火山灰)を少量含む。
SD7	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック・灰白色火山灰)ブロックを少量含む。	SD15	I	10R6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	陶器片(砂質シルトブロック)を少量含む。
SD8	I	10R5/3に似ない黄褐色	砂質シルト	陶器片(砂質シルトブロック・灰白色火山灰)ブロックを少量含む。					

第357図 小溝状遺構群SD1～15断面図

## 第7節 宮崎遺跡

### 4) ビット (第353図)

16基のビットを検出した。調査区東側と調査区中央～西側に分布する。1基のビット堆積土中より土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

### (2) 遺構外出土遺物

基本層Ⅲ層から土師器、須恵器、礫が出土しているが、図示できる遺物はない。

## 2. まとめ

宮崎遺跡は仙台市太白区富沢字宮崎にあり、自然堤防に立地する古代の遺跡である。平成27年度に169㎡の調査が行われ、古代以降の遺構群が検出された。

### (1) 遺構について

1) 古代以降の遺構は基本層Ⅲ層上面で検出した。

竪穴遺構1基、土坑1基、小溝状遺構群4群、ビット16基である。

2) S11は、出土遺物から9世紀中頃～9世紀後半の竪穴遺構と考えられる。

3) 小溝状遺構群は4群に分けられ、重複関係から東西方向に延びる小溝状遺構群のほうが、南北方向に延びる小溝状遺構群よりも新しい。堆積土中には灰白色火山灰を含んでいる。

### (2) 遺物について

出土遺物は平箱1箱である。全体として小破片が多く、図化できる遺物は少ない。

#### 1) 縄文時代

S11の堆積土から縄文土器片が出土しているが、小破片で量も少ないため混入したものと考えられる。

#### 2) 古代以降

基本層Ⅲ層上面検出遺構及び遺構外から土師器、須恵器、礫が出土している。S11の床面直上からは土師器甕、須恵器環が出土している。これらは9世紀中頃～9世紀後半の遺物と考えられる。

## 宮崎遺跡写真図版





調査区全景 (東から)



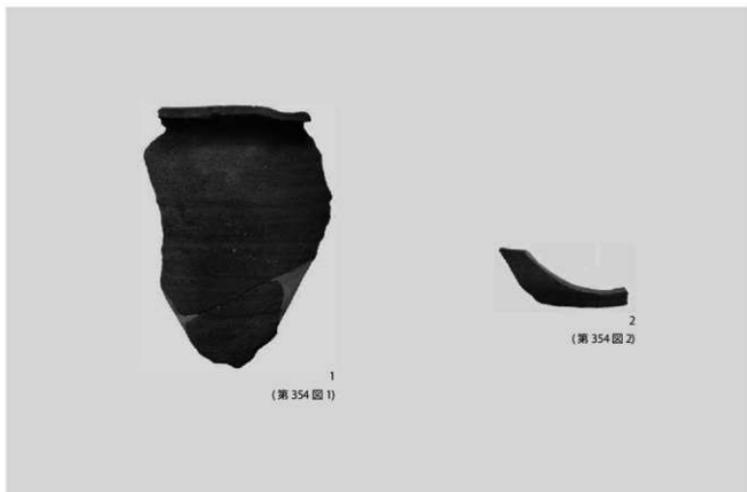
SI1 全景 (南から)



SI1 遺物 (E-001) 出土状況 (南から)



SK1 断面 (南から)



写真図版 1 宮崎遺跡

## 第7章 総括

区画整理事業以前の調査としては、昭和59年・60年に東北電力铁塔建設に伴う調査が行われており、鍛冶屋敷A遺跡から平安時代の竪穴住居跡2軒・鍛冶関連遺構1基が検出されている。また、平成8年・9年には都市計画道路富田富沢線建設に伴う確認調査と本発掘調査が行われ、鍛冶屋敷A遺跡から、奈良時代から平安時代の竪穴住居跡6軒・鍛冶関連遺構1基、縄文時代後期の竪穴住居跡2軒・配石遺構3基などが検出されている。鍛冶屋敷前遺跡からは、奈良時代の竪穴住居跡2軒、縄文時代後期の石組住居跡2基・地床跡2基などが検出されている。

これらの調査成果から、事業地内には縄文時代と古代の集落が広がっていることが想定されていた。今回の調査では、事業地内東側に位置する川前遺跡・富沢館跡から縄文時代の竪穴住居跡が、事業地内西側に位置する鍛冶屋敷前遺跡・鍛冶屋敷B遺跡から古代の竪穴住居跡・鍛冶関連遺構が検出されている。ここでは、古代と縄文時代の遺物と遺構について整理し、若干の検討を行いたい。

### 第1節 出土遺物について

#### 1. 縄文時代の遺物について（第358～372図）

縄文時代の遺物は、主に富沢館跡D-1・2区および川前遺跡のA～C区、及びそこで検出された縄文時代の遺構より多量に出土した。ここでは、これらの遺構や包含層から出土した遺物を中心に見て行きたい。

富沢館跡出土の縄文土器は器種ごとに分類し、川前遺跡出土の縄文土器は時期ごとに分類して説明する。遺跡ごとに概観すると、富沢館跡は縄文時代後期中葉が主体、川前遺跡は縄文時代晩期が主体である。

#### (1) 縄文土器（第358～370図）

##### 1) 富沢館跡（第358～360図）

###### 深鉢形土器

A-008・028・036・054は、口縁部が平口縁で、頸部から口縁部へ大きく外傾して立ち上がる。A-036は、胴部上位に最大径を持ち緩やかに内湾して立ち上がると考えられる。いずれも口縁部は無文帯で、A-008・028・054は、頸部に縄文が施された後に横位に平行沈線を、縦位にC字状または逆C字状沈線が施される。A-036は、頸部文様帯を有しないが、口縁部と胴部を区画するように屈曲し、屈曲部分に横位に沈線が施された後に、連続する刺突が施される。胴部上位は、縄文が施された後、横位に平行沈線を、従位にC字状または逆C字状沈線が施される。

A-002・003・007・014・023・027・030・031・033・034・037・048は、口縁部が波状口縁である。頸部は緩やかに内湾または直線的に、口縁部は直線的または内湾、外反して立ち上がる。A-030は、胴部が筒形を呈し、下位が窄まると考えられる。いずれも口縁部は無文帯で、口縁部と頸部を区画するように、横位に沈線または、刻目文の施された隆線が巡る。頸部には縄文が施された後、直線や曲線で描かれた沈線区画が施され、区画内に磨り消しが施される。A-002は、頸部と胴部を区画するような文様は無く、頸部から胴部上位まで縄文が施されていると考えられる。A-030は、口縁部の無文帯に、刻目文が施された逆C字状の隆線または、口唇部の小突起から懸垂する刻目文が施された隆線を施す。頸部と胴部を区画するように、横位に刻目文が施された隆線が巡る。胴部は、横位に区画された隆線と沈線の間に縄文が施される。A-014は、口唇部に二個一對の団扇状小突起を有する。A-023・031・037は、口唇部と口縁部を区画するように沈線または、隆線が施される。口唇部外面には、

連続する刻目文が施される。A-023は、焼成後に孔が穿たれている。

A-004～006・009・011・016・019・038・044は、口縁部が平口縁または波状口縁である。頸部は緩やかに内湾または直線的に、口縁部は直線的または内湾、外反して立ち上がる。A-038は、緩やかに内湾して立ち上がると考えられる。いずれも口縁部に縄文が施され、頸部または胴部を区画するように、横位に沈線または刻目文の施された隆沈線が巡る。A-006・016・019・038は、口縁部を上位と下位に区画するように、横位に沈線が施され上位に縄文が施される。更にA-006は、縄文が施された口縁部上位に、連続する弧状の沈線が多重に施される。これらの頸部または胴部には、直線や曲線で描かれた沈線文区画が施され、区画内に磨り消しが施される。A-038・044は、口唇部外面に刻目文が施される。更にA-044は、口唇部に小突起および沈線が施された团扇状小突起を有する。A-026・046は頸部破片である。いずれも緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部が大きく外に開くと考えられる。口縁部と頸部を区画するように刻目文が施された隆沈線が巡る。いずれも縄文が施された後、直線や曲線で描かれた沈線文区画が施され、区画内に磨り消しが施される。

A-022・025・053は、頸部から胴部または胴部のみである。A-053は、底部から胴部上位へやや直線的に立ち上がり、胴部上位から頸部へ緩やかに内湾し、頸部と胴部を区画するように屈曲する。A-022は、胴部下半のみであるが、A-053と同様に底部から胴部上位へやや直線的に、胴部上位から頸部へ緩やかに内湾すると考えられる。A-025は、胴部中位が張り出すよう底部から緩やかに内湾し、頸部と胴部を区画するように屈曲する。A-025・053は、頸部と胴部を区画するように横位に刻目文が施された隆沈線が巡る。A-025は、これに平行する沈線が横位に施されその区画された内側は、無文帯が施される。横位に巡る沈線より下の胴部に縄文が施される。A-053は、胴部を上位と下位に区画するように胴部中位に横位の沈線が施され、上位に縄文が施された後、連続すると考えられる弧状の沈線が施され、その内側に磨り消しが施される。下位は無文帯が施される。

A-001・012・032・035・042・052は、いずれも粗製土器である。A-012・032・042・052は平口縁である。A-042は、底部からやや直線的に、胴部上位または口縁部下位で緩やかに内湾して立ち上がる。A-012は、口縁部破片であるが、A-042と同様、胴部上位または口縁部下位で緩やかに内湾して立ち上がる。A-032は、胴部中位に最大径を持ち、口縁部に向かって緩やかに内湾して立ち上がる。A-052は、直線的に立ち上がる。A-001は、底部から胴部のみであるが、底部から外傾して立ち上がる。A-001・042は縄文が施され、A-012・052は、柳歯状工具による条線がC字状と逆C字状で施される。A-035は、胴部破片である。縄文が施され、焼成後に孔が穿たれている。A-001～009・011・012・014・016・019・022・023・025・027・028・030～038・042・044・048・052～054は、縄文時代中期中葉の宝ヶ塚式土器と考えられる。

鍛冶屋敷A遺跡1次(仙台市教委 2000)では、平行沈線文や、磨り消し縄文と組み合わせた入組み沈線文の他に、鋸歯状沈線文が施された土器が出土していたが、今回の調査では出土していない。

### 壺形土器

A-018は、胴部下位に最大径を持ち、底部から内湾して立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。A-029は、胴部中位に最大径を持ち、底部から内湾して立ち上がり、頸部で緩やかに屈曲する。A-039は、胴部上位に最大径を持ち、底部から強く内湾して立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部はやや直線的に外傾すると考えられる。A-047は、胴部上位に最大径を持つと考えられる。A-051は、胴部中位に最大径を持つと考えられる。A-018は、口唇部直下に縄文が施され、その下に横位に沈線が巡る。A-018・039は、胴部上位から下位に縄文が施され、その上・下端を横位に沈線を巡らせ区画する。その内側に直線や曲線で描かれた沈線文区画が施され、この区画内に磨り消しが施される。逆にA-029・047・051は、沈線文区画の内側に縄文が施される。

A-010・020・045は、長胴型の壺形土器である。A-020は、頸部で内湾し、口縁部は直線的に外傾して立ち上

## 第1節 出土遺物について

がる。A-010・045は胴部文様帯が2段で、A-020は3段で構成される。A-010は、連続するZ字状とS字状の沈線文区画の内側に縄文が施される。A-045は、直線や曲線で描かれた沈線文区画の外側に縄文が施される。A-020は、上から2段は横位に巡る沈線文区画に合流するJ字状沈線文区画の外に縄文が施され、最下段は連続する弧状沈線文区画の内側に縄文が施される。A-010は、底部付近に焼成前に孔が穿たれ、その内外の周囲を隆線が巡る。

A-040・041は、粗製土器である。A-040は、底部から大きく外傾し、胴部下位で最大径を持ち、強く屈曲しやや直線的に内傾して立ち上がる。A-041は、胴部中位に最大径を持ち内湾し、頸部で屈曲し、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部は無文帯が施され、胴部に縄文が施される。

A-024・043は、小型土器である。A-024は、丸底で球胴型である。A-043は、胴部上位に最大径を持ち、底部から内湾し、頸部で屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がる。いずれも胴部に縄文が施される。A-010・018・020・024・029・039・040・041・043・045・047・051は、縄文時代後期中葉の宝ヶ峯式土器と考えられる。

A-050は、小型土器である。胴部上位に最大径を持ち、胴部は内湾し、頸部で屈曲し、口縁部はやや直線的に立ち上がる。口唇部は小突起を有し、口縁部は口唇部及び頸部に横位に沈線が巡り、その内側に横位に沈線が1条巡る。胴部上位には縄文が施された後、沈線が施される。胴部最大径の付近に、貼瘤が施される。これは、縄文時代後期後葉の瘤付土器（金剛寺式）と考えられる。

### 注口形土器

A-021は、胴部中位に最大径を持ち、胴部は内湾して立ち上がる。注口部は欠損しているが、接合面を残す。胴部上位から中位に曲線の沈線が施される。底部は段を有し無文である。A-056・058は注口部である。A-056は、外湾する形状を呈する。外面はよく磨かれ、やや黒ずんでいることから黒色処理を施されていると考えられる。また、器面全体に僅かではあるが赤彩を残す。接合部付近の上下左右面に、対になる焼成後孔が穿たれている。A-058は直線的な形状をし、接合部付近の下面に刻目文の施された隆線が施される。

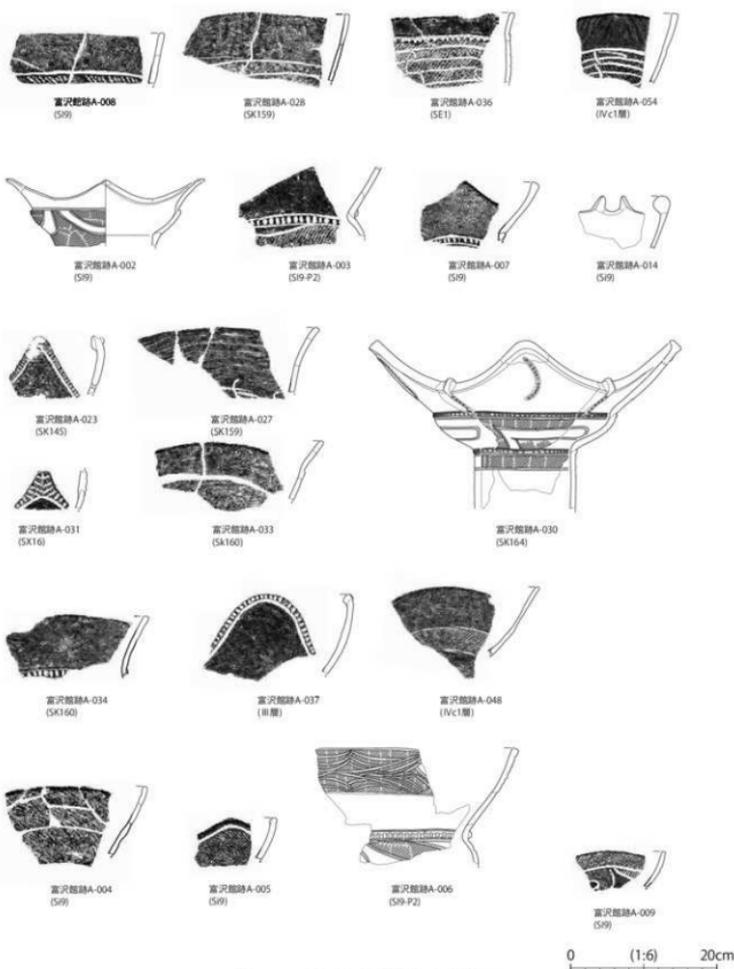
### 異形土器

A-015は、胴部と僅かに口縁部が残る。胴部中位に最大径を持ち、内湾しながら頸部で屈曲し、口縁部はやや外反するように立ち上がると考えられる。口縁部と脚部を区画するように、胴部上・下端に横位に刻目文の施された隆線が巡る。窓部は表に1ヶ所、裏に1ヶ所あり、窓部の縁を刻目文の施された隆線が巡る。A-049は、窓部のみである。窓部の縁には、刻目文が施される。胴部との接合部には、刻目文の施された隆線が巡る。いずれも、縄文時代後期中葉の宝ヶ峯式土器と考えられる。

### その他の土器

A-017は、蓋である。裾部から天井部へやや内反しながら立ち上がる。胴部には縞系の格状体回転文が施される。裾部には、横位の沈線が巡る。A-055は、台付である。脚部はやや内傾して立ち上がる。裾部に縄文が施され、横位に沈線が巡る。A-013は、器台である。台座部と裾部に、横位に刻目文の施された隆線が巡る。また同様の隆線が縦位に施される。A-057は、環状把手である。内部は中空である。把手頂部に瘤状の突起を有し、その下端に沈線が巡らせ、その間に刺突が施される。把手下端には、刻目文の施された隆線が2条施される。A-059は、環状突起である。突起頂部に、沈線が施された隆線が施される。突起中位には、左右共に3条の平行する沈線が施される。突起左下端には、瘤状の突起を有する。

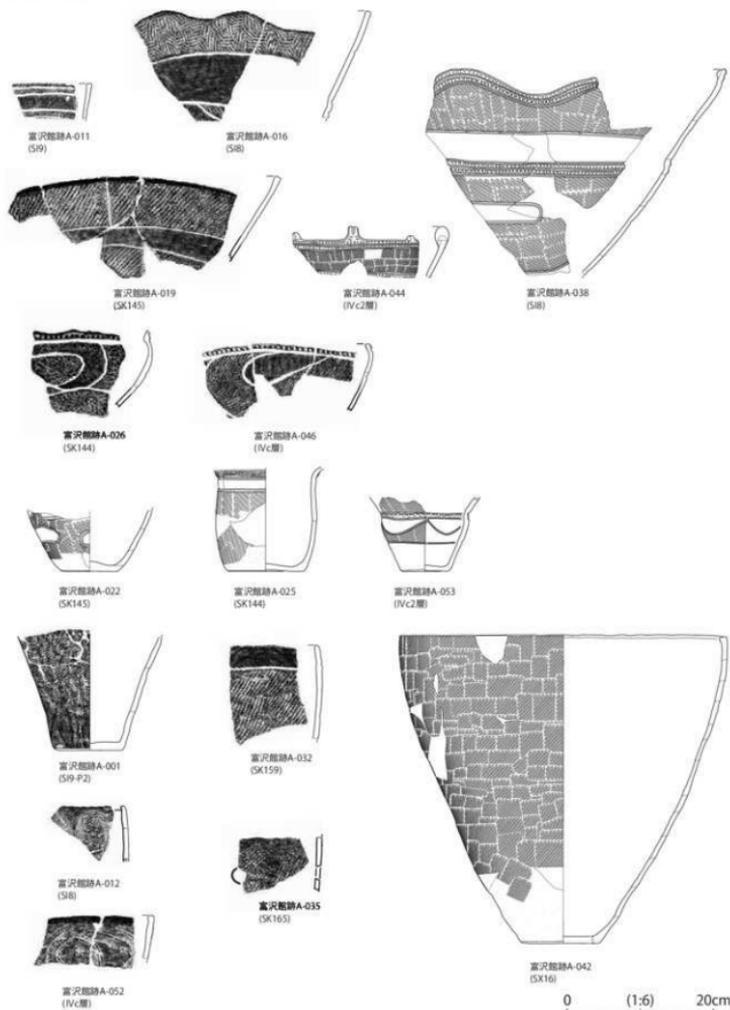
## 深鉢形土器



第358図 富沢館跡縄文土器集成 深鉢(1)

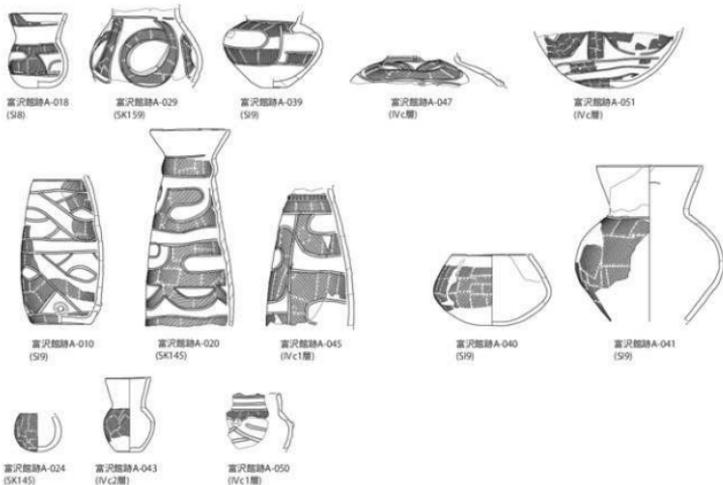
第1節 出土遺物について

深鉢形土器



第359図 富沢館跡縄文土器集成 深鉢(2)

## 変形土器



## 注口形土器



## 異形土器



## その他



第360図 富沢館跡縄文土器集成 深鉢以外

0 (1:6) 20cm

## 第1節 出土遺物について

### 2) 川前遺跡 (第361～370図)

#### A群

IV a2層、IV a1・2層より出土した土器群で、器面に貼瘤が施されるのが特徴的である。深鉢形土器の器形は胴部途中で屈曲しそこから口縁へ向け外傾して立ち上がるのが最も特徴的である。

A-059・143は、深鉢形土器である。A-143は、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり。A-059は、外傾しながら立ち上がる。A-059は波状口縁、A-143は平口縁である。A-059は、口縁に平行する3条または4条の沈線が施され、沈線と沈線の間に瘤状小突起が施される。A-143は、櫛歯状工具による条痕が縦位に並行して施される。

A-133・165は、壺形土器である。A-133は、胴部中に最大径を持ち、底部から内湾しながら立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は外反する。口縁部には、口縁に平行する1条の沈線が横位に巡る。胴部には、環状突起と瘤状小突起が各々対称的に施され、これらを繋ぐように3条の沈線が施される。A-165は、胴部が緩やかに内湾すると考えられ、頸部で屈曲し、口縁部はやや内湾し、口唇部付近がやや外反する。口縁部には、縄文が施され、その下端に1条の沈線が横位に巡る。頸部には、環状突起を有し沈線が施される隆線が横位に巡る。

A-146は、浅鉢形台付土器である。脚部は内傾すると考えられ、底部付近で屈曲し、胴部は大きく外傾しながら立ち上がる。屈曲部分には、横位に沈線が巡る。脚部には、窓部を有する。

これらは、縄文時代後期後葉の瘤付土器(金剛寺式)と考えられる。

#### B群

IV a3層、SI3掘り方、IV b1・2層から出土した土器群で、口縁部文様帯に連文や魚眼状三叉文、また入組帯状文に三叉文を組み合わせたのが特徴的である。口縁部では、山形突起を有するものもあるが、小波状口縁が多い。

A-128・137・145・147・158～161・163・164は、深鉢形土器である。胴部は緩やかに内湾して立ち上がる。頸部で屈曲し、口縁部は直線的に外傾または外反する。口縁は、いずれも平口縁で口唇部に小突起または突起を有する。A-161・163の突起頂部には刺突が施される。A-128・145・164は、口唇部に刻目文または押圧により、小波状口縁を作出する。口縁部または胴部上位に、縄文が施され、沈線等により三叉文や魚眼状三叉文、山形三叉文、磨り消しが施される。胴部または胴部下位には縄文が施される。A-137は、粗製の深鉢形土器である。胴部は緩やかに内湾して立ち上がる。口縁部から胴部に縄文が施される。

A-139は、壺形土器である。口縁部はやや外傾して立ち上がる。口縁は、平口縁である。口縁部を上位と下位に区画するように段を有し、上位は無文帯、下位は縄文が施され、沈線等により三叉文が施されている。

これらは、縄文時代晩期の大洞B1式と考えられる。

#### C群

IV a1・3層、SI2堆積土、SI4堆積土・砂掘り方、IV b1層から出土した土器群で、口縁部に文様帯をもち、文様は玉抱き三叉文や入組三叉文が施されるのが特徴的である。

A-125・131・134・138・142は、深鉢形土器である。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は直線的に内傾または内湾して立ち上がる。口縁は、口唇部に刻目文または押圧により、小波状口縁を作出する。口縁部には、これに平行する多重の沈線と沈線等により玉抱き三叉文や入組三叉文が施される。胴部には、縄文またはミガキが施される。A-025・135・140は、鉢形土器である。胴部は緩やかに内湾し、口縁部が内傾または直線的に外傾する。口縁は、口唇部に刻目文または押圧により、小波状口縁を作出する。A-025は、円盤状の突起を有する。口縁部には、これ

に平行する多重の沈線と、玉抱き三叉文や人組三叉文が沈線等により施される。胴部には、縄文が施される。A-141・153は浅鉢形土器である。胴部は内湾し、口縁部はやや内傾または口縁部付近で屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。

A-092は、壺形土器である。胴部中位に最大径を有すると考えられ、緩やかに内湾し上位で大きく内傾し、頸部付近で屈曲し、口縁部はやや外傾する。口縁部には縄文が施され、頸部付近に横位に沈線が施される。頸部は、無文帯である。胴部上位には、縄文が施され、多重の並行沈線及び沈線による人組文が施される。

A-126・149・152・155は、注口形土器である。A-126は、胴部は内湾すると考えられ、頸部付近でやや屈曲し、頸部は緩やかに内湾しながら口縁部付近で屈曲する。口縁部はやや内湾しながら外傾する。A-149・152・155は注口部のみである。A-149は注口が短い、A-152・155は長い。また、A-155は直線的であるが、A-152は下端がやや外反する。

A-109は小型土器である。底部から緩やかに内湾し、口縁部はやや内傾する。口縁は、口唇部に刻目文または押圧が施されることにより、小波状口縁を作出し、小突起を有する。口縁部には、その下端に平行する2条の沈線が施され、その間に入組三叉文が施される。

A-150・156は、粗製の深鉢形土器である。胴部は、やや直線的に外傾または緩やかに内湾し、口縁部はやや内傾して立ち上がる。A-150は、口縁部から胴部までミガキが施され、口縁部付近に焼成後に孔が穿たれている。A-156は、口唇部直下より、RL縄文を横位、縦位と交互に回転施文することにより、非結束縄文が胴部まで施される。

これらは、縄文時代晩期の大同B2式と考えられる。

## D群

IV a1～3層、SK6堆積土から出土した土器群である。羊歯状文や玉抱き三叉文から派生したと考えられているS字状文が特徴的である。器形は、口縁部文様帯と胴部の境に屈曲を有し、口唇部付近がやや外反するものが見られる。

A-014・108・127は、深鉢形土器である。胴部は内湾し、口縁部は内傾または直線的に外傾する。A-127は、口唇部付近が外反する。口縁は、口唇部に刻目文または押圧が施されることにより、小波状口縁を作出する。口縁部には、これに平行する多重の沈線と沈線等によりS字状文や羊歯状文が施される。胴部には、縄文が施され、A-108にはLR縄文とRL縄文が横位に回転施文することにより、非結束縄文が施される。A-013・035は、鉢形土器である。胴部は内湾し、口縁部はやや内傾して立ち上がる。口縁は、口唇部に刻目文または押圧により、小波状口縁を作出する。口縁部には、これに平行する多重の沈線と沈線等によりS字状文や羊歯状文が施される。胴部には、RL縄文とLR縄文が横位に回転施文することにより、非結束縄文が施される。A-105・129は、浅鉢形土器である。胴部は、緩やかに内湾または直線的に外傾し、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁は、口唇部に刻目文または押圧により、小波状口縁を作出する。口縁部には、これに平行する多重の沈線と沈線等によりS字状文や羊歯状文が施される。A-105は、管状工具の先端を刺突し捻ることで、瘤状を有する沈線を作出する。胴部には、縄文が施される。A-105は、沈線による雲形文が施される。

A-132・162は、壺形土器である。A-132は、口縁部がやや内傾し、口唇部付近で屈曲し、外傾しながら立ち上がる。口縁は、平口縁で口唇部に小突起を有する。口縁部上位はミガキが施され、下位には沈線や刻目文により羊歯状文が施される。A-162は、胴部中位に最大径を有し、底部からやや直線的に立ち上がり、中位で内湾する。胴部上位には、縄文が施され、沈線により玉抱きS字状文が施され、その外を磨り消しが施される。胴部中位は、沈線により区画された内側に磨り消しが施される。胴部下位には、LR縄文とRL縄文を横位に回転施文することにより、非結束縄文が施される。

## 第1節 出土遺物について

A-123は、注口形土器である。胴部中に最大径を有し、底部からやや直線的に立ち上がる。胴部中に、沈線や刻目文による羊歯状文が施される。

A-095は、小型土器である。底部から胴部へやや直線的に外傾し、口縁部付近で内湾して立ち上がる。口縁部には、これに平行する2条の沈線が口唇部付近及び口縁部下端に施され、その間に沈線による楕円区画が施され、さらにその内側にはX字文が施される。胴部には、縄文が施される。

A-037は、粗製の深鉢形土器である。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内傾する。口縁は、平口縁で小突起を有する。口唇部直下から胴部に縄文が施される。

これらは、縄文時代晩期の大洞BC式と考えられる。

## E群

IV a1～3層、S12堆積土から出土した土器群である。深鉢形土器や鉢形土器の口縁部文様帯は、幅が狭くなり、その影響か文様も横位に沈線を数条施されるのみのもみられる。浅鉢形土器では、胴部に縄文が施された後に、沈線や彫りにより区画文等や磨り消し縄文が施される事により、雲形文等を作成する。壺形土器は、頸部から口縁部が外傾して立ち上がるものや、頸部は内傾し、口縁部は外傾するのみみられる。

A-072は、深鉢形土器である。底部からやや緩やかに内湾して立ち上がる。口縁は、平口縁である。口唇部には、刻目文が施される。口縁部には、多重の沈線が施される。胴部には、RL縄文とLR縄文が横位に回転施文することにより、非結束縄文が施される。

A-012・020・029・076・093・136は、浅鉢形土器である。胴部は、直線的に外傾または外反して立ち上がり、口縁部へいたる。口縁は、平口縁である。口唇部の内外面に、刻目文や沈線、または刻目文や沈線の施された降線が施される。A-093は、小突起が施される。口縁部には、多重の沈線が施され、A-020はこれの間に刺突が施される。胴部には縄文が施され、沈線等で雲形文が施された後、その内外を磨り消しが施される。

A-110・118・122・124・130は、壺形土器である。A-122・124・130は、胴部中に最大径を有し、底部から内湾し、頸部で屈曲し、口縁部は、やや外反して立ち上がる。A-118は、胴部上位に最大径を有し、胴部は内湾し頸部で屈曲し、頸部は直線的にやや内傾し口縁部で屈曲する。口縁部は大きく外傾し、途中屈曲し外傾して立ち上がると考えられる。A-110は、長胴型の壺形土器である。最大径を胴部下位に有し、底部から胴部はやや直線的に内傾し、頸部で屈曲し、口縁部は外傾して立ち上がる。A-122・124・130は、胴部に縄文またはLR縄文とRL縄文が横位に回転施文することにより、非結束縄文が施される。頸部または口縁部は、ミガキが施される。A-118は、口縁部や頸部の屈曲部分に沈線が施される。口縁部から胴部までミガキが施される。

A-064・154は、注口形土器である。いずれも、注口部のみ残存する。注口部と胴部の接合部付近に沈線が施される。

A-057は、香が形土器である。頸部に沈線が施され、胴部に縄文及び沈線が施される。一部に窓部が残存すると考えられる。

A-009・018・053・112・120は、粗製の深鉢形土器である。胴部上位に最大径を有し、底部から内湾またはやや直線的に立ち上がり、口縁部はやや内傾して立ち上がる。口唇部直下から底部まで、非結束縄文が横位に施される。

これらは、縄文時代晩期の大洞C1式と考えられる。

## F群

IV a1・2層、S14堆積土から出土した土器群である。前段階の深鉢形や鉢形土器に比べ口唇部に刻目文が施され

るものが多くみられる。また、口縁部文様帯に施された横位沈線間に、櫛歯状工具によるものと考えられる刺突が磨り消し縄文が施される事により、雲形文等を作成する。また、胴部内面には隆沈線が1条または2条施されるものが多くみられる。器形では、胴部と口縁部の境に屈曲を有していたもの以外に、胴部上位に屈曲する位置が下がるものがみられる。

A-016・041・054・083・097・113は、深鉢形土器である。胴部は直線的に外傾または緩やかに内湾し、口縁部付近で屈曲し、口縁部は直線的に内傾または内湾し、口縁部付近で外反して立ち上がる。口縁は平口縁で、A-016・054・097は山形小突起を有する。口唇部には、刻目文が施される。口縁部には、これに平行する多重の沈線が施される。沈線と沈線の間に、刺突が施される。胴部には、縄文が施され、A-097は沈線等により雲形文が施される。

A-002・030～033・079・080・098・106・148・157は、鉢形土器である。胴部は、やや直線的に外傾し、口縁部付近では屈曲しながら内傾し、口唇部付近で外反する。口縁は平口縁で、A-033は山形小突起を有する。口唇部には、刻目文や沈線が施される。口縁には、これに平行する多重の沈線が施される。沈線と沈線との間に刺突が施される。胴部には、縄文が施される。

A-006・023・026・038～040・042～045・047・049・～051・066～069・075・087・088・099・102・103・114～116・119は、浅鉢形土器である。底部から胴部は直線的に内傾または内湾し、口縁は外傾または内傾して立ち上がる。口縁は、平口縁で小突起を有するものもある。口唇部には、刻目文または沈線が施される。口縁部には、沈線が施される。胴部から底部には、縄文が施され、沈線等で雲形文が施される。これらの内外を磨り消しが施される。底面には、沈線が一重または二重に施される。内面胴部下位に、隆沈線または沈線が施される。

A-107・111は、壺形土器である。胴部中位に最大径を有し、内湾して頸部で屈曲し、頸部及び口縁部は外反して立ち上がる。口唇部は、肥厚になり外に張り出す。頸部は、無文でミガキが施される。胴部には、RL縄文とLR縄文が横位に回転施文することにより、非結束縄文が施される。

A-022・024・062・078・094は、注口形土器である。胴部はやや内湾すると考えられ、肩部で屈曲し外反して立ち上がる。肩部と胴部には、縄文が施され、沈線等で雲形文が施され、その内外に磨り消しが施される。肩部には、沈線や刺突の施された隆線が巡ると考えられる。

A-036は、台付鉢である。胴部は緩やかに内湾し、胴部上位で屈曲し、口縁部は直線的に内傾して立ち上がると考えられる。胴部上位には、縄文が施され、沈線等で入組文が施される。その内側に磨り消しが施される。胴部下位には、RL縄文とLR縄文が横位に回転施文することにより、非結束縄文が施される。

A-048は、蓋である。胴部は、内湾する。胴部上位には、沈線が施され、瘤状突起を有する。胴部下位には、縄文が施され沈線等で雲形文が施される。

A-055・056・063・151は、小型土器である。底部から胴部は直線的またはやや内湾して立ち上がり、口縁部付近で屈曲し、口縁部は直線的にやや内傾し、口唇部はやや外反する。口唇部には、刻目文や沈線が施される。口縁部上位は無文でミガキが施され、下位には沈線や刺突が施される。胴部には、縄文や非結束縄文が施される。

A-001は、粗製の深鉢形土器である。底部から胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はやや直立する。口縁部は、平口縁と考えられる。胴部には、非結束縄文が施されると考えられる。

これらは、縄文時代晩期の犬洞C2式の古段階と考えられる。

## G群

IV a1・2層、SI2床面直上から出土した土器群である。口縁部直下が無文のものが多くみられる。器形は、胴部

## 第1節 出土遺物について

上位に緩やかな屈曲をもつものがみられる。浅鉢形土器は、出土量が最も多い。壺形土器は、頸部が内傾するものがみられる。

A-004・008・071・091・100・121・318は、深鉢形土器である。底部から胴部はやや直線的に外傾して立ち上がり、胴部上位で内湾し、口縁部付近で屈曲し、口縁部は外傾する。口縁は、平口縁で小突起を有するものもある。口唇部には、刻目文や沈線が施される。口縁部は無文で、ミガキが施される。胴部上位には、1条または多条の沈線が施される。胴部には、縄文や非結束縄文が施される。A-008・091には、焼成後に孔が穿たれている。

A-046は、鉢形土器である。胴部上位に最大径を有し、内湾しながら立ち上がる。口縁部はやや外反する。口縁は、平口縁である。口縁部は、無文でミガキが施される。胴部には、縄文が施される。

A-077は、浅鉢形土器である。底部から胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁は、平口縁で小突起を有する。口縁部から底部には、沈線等で雲形文が施される。底面には、沈線が1条施される。胴部内面中には、隆沈線が施される。

A-005・028・061・096・117は、壺形土器である。胴部中位に最大径を有し、内湾して立ち上がり、頸部付近で屈曲し、頸部は直線的に内傾し、口縁部は外傾する。口縁は、平口縁で小突起を有するものもある。口唇部には、沈線が施されるものもある。口縁部は無文で、ミガキが施される。頸部は無文でミガキが施され、頸部下位に沈線が施された隆線及び、刻目文の施された隆線が施される。胴部には、縄文や非結束縄文が施される。A-096は、沈線や刺突が施される。

A-052は、鉢形土器である。胴部上位に最大径を有し、底部から内湾して立ち上がり、口縁部付近で屈曲し、口縁部は外反する。口縁部から底部まで無文で、ミガキが施される。

A-058は、小型土器である。胴部は内湾し、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁は、平口縁である。口縁部と胴部の境に隆沈線が施される。

これらは、縄文時代晩期の大洞C2式の新段階と考えられる。

## H群

IV a1・2層から出土した土器群である。工字状文またはπ字状文が特徴的である。深鉢形・鉢形土器は、口縁部の文様は無文、または横位に沈線を巡らすものが主体となる。胴部上位に屈曲を有するものは、そこに文様帯を構成する。壺形土器は、胴部上位に最大径を有するものが多い。

A-019は、深鉢形土器である。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部付近で屈曲し、口縁部は内湾する。口縁は、平口縁で山形突起や小突起を有する。口唇部及び口縁部には、沈線が施される。胴部には、非結束縄文が施される。

A-034・060は、浅鉢形土器である。胴部はやや直線的に外傾し、口縁部はやや内傾または屈曲し、外傾しながら立ち上がる。口縁は平口縁で、A-034は小突起を有する。口縁部には沈線が施される。胴部には、沈線等で工字状文またはπ字状文や縄文が施される。

A-003・065・070・104は、壺形土器である。胴部上位に最大径を有し、底部から直線的に外傾して立ち上がり、胴部上位で内湾し、頸部付近で屈曲する。頸部は直線的または外反して内傾し、口縁部付近で屈曲し、口縁は外傾する。口縁は、平口縁で小突起を有するものもある。口縁部は無文で、ミガキが施される。頸部は無文である。A-065・070の胴部上位には、沈線が施される。A-003の胴部には、縄文が施される。A-104の胴部は、無文でミガキが施される。A-070の頸部付近には、三個一対の瘤状の突起を6か所と、これらに比べてやや大きめの突起を1ヶ所有する。

これらは、縄文時代晩期の大洞A1式と考えられる。

## I群

IV a1・2層から出土した土器群である。工字状文または $\pi$ 字状文以外に匹字状文もみられる。器形は、胴部の屈曲は緩やかなものが多く、口縁部は外反するものがみられる。浅鉢形土器では、胴部が無文のものがみられる。

A-011・015・074・082・085・086は、深鉢形土器である。胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反または外傾する。口縁は、平口縁である。口唇部に、刻目文または沈線が施される。A-082は、口唇部に小突起を有する。胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外傾または外反する。

A-010・017・073は鉢形土器である。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は外傾または外反する。口縁は、平口縁である。口唇部に、刻目文が施される。口縁部には、沈線または無文でミガキが施される。胴部には、非結束縄文が施される。

A-081・101は、浅鉢形土器である。口縁は、平口縁である。底面から胴部は内湾して立ち上がり、口縁部はほぼ垂直または外傾する。A-081は、口縁部に沈線が施される。

A-007・084・090は、壺形土器である。胴部中位または上位に最大径を有し、胴部はやや直線的に外傾して立ち上がり、中位で内湾し、頸部付近で屈曲し、頸部及び口縁部は直線的に内傾する。A-007・090は、胴部上位に縄文や沈線が施され、胴部中位から下位は無文でミガキが施される。A-084は、胴部に非結束縄文が施されると考えられる。

A-144は台付鉢で、A-089は台付土器である。A-144は、胴部が内湾しながら立ち上がる。台部は、内湾または外反しながら立ち上がる。A-089は台部下位に、A-144は胴部中位に沈線が施される。

A-021は、蓋である。胴部から天井部は、内湾する。天井部及び胴部には、沈線が施される。天井部にはやや大きめの突起を、胴部にはこれより小さい突起を二個一対で有する。

これらは、縄文時代晩期の大洞A2式と考えられる。

## J群

IV a1層から出土した土器群である。

A-027は、深鉢形土器である。口縁は、平口縁である。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部付近で緩やかに屈曲し、口縁部は外反する。口唇部には、刻目文が施される。口縁部には、沈線が施される。胴部には、非結束縄文が施される。

これは、縄文時代晩期の大洞A'式と考えられる。

## その他

A-319は、釣手土器の釣手部分と考えられる。正面及び裏面には山形の隆沈線文が施される。右側には角柱状の突起を有し、これの下位に焼成前に孔が穿たれている。この突起は左側にも対称的に有していたと考えられる。

第1節 出土遺物について

A群



川前遺跡A-059  
(IVa層)



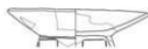
川前遺跡A-143  
(IVb層)



川前遺跡A-133  
(IVb層)



川前遺跡A-165  
(IVb層)



川前遺跡A-146  
(IVa2層)

B群



川前遺跡A-128  
(IVa3層)



川前遺跡A-145  
(IVb層)



川前遺跡A-147  
(IVb2層)



川前遺跡A-158  
(SI2)



川前遺跡A-159  
(SI2)



川前遺跡A-180  
(SI2)



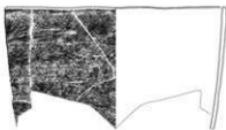
川前遺跡A-161  
(SI3)



川前遺跡A-163  
(IVa3層)



川前遺跡A-164  
(IVa3層)



川前遺跡A-137  
(IVb層)



川前遺跡A-139  
(IVb層)

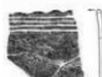
C群



川前遺跡A-125  
(IVa3層)



川前遺跡A-131  
(IVa3層)



川前遺跡A-134  
(IVb層)



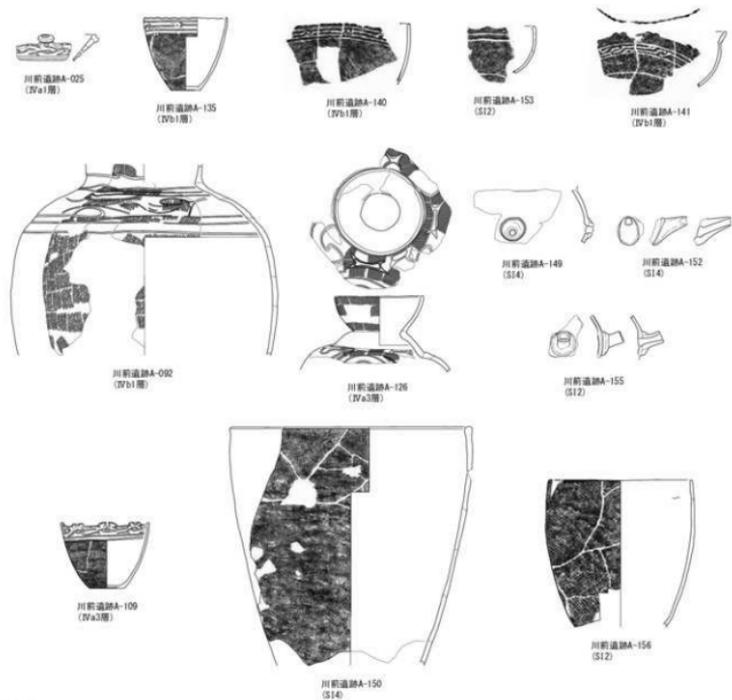
川前遺跡A-138  
(IVb層)



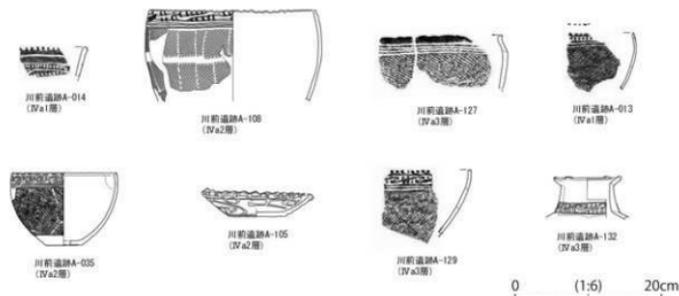
川前遺跡A-142  
(IVb層)



第361図 川前遺跡織文土器集成 A～C群

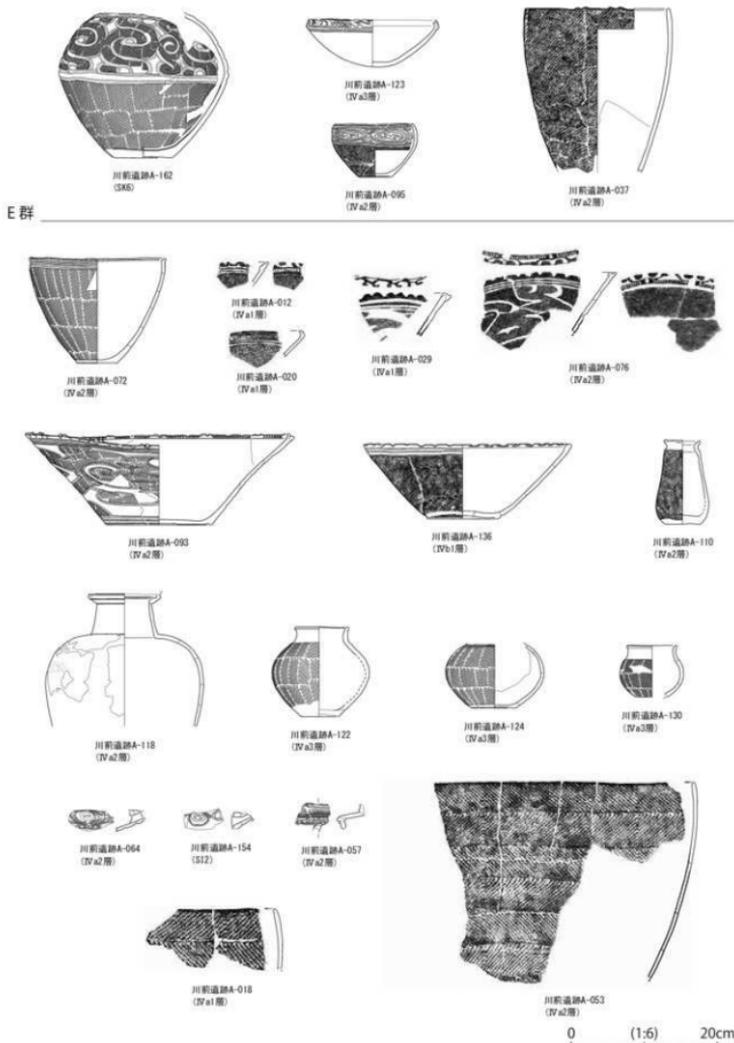


D群

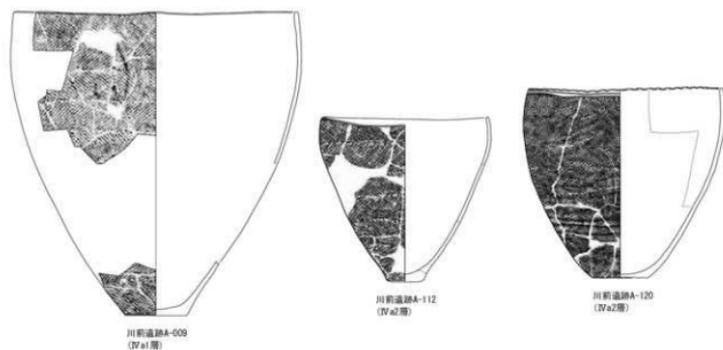


第362図 川前遺跡縄文土器集成C～D群

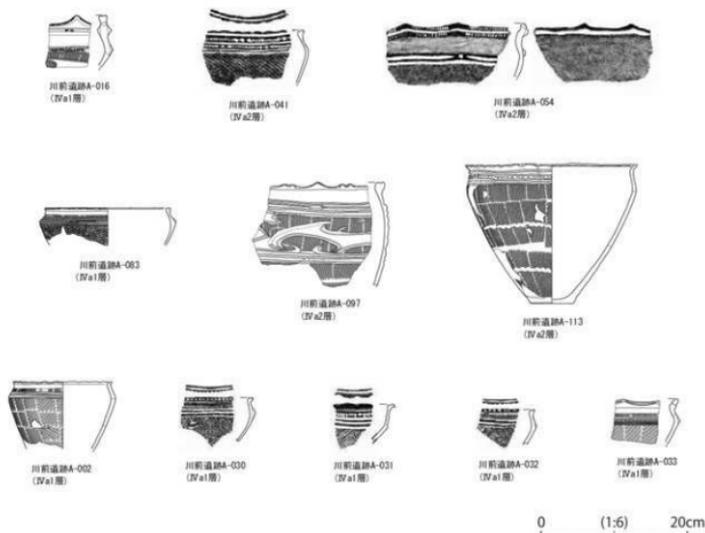
第1節 出土遺物について



第363図 川前遺跡縄文土器集成D～E群



F群

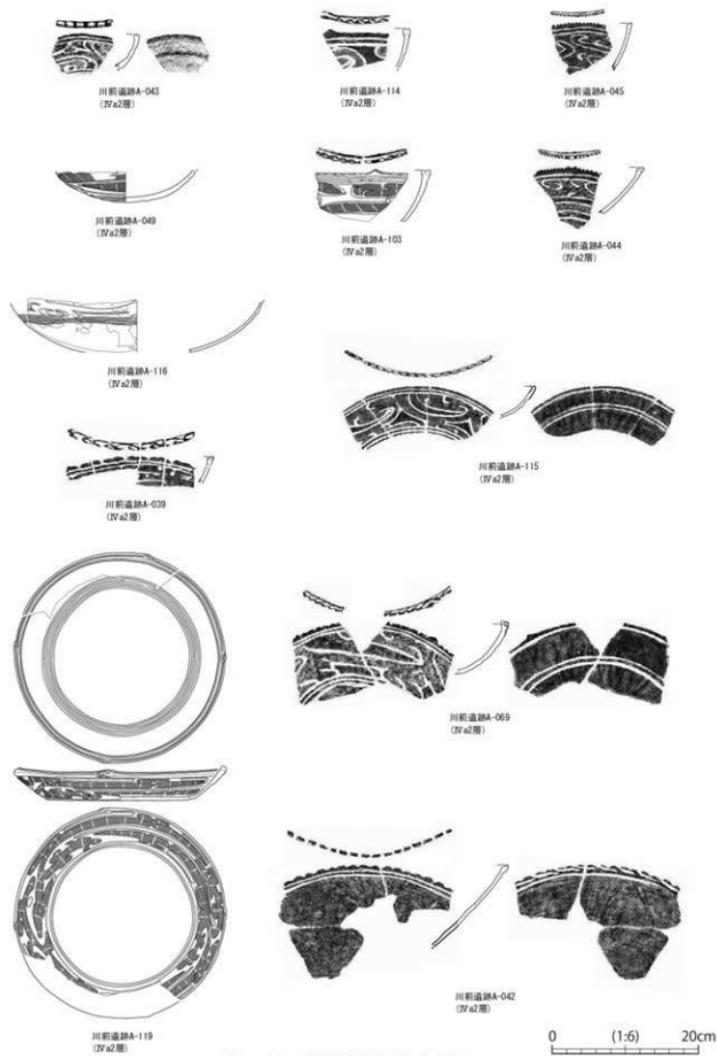


第364図 川前遺跡縄文土器集成E～F群

第1節 出土遺物について

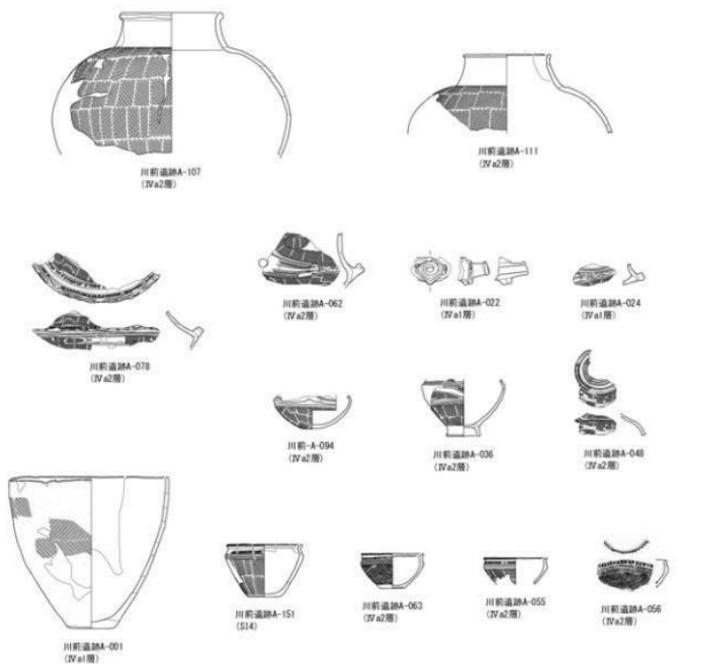


第365図 川前遺跡縄文土器集成F群(1)

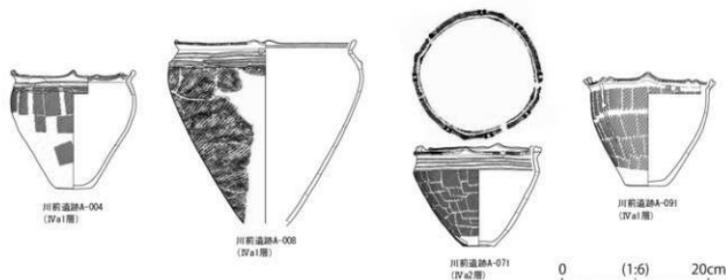


第 366 図 川前遺跡縄文土器集成 F 群 (2)

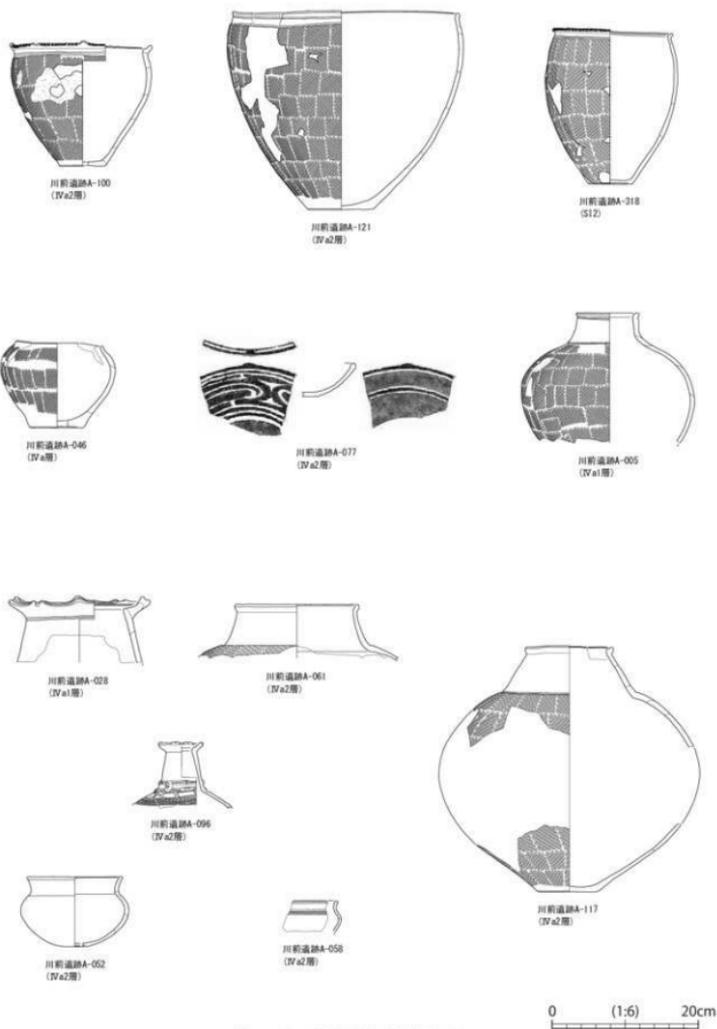
第1節 出土遺物について



G群



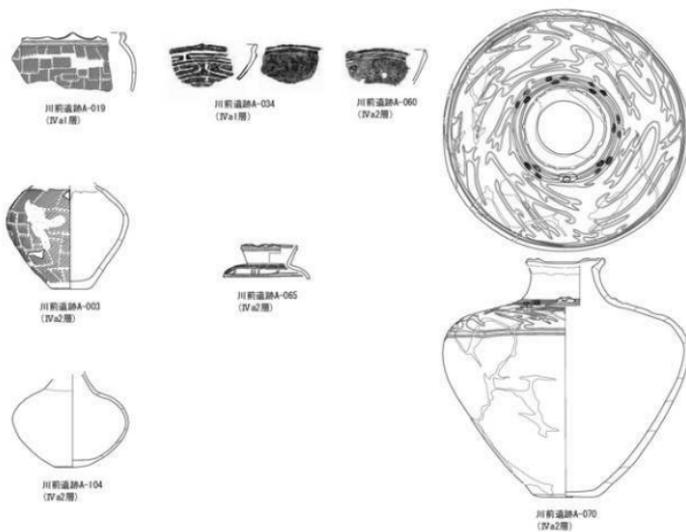
第367図 川前遺跡縄文土器集成F～G群



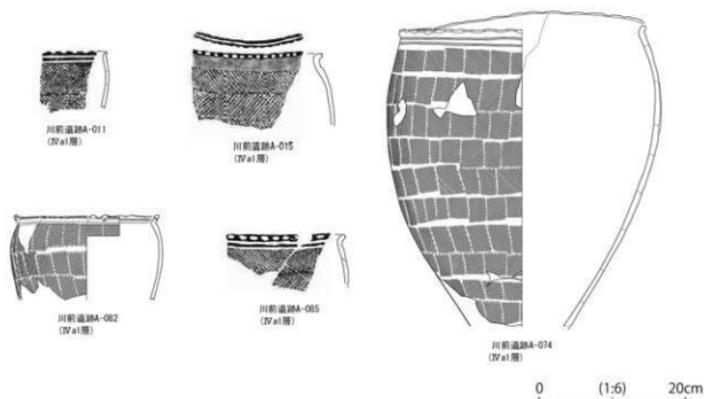
第 368 図 川前遺跡縄文土器集成 G 群

第1節 出土遺物について

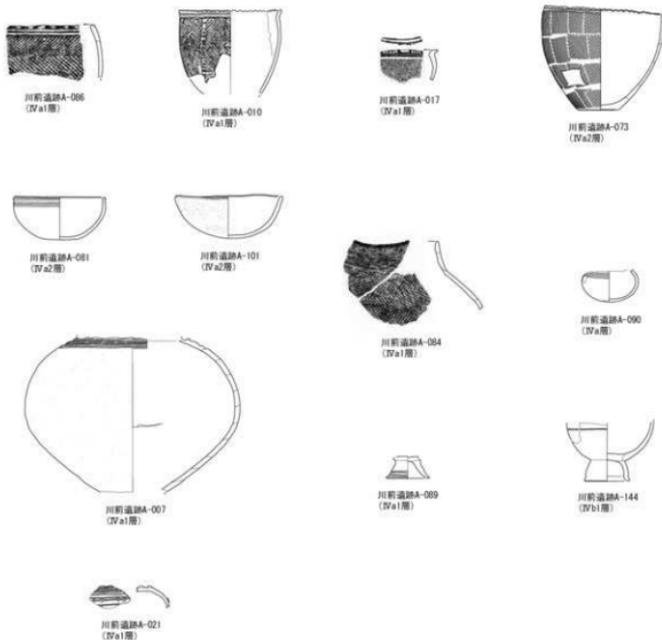
H群



I群



第369図 川前遺跡縄文土器集成H～I群



J群



川前遺跡A-027  
(27a1層)

その他



川前遺跡A-319  
(27b1層)

第370図 川前遺跡縄文土器集成I～J群、その他



## 第1節 出土遺物について

### (2) 土製品 (第371図)

今回の調査では、縄文土器に混じり多くの土製品が出土した。それらの内、8点に関してここで文様や状態、特徴について説明したい。

#### 1) 土偶

富沢館跡 P-003 は、胴部のみ残存する。腹面の胸部には、乳房状の突起を2つ有し、胸部上位及び乳房状突起の間に刺突が施される。腹部は隆起し、ここにも刺突が施される。腰部側縁は括れ、腹面腰部には横位または斜位に沈線が施され、上位に刺突が施される。下腹部には、縄文が施される。背面には縄文が施され、横位及び斜位の沈線が施される。腰部には、腹面同様に横位及び斜位の沈線が施される。臀部中央に、縄文が施される。川前遺跡

P-012 は、左腕部端及び両脚部を欠損する。頭部中央には刺突が施される。頭部と胴部の境には、区画するように沈線が横位に巡る。胴部と腰部の境にも、区画するように沈線が横位に巡る。背面胴部中央には、沈線による円形が施される。

川前遺跡 P-010 は、立膝の状態と考えられる。大腿部には沈線が施される。膝部内側には、沈線による円形が施される。脚部と足部の境には、区画するように段を有する。足部先端には、刻目文を施して、指が作出されている。

川前遺跡 P-001 は、動物の頭部と考えられる。断面形は概ね円形を呈する。両側面に刺突による目を、正面円錐状の頂部に刻目文による口を作出している。

#### 2) その他の土製品

富沢館跡 P-002 は、正面にく字状または逆く字状の沈線が施される、スタンプ形土製品の類と考えられる。富沢館跡 P-004 は、表裏面および側面に凹縁が巡る土鍾である。表裏面共にミガキが顕著である。川前遺跡 P-008 は、平面形が山形状を呈する。頂部には孔が穿たれている。表面にはS字状や弧状、蛇行状の沈線が施される。裏面は平面形状に合わせて凹ませており、そこに5つの粒状突起を有する。僅かであるが、表裏面に全体に赤彩が残る。器種は三脚玉土製品あるいは土冠と呼称されるものであると考えられる。川前遺跡 P-013 は、耳飾である。カサ部は円形を呈する。柄部は下位が袋状に膨らみ、中位で外反し、上位は外傾する。柄部の一部に赤彩を残す。

#### 土偶



#### その他



第371図 土偶・その他の土製品集成

### (3) 石製品 (第 372 図)

川前遺跡の調査において、岩偶や線刻礫等の特徴的な石製品が出土した。ここでは、それらについて説明したい。

#### 1) 岩偶

川前遺跡 Kd-009 の石材は、凝灰岩である。楕円形の扁平礫を素材に使用していると考えられる。大きさは、長さ 7.1cm、幅 6.5cm、厚さ 2.8cm を測る。重量は 87.85g である。脚部は欠損している。礫の側縁を削る事により、頭部、腕部、胴部を作出する。頭部正面には、目を模した 2ヶ所の凹みを有し、頭部上位には横位の線刻と、腕部付近から目と目の間を 2 条の線刻が線対称的に弧を描いて施される。頭部下位は山形状に凹ませ、一部を長方形形状に残し、鼻を表現したものと考えられる。表面胴部には、左右に 2 条の線刻が対称的に施される。背面頭部には山形状の線刻が施される。裏面胴部には、左右に 1 条の線刻が対称的に施される。胴部中央に、横位の線刻が施される。施されている線刻の断面形は、V 字状または U 字状を呈する。

#### 2) イモ貝形石製品

川前遺跡 Kd-011 の石材は、凝灰岩である。大きさは、長さ 8.6cm、幅 8.4cm、厚さ 3.0cm を測る。重量は 101.63g である。平面形は円形で、中央に貫通孔を有する。断面形は、表面が穿孔を中心にやや凹み、裏面が碗型を呈する。表面には、貫通孔を起点に右巻きの溝が回る。溝の断面形は、V 字状または U 字状を呈する。裏面には、ケズリによる整形の痕跡が全体に残る。イモ貝形石製品に関して、県内では蔵王町巖治沢遺跡 (宮城県教委 2010) や大崎市北小松遺跡 (宮城県教委 2014) 等で出土例が報告されているが、出土例の少ない遺物である。

#### 3) 石刀

川前遺跡 Kd-006 ~ 008 の石材は、いずれも粘板岩である。川前遺跡 Kd-006 は刀身部の大半を欠損する。大きさは、長さ 16.7cm 以上、幅 2.4cm、厚さ 1.2cm を測る。重量は 77.80g である。平面形は、刀身部が欠損しているため全形は不明であるが、直刀状を呈すると考えられる。断面形は、柄部で楕円形を呈する。柄頭部と柄部の境はやや括れる。Kd-007 は、柄頭部及び切先部を欠損する。大きさは、長さ 22.2cm 以上、幅 3.6cm、厚さ 1.3cm を測る。重量は 155.56g である。平面形は鈍状を呈し、刀身部は湾曲する。断面形は、刀身部で片刃状を呈する。Kd-008 は、柄頭部を欠損する。大きさは、長さ 33.4cm 以上、幅 4.0cm、厚さ 1.2cm を測る。重量は 239.88g である。平面形は鈍状を呈し、刀身部は湾曲する。断面形は、刀身部で片刃状を呈し、柄部でやや楕円形を呈する。いずれも、全体を研磨により整形されている。

#### 4) 線刻礫

川前遺跡 Kd-003 の石材は、砂岩である。楕円形の小型扁平礫を素材に、そのまま使用している。大きさは、長さ 3.8cm 以上、幅 3.5cm、厚さ 0.8cm を測る。重量は 11.63g である。表裏面の中央に X 字状の線刻が施され、左右の区画には 1 条の、下の区画には二重の山形状の線刻が施される。上の区画は、表面のみ 1 条または 2 条の山形状の線刻が施される。

Kd-004 の石材は、凝灰岩である。楕円礫を素材に使用している。大きさは、長さ 7.4cm、幅 4.8cm、厚さ 2.9cm を測る。重量は 74.89g である。表裏面に研磨が施され、側縁はケズリによって、整形されている。上・下端に整形のためと考えられる敲打痕が残る。表面にのみ横位に 3 条の線刻が施される。川前遺跡 Kd-010 の石材は、凝灰岩である。不整楕円礫を素材に、そのまま使用している。大きさは、長さ 9.2cm、幅 4.9cm、厚さ 3.8cm を測る。重量は 52.04g である。表裏面の上・下にクランク状の線刻を、中に 2 条一対と考えられる線刻が 4 段施される。

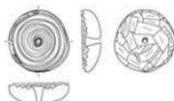
## 第1節 出土遺物について

岩偶

イモ貝形石製品



川前遺跡Kd-009  
(IVa2層)



川前遺跡Kd-011  
(IVa2層)

石刀



川前遺跡Kd-006  
(IVa2層)



川前遺跡Kd-008  
(IVa2層)



川前遺跡Kd-007  
(IVa2層)

線刻硯



川前遺跡Kd-003  
(IVa2層)



川前-Kd-004  
(IVa3層)



川前遺跡Kd-010  
(IVa2層)

第372図 石製品集成

0 (1:6) 20cm

## 2. 古代の遺物について (第373～381図)

### (1) 古代の土器 (第373～380図)

古代の土器は、川前遺跡以外の6遺跡で検出された古代以降の遺構より出土した。ここでは、その中でも竪穴住居跡及び竪穴遺構、鍛冶関連遺構の床面直上、カマド、床面施設から出土し、それらの遺構に伴うと考えられる土師器、赤焼土器、須恵器について説明する。これらの土師器は、その器形や調整等の特徴から表杉ノ入式に比定される。該期の土器様相については、先行研究(白鳥1980他)から、A期(9世紀前半以前～9世紀前半)、B期(9世紀中頃～9世紀後半)、C期(10世紀前半～10世紀前半以降)の3時期に区分が可能である。

### A期の土器 (第373・374図)

鍛冶屋敷A遺跡I区SI1竪穴住居跡、富沢館跡E南-西区SI2竪穴住居跡、鍛冶屋敷前遺跡II区SI14・18竪穴住居跡、宮崎遺跡SI1竪穴遺構の床面直上、カマド、床面施設から出土した土器を基準資料とする。器種は、土師器が環、甕、須恵器が環、甕である。なお、赤焼土器環のD-037が鍛冶屋敷前遺跡II区SI18竪穴住居跡の堆積土

から出土しているが、それ以外の出土土器が9世紀前半のものと考えられる事と、重複する遺構との新旧関係から、混入したものと考えられる。器種毎の傾向は、環が土師器環1点、須恵器環4点出土している。甕がロクロ使用の土師器甕3点、須恵器甕1点出土している。竪穴住居跡及び竪穴遺構に伴う土器は少ないが、堆積土から出土した土器もみると、土師器の出土量に比べ須恵器の方が多い。

土師器環は、D-003(富沢館跡E南-西区SI2竪穴住居跡)の1点が出土している。体部は内湾して開き、そのまま口縁部に至る器形を呈する。底部切り離し技法は、回転系切り無調整である。法量は口径12.6cm、底径4.9cm、器高3.4cmである。底径/口径比は0.39である。

土師器甕は、ロクロ使用のD-004(富沢館跡E南-西区SI2竪穴住居跡)、D-024(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区SI14竪穴住居跡)、D-001(宮崎遺跡SI1竪穴遺構)の3点が出土している。いずれも中型で胴部は長胴形である。胴部最大径を上位に有する。D-001の口縁部は、頸部で強く屈曲し、水平に近い角度で外傾して開く。

須恵器環は、E-001・008(鍛冶屋敷A遺跡I区SI1竪穴住居跡)、E-002(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区SI18竪穴住居跡)、E-001(宮崎遺跡SI1竪穴遺構)の4点が出土している。体部は直線的に外傾して開くものと、僅かに内湾して開きそのまま口縁部に至るものがある。底部切り離し技法は、回転系切り後無調整のものと、切り離し後にナデが施されるのがみられる。法量は口径13.5～15.0cm、底径5.2～7.2cm、器高4.1～5.2cmである。底径/口径比は0.35～0.59で、平均は0.46である。

須恵器甕は、E-007(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区SI18竪穴住居跡)の1点が出土している。胴部は長胴形で、胴部最大径を上位に有する。調整は、外面胴部上半に平行タキ、下半にヘラケズリが施され、内面底部にユビナデが施される。

その他、堆積土から土師器鉢、須恵器長頸瓶等も出土している。土師器鉢のD-008(富沢館跡6区SI6竪穴遺構)は、底部に「石」の文字がヘラ書されている。同じくD-006(富沢館跡6区SI10竪穴遺構)は、内外面にヘラミガキ・黒色処理が施されており、底部に木葉痕がみられる。また、D-039(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区SI18竪穴住居跡)は体部が内湾して開き、外傾しながら口縁部に至る器形を呈し、胴部と口縁部の境は段を持つ。須恵器環のE-011(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区SI19竪穴住居跡)は、底部中央に焼成後の穿孔が見られる。

## B期の土器(第374～377図)

富沢館跡2区SI1竪穴住居跡、鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区SI12竪穴住居跡、鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区SI6竪穴住居跡及びSI4鍛冶関連遺構、京ノ中遺跡SI1・2竪穴住居跡の床面直上、カマド、床面施設から出土した土器を基準資料とする。器種は、土師器が環、甕、須恵器が壺である。器種毎の傾向は、環が土師器環6点が出土しているのに対し、須恵器環は出土していない。甕は、ロクロ不使用の土師器甕1点とロクロ使用の土師器甕7点出土しているが、須恵器甕は出土していない。A期と比べ、土師器の出土量は環、甕ともに増加したのに対し、須恵器は減少している。

土師器環は、D-001・002(富沢館跡2区SI1竪穴住居跡)、D-019(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区SI12竪穴住居跡)、D-051(鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区SI6竪穴住居跡)、D-006(京ノ中遺跡SI1竪穴住居跡)、D-004(京ノ中遺跡SI2竪穴住居跡)の6点が出土している。体部は内湾して開き、そのまま口縁部に至るものが主体を占める。底部切り離し技法は、回転系切り無調整のものが主体を占める。D-051(鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区SI6竪穴住居跡)は、底部切り離し後、体部下半から底部にかけて全面ヘラケズリが施される。法量は口径13.0～14.0cm、底径5.3～6.7cm、器高3.7～4.7cmである。底径/口径比は0.40～0.52で、平均は0.47である。

土師器甕は、ロクロ不使用のC-003(鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区SI4竪穴遺構)1点と、ロクロ使用のD-040・041(富沢館跡2区SI1竪穴住居跡)、D-020(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区SI12竪穴住居跡)、D-001・048(鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区

## 第1節 出土遺物について

SI4 竪穴遺構)、D-005(京ノ中遺跡 SI1 竪穴住居跡)の6点が出土している。いずれも大型の甕である。ロクロ不使用の甕は長胴形で、胴部最大径を上位に有する。外面調整は、口縁部にヨコナデ、胴部に縦位のハケメが施され、内面調整は口縁部にヨコナデ、胴部に横位のヘラナデが施される。底部に畳表状の圧痕が見られる。ロクロ使用の甕はいずれも長胴形で、胴部最大径を上位に有するものと中位に有するものがある。外面調整は、胴部下半にヘラケズリが施されるものが主体で、内面調整は胴部にヘラナデまたはナデが施されるものと、無調整のものがある。D-041・005は内面の底部にユビナデが施される。

須恵器環、甕は竪穴住居跡及び竪穴遺構に伴うものは出土していない。

須恵器壺は、E-001(京ノ中遺跡 SI2 竪穴住居跡)の1点が出土している。胴部は球胴形で、胴部最大径を上位に有する。頸部は口縁部に向かって外反して開き、口縁端部は垂下して面を持つ。口径は底径より僅かに大きい。外面調整は、胴部下半に回転ヘラケズリが施される。底部切り離し後、高台が貼り付けられ、底部周縁にナデ、底部中央にユビオサエが施される。

その他、堆積土から土師器高台付環、須恵器環等も出土している。

## C期の土器(第377～380図)

鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区 SI1・3 竪穴住居跡及び SI2 竪穴遺構、鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区 SI8・11・9・15・16・17 竪穴住居跡、鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区 SX2 竪穴住居跡の床面直上、カマド、床面施設から出土した土器を基準資料とする。器種は、土師器は環、高台付環、甕、耳皿がある。また、この時期から赤焼土器が出現し、環、高台付皿がある。器種毎の傾向は、環が、土師器環11点、赤焼土器環8点出土しているのに対し、須恵器環は出土していない。高台付環、皿は、土師器高台付環2点、赤焼土器高台付皿1点が出土している。甕は、ロクロ不使用の土師器甕1点とロクロ使用の土師器甕5点出土しているのに対し、須恵器甕は出土していない。B期に引き続き須恵器の出土量は少なく、新たに赤焼土器が出現し、増加している。

土師器環は、D-005(鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区 SI2 竪穴遺構)、D-004・005・009・010(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区 SI9 竪穴住居跡)、D-026(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区 SI15 竪穴住居跡)、D-029・030(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区 SI16 竪穴住居跡)、D-053・054・058(鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区 SX2 竪穴住居跡)の11点が出土している。体部は内湾して開き、口縁部が僅かに外傾するものと、そのまま口縁部に至るものがある。底部切り離し技法は、いずれも回転系切り無調整である。法量は口径13.1～16.8cm、底径4.9～6.7cm、器高4.9～7.8cmである。底径/口径比は0.33～0.50で、平均は0.42である。

土師器高台付環は、D-033(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区 SI16 竪穴住居跡)、D-035(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区 SI17 竪穴住居跡)の2点が出土している。いずれも体部は内湾して開き、そのまま口縁部に至る器形を呈する。底部切り離し技法は回転系切りで、高台が貼り付けられる。法量は口径15.3cm、底径7.1～8.4cm、器高4.0～6.7cmである。

土師器甕は、ロクロ不使用のC-001(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区 SI9 竪穴住居跡)1点と、ロクロ使用のD-010(鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区 SI3 竪穴住居跡)、D-007(鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区 SI2 竪穴遺構)、D-007・008(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区 SI9 竪穴住居跡)、D-034(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区 SI16 竪穴住居跡)の5点が出土している。中～小型のものが主体である。ロクロ不使用の甕は球胴形で、胴部最大径を上位に有する。外面調整は、口縁部にヨコナデ、胴部に横位のナデののち下端にハケメが施され、内面調整は口縁部にヨコナデ、胴部に横位のヘラナデが施される。底部に畳表状の圧痕が見られる。ロクロ使用の甕は長胴形のもの2点、球胴形のもの3点である。胴部最大径を、長胴形のもの上位に有し、球胴形のもの中位に有する。調整は、ロクロ調整のみのものが主体である。D-034の外面は胴部下端にハケメが施され、内面は胴部にヘラナデが施される。

土師器耳皿は、D-059(鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区 SX2 竪穴住居跡)の1点が出土している。体部は緩やかに内湾して

開き、口縁部は上方へ折り曲げられている。底部には高台が貼り付けられている。調整は、体内内外ともにヘラミガキ・黒色処理が施される。高台部の外面調整は、ヘラケズリのちへラミガキ・黒色処理、内面調整はヘラナデ・ヘラミガキ及び黒色処理が施される。法量は口径6.6cm、底径4.5cm、器高3.5cmである。

須恵器環、甕は、竪穴住居跡及び竪穴遺構に伴うものは出土していない。

赤焼土器環は、D-001(鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区S11竪穴住居跡)、D-008(鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区S13竪穴住居跡)、D-003・004(鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区S12竪穴遺構)、D-018(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区S18・11竪穴住居跡)、D-025(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区S115竪穴住居跡)、D-031・032(鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区S116竪穴住居跡)の8点が出土している。体部は内湾して開き、口縁部は外傾するものが主体を占める。底部切り離し技法はいずれも回転系切り無調整で、D-032(鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区S116竪穴住居跡)は切り離し後にヘラナデが施されている。法量は口径11.4～13.8cm、底径4.1～5.7cm、器高2.8～5.2cmである。底径/口径比は0.33～0.46で、平均は0.40である。

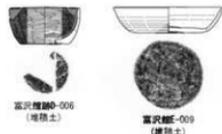
赤焼土器高台付皿は、D-006(鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区S12竪穴遺構)の1点が出土している。体部は直線的に外傾して開き、そのまま口縁部に至る器形を呈する。底部切り離し技法は回転系切りで、のちに高台が貼り付けられる。法量は口径11.8cm、底径7.0cm、器高3.4cmである。

その他、堆積土から須恵器甕等も出土している。

A～C期の土器のうち、環、高台付環、高台付皿について器形と底部切り離し技法、底径/口径比を指標として所属時期について検討する。A期の土器器環は、体部は内湾して開き、そのまま口縁部に至る。底部切り離し技法は、回転系切り無調整である。底径/口径比は0.39である。須恵器環は、体部は直線的に外傾して開くものと、僅かに内湾して開きそのまま口縁部に至るものがある。底部切り離し技法は、回転系切り無調整のものとなデが施されるものがみられる。底径/口径比は0.35～0.59で、平均は0.46である。これらの特徴は多賀城跡のC群土器にみられることから、A期は9世紀前半以前～9世紀前半と考えられる。B期の土器器環は、体部は内湾して開きそのまま口縁部に至るものが主体を占める。底部切り離し技法は、回転系切り無調整のものが主体を占める。底径/口径比は0.40～0.52で、平均は0.47である。須恵器環は、竪穴住居跡及び竪穴遺構に伴うものは出土していない。これらの特徴は多賀城跡のD群土器にみられることから、B期は9世紀中頃～9世紀後半と考えられる。C期の土器器環は、体部は内湾して開き口縁部が僅かに外傾するものと、そのまま口縁部に至るものがある。底部切り離し技法は、回転系切り無調整である。底径/口径比は0.33～0.50で、平均は0.42である。須恵器環は、竪穴住居跡及び竪穴遺構に伴うものは出土していない。この段階から、赤焼土器がみられるようになる。赤焼土器は、体部は内湾して開き口縁部は外傾するものが主体を占める。底部切り離し技法は回転系切り無調整で、のちにヘラナデが施されるものもみられる。底径/口径比は0.33～0.46で、平均は0.40である。これらの特徴は多賀城跡のE群土器にみられることから、C期は10世紀前半～10世紀前半以降と考えられる。

# A 期

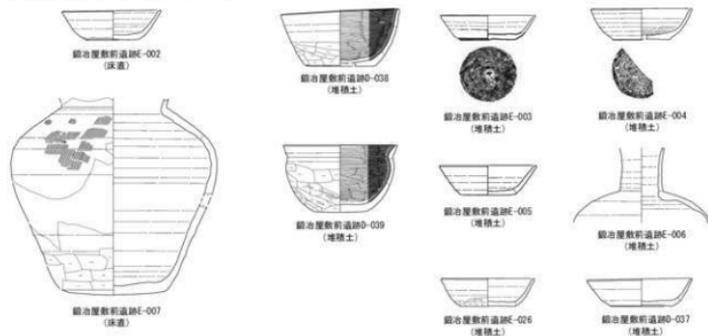
## 富沢館跡 6区 SI10 出土土器



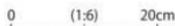
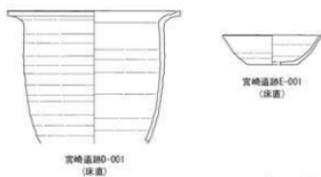
## 鍛冶屋敷前遺跡 II区 SI19 出土土器



## 鍛冶屋敷前遺跡 II区 SI18 出土土器



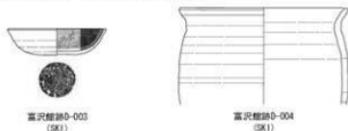
## 宮崎遺跡 SI1 出土土器



第 373 図 古代土器集成 (1)

## A 期

富沢館跡 E 南 - 西区 S12 出土土器



鍛冶屋敷 A 遺跡 I 区 S11 出土土器



鍛冶屋敷前遺跡 II 区 S114 出土土器

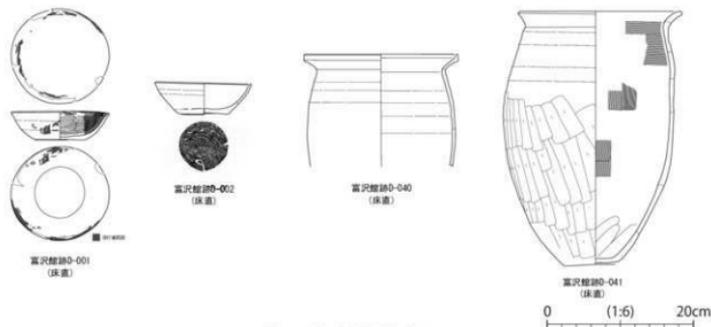


富沢館跡 6 区 S16 出土土器



## B 期

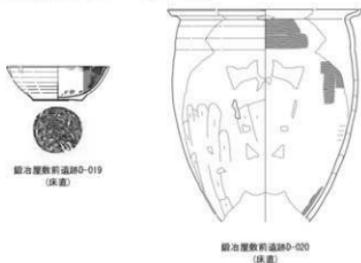
富沢館跡 2 区 S11 出土土器



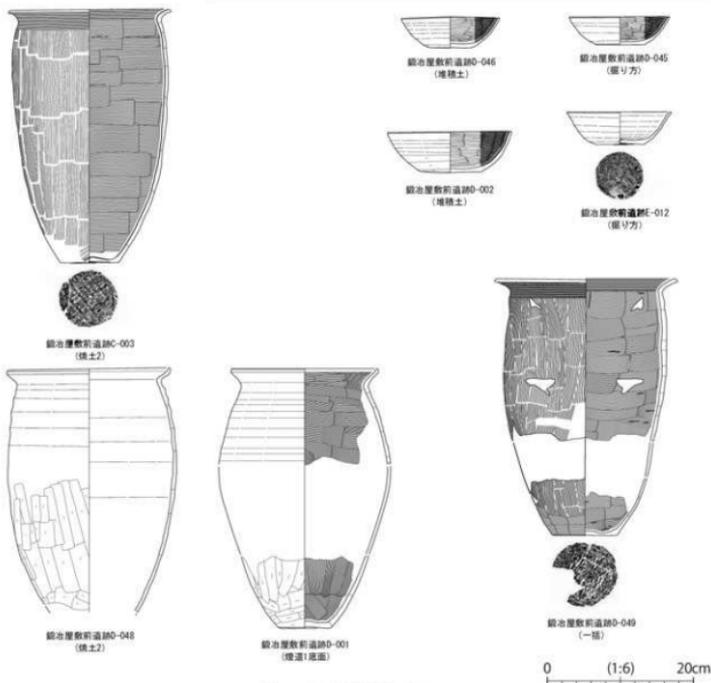
第 374 図 古代土器集成 (2)

## B期

### 鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区 S112 出土土器



### 鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区 S14 出土土器



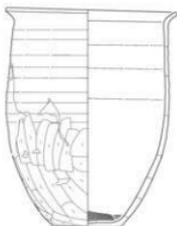
第375図 古代土器集成(3)

## B 期

### 京ノ中遺跡 SI1 出土土器



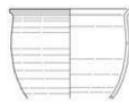
京ノ中遺跡D-006  
(深皿)



京ノ中遺跡D-005  
(深皿)



京ノ中遺跡D-001  
(カマド内埴埴土)

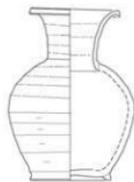


京ノ中遺跡D-002  
(カマド掘り方)

### 京ノ中遺跡 SI2 出土土器



京ノ中遺跡D-004  
(P)



京ノ中遺跡E-001  
(深皿)



京ノ中遺跡D-003  
(カマド内埴埴土)



京ノ中遺跡D-007  
(1層)

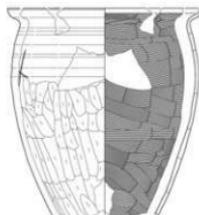
### 鍛冶屋敷前遺跡 III区 SI6 出土土器



鍛冶屋敷前遺跡D-051  
(カマド軸)



鍛冶屋敷前遺跡D-050  
(埴埴土)



鍛冶屋敷前遺跡D-003  
(カマド内埴埴土)

0 (1:6) 20cm

## B 期

鍛冶屋敷 A 遺跡 II 区 SI4 出土土器

---



鍛冶屋敷A遺跡0-013  
(増穂土)



鍛冶屋敷A遺跡0-012  
(増穂土)

鍛冶屋敷前遺跡 II 区 SI10 出土土器

---



鍛冶屋敷前遺跡0-015  
(増穂土)



鍛冶屋敷前遺跡0-017  
(増穂土)



鍛冶屋敷前遺跡0-016  
(増穂土)



鍛冶屋敷前遺跡0-013  
(増穂土)



鍛冶屋敷前遺跡0-014  
(増穂土)

鍛冶屋敷 B 遺跡 II 区 SI2 出土土器

---



鍛冶屋敷B遺跡0-001  
(増穂土)

## C 期

鍛冶屋敷 B 遺跡 II 区 SI1 出土土器

---

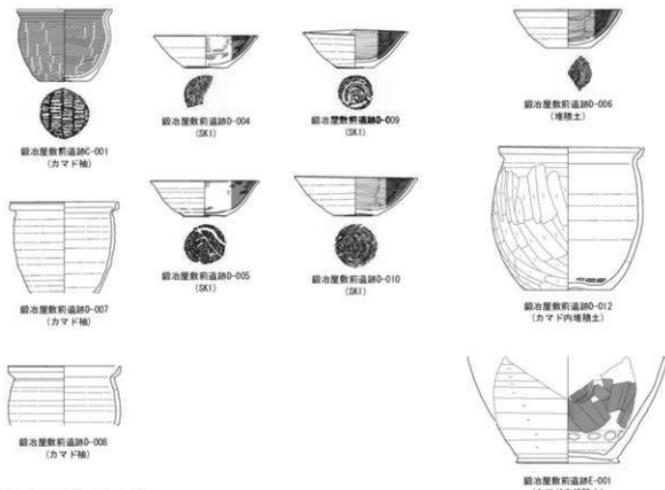


鍛冶屋敷B遺跡C-003  
(増穂土)



# C 期

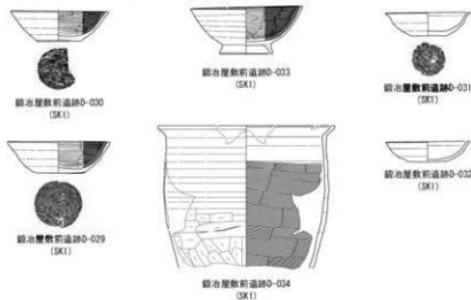
## 鍛冶屋敷前遺跡II区 S19 出土土器



## 富沢館跡6区 S17 出土土器



## 鍛冶屋敷前遺跡II区 S116 出土土器



第 378 図 古代土器集成 (6)

## C期

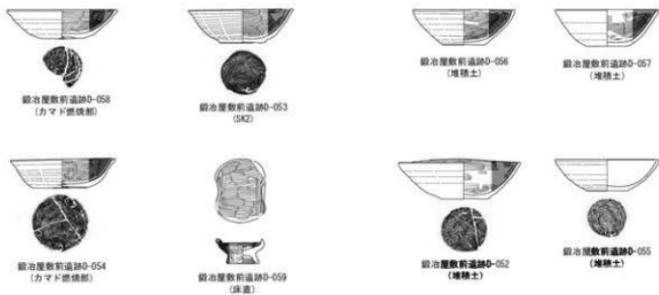
### 鍛冶屋敷 A 遺跡 II 区 SI2 出土土器



### 鍛冶屋敷前遺跡 II 区 SI15 出土土器



### 鍛冶屋敷前遺跡 III 区 SX2 出土土器



### 鍛冶屋敷 A 遺跡 II 区 SI1 出土土器



0 (1:6) 20cm

## C 期

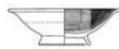
### 鍛冶屋敷 A 遺跡 II 区 S13 出土土器



鍛冶屋敷A遺跡0-010  
(方マド器底部)



鍛冶屋敷A遺跡0-008  
(方マド器底部)



鍛冶屋敷A遺跡0-009  
(磁ノ方)

### 鍛冶屋敷前遺跡 II 区 S18・11 出土土器



鍛冶屋敷前遺跡0-018  
(床土)



鍛冶屋敷前遺跡0-021  
(埴積土)

### 鍛冶屋敷前遺跡 II 区 S17 出土土器



鍛冶屋敷前遺跡0-025  
(床土)

## 細別時期不明

### 鍛冶屋敷 A 遺跡 II 区 S15 出土土器

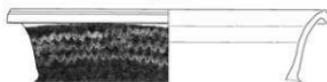


鍛冶屋敷A遺跡E-002  
(埴積土)

### 鍛冶屋敷前遺跡 III 区 SX4 出土土器



鍛冶屋敷前遺跡E-015  
(埴積土)



鍛冶屋敷前遺跡E-014  
(埴積土)

0 (1:6) 20cm

(2) 仙台市・鍛冶屋敷A遺跡出土刻書砥石

国立歴史民俗博物館

三上 喜孝

1) 形状

長さ 15cm、幅 3.5～4cm四方の四角柱状で、上下端はほとんど欠損がなく、原形をとどめていると考えられる。4面のうちの1面は、大きく研磨されており、凸面状を呈している。残りの3面に文字が刻書されている。以下、最も多く文字が残っている面をⅠ面、その右の面をⅡ面、さらにその右の面をⅢ面とする。

Ⅱ面やⅢ面を観察すると、刻書がきわめて浅いことがわかる。これは、文字を刻書したあとにさらに研磨に使用したことを示している。文字の刻書と鉄製品の研磨が、繰り返し行われていた可能性がある。

2) 刻文



3) 内容

Ⅰ面

Ⅰ面は、「謹んで解し申請う稲の事、合わせて…」と読むことができる。これは、古代の上申文書の「解文」の事書部分を刻書したものである。

「謹解…」の右側の行は、「解」と思われる文字が一文字、「有」が三文字書かれているが、解文内容とは無関係に刻みつけた文字であると考えられる。また、「謹解…」の上部の文字についても、判読が難しい。

そこで、解文の事書を書いた部分を観察すると、「謹解」と「申請」の間に一文字程度の空白があることがわかる。これは、紙の文書で作成される解文の事書で、「謹解」と「申請」の間を一文字開けるという作法を踏襲したものである。

また、二行目の「合」の下には、申請する稲の数量が記載されていたと考えられるが、判読は難しい。ただ、「合」の文字が、一行目の「謹解」よりも、やや段を下げて書き始めている点も、紙の文書の記載様式を意識している。

すなわち、Ⅰ面に書かれた解文の文字の割付を復元すると、

〔謹解 申請稲事(つつしんで げし もうこう いねのこど)

合□□ (あわせて…)〕

となり、文字の割り付け方が、紙や木簡の解文を意識したものとなっているのである。

〔解文の用例〕

こうした文字の割付の仕方や、事書きの次行に総額をあらわす「合」の文字を挿する例は、奈良時代の正倉院文書の中にもよくみられる。一例をあげる。

○山道真人津守出拳銭解（正倉院文書、続修二五）

謹解 申請月借錢解事

合銭肆佰文 質式下郡十三条卅六走田一町

受山道真人津守

息長真人家女

山道真人三中

右件三人、死生同心、限八箇月、半倍得進

上、若不進者、息長黒麻呂得進上、

仍録状、以解。

天平尙宝二年五月廿六日息長真人黒麻呂

（山道真人津守、息長真人家女、山道真人三中の三人が、田一町を

質物として銭四〇〇文を借りた。八箇月のうちに、五割の利息をつけて返すつもりだが、もし返せない場合は、息長黒麻呂が代わりに返す、という内容）

なお、解文の文書様式をもつ文書は、木簡にも確認される。例として、秋田県大仙市の弘田柵跡出土木簡をあげる。

○弘田柵跡出土第一七号木簡（『横手市史』資料編 古代・中世）横手市、2006年）

×解 申請借稲×

(一一一)×(一一三)×四 〇八一型式

○弘田柵跡出土第三四号木簡（『横手市史』資料編 古代・中世）横手市、2006年）

鹿毛社馬者

・解 申請馬事 右件馬□□□代□当子弟貴養生

二八〇×三八×一一 〇一一型式

これらは、銭や稲の借用や馬の申請をした際の解文である。木簡の場合も、紙の文書と同様、「解」と「申請」の間を一字分あけるという様子が踏襲されている。

解文の様式は、申請文書という性格からいっても、地域社会に広く知られていた文書様式であり、そうした知識が、おそらくは鍛冶を行う工人たちの間でも共有されていた可能性がある。しかも「謹解 申請稲事」というように、稲の支給を申請する解文は、弘田柵跡出土木簡にも類例がみられるように、よく使われる申請文書の形式であったと思われる。

ただし、「稲を申請する」という解文の事書の内容と、それが砥石に刻まれたことには、特に関連性がないと考えられることから、実際に申請文書として機能した解文ではなく、解文の事書を習書したものと考えられる。

〔砥石に文字を刻書する類例〕

砥石に刻書した事例として、群馬県吉井町黒熊中西遺跡出土の砥石がある。竪穴建物跡の床面直上から出土しており、出土状況は、本遺跡出土の砥石と共通している。

扁平な直方体状の一面に「元慶四年二」と刻書されている。元慶四年は八八〇年にあたり、九世紀の後半である。本遺跡出土の刻書砥石とほぼ同時期のものである。

黒熊中西遺跡出土の刻書砥石は高島英之氏の考察によれば、「砥石としての用途が放棄された後に刻書されている」ものであり、高島氏はこれを祭祀に用いられたものとみている（『刻書砥石 一群群馬県吉井町黒熊中西遺跡出

## 第1節 出土遺物について

土の元慶四年銘碇石を中心に、『古代出土文字資料の研究』東京堂出版、2000年）。だが、本遺跡出土の刻書碇石は、刻書がされた後も、引き続き碇石として使用していたと考えられ、この点が黒熊中西遺跡出土の刻書碇石とはやや異なる。

群馬県内ではもう一点、群馬県高崎市日高遺跡から刻書碇石が出土している。やはり竪穴建物跡の床面直上から出土したもので、「□井」という刻書が確認できる。「井」は、本遺跡出土の刻書碇石のⅢ面にもみえている。

さらに、千葉県船橋市の印内台遺跡の竪穴建物跡の堆積土中からも刻書碇石が出土している（『千葉県船橋市印内台遺跡―第17次発掘調査報告書』住友不動産株式会社 船橋市遺跡調査会 1996年）。碇石の形態は立方体を呈し、長さ9.80cm、幅2.80cm、重さ90.0グラムを計る泥岩製である。幅広の面（これを仮に正面とする）に2行、その右側に1行の文字が確認できる。釈文は以下の通りである。

「□□□□ □□」（右側面）  
「□ □八人 大□×」（正面右側）  
「□□アア丈ア八田ア大田×」（正面左側）

注目されるのは正面左側の行である。「ア」は「部」の異体字で、「□□部」「□部」「八田部」「大田（部）」と、部姓をもつウジ名を列記したものである。正面右側の行に「八人」とみえるが、これは記載されたウジ名の合計人数をあらわしている可能性がある。「八人」の上は、「全」のような字で、「同じく」あるいは「合わせて」という意味かも知れない。ウジ名が列記されていることの意味は不明だが、何らかの祭祀にかかわる可能性があるのではないかと報告書では指摘している。

鍛冶屋敷A遺跡出土の刻書碇石にも「大田部」という記載があり、偶然だが印内台遺跡出土の刻書碇石と同じウジ名が刻まれている。後述するように、大田部は東国に多く分布するウジ名であり、いまのところ刻書碇石がもっぱら関東地方の遺跡から出土していることからすると、鍛冶屋敷A遺跡出土の刻書碇石も、東国との関わりを想定できるかもしれない。

刻書碇石の類例は、全国的に見ても多いわけではないが、出土状況や年代に共通点も見られ、今後も類例の増加が待たれるところである。

### 〔習書することの意味〕

碇石に限らず、何らかの器物などに文字を習書する事例が、古代にはみられる。

- 仙台市郡山遺跡出土木簡
  - ・起
  - ・波登云登塞云登字字字字
  - 三二四×一八×四
- ※木簡の形状・寸法や片面側の切り込みの状況から写経用紙に界線を引くための見込みをつける際に使用した写経専用の定木とみられる。文字は経文の習書であろう。
- 秋田城跡出土文字瓦
  - 故故念法弘
  - 念念 月月月乃
  - 念進上物事
  - 下毛野
- ※「…進上物事」と、解文の「事書」と思われる文言を習書している。他の経文は「念」「法」など、仏教にかかわる文言か。

郡山遺跡出土木簡において、写経用定木に経文の習書らしきものが書かれているということは、「モノ」と「書か  
れている文字」が、まったく無関係のもので無いことを示しているが、これは、その「モノ」を使用している人が、  
文字を書く行為にかかわっていることを意味している。

秋田城の文字瓦も同様に、仏教にかかわる文字の知識や、文書様式にかかわる知識をもつ人が、瓦に書き付けたも  
のと思われる。

刻書砥石の場合も砥石を使用する人(工人)が、解文に関する知識を持っていて、それを書き付けた可能性がある。  
これは、古代東北地方の社会における文書様式の広がりを知るための貴重な資料であるといえる。

## II 面

II面にみえる「大田部」は、ウジ名であると考えられる。「大田部」は、東日本では、安房、常陸、陸奥、出羽  
などに分布が確認できる。

- 平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構出土木簡  
(奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査出土木簡概報」三二)
- 安房国安房郡廣瀨郷沙田里大田部  
(一五七) × 二二 × 六 ○三九型式
- 宮城県多賀城市・市川橋遺跡出土木簡(「木簡研究」18号(削屑))  
大田部子赤麻呂  
足 谷田石足
- 茨城県石岡市・鹿の子(遺跡出土墨書土器  
「大田マ」(八世紀後半の土師器坏)
- 秋田県秋田市・秋田城跡出土墨書埴(「秋田市史 第七卷 古代 資料編」)  
建部友足  
面郷伯姓 □ □ 本 □  
麻呂 □ □  
麻呂 大田部 □ 麻呂  
□ □
- 秋田県大仙市・厨川谷地遺跡出土墨書土器  
「調・酒・大田部・三 □ □」(土師器坏、九世紀後半) ○世紀前半)

「大田部」は、東国に分布が認められることから、もともとは東国から移住してきた集団である可能性がある(三  
面に「上野」という文字がみえることから、あるいは上野国(今の群馬県)とかわるかも知れない)。

陸奥国分寺・国分尼寺から出土する刻印瓦には、郡名や氏族名を意味する一文字が示されているが、「大」は、  
あるいは「大田部」をさすとは考えられないだろうか(「物」は物部、「矢」は矢田部をさすとみられる)。そうだ  
とすれば、「大田部」は、この地域で一定の勢力を持つ集団であった可能性がある。

## 第1節 出土遺物について

### Ⅲ面

「上野」という文字ははっきりと確認できる。ほかに同じ面に「上」を繰り返して書いている。「上野」の下には「里」のような字が読めるが、「野」を書いている可能性がある。

「上野」は、「上野国」（今の群馬県）を指している地名を意味する可能性もあるが、下に「国」の字が確認できないので郷名など地名や、人名の一部である可能性もある。

上部に、小さく「井」と書かれているのが確認できる。「井」は、墨書土器などに多くみられる、まじない記号（魔除け符号）であると考えられる。

### まとめ—鍛冶屋敷A遺跡出土刻書砥石の意義—

本遺跡から出土した刻書砥石には、砥石として使用した四面のうち、三面に文字が刻まれており、さらにそのうちの一面に、古代の上申文書である「解文」の事書部分書かれていた。これは「謹んで申し請う稲の事」と読み、稲の申請にかかわる解文の事書を表現したものである。

この「解文の事書」は、砥石の機能とは直接かかわりのない内容だが、紙に書かれる解文の記載様式を忠実にふまえた書き方をしていることから考えると、解文に関する知識のある者が刻書したことがわかる。通常、砥石に刻書するのは、鍛冶職人のような工人と考えられる事から、工人たちの間にも、解文の事書の書式に関する知識が、知られていた可能性がある。

このことは、解文の形式を持つ文書が、古代の地方社会に広く浸透していたことを意味している。定型化された書式が広く知られていたからこそ、工人たちによる刻書も行われ得たのである。

さらに、申請物を「稲」と書いていることも、古代の地方社会で作成された解文の中でも、稲を申請する内容のものが多かったことを意味している。もっともスタンダードな解文の事書が、砥石に書かれたと考えられるのである。稲の貸給や支給は、古代地方社会において頻繁に行われていたことであり、そのことが、その解文の事書を、最もスタンダードなものとして認識させていた可能性がある。

なぜ砥石にこのような刻書がなされたのかは不明であるが、文字内容や、刻書の遺存状況から、これまでいわれてきたような祭祀行為にともなって刻まれたものとは、必ずしもいえない可能性もある。今後の類例の増加を待つて、刻書砥石の意味をさらに考えていく必要がある。

もう一点、注目されるのは、上野国（現在の群馬県）との関係である。Ⅲ面には「上野」という刻書が見えるほか、実物の考古資料としても、群馬県内から二点の刻書砥石がこれまで発見されており、砥石に刻書する行為の地域性、という問題についても、今後注意を向けていかなければならない。

## (3) 鉄鏃・鉄釘 (第381図)

鍛冶屋敷A遺跡や鍛冶屋敷B遺跡、鍛冶屋敷前遺跡では、遺構堆積土や基本層より多量の銹滓が出土した。これらと共に、金属製品が出土した。これらの内、掲載した遺物に関して説明したい。

鉄釘は4点出土している。

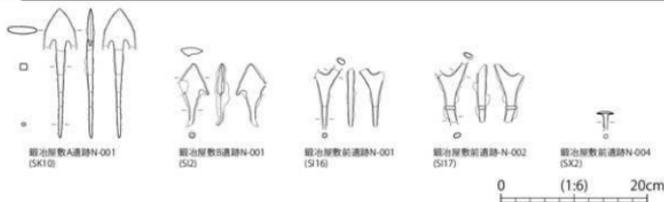
鍛冶屋敷A遺跡N-001は、鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区SK10堆積土から出土した。両鐵身逆刺部を欠損する。鐵身部は4.3cm、柄部は13.6cm以上を測る。鐵身関部は挟れる。鐵身部の断面形は両丸造を呈し、柄部の断面形は方形を呈する。

鍛冶屋敷B遺跡N-001は、鍛冶屋敷B遺跡Ⅱ区SI2床面直上から出土した。右鐵身逆刺部及び柄部下端を欠損する。鐵身部は3.7cm、柄部は5.0cm以上を測る。鐵身関部は挟れる。鐵身部の断面形は、レンズ状を呈すると考えられ、柄部の断面形は方形を呈する。

鍛冶屋敷前遺跡N-001・002は、いずれも雁股鐵である。鍛冶屋敷前遺跡N-001は、鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区SI16床面直上から出土した。両鐵身部上端を欠損する。鐵身部は4.8cm以上、柄部は3.3cm以上を測る。鐵身部の断面形は平片刃造を呈し、柄部の断面形は方形を呈する。鍛冶屋敷前遺跡N-002は、鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区SI17堆積土から出土した。両鐵身部上端を欠損する。鐵身部は5.8cm以上、柄部は2.3cm以上を測る。鐵身部の断面形は平片刃造を呈し、柄部の断面形は長方形または楕円形を呈すると考えられる。柄部は円形関と考えられる。

鍛冶屋敷前遺跡N-004は鉄釘である。鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区SX2堆積土から出土した。基部下端を欠損する。カサ部径は2.3cm、基部は1.8cm以上を測る。カサ部平面形は円形を呈し、基部断面形は方形を呈する。

## 鉄鏃・鉄釘



第381図 金属製品集成

## 第2節 検出遺構

## 1. 縄文時代の遺構

平成27年度の本発掘調査において、富沢館跡D-1・2区で竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑及びピットを検出した。また、川前遺跡では竪穴住居跡、土坑及びピットを検出した。ここでは、竪穴住居跡及び竪穴遺構について説明する。

## (1) 富沢館跡

D-1区で、竪穴住居跡1軒及び竪穴遺構1基を検出した。いずれの遺構も、床面または底面等から縄文時代後期中葉の宝ヶ峯式土器が出土している。

SISは、検出時の規模や形態から住居跡として調査を行ったが、その後遺構内に施設等の痕跡が確認されなかつた為、竪穴遺構として報告した。平面形は、西壁が張り出すが、凡そ円形または不整な円形を呈すると考えられるが、遺構の南側が調査区外に延びる。堆積土及び底面直上で多量の縄文土器が出土した。出土した縄文土器は、縄文時代後期中葉宝ヶ峯式期の土器である。

## 第2節 検出遺構

SI9は、遺構の西側が調査区外へと延びる。平面形は円形を呈すると考えられる。周溝及び掘り方は、検出されていない。住居床面の東側で、火床面を1ヶ所検出した。掘り方が検出されなかった事から地床がと考えられる。ピットがP1～8まで8基検出されており、その内検出状況からP2・3・8は、いずれも主柱穴と考えられる。これらは、住居壁付近にみられることから、この竪穴住居跡の柱穴は住居壁際を巡るものと考えられる。以前に鍛冶屋敷A遺跡の調査(仙台市教委 2000)においても、同様の住居跡(SI-5・SI-6)が2軒検出されている。床面直上や堆積土から多量の縄文土器が出土した。出土した縄文土器は、縄文時代後期中葉宝ヶ峯式期の土器である。

### (2) 川前遺跡

A区で、竪穴住居跡を3軒検出した。SI2～4竪穴住居跡では、いずれもが跡ないが跡と考えられる被熱範囲を検出した。その内SI3・4は、石組がでる。石組は、いずれも掘り方内に自然礫を配している。SI3・4では、住居掘り方を有していた。竪穴住居跡の堆積土や床面、掘り方等から縄文時代後期後葉の土器が出土している。

SI2は、遺構の東半が調査区外へと延びる。平面形は、円形を呈すると考えられる。周溝及び掘り方は、検出されていない。住居内中央付近で被熱範囲を検出しており、平面形は不整形であるが、赤色硬化した範囲がが跡と考えられる。床面直上に、多量の炭化物が検出されているが、炭化材や、床面や壁面へ広範囲に被熱した痕跡が、が跡以外にみられない事から、火災住居ではなく住居廃絶時または廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

SI3は、SI4と重複関係にありSI3が新しい。遺構の西側が調査区外へと延びる。平面形は、円形を呈すると考えられる。周溝は、検出されていない。住居内中央付近で、石組がを1基検出した。大きき4～25cm程の礫が配されており、中には平坦な面を内側に向けて配されているものもある。長軸73cm、短軸71cm、深さ5cmで、平面形が不整形の掘り方を有する。が跡のやや南東方向で、長さ20cm程の自然礫を使用した立石を1ヶ所検出した。これには掘り方は無く、住居掘り方埋土中の土器を破壊している。また、立石に被熱等の痕跡は確認されていない。住居南壁付近で検出した事から、出入口施設に関するものと考えられる。

SI4は、SI3と重複関係にありSI4が古い。平面形は、不正な円形を呈すると考えられる。周溝は、検出されていない。住居内中央付近で、石組がを1基検出した。が石は、南西側のみに残存した。北側や東側でが石の抜取痕を検出した事から、凡そ円形にが石が配されていたと考えられる。また、残存するが石で接合関係になるものもあり、状況に応じて打ち割って配されていたと考えられる。

## 2. 古代の遺構(第382図)

平成25年度から平成28年度の発掘調査で、竪穴住居跡23軒、竪穴遺構18基を検出した。また、これら以外にも土坑や性格不明遺構等を検出している。ここでは、今回の発掘調査で検出された竪穴住居跡及び竪穴遺構の規模、カマド付設置位置を基に、時期別の変遷をみていきたい。なお、時期の呼称は前節で記載したA～C期に沿って記載する。

### (1) 竪穴住居跡及び竪穴遺構の時期と変遷

#### A期(9世紀前半以前)

富沢館跡6区SI6・10・E南・西区SI2、鍛冶屋敷前遺跡II区SI14・18・19・III区SX5、宮崎遺跡SI1がある。鍛冶屋敷A遺跡1区SI1は、堆積土1層に灰白色火山灰が確認されたため、A期として扱う。富沢館跡SI6は、時期確定のできる遺物が出土していないが、周辺遺構との重複関係により当期に属すると考えられる。平面形は方形が3軒、隅丸方形が2軒、方形と考えられるのが1基、隅丸方形と考えられるのが2基、不明が1基である。長辺の規模は3m台1軒と4基、4m台3軒、5m台1軒である。カマドが付設される壁面は北壁3軒 東壁2軒である。カマド奥壁が住居壁面より張り出すのは3軒、収まるのは2軒である。いずれのカマドも盛土により構築

され、構築材に礫を使用していたのは2軒である。

#### B期(9世紀中頃～後半)

鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区S14、鍛冶屋敷B遺跡Ⅱ区S12、富沢館跡2区S11、鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区S110・12・13・Ⅲ区S14・6・7・SX3、京ノ中遺跡S11・2がある。鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区S13、Ⅲ区SX3は時期確定のできる遺物は出土していないが、周辺遺構との重複関係により当期とした。鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区S14、鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区S14・SX3は、出土遺物や検出状況から鍛冶関連遺構と考えられる。平面形は方形が2軒、長方形が1軒、方形と考えられるのが5軒、長方形と考えられるのが1基、隅丸長方形と考えられるのが2基、不明が1基である。長辺の規模は1m台1基、2m台1基、3m台6軒、4m台1軒と1基、5m台1軒、7m台1基である。カマドが付設される壁面は北壁1軒、南壁2軒、東壁3軒である。カマド奥壁が住居壁面より張り出すのは2軒、収まるのは4軒である。カマドが盛土により構築されているのは5軒で、その内カマドの構築材に礫を使用しているのは3軒である。

#### C期(10世紀前半以降)

鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区S11～3、鍛冶屋敷B遺跡Ⅱ区S11、富沢館跡6区S17、鍛冶屋敷前遺跡Ⅱ区S18・9・15～17・Ⅲ区S11・2・SX2が当期に該当する。鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区S11・2・7は時期確定のできる遺物が出土していないが、周辺遺構との重複関係により当期に属すると考えられる。鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区S12、富沢館跡6区S17は、出土遺物や検出状況から鍛冶関連遺構と考えられる。平面形は方形が1軒、隅丸方形が1基、長方形が3軒と1基、隅丸長方形が1軒、方形と考えられるのが1軒と1基、長方形と考えられるのが1軒と1基、隅丸方形と考えられるのが1軒と1基である。長辺の規模は3m台2軒と1基、4m台5軒と1基、5m台1軒と2基、6m台1基である。カマドが付設される壁面は北壁1軒、南壁1軒、東壁5軒である。カマド奥壁が住居壁面より張り出すのは3軒、収まるのは3軒、不明が1軒である。カマドが盛土により構築されているのは5軒である。

A期に該当する竪穴住居跡は5軒、竪穴遺構は4基である。平面形は方形または隅丸方形、長辺の規模は4m台が主体である。カマドは東・北壁に付設され、いずれも盛土により構築されている。これらの内2軒のカマドが、構築材に礫を使用している。

B期に該当する竪穴住居跡は8軒、竪穴遺構は4基である。平面形は方形または隅丸方形、長辺の規模は3m台または4m台が主体である。カマドは東・南壁に付設され、いずれも盛土により構築される。これらの内3軒のカマドが、構築材に礫を使用している。

C期に該当する竪穴住居跡は8軒、竪穴遺構は5基である。平面形は長方形または隅丸長方形、長辺の規模は4m台が主体である。カマドは西壁以外に付設され、いずれも盛土により構築される。

今回の調査において、A・B期の竪穴住居跡、竪穴遺構の平面形は、方形または隅丸方形が主体であるが、C期では長方形または隅丸長方形が主体である。カマドの付設位置では、西壁にカマドを付設する竪穴住居跡が検出されなかった。

### (2) 鍛冶関連遺構

今回の発掘調査で検出した鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区S12・4、富沢館跡6区S14・5・7、鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区S14・SX3・4は、いずれも遺物出土状況や、遺構検出状況により鍛冶関連遺構と考えられる。これら鍛冶関連遺構の平面形は隅丸長方形、隅丸方形、長方形で、長辺の規模は1m台1基、3m台2基、4m台3基、5m台1基、7m台1基である。いずれの遺構床面でも、炉跡と考えられる被熱範囲や焼土を検出した。また、富沢館跡6区S14・5以外では釜澤が出土しており、最も多く出土したのは鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区S14で、平箱2箱分に及ぶ。

## 第2節 検出遺構

鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区SI2床面で、5ヶ所の焼土範囲と炉跡(P2)を検出した。焼土5以外は全て遺構南側にあり、ここが作業を行う場となっていたと考えられる。床面南西側に位置する焼土1及び床面南東側に位置する焼土3周辺で礫が数点出土しており、これらには被熱がみられる事から、炉の周辺に配置されていたものと考えられる。また、焼土1の礫と焼土3の礫で接合するものがみられた。焼土3は、北側と南側に落ち込みが近接する。北側は深さ36cm、南側は10cmを測る。いずれも、焼土を掘り込んでいる為、焼土3との関係性は不明であるが、焼土3の対称的な位置、床面北西側に同様の様相を呈するSK2があり、何らかの関係を示唆する。床面では、これら焼土範囲を囲うように硬化範囲を検出した。

鍛冶屋敷A遺跡Ⅱ区SI4床面中央付近で、4ヶ所の焼土範囲を検出した。南側の一部が途切れる周溝を有する。焼土範囲付近にピットが集中する。床面南西側に、床面から深さ32cmを測る土坑と、南壁際に平面形が隅丸長方形を呈すると考えられる土坑が位置する。

鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区SI4床面北側で2ヶ所の焼土、南側で1ヶ所の被熱範囲を検出した。焼土2の周辺で礫が出土しており、炉跡の周囲に礫が配置されていたと考えられる。本遺構の床面直上及び堆積土から多量の銹滓と共に羽口が出土している。

鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区SX3床面中央で5ヶ所の焼土を検出した。SI4と重複関係にありSX3が新しい。焼土1と焼土4が東西に並ぶ。

鍛冶屋敷前遺跡Ⅲ区SX4床面の北側寄りで鍛冶がと考えられる焼土範囲を1ヶ所検出した。これの周囲から礫が出土しており、炉跡の周囲に礫が配置されていたと考えられる。炉跡の底面中央は還元により変色している。炉跡の西側に羽口が設置された状態で出土しており、この炉跡が鍛冶に関連する事を示唆する。炉跡の南側に大型の礫が南北方向に並んでおり、南端の礫のみ長軸を東西へ向けている。炉跡の南東側に、床面から深さ43cmを測る土坑が位置する。堆積土下層から多量の、上層から少量の銹滓が出土しており、鍛冶関連の遺構と考えられる。

富沢館跡6区SI4床面南西側で被熱範囲を検出した。検出した範囲の壁面際を全周する周溝を有する。また、P3～5は主柱穴と考えられ、その内P4・5では柱痕跡を検出した。主柱穴が壁際を巡る構造をしていたと考えられる。富沢館跡6区SI5床面中央付近で被熱範囲を1ヶ所検出した。P1・5・7・8・10は主柱穴と考えられ、SI4同様に壁際に主柱穴が巡っていたと考えられる。掘り方は、壁際を掘り込む事により、中央が島状に残る。

富沢館跡6区SI7床面東側で1ヶ所、北西側で2ヶ所の被熱範囲を検出した。床面東側で検出した被熱範囲が、今回検出した鍛冶関連遺構の中で最も広く、長軸160cm、短軸80cmを測る。被熱深度も最も深く23cmを測る。床面中央付近で1点、南壁際に1点大型の礫が出土した。また、床面南東・西側で白色土が広がる範囲を検出した。

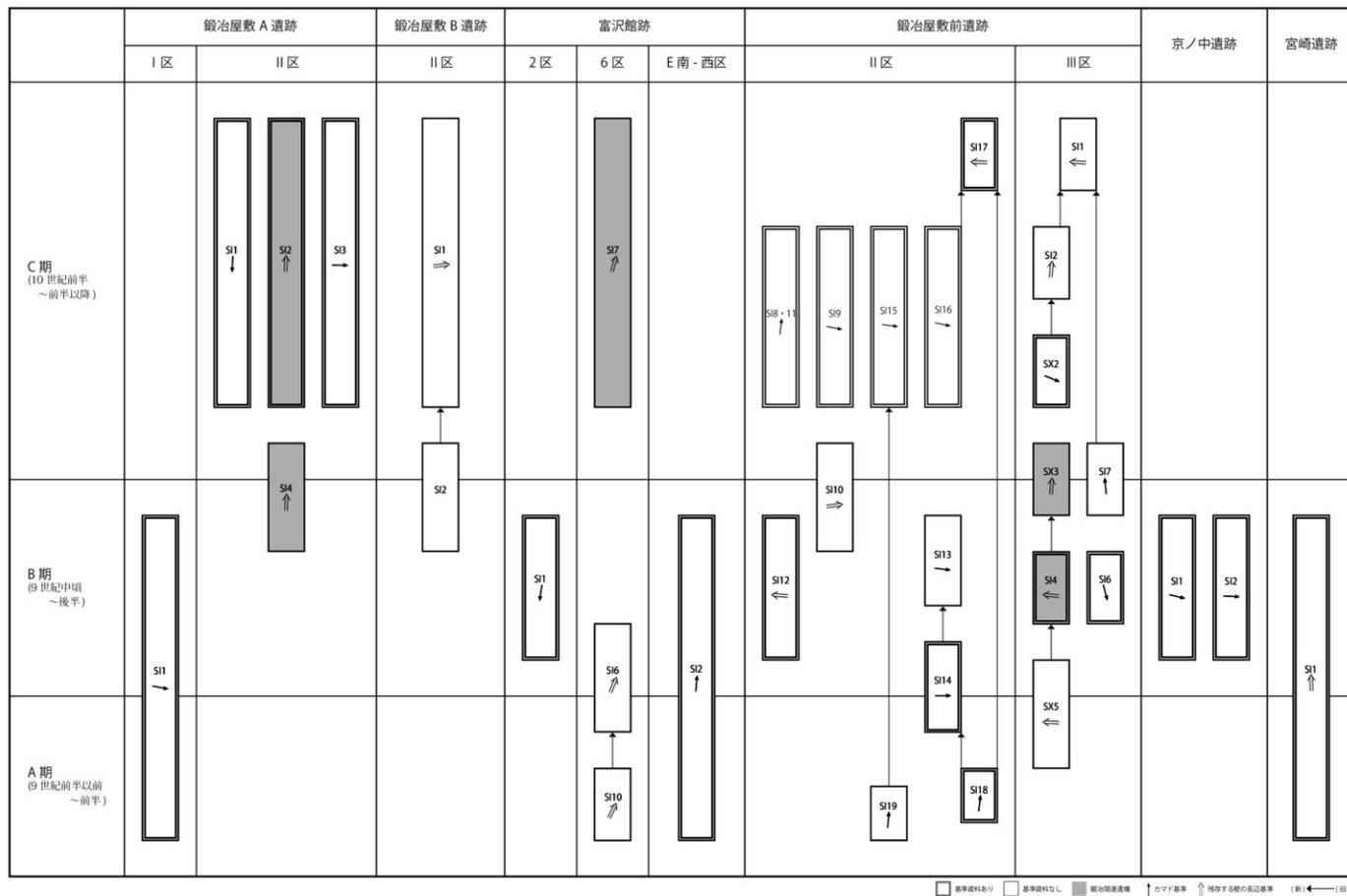
鍛冶炉または鍛冶炉と考えられる焼土や被熱範囲の位置に統一はみられないが、炉の周辺を大型の礫で囲っていたと考えられる鍛冶関連遺構が4基検出された。また、周溝を有する鍛冶関連遺構が2基で、壁際に沿う主柱穴を有する。これら鍛冶関連遺構の時期は、B期(9世紀中頃から後半)以降に該当する。

今回の報告では、鍛冶屋敷A遺跡や鍛冶屋敷前遺跡、富沢館跡から確認された竈穴遺構のうち、床面に炉跡や焼土があり、羽口や銹滓が出土している遺構を鍛冶関連遺構として報告している。調査時点では、床面が検出されるまで鍛冶関連遺構と認識できなかったことから、床直上の堆積土を採取し、鍛造割片や湯玉を選別するための作業は行っていない。また、焼土として報告した中にも、底面に被熱による赤変硬化面のあるものが含まれている。

### 3. 富沢館跡の土塁と堀跡(第383図、付図3)

富沢館跡は、仙台市の南部、仙台市高速鉄道南北線富沢駅から西へ約700mの地点、名取川の支流である新沢川の自然堤防上に所在する。

この館の詳細な造営時期及び造営者は不明であるが、入生田家に残る『館記』や『入生田家之故実』において北



第 382 図 A～C 期主要遺構の重複関係模式図



目城主であった栗野大善の造営によるものとされており、地域の伝承では、栗野氏家臣であった富沢伊賀守が居住していたとされる。

平成13年度に第1次発掘調査(仙台市教委 2002)が行われ、その後、平成15年度に第2次発掘調査(仙台市教委 2004)が、平成24年度に第3次発掘調査(仙台市教委 2013)が行われた。これらの調査においていずれも、堀跡が検出された。今回、平成25・26年度に確認調査を行い、平成26年度から28年度に第4次発掘調査を行った。本調査では、34の調査区を設定し発掘調査を行い、その内25の調査区において堀跡を検出した。土塁は、平成25年度に確認調査区を1ヶ所(IV-12)と一部断ち割りを行い、平成26年度に南端部平場、平成27年度に3区で南端、6区で北端の調査を行った。

ここでは、今次発掘調査及び過年度に行われた発掘調査の成果を含め、土塁及び堀跡について説明したい。なお、説明にあたって、土塁を含め1～6区、G・H区及び第1次調査区を「主郭部」、A～F区及び第2・3次調査区を「外郭部」として分け、第383図に示した通り主郭部を構成する堀跡を「A」・「B」、外郭部を構成する堀跡は「C」・「D」・「E」・「F」として述べる。

#### (1) 主郭部

第1次発掘調査でSD1、第4次発掘調査1区でSD8、2区でSD10・34・35、3区でSD79～81、4区でSD39・40、5区でSD41・42、6区でSD58・92、G区でSD93、H区でSD94、確認調査区IV-18で堀跡を検出した。また、主郭部西側には平面形がL形で総長14.12mの土塁が位置し、土塁の南端には平面形が方形の平場があり、南北20.40m、東西18.30m、高さ92cmを測る。この部分に、調査時「南端部平場」として調査を行った。

堀跡Aを構成すると考えられる堀跡は、1区SD8、2区SD10・34、3区SD79～81、5区SD42、6区SD92、G区SD93で、堀跡Bを構成すると考えられる堀跡は、3区SD79～81、6区SD58、G区SD93、H区SD94、確認調査区IV-18堀跡である。

##### ① 1区

1区東壁際で南北に延びるSD8、1区の西側に位置するG区でSD93、更にその西側の確認調査区IV-18で堀跡を検出した。SD93およびIV-18は、いずれも両上端が検出されなかったことから、各調査区が堀跡内に収まっていると考えられる。これらからは、重複関係の検出や時期を確定する遺物の出土がなかった為、これらが同時期に存在していたかは不明であるが、主郭部東側に1～3条の堀跡が存在していたと考えられる。SD8の東端は2区SD10・35と、IV-18堀跡はH区SD94と繋がると考えられる。また、SD93は堀跡Aまたは堀跡Bいずれかに、合流ないし重複すると考えられる。

##### ② 2区

SD10・35は、2区南側で検出された。これらは重複関係にあり、SD10が新しい。また、これらはSD34と重複関係にあり、SD34が古い。SD10は断面観察で深さ約30cm程であり、底面は少々起伏はあるが、概ね平坦である事から、堀としての機能はほぼなかったと考えられる。SD10・35はその延伸方向から、3区で検出されたSD79～81と繋がる堀跡と考えられ、主郭部堀跡の南側を構成するものと考えられる。SD34は、南北に延びる堀跡である。その延伸方向から、後述する4区で検出されたSD39またはSD40と同一の堀跡の可能性が考えられる。時期を示す遺物は出土していないが、仮にSD35が後述するSD81と同一の堀跡であれば、SD34はさらにそれよりも古い時期の堀跡となる。

##### ③ 3区

3区では、SD79～81及び筋違いの土塁を検出した。SD79は、土塁及び南端部平場の調査時にこれらの西側及び南側を沿うように検出された。SD80・81は南端部平場及び土塁南端を取り除いたその直下より検出された。南端部平場で南北のベルトを2ヶ所設定し、断面観察を行った結果、現況の土塁の更に南側に別の土塁と考えられる、

## 第2節 検出遺構

にぶい黄褐色砂質シルトの高まりを確認した。これにより平面精査を行った結果、筋違いの東西に延びると考えらえる土塁跡を検出した。また、土塁の南端も東方向へと延びる状況を示しており、現況の土塁と新たに検出された筋違いの土塁との間に、通路状の空間があることが確認され、虎口（小口）になっていたと考えられる。断面観察によりSD81を埋めた際の土と考えられる堆積土が、崩された後僅かに残った筋違いの土塁を覆っている事から、この筋違いの土塁が取り除かれた後、SD81が掘削されたと考えられ、この堀の形態変化に合わせて、土塁の形態も変化した可能性が考えられる。SD80は、SD81と重複関係にありSD81が新しいことが確認された。これにより、SD80を埋めてSD81へと堀が変化したことが明らかとなった。この段階で土塁の形態に変化があったかは判断としないが、堀の変化に合わせて土塁の形態も変化した可能性が示唆される。SD80は西側と東側に分岐する堀跡である。SD80と現況の土塁の断面観察により、東側SD80を埋め立てた土が土塁の構築土として入り込んでいる状態が確認された。これにより、SD80東側を埋めながら現況の土塁が構築され、SD80西側が残り、その後埋められたことが確認された。なお、SD80検出面から17世紀の肥前産陶磁器碗が出土しており江戸時代には埋っていたと考えられる。SD80が埋まった後は、SD79がこれを踏襲するようになるかのようにまた、現況の土塁に沿うように掘削されたと考えられる。南端部平場は、現況の土塁や筋違いの土塁、SD80・81を覆っている事や、構築土から縄文土器片から近世陶磁器片まで多くの時期の遺物が混在している事から、土塁を崩した時に出土した土で構築されたと考えられ、畑として利用されていたものである。主郭部南西隅では、筋違いの土塁により虎口があり、その後SD81の掘削及びSD80への堀の変化に合わせて土塁も形態を変化していったと考えられ、SD80が埋められる時に合わせて現況の土塁へと変化した。土塁の南端に方形平場が構築され、これに沿う様にSD79が掘削されたという変遷と変化がみられた。SD79またはSD80は、その位置関係から後述する5区検出のSD42と同一の堀跡と考えられる。

### ④4区

4区では、SD39・40を検出した。これらは重複関係にあり、SD39が新しい。平面精査によりSD39は平面形がL字状を呈し、北方向から東方向へと屈曲することが確認された。東より先には1区で検出されたSD8が位置するが、SD8が東方向へ延びる様子が確認されなかった為、SD8とは繋がらないものと考えられる。ただし、南に2区で検出されたSD34が位置し、これらの位置関係からSD39とSD34は同一の堀跡の可能性が考えられる。SD40は、検出状況から北から南へと延びる堀跡と考えられる。これも位置関係から、SD39と同様にSD34と同一の堀跡の可能性が考えられる。また、4区西側ではSD31を検出した。北西端で北西方向と北東方向で分岐するが、北西方向は間もなく止まる。規模から堀跡と考えられるが、主郭部で検出された堀跡と軸の傾きに違いがあり、いずれの堀跡に繋がるのか不明である。

### ⑤5区

5区では、前述したSD79またはSD80と同一の堀跡と考えられる南北に延びるSD42以外に、東西に延びるSD41を検出した。SD42と重複関係にありSD41が古い。これが東へ延伸する先には、ほぼ同様の方向に延びるSD81が位置する。

### ⑥6区

6区では、土塁に沿うようにSD92が検出された。これは、3区と同様に土塁に沿うように検出されたSD79またはSD80と同一の堀跡と考えられ、主郭部堀の北西側を構成するものと考えられる。また、土塁を取り除いたその直下より、東西に延びるSD58を検出した。SD58の堆積土からは、中国産青磁が出土している。SD58は、SD92と重複関係にありSD58が古い。SD58の延伸する先には、第1次発掘調査区のSD1が位置しており、これと繋がる可能性が考えられる。また、このSD1は西方向から屈曲して南方向へと延びる様子が検出されたが、南端は1区SD8またはG区SD93、確認調査区IV-18堀跡と繋がる可能性が考えられる。SD58が土塁の直下より

検出されたことから、現況の土塁北端とは違う形態をした土塁が構築されていた可能性が考えられる。また堀跡以外にも、6区土塁の直下では、中世の火葬墓が検出されている。これ以外にも、時期は不明であるが平面形が正方形や長方形を基調とする大型の土坑、鍛冶関連遺構と考えられる竪穴遺構が検出されており、3区の土塁直下とは様相に違いがみられる。土塁は、この6区付近で北端が途切れるが、現代において敷地内への入り口を北側にしたためであり、それ以前には北側にも土塁があったようである。

今次調査を含め、主郭部では東・南・西側において堀跡を検出した。また、土塁の調査によりその直下に現況の土塁以前に掘削された堀跡があること、また主郭内部にも時期は不明であるが堀跡があることが確認された。

第4次発掘調査時点では、主郭部敷地内の入り口は北側であるが、それ以前はG区付近に進入路があったことが知られており、それを示すように1区北側でP103・104・106及びSK3で構成されるSB4門跡を検出した。これはSD8と重複関係にあり門跡が新しいことから、SD8が埋められた後に設置された門と考えられる。また、1区南東側において、3区で検出した筋違いの土塁構築土と同様の土が広がる範囲を検出した。これは、土塁の残存と考えられ土塁が南側にも巡らされていたものと考えられる。3区では2軒の掘立柱建物跡、4区では多数のピット及び2基の井戸跡を検出した。特に、4区において明確な組み合わせは検出されなかったが主郭部の他の調査区に比べピットが集中していることや、井戸跡が2基検出されていることから、4区付近に居住域があったと考えられる。

土塁は、3区及び6区で述べたように、北端及び南端で現況の土塁とは違う形態をしていたことが考えられる。3区では、筋違いの土塁を検出したことから虎口があり、その後SD80・81が掘削されたことにより土塁も形態を変えた可能性が考えられ、SD80が埋められるときに現況の土塁へと変化した。これに接続するように南端部平場が構築され畑として利用された。また、6区でもSD58の検出により現況の土塁とは違った形態をしていた可能性が考えられる。この様に、3区及び6区の調査において、土塁や堀跡の形態に変化があったことが明らかとなった。また、現況の土塁が入生田氏敷地の西側に残存していたのは、『館記』に2代目仙台藩主伊達忠宗の時、堀や土塁が壊滅や要害の様で誤解を招くと言われた為、土塁を崩し、堀を埋めたところ、西の土塁を北西から吹く風を凌ぐ為、残したのではないかと考えられる。

## (2) 外郭部

外郭部は、今次発掘調査で26の調査区を設定して行った。その結果17の調査区で堀跡を検出した。また、前述したとおり第2・3次発掘調査においても堀跡を検出している。この他に、平成25年度の確認調査でも堀跡を検出した調査区が有る為、これらを含めて説明したい。ただし、範囲が広い為、大きく北外郭部・東外郭部・南外郭部・西外郭部と4ヶ所に分けて説明する。

### 1) 北外郭部

第2・3次発掘調査区及びA区をこの範囲とした。第2次ではSD2、第3次ではSD1、A区ではSD87を検出した。いずれも東西方向に延びる堀跡と考えられる。第2次SD2と第3次SD1は、位置関係から繋がるものと考えられる。A区SD87の東・西端は、その延伸する軸の傾きから第2・3次で検出された堀跡の更に北側を巡る堀跡の一部である可能性が考えられる。

### 2) 東外郭部

B-1～4区、D-1・2区、確認調査区のIV-44・45をこの範囲とした。B-1～4区でSD89・91、D-1区でSD62・63、D-2区でSD64を検出した。IV-44は堀跡の堆積土を調査区全体で確認したが、調査区が堀跡内に収まっていると考えられ、IV-45ではSD89を検出した。

堀跡Cを構成すると考えられる堀跡は、B-2区SD91で、堀跡Dを構成すると考えられる堀跡は、B-1～4区

## 第2節 検出遺構

SD89、D-1区SD62～64で、堀跡Eを構成すると考えられる堀跡は、IV-44堀跡である。

B-1～4区、IV-44で検出した堀跡は、田畑の地割に沿うように各々並行して南北に延びる。SD89の南端は位置関係から、D-1区で検出したSD62と一連のものと考えられる。SD62は南東隅の角部分と考えられ、こより北から西へと屈曲すると考えられる。SD62とSD63はその位置関係から一連のものと考えられる。SD63の西端は検出状況から、西方向へと延びるようにみられる為、D-2区SD64と一連のものと考えられ、SD64は北方向から北西方向へ屈曲する角部分と考えられる。近くの地割を兼ねた用水路に沿って延びると考えられる。東外郭部では、検出された堀跡から時期を示す遺物が出土しておらず、重複関係も確認されていない為、各々時期は不明であるが、3条の堀跡が南北に延び、各々D-1区付近で西方向へと屈曲すると考えられる。

### 3) 南外郭部

D-3～5区、確認調査区IV-37～39・48をこの範囲とした。D-3区でSD69・70、D-4区でSD71・72、D-5区でSD73・74、確認調査区IV-37～39・48で堀跡を検出した。

堀跡Cを構成すると考えられる堀跡は、確認調査区IV-48で、堀跡Dを構成すると考えられる堀跡は、D-3区SD69・70、D-4区SD71、確認調査区IV-37・39で、堀跡Eを構成すると考えられる堀跡は、D-4区SD72、D-5区SD73、IV-38堀跡である。

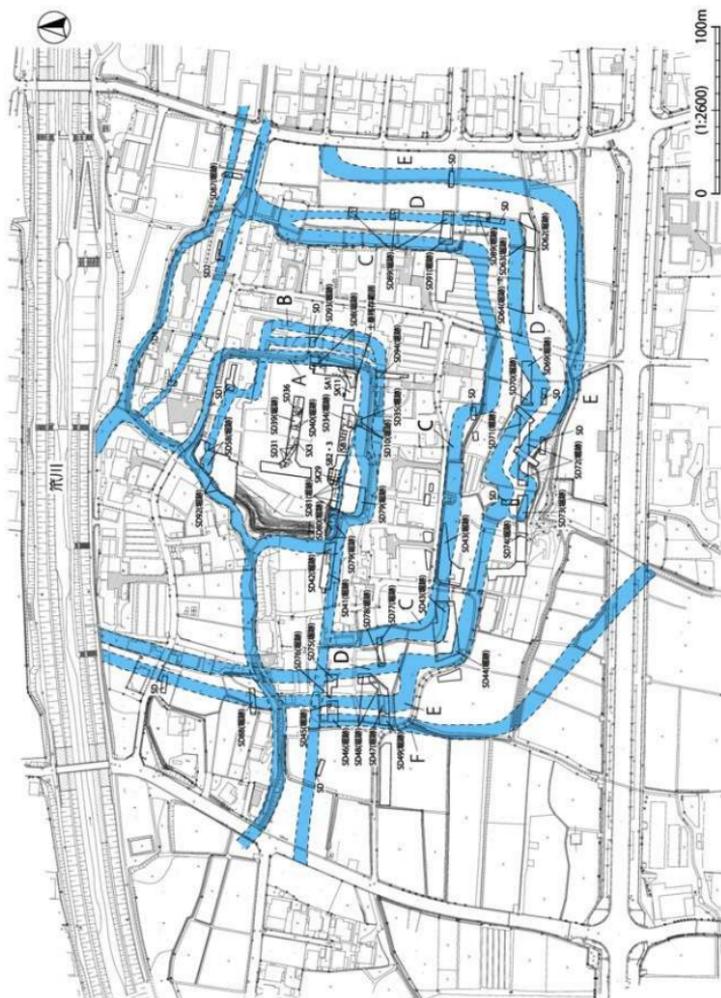
D-3区では、北東方向から南西方向へ延びるSD69及び南東方向から北西方向へ延びるSD70を検出した。位置関係から、同一の堀跡と考えられ、V字状に屈曲する箇所と考えられる。SD70の西側には、D-4区SD71が位置し、同一の堀跡と考えられる。また、SD70の南側には、IV-39で検出した堀跡が位置しており、これも同一の堀跡と考えられる。SD71及びSD70、IV-39検出の堀跡は、幅約1m程度のV字状に屈曲する部分と考えられる。D-4区西側では、東方向から西方向へS字状に屈曲するSD72を検出した。また、SD72の南側には、IV-38で検出した堀跡が位置し、位置関係から同一の堀跡と考えられる。SD72の西側にD-5区SD73が位置し、位置関係からこれと一連のものと考えられる。平面精査及び断面観察からSD73の東端は北方向へと屈曲する事が確認された。SD72及びSD73、IV-38検出の堀跡は、幅約4～6mのS字状に屈曲する部分と考えられる。IV-37及びIV-48は、検出した規模から堀跡と考えられる。IV-48堀跡は、堀跡Cの一部になる可能性が考えられ、C西-a区SD43と一連のものと考えられる。IV-37堀跡は、D-4区SD71から延びる堀跡Dの一部と考えられる。また、D-5区中央付近で検出したSD74は規模から、堀跡に付随する溝跡等が考えられる。南外郭部では、検出された堀跡から時期を示す遺物が出土しておらず、また重複関係も確認されていない為、各々時期は不明であるが、V字状またはS字状に屈曲する2条の堀跡を検出した。D-4区の南側に、約1mの土手状の高まりがあり、D-4区で検出されたSD72に沿う様子を呈している。また、これの南側にある用水路も沿う様にあることから、トレンチを設定し断片り調査を行い、これが土塁の残存分であることが確認された。

### 4) 西外郭部

C西-a・b区、E北・E北・東・E東・E南-東区・E中央区、F区、確認調査区IV-4・21をこの範囲とした。C西-a区でSD43、C西-b区でSD43・44、E北区でSD45・46、E北-東区でSD75・76、E東区でSD77・78、E中央区でSD48、E南-東区でSD47・49を検出した。

堀跡Cを構成すると考えられる堀跡は、C西-a区SD43、C西-b区SD43、E東区SD77で、堀跡Dを構成すると考えられる堀跡は、C西-a区SD44、E東区SD78、E中央区SD48、E北-東区SD75で、堀跡Eを構成すると考えられる堀跡は、C西-a区SD44、E中央区SD46またはE南-東区SD47、E北区SD45、E北-東区SD76、F区SD88、IV-4堀跡で、堀跡Fは、E南-東区SD49、E北区SD46である。

C西-a区北側で、東西に延びるSD43を検出した。これの東側には、C西-b区SD43が位置しこれと同一の堀跡である。SD43は東方向から延び北方向へと屈曲する堀跡の角部分と考えられる。これの北側は、E東区SD77



第 383 図 富洲新幹線駅周辺配置図

## 第2節 検出遺構

と一連のものと考えられる。SD77は、検出状況から南北に延びる堀跡と考えられるが、これの北端から先では、土手が袋状に止まる様子を呈しており、これがSD77機能時の様子を留めているならば、SD77の北端はここで止まると考えられる。C西-b区西側で、SD44を検出した。これも、SD43同様に東方向から北方向へと屈曲して延びる堀跡である。SD44の北端は、堀跡DのE東区SD78、E中央区SD48と連続し、更にE北-東区SD75と連続すると考えられ、また分岐して西方向から北方向へと屈曲し、堀跡EのE南-東区SD47と連続し、E北区SD45、E北-東区SD76、F区SD88、確認調査区IV-4堀跡に連続する可能性が考えられる。E南-東区では、SD47・49以外にSD48を検出した。これは、SD47と重複関係にありSD48が古い。SD48は西方向から途中北へと屈曲する堀跡角部分である。SD48の東側にE東区SD78が位置し、位置関係から一連の堀跡の可能性が考えられる。E南-東区SD49の北端は、E北区SD46に連続すると考えられる。E北区SD46の北端及びE南-東区SD49の南端の延びる先は、いずれの堀跡に連続するかは不明であるが、堀跡Eの更に西側及び南側に堀跡Fが巡る可能性を示唆する。

なお、E北区の西側に位置するIV-21でも堀跡を検出したが僅かに一部を検出しただけである事と、検出状況から東西方向の堀跡であると考えられるが、近隣に同方向に延びる堀跡を検出していない為、いずれの堀跡に連続するか不明である。ただし、5区SD41が東西方向に延びる堀跡で、これの東端の延伸先に確認調査区IV-21堀跡が位置しており、連続する可能性が考えられる。また、これは西外郭部堀跡C～Fを横切る為、いずれかと連続する可能性も考えられる。西外郭部は、屈曲する堀跡や重複関係を有する堀跡等を検出した事により、対極にある東外郭部に比べて、複雑な構造をしていたと考えられる。

『入生田家之故実』において、「西に三重、南に武重、北に和賀河(荒川)ともに二重也。」という記述がある。これが、発掘調査で検出したどの堀跡を示しているかは不明であるが、文献だと南や北より西側に堀を多く巡らせている事からも、やはり西外郭部は複雑な構造していたと考えられる。

富沢館跡の北側については、荒川の改修工事により往時の地形が失われ、堀跡の痕跡も残されていないが、今回の調査成果から、富沢館跡は、南北約100m、東西約120mの規模をもち、土塁に囲まれて五角形を呈する主郭の外側に曲輪があり、全体を三重～四重の堀跡で囲む構造となっていたようである。残存する土塁の西側には、戦後まもなくまで西光寺という寺院があり、調査時点でも、西光寺から移設されたという近世の墓石が残されていた。また、明治時代に作られた地籍図に描かれた道路や土地の形状からも、西外郭部や南外郭部に家中集落があり、曲輪があったと思われるが、その構造ははっきりしない。西側と南側の堀跡が複雑な形状と構造になっていて、南側には土塁が残されていたことも、主要な曲輪があったことによるものと考えられる。

中世この地域は北目領と呼ばれ、国人領主である栗野氏の勢力範囲下であり、重要な軍事拠点となっていたが、近世には入生田家の在郷屋敷となり、前述の「館記」にあるように、「城のように見え、要害と紛らわしい」ということで、土塁を崩し、堀を埋め、畑や水田にする大きな改変を受けたと推定される。

### 引用・参考文献

- 一辺町教育委員会 1985 『山王四遺跡調査図録』
- 氏家 和典 1988 『東北古代史の基礎的研究』東北プリント
- 金子 昭彦 2011 『北日本・縄文晩期の三角玉はかの装飾品-三角玉・鏝形・内面溝状製品-』『岩手県考古学』岩手県考古学会
- 小林 達雄編 1989 『縄文土器大観』小学館
- 小林 達雄編 2008 『縄文 縄文土器』『縄文 縄文土器』刊行委員会
- (財)西條報恩会編 1991 『家ヶ峯』東北プリント
- 千田嘉博ほか 1993 『城跡調査ハンドブック』新人物往來社

- 仙台市教育委員会 1993 『年報14』仙台市文化財調査報告書第176集  
 1994 『中田南遺跡 - 古代・中世の集落跡の調査 - 』  
 1995 『中田南遺跡 - 第2次調査報告書 - 』  
 1998 『柳生台加瀬遺跡 - (仮称) 柳生小学校建設関係発掘調査報告書 - 』  
 2000 『大野田古墳群・王ノ塚遺跡・六反田遺跡 - 仙台市富沢駅周辺上地区両整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ - 』仙台市文化財調査報告書第243集  
 2000 『殿治屋敷A遺跡・殿治屋敷前遺跡 - 市道「富田富沢線」関連遺跡発掘調査報告書 - 』仙台市文化財調査報告書第245集  
 2000 『王ノ塚遺跡 - 都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ - 』仙台市文化財調査報告書第249集  
 2002 『小鶴城跡ほか』仙台市文化財調査報告書第261集  
 2004 『保存院前遺跡他』仙台市文化財調査報告書第274集  
 2011 『下ノ内遺跡・春日者古墳・大野田宮衛遺跡ほか - 仙台市富沢駅周辺上地区両整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ - 』仙台市文化財調査報告書第390集  
 2013 『伊古田遺跡・大野田古墳群・下ノ内遺跡 - 仙台市富沢駅周辺上地区両整理事業関係遺跡Ⅲ - 』仙台市文化財調査報告書第413集  
 2013 『大野田遺跡・元袋遺跡・伊古田遺跡ほか - 仙台市富沢駅周辺上地区両整理事業関係遺跡Ⅳ - 』仙台市文化財調査報告書第414集  
 2013 『仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告Ⅰ - 平成23年度・平成24年度震災復興民間文化財発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書 - 』仙台市文化財調査報告書第416集  
 2016 『西台畑遺跡第9次発掘調査 - 仙台市あすと長町17街区・集合住宅建設に伴う発掘調査報告書 - 』仙台市文化財調査報告書第441集  
 2016 『薬師堂東遺跡Ⅱ - 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ - 』仙台市文化財調査報告書第443集  
 2016 『王ノ塚遺跡第6次調査 - 都市計画道路「郡山折立線」関係遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第445集  
 2017 『元袋遺跡・六反田遺跡・伊古田遺跡ほか - 仙台市富沢駅周辺上地区両整理事業関係遺跡Ⅴ - 』仙台市文化財調査報告書第455集  
 2017 『元袋遺跡・六反田遺跡・伊古田遺跡ほか - 仙台市富沢駅周辺上地区両整理事業関係遺跡Ⅵ - 』仙台市文化財調査報告書第456集
- 仙台市史編さん委員会 1995 『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市  
 1999 『仙台市史 通史編1 原始(改訂版)』仙台市  
 2000 『仙台市史 通史編2 古代中世』仙台市  
 2006 『仙台市史 特別編7 城蹟』仙台市
- 庄子直雄・山田一郎 1980 『宮城県に分布する灰白色火山灰』宮城県多賀城跡調査研究所年報1979) 宮城県多賀城跡研究所  
 白鳥 良一 1980 『多賀城跡出土土器の変遷』研究紀要Ⅵ) 宮城県多賀城跡調査研究所  
 田辺 昭三 1981 『須恵器大成』角川書店  
 辻 秀人 2007 『古代東北・北海道におけるモノ、ヒト、文化交流の研究(課題番号:15320111)』平成15年度~平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書 東北学院大学文学部  
 中村 浩・望月幹太編 2001 『土師器と須恵器』普及版季刊考古学 雄山閣  
 永井 久美男 2002 『中世出土物の分類』高志書院  
 三浦 正幸 1999 『城の鑑賞基礎知識』至文堂
- 宮城県教育委員会 1996 『奈良・平安時代の遺物』山王遺跡Ⅲ-仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書-多賀前地区遺物編』宮城県文化財調査報告書第170集  
 1996 『上郡類』山王遺跡Ⅳ-多賀前地区考察編-』宮城県文化財調査報告書第171集  
 2010 『殿治沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第222集  
 2014 『北小松遺跡 - 田尻西地区は場整備事業に係る平成21年度発掘調査報告書 - 』
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『多賀城跡 政庁跡図録編』  
 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡本文編』  
 村田 晃一 1995 『宮城郡における10世紀前後の上郡』『福島考古』36号  
 山内 清男 1979 『先史日本上郡の縄文』先史考古学会

# 報告書抄録

ふりがな	かじやしきいせき・とみざわたてあと・かわまさいせきほか							
書名	観治屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか							
副書名	仙台市富沢駅西土地地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第466集							
編著者名	工藤信一郎・主濱光朗・水土匠彦・西家礼乃							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉1-5-12 仙台市役所上杉分庁舎 Ⅱa022-214-8899							
発行年月日	2018年(平成30年)3月23日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
観治屋敷A遺跡	宮城県仙台市太白区 富田字舞台・京ノ南	01087	38° 21' 32"	140° 85' 57"	Ⅰ・Ⅱ区 2014.2.27 } 2014.11.21	Ⅰ区260㎡ Ⅱ区1,005㎡	土地地区画整理事業	
観治屋敷B遺跡	宮城県仙台市太白区 富沢字観治屋敷	01086	38° 21' 02"	140° 85' 76"	Ⅰ・Ⅱ区 2014.7.28 } 2017.3.17	Ⅰ区170㎡ Ⅱ区60㎡	土地地区画整理事業	
富沢館跡	宮城県仙台市太白区 富沢字館・熊前	01246	38° 21' 43"	140° 86' 11"	Ⅰ～Ⅵ・A～H区 2014.5.28 } 2016.6.27	Ⅰ～Ⅵ区 A～H区・土塁 9,043㎡	土地地区画整理事業	
観治屋敷前 遺跡	宮城県仙台市太白区 富沢字観治屋敷前・ 熊前	01511	38° 21' 10"	140° 85' 69"	2014.5.22 } 2014.10.20	961㎡	土地地区画整理事業	
京ノ中遺跡	宮城県仙台市太白区 富田字京ノ中	01573	38° 21' 09"	140° 85' 57"	2014.5.19 } 2014.6.24	358㎡	土地地区画整理事業	
川前遺跡	宮城県仙台市太白区 富沢字川前	01575	38° 21' 13"	140° 86' 35"	2015.6.15 } 2015.10.16	240㎡	土地地区画整理事業	
宮崎遺跡	宮城県仙台市太白区 富沢字宮崎	01576	38° 21' 45"	140° 85' 75"	2015.8.10 } 2015.9.15	169㎡	土地地区画整理事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
観治屋敷A遺跡	集落跡	縄文・奈良～ 中世	竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑、溝跡、河川跡、小溝状遺構群、性格不明遺構、円形周溝状遺構、ピット		縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、石製品、金属製品、土製品		・竪穴住居跡から灰青砥石が出土した。 ・円形周溝状遺構を検出した。	
観治屋敷B遺跡	包含地	縄文・奈良～ 近世	竪穴遺構、土坑、溝跡、小溝状遺構群、ピット		土師器、須恵器、陶磁器、石製品、金属製品		・竪穴住居跡から鉄鎌が出土した。	
富沢館跡	城館跡・ 集落跡	縄文・平安～ 近世	竪穴住居跡、竪穴遺構、掘立柱建物跡、柱列、門柱跡、土坑、火葬墓、溝跡、堀跡、井戸跡、土坑、小溝状遺構群、性格不明遺構、ピット		縄文土器、土師器、須恵器、瓦、陶磁器、土師質土器、石器、石製品、木製品、金属製品、土製品		・縄文時代の遺物包含層から多量の縄文時代後期中葉の遺物が出土した。 ・堀跡を多数検出した。 ・土塁直下にてこれより古い堀跡を検出した。	

鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	縄文・奈良～中世	竪穴住居跡、竪穴遺構、掘立柱建物跡、柱列、土坑、溝跡、性格不明遺構、ピット	土師器、須恵器、瓦、陶磁器、石製品、金属製品、土製品	・鍛冶関連と考えられる竪穴遺構を検出した。 ・鉄釘や鉄線等、金属製品が出土した。
京ノ中遺跡	集落跡	平安	竪穴住居跡、土坑、溝跡、ピット	土師器、須恵器、石製品、木製品、金属製品	・竪穴住居跡から鉄製防錆車が出土した。
川前遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡、土坑、ピット	縄文土器、須恵器、石器、石製品、金属製品、土製品	・縄文時代の遺物包含層から多量の縄文時代晩期の遺物が出土した。 ・岩鏡、イモ貝形石製品、線刻硬、石刀が出土した。 ・土鏡、耳飾が出土した。
宮崎遺跡	集落跡	平安	竪穴遺構、土坑、溝跡、ピット	縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器	
要約	<p><b>鍛冶屋敷A遺跡</b> 9世紀代と考えられる1区SI1竪穴住居跡床面直上において、3面に文字の刻まれた胡書紙石が出土した。同じく、1区で円形周溝状遺構を1基検出した。Ⅱ区では10世紀前半頃と考えられる、竪穴住居跡2軒、竪穴遺構2基を検出した。この内、SI2・4は、鍛冶関連遺構と考えられる。</p> <p><b>鍛冶屋敷B遺跡</b> Ⅱ区で10世紀前半以前の竪穴遺構1基、10世紀前半頃の竪穴遺構1基を検出した。SI2竪穴遺構の床面直上において、鉄鏡が出土した。</p> <p><b>富沢遺跡</b> D-1・2区で、縄文時代の遺物包含層を確認した。主に縄文時代後期中葉の宝ヶ峯式期の土器が多量に出土した。D-1区で、縄文時代後期中葉頃と考えられる、SI9竪穴住居跡を検出した。これからは、縄文土器と共に、堆積土中から土偶やスタンプ土製品が出土した。 古代の竪穴住居跡2軒と竪穴遺構5基を検出した。2区SI1竪穴住居跡は9世紀中頃～後半頃、E南西区SI2竪穴住居跡は、9世紀代と考えられる。竪穴遺構は全て6区で検出された。この内、SI6・7・10竪穴遺構は、堀跡直下で検出された。SI4・5・7・10は、出土遺物や検出状況により鍛冶関連遺構と考えられる。 1区及び6区で、2基の火葬墓(SK11・115)を検出した。SK11では燃焼部に粘土が貼られていたと考えられ、これの直下より鏡が4枚出土した。 今中の発掘調査で34調査区の内、25調査区で堀跡を検出した。主郭部においては、東・南・西で堀跡を検出し、3区において時期差のある3条の堀跡を検出した。これらの内、2条は土を取り除いたその直下より検出した。また、現状の土層が構築されるのに合わせてSD80が埋められた様子が確認された。6区においても、土を取り除いたその直下より堀跡を1条検出した。外郭部では北で1条、東で3条、南で3条、西で3～4条で構成されると考えられる堀跡を検出した。特に西側では複雑な様相を呈すると考えられる。主郭部東側では、出入口に位置したと考えられる門跡を検出した。また、南西側では現状の土層の南側に筋違いの土塁を検出した。ここに虎口があったと考えられる。</p> <p><b>鍛冶屋敷前遺跡</b> 1区で柱列跡3列、溝跡9条を検出した。概ね東西南北方向へ延びる様相を呈する。Ⅱ区では、11軒の竪穴住居跡を検出した。これらの内、9世紀前半以前が1軒、9世紀前半頃が2軒、9世紀後半頃が3軒、10世紀前半以前が1軒、10世紀前半頃の竪穴住居跡を5軒検出した。Ⅲ区では、竪穴住居跡3軒、竪穴遺構5基、鍛冶関連遺構3基を検出した。これらの内、9世紀後半以前が1基、9世紀中頃から後半が1軒と1基、9世紀後半以降が1基、10世紀前半以前が1軒、10世紀前半が1軒と2基検出された。SI4竪穴住居跡、SX3・4竪穴遺構は、出土遺物や検出状況により鍛冶関連遺構と考えられる。SX4では、9跡に引口が設置された状態で出土した。</p> <p><b>京ノ中遺跡</b> 2軒の竪穴住居跡を検出した。いずれも9世紀後半頃の竪穴住居跡である。SI2の床面直上から、鉄製防錆車が1点出た。また、カマド左袖付近の床面直上から、完形の須恵器壺が出土した。</p> <p><b>川前遺跡</b> A～C区で、縄文時代の遺物包含層を確認した。主に縄文時代晩期の大洞式期の土器が多量に出土した。Ⅳa2層から、岩鏡、イモ貝形石製品、石刀、土鏡、耳飾等が出土した。縄文時代後期末葉～晩期初期の竪穴住居跡を3軒検出した。このうちSI2の床面全体で炭化物範囲を検出した。SI3・4では、掘り方を有する石鏡が検出した。</p> <p><b>宮崎遺跡</b> 9世紀中頃～後半頃の竪穴遺構を1基、小溝状遺構群を検出した。</p>				



---

仙台市文化財調査報告書第466集

**鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか**

仙台市富沢駅西土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書

〔第2分冊〕

2018年3月

発行 **仙台市教育委員会**

宮城県仙台市青葉区上杉1-5-12 仙台市役所上杉分庁舎  
☎ 022-214-8899(文化財課)

印刷 **株式会社仙台紙工印刷**

宮城県仙台市宮城野区苦竹3丁目1-14  
☎ 022-231-2245

---

